
東方翼閃光

峠 陸哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方翼閃光

【Nコード】

N9668N

【作者名】

峠 陸哉

【あらすじ】

大妖怪である八雲紫は、ある計画を遂行するために無理矢理一人の少年、霧崎翼を幻想入りさせてしまう。幻想郷に放り込まれた翼はあらゆる妖怪と、時に親しく、時にやむ無く戦う。

彼は妖怪達の楽園でどう生きていくのか。

これは一人の少年の、幻想郷奮闘記である。

第一話 幻想よりの使者（前書き）

この作品は二次創作であり作者のイメージでキャラの性格が決定しています。

さらに独自解釈、独自設定も有ります。

このキャラはこんなんじゃない！とか、こんな設定納得できるか！等、そういう事が我慢出来ない方は今すぐ戻ることをお勧めします。

そうでない方、存分にお楽しみください。

第一話 幻想よりの使者

町中と言えど夜更け、しかも裏通りともなれば人影は殆ど見られない。両脇を囲む雑居ビルは裏口も窓も設けておらず、大通りと住宅街から指す明かりしか無いため、ほの暗く誰も近寄ろうとしない。今居るのは餌を求めてゴミを漁る野良猫が数匹と、背の高い女性が一人だけ。

音もなく歩くその女性はナイトキャップのような奇抜な帽子を被り、人目を引く紫一色のドレスに身を包んでおりただでさえ怪しいのに、腰まで届きそうな豊かな金の長髪がそれを増幅していた。しかも左手には日傘、右手には鞘に収められた細剣を携えている。

何処からどう見ても怪しい彼女は、落胆した様子で肩を落とした。「何処にいるのかしら、あの子」

呟き、失望の溜め息をつく。

この為だけにわざわざ幻想郷から出向いているのに、一体何処へ消えてしまったのか。前に彼を見つけた時は、確かにここにいたのに。

ここまで遅れると、流石に焦りが生じてくる。

「無計画さが仇となった、か。私は幾ら時がかろうと構わぬが、お主はそうもいかぬのではないか？」

今回の計画の協力者が、心配そうに語りかける。

彼女の言うとおり、まったくもって迂闊だった。こんなことになるなら、もっと容姿や身なりをしっかり覚えていればよかった。

彼が持つ独特の雰囲気だけで十分だと思っていた己の浅慮を悔やむ。

いかに異端の人間でも、人が溢れかえったこの時代に特定の人物を探し当てるなど、無謀だったか。

「どうしようかしら」

時間にはまだ猶予があるが無駄にしているものでもない。他の作

業もまだまだ残っているし、このまま搜索を続けても成果があるとは思えない。

残念だが、ここが引き際だろう。

明日こそは見つけ出す。藍や橙にも協力してもらえばなんとかなる。

決意を新たに、懐から扇子を取り出した。

「むう、今日こそは我が主となる者を一目見たかったのだが、仕方あるまい。まったく、手を貸す事すら叶わぬこの身の恨めしいことよ」

「あなたには後で頑張ってもらおうよ。幻想郷の案内も済ませちゃったし、今はゆっくりしててちょうだい」

悔しそうに愚痴をこぼす彼女を宥め、まずは彼女をスキマの中に入れる。

背後から気配を感じたのはその時だ。

妖怪や神のように、同じ異端だからこそ感じ取れる、歪で不確かな気配。人間達が支配する世界では排斥されるべき、イレギュラーな存在だ。

胸を踊らせ見ると、一人の少年が重い足取りでこちらに近付いてきている。

紺の学生服に灰色のズボンを着ていることから、年は十七〜八だろうか。真っ黒な跳ね気味の短髪と疲れを醸し出しながらもなお活き活きとした瞳は、若々しく生氣溢れる感じがした。

全身から発散されている強い気のせいだろうか？

いや、そんなことはこの際どうでもいい。探していた人物が目の前にいる、この結果だけで十分ではないか。

あとは、目的を果たすのみだ。

「やっと、見つけた」

不敵な笑みを浮かべ、疲労困憊の様子で歩く彼の前に立ちほだかるのだった。

「今晚は。月の綺麗な夜ですわね」

「へ？ああ、そうですね」

部活帰り、俺はいつもこの道を通る。いつもは人通りが少ないところで、現在俺はなんとも胡散臭い感じの金髪美人に捕まっている。

紫一色のド派手なドレスを着た彼女は、少し高い視点から俺を見据えた。

俺、日本人男性の平均身長よりは高いはずんだけど……。外国の人？

「あなた、名前は？」

吸い込まれそうな金の瞳が俺を見つめる。綺麗なのは間違いないんだが、その輝きはどこか人間っぽくなくて少し怖い。

「……霧崎翼きさき ひとみですけど」

見ず知らずの怪しげな人に名前を教えるのもどうかと思ったが、答えなければいけない気がして素直に答えてしまった。何なんだ、この妙な重苦しさは……？

「翼、ね。少しお時間よろしいかしら？」

何かの勧誘か？しかしそうならいきなり名前で呼ぶことは無さそうだし、笑みも愛想笑いには見えない。

話を聞いてみたいとも思ったが、生憎疲労が限界に達していたのでここは帰ることにする。

「すみませんが俺、急いでるんで……」

「あらあら、それは残念ですわ。もっとあなたとお話したかったのに」

全く残念そうに見えない。何ですつと微笑みっぱなしなんだ？

正直、かなり不気味だ。

「あー……えつと……」

どう返そうか悩んだせいで、何とも言えない間ができてしまった。静かな細道に響いていた野良猫の鳴き声が、ピタリと止む。大通

りから聞こえてくる喧騒も、どこか遠くにいつてしまったようだ。

女性は何も言わず、ただ微笑みながら俺を見つめている。息遣いもちやんと聞こえるのだが、その様はまるで彫像を思わせた。ただでさえ不気味なのに、黙られるとなお不気味だ。

気まづい沈黙。

暗闇が音を吸い尽くして回りを囲んでいるような気さえする。息苦しくて堪らない。

こんな静けさの中、いつまでも微笑を崩さない彼女に、だんだんと不信感がつのつてくるのは至極当然だろう。

「そ、それじゃ……」

これ以上関わってはいけない。そう直感した俺は不自然ながら、足早にその場を後にする。

それでもなお、変な緊張感拭い去れない。たかだか一人の女性に話しかけられただけなのに、何かが怖くて仕方がない。

なんとかそれを掻き消そうと別のことを考えようとするも、後方から突きささる視線がその悉くを粉碎する。

後ろから誰が見てたって普通は気にも留めないし気付きもしないが、彼女は今や人間としては規格外の威圧感を放っており、俺の不安を増大させていた。

「落ち着け……もう、大丈夫」

幸福を呼ぶ呪文のように唱えてみる。

女は確実に遠ざかっているし、この路地裏さえ抜ければもう家は目の前だ。向こうの通りだって最初から見えてるじゃねえか……。

動悸を抑えようと胸を押さえ、地面に目を向けると無数の目が見つめ返してきた。

え？

地面が、無い。

俺の右足が踏みしめようとしていたそれは消え失せて、大穴が開いている。沢山の目はその奥からまばたきもせずはこちらを見ているのだ。

死のように冷たい視線たちが背筋を凍らせる。

「……あ」

右足が、飲み込まれる。このままでは真つ逆さまだ。

やばい！やばいやばいやばい！頑張れ踏ん張れ堪える俺！まだ17年しか生きてねえじゃねえか！こんな死に方絶対嫌だつっうのおおおお！！

両腕をぐわんぐわん回して懸命に堪えようとするも、無情にも反らした体は意思に反し、前に倒れ込む。

対岸は遠く到底飛び越えられそうにない上、こんな場所のせいで手近に人はいない。

結論。

死亡確定。

「うおおああああ……」

俺は長い長い悲鳴を残し、得体の知れない穴の底へと落ちていくしかなかった。

女性は静かに、微かに決意を呟いた。

「よし……」

主役が舞台上上がり、幕は開いた。

これからどうなるかは分からないが、私の思い通りになる自信はある。

私が用意した舞台で、全員が私の脚本通りに演じてくれれば万事上手くいく。あとは致命的なアドリブをフォローしていただくだけ。

私が描いたハッピーエンドに、必ず導いて見せる。どんなに過程が泥臭く汚いものになってもいい、結果さえ伴うならどんな手でも使ってやる。

それが私の義務であり、願望なのだから。

「……帰りましょう」

閉じたままの扇子を横に滑らせると、空間に切り込みが入り大きく裂けた。いつものように躊躇いもなく足を踏み入れ、裂け目を閉じる。

その後にはもう、何も残らなかった。一人の少年がこの世界から消えた痕跡など、何処にも見られない。

裏通りに再び静寂が戻ってくる。

ごみ袋を引っ掻いていた野良猫も、いつの間にか姿をくらましていた。

第一話 幻想よりの使者（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。

峠陸哉と申します。

長い長い話になりそうですが、最後までお付き合い頂けると嬉しいです。

それでは次回も宜しくお願いします。

第二話 冥界にて墓穴を掘る

俺は気が付くと、畳に敷かれた布団の上に横になっていた。

見慣れない部屋には誰の姿もない。知り合いも、あの怪しげな女も見当たらなかった。

「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまう。

夢だったのか、あれ？あの女も、穴も？

寝ぼけているせいで一瞬抱いた甘い考えを、顔を叩いて打ち捨てる。

今更それはないだろう。夢にしては記憶がはっきりし過ぎているし、大体家に帰れたならブレザーのまま寝る訳が無い。

「……………ええ〜つと……………」

落ち着け。順を追って考えていこう。

たしか俺は帰り道、変な美人に裏通りで絡まれて、そのあと地面に開いた目玉だらけの大穴に落ちこちたはずだ。

……………く、あの射抜くような眼光を思い出しただけでも鳥肌が……………。
トラウマ確定だ。

あまりにも衝撃的な光景だったので、かなり鮮明に憶えている。

記憶では眼球ばかりで底は全く見えなかったし、残念ながら落ちた俺はまず死んでいるだろう。今のところ死んでいるという実感は全く無いけど、あれで死んでない方がおかしい。

となると、順当に考えればここは地獄だ。あれが天国に繋がっているとは思えない。

しかし地獄なら針山、釜茹で、血の池とか身の毛のよだつような場所ばかりのイメージだが、今俺が寝転がっているのは、住人に安らぎを与えてくれる純和風の部屋だ。

「どういうことだ、これ……………」

訳がわからず、首を振って部屋を見回す。

障子の扉に畳の床。襖の横にある床の間には色とりどりの花が生けられた花瓶と“花鳥風月”の掛軸が飾られている。その前には俺が帰りに肩に下げていた鞆と、鞆に納められた細剣が一振り。

武士が住んでいそうな部屋だが、俺の鞆以外はいたって自然で落ち着いた雰囲気の一部屋だ。

中でも剣は俺の心をくすぐってくれた。男ならこういうものには惹かれる奴も多いだろう。

「これって……やっぱ真剣か」

手に取ると、鋼の持つ重量が伝わってくる。

黄金の装飾が施された黒い漆塗りの鞆を見ると、流れるような文字で“出石小刀”と彫ってあった。

何て読むんだこれ？しゅっせき、しょうとう？

俺は泥棒ではないので持ち主の断りなしに触ってもいいものかと良心がうずいたが、好奇心に勝てず剣を抜いてみた。

音を立てないよう静かに鞘を払うと……。

「おおお……」

感嘆の溜息が一つ。

錆の全くない美しい鋼の両刃は刃こぼれも特に見当たらず、電灯もないのに心なしが青白い光を放っているように見えた。美麗な刃だけでなく柄も見事な装飾に彩られており、宝剣と呼ぶにふさわしい神々しさが満ち満ちている。

ロープレでもそうだが、何かこういう凄い武器持っていると、それだけで強くなった気がする。

心なしか剣も軽い。

調子に乗った俺がいろいろ構えを取ったりしてしばらく遊んでいたら、障子が突然開いた。

「何者だっ！？」

威勢よく入ってきたのは、腰に刀を二本差した少女と、白くてふわふわ浮いている謎の生命体だった……どこの漫画の世界だよこは。

背後霊のようなそれを見てちょっとビビったが、あの恐怖の穴に比べたら可愛いものだ。

入室時きっかりと正眼に構えていた俺を見て、彼女は俺とは比較にならないほど素早く滑らかに抜刀し二刀を構えた。

ぱつと見俺より3つ4つは年下なのに、大したもんだ。剣の修行でもしてたのだろうか。冷静に考えれば殺されるかもしれないのだが、どうにも緊張感が出ないのは彼女の見た目や雰囲気のせいだろう。

「おつ、すげえ。俺もそんな風に来ないもんかな」

その迫力に思わず呟くと彼女ははにかんだ笑顔を見せた。物物しい武器を持っているのに、その姿はなかなか可愛いと思えてしまう。「あ、ありがとうございます……じゃなくて！早く刀を降ろしてください！」

澄んだ青色の眼がこちらを睨む。

抜き身を引つ提げてるのにそれでも怖くないって、何か可哀想だなこの子。

「ご、ごめん。つい触りたくなって」

言い訳はするべきじゃねえが、したくなつちまうんだよな。

しかし残念だ。もう少し触っていたかったのに。

名残惜しくも剣を鞘に収めると、彼女は眼を丸くしてこちらを見つめた。

え、何？俺何かまずい事した？

「……何とも、ないのですか……？」

聞いている意味が分からない。

「えっと、何ともないぞ？」

とりあえずそう答えると、彼女は二刀を同時に鞘に収めながらブツブツ言い始めた。

「……ただの外来人があの剣を？幽々子様にご報告しなきゃ……」

ユユコ？誰のことだ？

次々疑問符が頭の中に生成されていく俺を置いて、彼女は短い銀

髪を揺らしてさっさと出て行ってしまった。

状況を把握できないままに、どんどん事態が進行していく。

このままでいいのか？どうにも流されているような気が……。

悩む俺だったが、時間はそう与えられないようだ。とたどたとした足音がすぐに聞こえてきた。それと共に、廊下の方から二人のやり取りも耳に入ってくる。

「も、何よ妖夢。お饅頭ぐらいゆっくり食べさせてくれてもいいじゃない」

「それは後でもいいでしょう！早く来てください！」

さっきの子、妖夢って言うのか。随分変わった名前だな。

「失礼します！」

またも威勢良く障子が開かれると同時に、妖夢が息を切らしながら別の女性を部屋に引つ張り込んできた。

梅の花をあしらったような紋様の空色の着物を着ており、同色の帽子に渦巻き模様が入った三角頭巾が付いている姿は、さながら幽霊のようだ。肌の色も雪のように白く、それ故に綺麗な桜色の髪が強調されていた。

俺より幾分か年上か？真面目そうな妖夢とは対照的にマイペースな印象を受けた。

饅頭手に持ったまんまだしな。

彼女は妖夢に強引に座らされると、食べかけのそれに再び手をつけ始めた。

自由な人だ……。

「はあ……では私から自己紹介させていただきます。私の名前は魂魄妖夢^{こんぱくようむ}。幽々子様の剣術指南役、並びに西行寺家の専属庭師を務めています」

妖夢が正座から仰々しく一礼した。

やはり固くて生真面目な性分なようだ。自由奔放な隣の方に大分振り回されてそうで、ちょっと同情を誘う。

「そしてこの方が我が主にして西行寺家の主、西行寺幽々子様^{かこうせいゆうゆうこ}です。

現在、この冥界で過ごしている幽霊の管理を閻魔様より任されています」

紹介された当の本人は、最後の一片を口に放り込んでいるところだった。

「ゆふありひふえおふふえわふえうほわ」

「飲み込んでからでいいです」

何というか、凄そうな肩書きとは裏腹に天衣無縫な人だ。

彼女、幽々子さんは饅頭をゆったりと咀嚼し飲み込むと、柔らかに微笑んだ。

「紫に目を付けられるとは災難だったわね、霧崎翼、だったかしら？」

……待て待て、頭パンクするからもうこれ以上分からないことを増やさないでくれ。

紫って誰だ？何で俺の名前を知ってるんだ？

正直さっきの自己紹介だって、名前以外はさっぱり分からなかったぞ。

「ええっと、もう分からないことだらけなんで、とりあえず質問いいますか？」

どの質問にも妖夢が丁寧に答えてくれたが、全てがもれなく常識の斜め上をいくぶっ飛んだもので、思考が追いつくのに暫く時間がかかった。

まず、現在俺が居る世界は幻想郷と呼ばれる異世界で、俺達の世界で忘れ去られた物が集う場所らしい。

この屋敷、白玉楼はその中にある冥界に建っているそうだ。

俺は別に死んだというわけではなく（これを聞いたら幽々子さんに大笑いされた）あの胡散臭い女性、大妖怪である八雲紫やくもゆかりが持つ能力によって冥界に送り込まれただけのようなのだ。

その際、庭に植わっている桜の木の一本にダイブし、枝をへし折りまくった拳句に気絶し現在に至るということだ。

ふざけた話だが、現実には有り得ない物を複数見ている以上信じない訳にもいかなかった。

話では、八雲紫は物事の境界、境目を操ることができらしい。その能力で世界の狭間を自由に行き来できるため、それを利用して俺を幻想郷に連れてきてしまったようだ。

そして妖夢は剣術を扱う半人半霊で、幽々子さんは死を操る亡霊……。

何この百鬼夜行の世界？

こええよ幻想郷。帰りたい。ダツシユで帰りたい。

「で、俺は元の世界に帰れるんですよね？」

送り込めるのなら、逆もまた可能のはずだ。そうでない困る。

すると幽々子さんのほほんとした笑顔のまま、首を振った。

「いいえ、無理ね」

ああ、無理なのか。それじゃあしょうがねえ……。

「……え？」

瞬間、思考が停止した。

「すいません、もう一回言ってもらえますか？」

幽々子さんは笑顔を吹き消し、真顔で言った。

一音一音、はっきりと。現実を叩きつけるように。

「あなたは、元の世界には帰れない。正確には、帰すわけにいかない」

「……冗談でしょう？」

「本当。残念だけど、それが真実よ」

ふざけんな、そんなこと口だけで納得できるかよ。勝手に変な世界に連れてこられて、なんでこっちに缶詰めにされなきゃなんないんだ。

反論しようとしたところに、妖夢が割って入ってきた。

「幽々子様、流石に説明不足かと。私が補足してもよろしいでしょ

うか？」

「任せるわ。私は現場を見ていないわけだし、あなたが適任でしょう」

幽々子さんがやりきれない風な声で返した。

「冗談じゃ、ない？」

そんな馬鹿な。じゃあ、俺の人生はどうなる？こんな訳の分からない世界で過ごせと言うのか？そんな筋の通らない話があったたまるか。

大混乱の思考の中で、妖夢の説明が妙に大きく聞こえた。

「あなたは、床の間に飾ってあった剣を抜きましたよね？あれが原因です」

妖夢の予想外の答えに口が半開きになる。

剣？それと帰ることに何の関係が？

「あの剣の名は“いずしのかたな出石小刀”。新羅の王子、あめのひぼし天日槍が持っていた宝物で、神の力の具現と呼んでも差し支えない程の力を備えています」
畏怖からか、背筋に嫌な寒気が走った。

か、神……！？只の名剣だとは思えなかったが、そんな代物だったのか……！

だとすれば、あの青白い光は？

嫌な予感しかない。そして、そんな予感に限った的中してしまう。

「それを抜いたことがきっかけとなり、あなたの内に眠っていた超常的な力、能力が発現してしまったのです。刀身から放たれていた青白い光が、何よりの証」

妖夢の同情のこもった言葉は、その真実味を高めるだけだった。

そんな馬鹿げた、能力なんて子供騙しな話が、本当に……。現実を飲み込めず固まっている俺に、幽々子さんは冷静に問いかける。

「どんなものであれ、能力を備えた人間を外の世界に帰すのは果たして賢明といえるかしら？」

否定したい。

だが、頭の冷静な部分がしっかりと答えを導き出してしまふ。
そんなの、帰すべきではないに決まっている。俺が戻った時、周りにどんな影響を及ぼすか分かったものじゃない。

現代には能力なんてないし、信じられていない。それがバレてしまえばどうなるか。徹底的に調べられ、利用されるか、異端として排斥されるかのどちらかだろう。

人間にとって、非科学的な現象や力は、歓迎できないものだからだ。

「……妖夢。白楼剣を抜きなさい」

幽々子さんが溜め息をつきながら命じた。妖夢が無言のままにゆつくりと短刀を抜き、茫然としている俺の右腕に峰を当てる。

「一つだけ聞いわ。向こうの世界の思い出は、未練と共にあるべきかしら？」

閉じた扇子を俺に向け、真つ直ぐに俺を見る。

こんな状況だが彼女達に悪意は感じられず、むしろ何か温かいものを感じた。二人の柔らかな表情は俺を多少なりとも落ち着かせ、言葉を吟味する余裕を与えてくれた。

「……いいえ、できるものなら」

断ち切るべきだが、それはたぶん無理だ。

自信ゼロの情けない回答だったが、そんな俺に幽々子さんは満足したように頷き微笑んだ。

「出来るものなら、ね……ふふ、そんなあなたの儂い望みを、妖夢が叶えてくれるわ」

その言葉を合図に峰が反され、白刃が俺の腕に一筋の紅い傷をつけた。

刺すような痛み若干顔をしかめるが、それと同時に胸の中に巣食っていた空虚感が消え失せる。

「つつ……今のは？」

「白楼剣は人の迷いを断つ剣。あなたの身を裂くと共に、心を斬ることができなのです」

妖夢が短刀を鞘に収めながらほほ笑んだ。

「思い出だけを残して、外界へ“戻りたい”という未練は去ったわ。これから白玉楼で共に暮らす者同士、よろしく翼」

幽々子さんが扇子を広げて口元を隠した。その奥の微笑は八雲と同じく、底の知れない感じがする。

「はい、よろしくお願い……えっ!?一緒に暮らすんですか!?!」

「ふふふ、嫌かしら?」

幽々子さんが鈴を鳴らすような声で笑う。どうにも遊ばれているような気がするのはいのせいでないだろう。

「いや、むしろ嬉しいんですが……普通なら紫さんが責任をとるもんじゃないですか?幽々子さんに迷惑をかけるのは」

そりゃ男なら、こんな美人達(人?)と一つ屋根の下で暮らせるなんて、嬉しいに決まってる。

しかし、人には通すべき筋つてものがある筈だ。

「その紫から頼まれてるのよ。親友の頼みを無下に断れないでしょ?それにあなた、とつても面白いんですもの」

面白いか。喜んでいいのか微妙な返事だな。

「じゃあ、妖夢は?」

「私は幽々子様に従うだけです」

生真面目な返事だ。何にせよ、同意してくれたことは確かだよな? 「それじゃあ……よろしくお願いします」

俺は妖夢がしたように、正座から深々と頭を下げた。

第二話 冥界にて墓穴を掘る（後書き）

誤字、指摘などあればよろしくお願いします。

第三話 普通の魔法使いと異界の人間

「住むに当たつてですが、何か俺に出来る仕事はありませんか？」

働かざる者食うべからずという訳だ。勤労の重要性をストレートに表した素晴らしい言葉だと思う。

労働や学業、更には目標を全て放り出せば、後に待っているのは堕落のみだ。俺は高校生だったが幻想郷に学校の概念があると思えないし、何より妖夢や幽々子さんに迷惑かけっぱなしというのはすつきりしない。

「どうでしょうか？」

「ないわね」

幽々子さん、悩む間もなく笑顔でばっさり。もうちょっと考えてくれてもいいんじゃないかねえか？

残念そうな俺を見て、妖夢が補足を入れてくれた。

「白玉楼では基本的な家事労働は全て幽霊達がやっているのです。さらに庭の手入れやお使い等は私が担当しているのでそもそも仕事が無いのですよ。こちらに来たばかりなのですし、翼はゆっくり過ぎして下さい」

家事労働を他人に全部やってもらうとは……。

お嬢様だ。本物のお嬢様がいるぞ。

「でもただで住まわせてもらうのもなあ……手伝い程度でも無いですかね？」

これから世話になる新参加者が、楽をする訳にはいかない。だからこそこうして頼み込んでいるのだが、幽々子さんはふわりと立ち上がり首を振った。

「何か手伝って欲しい事があればその都度お願いするわ。まずは暫く手付かずだった宝物庫の掃除をしてきてちょうだい」

彼女に次いで妖夢も立ち上がる。俺の役割はお手伝いさんで固まったらしい。

ま、役に立てるんならそれでもいいか。正座を崩して痺れた足を伸ばしている俺に、幽々子さんは部屋を出る直前で振り返った。

「宝物庫は正門の左側よ。あと、出石小刀は常に腰に指しておきなさい」

「え？でも」

こんな大層な物を俺に持たせていたら妖怪に奪われるんじゃないか？そんなリスクを背負ってまで強制することじゃないようないや……。

「あなたがその剣を持っているのが一番栄えるじゃない。私には似合わないし、妖夢も三刀流は出来ないでしょう？」

それはそうかもしれないが、納得がいかない。神剣なんて言われると、流石に恐れ多いのだ。

待てよ、逆に考えよう。化け物だらけな世界で、自分の能力もよく分からない俺が無防備に外を出歩いたら……。

「分かりました。有難く使わせていただきます」

「出来れば使わない方がいいんだけど、とりあえず頑張っつてね。健闘を祈つてるわ」

たかだか整理整頓で戦つてたら命がいくつあつても足りません。

とにもかくにも、まずは出向いてみよう。教えてもらった通りに正面から本殿を出て左に折れ、塀に沿つて進む。高い塀の向こうでは、葉を落とした桜の木がもうすぐ訪れる芽吹き季節を待ち望むように揺れていた。足元は昨日の名残か、疎らに雪が地面を覆っていた。

時間軸は外と同じらしい。

「えーと、今日はっつと」

紺のブレザーのポケットをまさぐり、携帯を取り出した。何処に行くにも無いと落ち着かないため、習慣的にポケットに入れていた予想通り圏外だったが、時計としては機能してくれるだろう。待受画面には、今日の日付と現在時刻が表示されている。

3月2日、午前11時42分。

俺が穴に落ちた日から一週間も経過していた。相当長い間倒れたままだったようだ。無駄にした時間が少し悔やまれるが、後悔した所で戻る筈もない。忘れることにしよう。

初春にしては少し寒い、それは幽霊がそこら中を飛び交っているから、だな。さつき屋敷の中で幽霊と正面衝突して通り抜けたのだが、あまりの寒さに身震いした。この屋敷の景観にはそぐわないが、ブレザーにセーターを着ていて助かった。

携帯を閉じるとパチンと乾いた音が妙に大きく響き、後には木々

のざわめきだけが残る。

「……静かだ……」

独白も虚しく風に拐われていく。車のクラクションは勿論、人の会話も、雀の鳴き声すら聞こえない。

ここまで静かだと、逆に落ち着かねえな。死後の安寧ってこんなに寂しいのか……。

「……いやいやいや」

ぐしゃぐしゃと頭を掻きむしり、少しネガティブ思考になっていた頭を切り替える。

ここがどんな所であれ、俺に他の行き場なんてねえだろ。大体生きてるうちから死んだ後のことを考えてどうする。今考えるべきなのは、あの二人に恩を返すことだ。

言い聞かせ、前を見据えて歩き出す。

これからの暮らしがどうなるのか俺には見当も付かないが、考えたって始まらない。出来ることを一つづつこなしていこう。

「うっし！いつちよやってやらあ！」

自らを奮起させるため、曇天に拳を突き上げた。そうでもしないと、ネガティブな気持ちに引きずられて前に進めない気がしたから。人間、そう簡単には割り切れないものだ。

さて、気合い十分な俺を待ち受けていた例の宝物庫だが、何と云うかすごく普通だった。

白さ際立つ漆喰の壁に、軋んだ音を立てそうな両開きの扉には門とでかい錠前が掛かっている。その上には規則正しく並べられた瓦が、少しばかりの雪を被っていた。

江戸末期からまんま抜け出てきたようなそれは、塀の角にある引き戸のすぐ向こうにあった。本殿を囲むものとは別の厚い石壁が三方を包む小部屋で、外からは屋根しか見えないようになっていた。宝物庫というだけあり、そこには見張りに立っているらしい幽霊がいくつかふよふよ漂っていた。そいつらは俺が入ってくると、これでお役御免と言わんばかりにさっさと何処かへ飛んでいってしまった。

置き土産に、細長い金属物を落として。

「これは……この鍵、だよな」

すっかり錆びついたそれをつまみ上げると、そこいらの雪の下に埋めたかのようにひんやりしていた。

鍵にしてはかなり大きく、横向けに手のひらに乗せると若干はみ出る。

俺はそれをグツと握りしめ、扉に向き直った。立派な建物に相応しいようなお宝が、この中には眠っているんだろう。間違っても壊したりしねえよう注意しなきゃな……。

まずは鍵を錠前に差し込もうとした、その時だった。

「おっ、これなんかいいじゃないか」

声が出た。少しして、金属同士が触れ合う騒がしい音。

振り返っても当然誰もおらず、扉をもう一度見ても、やはり錠も門もしつかりと掛かったままだ。生唾を飲み込み、抜き足差し脚で静かに後退る。

「泥棒……!!」

想定外の展開に思わず声が漏れる。

これ妖怪よりたち悪いじゃねえか！密室に忍び込んでる時点で一般人でもねえし！

つといかん、落ち着け俺。一人で脳内ツツコミ入れてる場合じゃねえ。

深呼吸し、冷静に思考を巡らせる。

しかし、どうしよう？本来なら俺が中の奴を取っ捕まえるべきだろうが、相手が相手だし下手したら即お陀仏だ。でも幽々子さんに報せに行ったらその間に逃げられるかもしれねえし……。

「……しゃーねえ」

扉に忍び寄り、極限まで力を抜いて解錠する。鍵を握る手が汗でベツトリしているのは、言わずもがな天気のせいではない。

音がしないよう慎重に、慎重に……。あっおい！言ってる側からカチャって！

扉を挟んで向こう側の相手に聞こえるはずもないが、神経質になっている現在の俺には爆竹並みの騒音だ。

しばらくの間微動だにせず息を殺していたが、気付かれた様子はない。

……何か俺の方が泥棒っぽくねえか？中の奴は隠れる気がさらさら無いのか、ずっと喧しい音立ててるし。

ともあれ、これで錠は開いた。そして盗人はまだ中だ。

「ようし……」

右手で静かに出石小刀を抜き放ち、左手を添えて下段に構える。いくらこれがあるといっても、素人剣法で真っ向から戦って人外に勝てるわけがない。

なら、一気に奇襲してこいつを首に突き付けてやればいい。そこで大人しく捕まるならそれでいいが、殺されそうになったら斬る。

それで死ぬかは分からないけど、ビビるくらいする、はずだ。

乾坤一擲けんこんいつてきの博打みたいな策だが、他にいい方法も思い浮かばない。意を決し、剣を構えたまま左足を腹に引き寄せる。

そして。

「おらあああ！！！」

その場のノリで渾身の蹴りを扉にぶちかました。

直後、この行動を俺は激しく後悔した。

この扉は、錠とかんぬき門が掛かっている。もう一度言っ、錠と門（この重要）が掛かっている。

脚が扉を気持ちよく開ける筈が、抜き忘れた門がそれを阻んだ。

それで開かなかっただけならまだ良かったのだが、俺の中段蹴りは扉を貫通しそうな勢いで放たれ、あるうことが門をへし折り右側の分厚い木板を軽々と吹き飛ばしてしまった。奥で物色を続けていた犯人は振り向き様に扉の体当たりを食らい、押し潰されて動けなくなる。

よし！これで捕まえたも同然だ！

「つてあああああ！！！」

もうもうと上がる埃の中、俺の絶叫が轟いた。

「うああ、や、やっちまった！何で！？何でこんなキツク力凄まじいことになってんだ！？いやそれよりどうすんだよこれ！初日で追っ出されたくねえけどこんなの俺には直せねえし！」

打開策を考えれば考えるほど、焦りと混乱が頭を支配していく。

結果、頭を抱えて悶え続ける俺。情けねえ……。

「けほつ……と、とりあえず、一旦落ち着いたらどうだ？そんな状態じゃ考えも纏まらないぜ？」

むせながら、上半身だけ板から出して床に伏している金髪の女の子が口を出す。

おお、正鵠を射た意見だ。さすが泥棒、知恵はよく働く……じゃなくて！

「扉のことよりお前だよお前！普通に助言してんだ！何処から入ってきやがった！」

この状況で何故普通に助言してくるんだ？幻想郷の奴等はこんな奴等ばつかなのか？疲れるな……。

「何処つて、あそこから決まってるじゃないか」

板の下から這い出してきたそいつは、悪びれる様子もなく蔵の高所にある大きめの木格子らしき場所を指差した。

らしき、と呼ぶのは、まるでレーザーでぶち抜いたように綺麗な円形の穴が開けられており、木格子の役目を果たせなくなっていたからだ。どんだけ荒っぽい泥棒だよ、おい……。

「とりあえずこいつを退けてくれないか？このままじゃ動けないぜ」

そして図々しい。泥棒を助ける馬鹿が何処にいるかよ。

「無理。このまま家の主の前に突き出してやる」

こいつが何者かは知らねえが、もしかしたら殺されるかもな……。幽々子さん、死を操るとか言ってたし。そう思うと可哀想だが、こ

れが俺に与えられた仕事で恩返しだ。

自己暗示をかけ、その御主人を連れてこようと背を向けても尚、彼女は話す。

すぎる様子もなく、至って普通に。

「主って幽々子のことか？そっいえば花見以来会ってないな。元気にしてるか？」

かなり親しげな話し方だ。これはもしかすると、もしかするかもしれない。

「お前……幽々子さんの知り合いか？」

きょとんとしている俺に、彼女はニツカリと笑いながら答える。
無駄に爽やかだ。

「知ってるも何も、何回ここで一緒に宴会したか分からないくらいだぜ？それにお前、今呼んだらへマやったのがばれるだろ」

クスクス笑いと刺さる一言を頂いた。うん、あくまで自滅しないため、俺がすべきことをするか。

歩み寄り、一見重そうな長方形の巨大なそれを片手で持ち上げ、すつと壁に立て掛けた。

我ながら人間技じゃない。やっぱ俺、どうかしちゃったらしいな。

「痛つつ……。まったく、捕まえるにしてもやり過ぎだぜ」

「ごもつともな言葉が耳に痛い。」

彼女は膝を払い、魔女が被ってそうなとんがり帽子を拾い上げた。服は見事に白黒に統一されており、これまた魔法使いを連想させる。

イメージと違う所は、彼女が老婆ではなく少女である所か。

「お前、もしかして魔法使いか？」

普通ならこれ以上痛々しい質問も無いだろうが、ここは魑魅魍魎の蔓延る異世界だ。魔法使いがいても何ら不思議じゃない。

「いかにも、私は魔法使いだ。アリスやパチュリーと違って私は人間だけだな」

予想ドンピシャ。しかし初めて出会った人間も魔法使いとは……何てファンタジーな世界だ。

伝説の剣もあるし、勇者になって魔王を倒す旅にでも出かけられそうだな。仲間の魔法使いが盗賊と兼業なのは、道徳的にどうかと思うが。

彼女は脇に置いてあった箒を肩に担いで、じろじろと俺を観察し始めた。視線が些かくすぐつたい。

「お前はどうみても人間なだけどなあ？普通の人間があれば怪力なはずがないし……。能力でも持つてるのか？」

能力は間違いなくあるが、それがどういった能力なのか、幽々子さんや妖夢は教えてくれなかった。分からねえが、単純に予想するなら“幻想の武器を操る程度の能力”とかか？

まんまだけど妖夢の発言から推測すると、出石小刀も一般人なら触れることも出来ないらしいから、本当にそうかもしれないねえな。

「まあな。まだどんなことが出来るかは分からないけど……身体能力の向上はありそうだ」

強くならなきゃこの世界では生きていけそうもないし、己をよく知るためにも今度色々試してみるか。もしかしたら衝撃波みたいなのも出せるんじゃないか？

ちよっとワクワクしてくるな。

「弾幕が張れるようになったら知らせてくれよ。たまには違う奴と戦ってみたいからな」

弾幕か……。シューティングゲームでそんなジャンルがあったが、幻想郷の住人はあんな弾が素で撃てるのか。

やっぱり幻想郷ヤバイ。

「さて、私はそろそろ帰るぜ。何も盗ってないから安心してくれ」

箒に跨がるうとした彼女の腕をガッチリと掴む。

「ほう、じゃあその右手に持ってる鏡はなんだ？」

掴んだその先には、教科書で見たような土汚れの目立つ銅鏡がしっかりと握られていた。油断ならない奴め……。

睨み付ける俺の視線をもともせず、彼女は空いている手の親指をグツと突き立てた。

「盗む訳じゃない。死ぬまで借りるだけだぜ」

完全にガキの言い訳じゃねえか。お前の物は俺の物、か？

「一緒だろうが……。とにかく返せ。今なら幽々子さんにも黙ってやるからよ」

抜きつばなしだった剣で意識的に光を反射させてみると、案外簡単に注意を引くことが出来た。いざとなれば容赦しない、の意思表示。

……勿論ハツタリだが。

するとありがたいことにこれが通じ、二、三拍の沈黙の後に彼女は頭を掻いて溜め息を吐いた。

「やれやれ、分かったよ。ちえつ、今日はパチュリーの本三冊だけかあ……」

「いやいや、泥棒はしごしてんじゃねーよ！躊躇いつてもんがねえのかお前は！」

呆氣にとられている俺をよそに、彼女は大きく伸びをした。

「ま、いいか。冥界に来たのも気まぐれだったしな。面白いのにも会えたし万々歳だぜ」

面白いの、と呼ばれて気が付いた。そういえばお互い、まだ名前を聞いてなかったっけな。

「霧崎翼、な。今度からはちゃんと呼んでくれ」

未だに離さない銅鏡を催促しながら自己紹介を済ませる。それに對し、彼女は両方の手を差し出してきた。

「私は霧雨魔理沙きりふめまじさ。呼ぶときは魔理沙でいいぜ。よろしくな、翼」

右手で盗品を受け取りながら、左手で握手を交わす。その両手が離れた瞬間、魔理沙は矢のように急加速し解放された扉から飛び出していった。

見えなくなるまで見送ろうかとも思ったが、今は一分一秒が惜しい。見つかる前に何とかして扉を直さなきゃいけないのだから……。

ジャリ。

「……あ」

足音。

ジャリ。

確かに感じる、人の気配。

足元が抜け落ちたような気持ち悪い浮遊感と共に頭に浮かんだのは、追放の二文字だった。

「すす、すいませんでしたああ!!」

顔を見るのが怖くて目をつぶったまま振り返り、間髪入れず土下座。その人が口を開くまで、俺は床に額を擦り付けるばかりだった。

第三話 普通の魔法使いと異界の人間（後書き）

翼のヘタレ度がどんどん上がっていく…… ^^ ;

さて、読んでいただきありがとうございます。

あんな主人公ですが、これから頑張る予定ですので応援してやってください。

第四話 死への境目

「……ええつと、とりあえず、顔を上げてくれないかな？」

幽々子さんでも妖夢でもない落ち着いた声音は、明らかに困惑していた。口調もまるで別人。

あれ？

もしかして、やっちまったのか？

汗が吹き出るのを感じながら、出来るだけゆっくりと顔を上げると……。

「初めまして、霧崎翼。紫様から少しだが話は聞いているよ」

見知らぬ女性が長い袖の口を合わせて一礼した。

う、は、恥ずかしい。顔が赤くなっていくのが自分でも分かる。

忘れよう、出来るだけ早急に、かつ完璧に。せつかく相手もスル―してくれてんだから。うん。

気持ちを切り替えようと首をブンブン振りながら自らに言い聞かせ、立ち上がる。

そ、そういえば中国のアクション物かなんかで、あんな礼をやっているのを見たことがある。ということは気を使って波動を飛ばしたりも出来るのか？

普通なら痛すぎる発想だが、この世界ならばそれが現実になるから油断できない。

白をベースにした道士服には、八卦はっけつていうんだっただか、棒が規則的に並んだ模様が入っていたりしていかにも感じた。

背は結構高く、髪は魔理沙と同じ金髪だが、こちらは癖のないショートカットで、その上には二つの突起がついた変わった帽子を被っている。動物の耳のようだ……いや、本当に耳なのだろう。ここ

は異世界なのだから。

殊更に目を引く九本の金色尻尾から判断するなら、狐、か？

「あの……あなたは？」

尾から目を離さないままの質問。これには二つの意味が込められている。

一つはそのまま、彼女が何者なのか。そしてもう一つは彼女がどんな妖怪なのかだ。

一応人型だが、まず人間ではないはず。

彼女は相変わらず袖口を合わせたまま、サッと自己紹介をしてくれた。どうやら癖らしい。

「私か？私は八雲藍^{やくもらん}。紫様の式……従者のようなものだな。種族は見ての通り妖獣、九尾の狐だよ」

立派な尻尾群がわさりと揺れる。毛並みがいいのだろうか、つやつやとした光沢をもったその魅力的なふさふさが、俺の視線をとらえて離さない。

俺は動物が好きだ。犬や猫の散歩をしている知り合いを見かけるとよく頭をなでなでさせてもらっていたりする。

しかし今回の誘惑は、そんな生温いものではない。あんな人が埋もれそうな尻尾なんて、恐らく彼女以外は持ち合わせていないだろう。是が非でも触ってみたい。

しかし失礼になるかもしれないし、いきなり触らせてくれなんてさすがに言えないので、まずはサラッと話題として触れてみよう。

「あの、随分と立派な尻尾ですね」

……我ながらさつきからじろじろ見といてあざと過ぎるな。

「触ってみるかい？」

藍さんはまた尻尾をわさと動かして袖口を離した。

まさか向こうから提案してくれるとは……。ありがたい。あのふさふさにこつても簡単に触れられるのか。

テンション、上がってきた……！

「え？いいんですか？」

白々しい確認だったが、藍さんは嫌な顔一つせず柔和な笑みで頷いてくれた。

「目が触りたいと言っているよ？紫様が随分と迷惑をかけてしまっ
たし、そのお詫びだ。私も自慢にしている尻尾だし、褒めてもらえ
るとやっぱり嬉しいしな」

藍さんは腕を組み、紫様ももう少し人情をどうたらこうたら……
などと独りごちていた。

いやはや、粹な計らいに感謝感激だよ。最初の気遣い溢れる対応
といい、他人の人生を跡形もなく粉碎した御主人とはえらい違いだ
……。……。

ここで、俯きがちに鼻の頭を搔いたのが間違いだった。

奴はこの時、既に真後ろにいたのだから。

「あら、ずるいわよ翼。私は最近触らせてもらえないのに」

あらわになつていた首筋につつーと指の感触が走ったせいで、
のけ反った上に変な声が出てしまう。

「うひゃあう!? な、何すんだてめえ!」

咳払いしてから顔の高さにいた憎きあいつをギロリと睨み上げる。奴は俺が落とされた穴と同じような、気持ち悪い空間の裂け目から身を乗り出してニヤニヤしていた。くっそも力つくこいつ。

奴、八雲紫は軽やかに地面に着地すると、物凄くわざとらしい悲しみを顔に張り付けた。

「あらあら、てめえなんてひどいじゃない。私の名前は紫よ?」

「んなこた知ってるわあ!」

こいつは自分のしたことを理解していないらしい。ふざけた対応しやがって。

こいつにとっては俺なんてとるに足らない存在かもしれないけど、だからって他人の人生を好き勝手にしていい訳がない。しかもその後もまだ人を挑発するなんて、はつきり言ってひねくれすぎだ。

「ゆ、紫様、何時から居られたのですか……」

藍さんが緊張した面持ちで、俺の向こうでニヤニヤしている八雲を見つめた。感情をそのまま表したかのように尻尾も耳もピンと張りつめていたが、何故か小刻みに震えてもいた。

緊張、恐れ……もしかして、畏怖している?

「何時って、ついさっき来たばかりよ。そんなことより、藍」

名を呼んだ瞬間、瞳に宿る光が危ない色を帯びた。

見ただけで己の存在全てをねじ曲げられそうなの瞳は、少なくとも従者に向けられるべきものではなかった。

「式が唯一無二の主意見するとは、一体どういう見かしら？」

まるで機械に向かって命令するような、一切温かさが感じられない
淡々とした話し方に反感を覚える。

意見……もしかして、藍さんがさつきちよろつとこぼしてたあれ
のことか？

だとしたら、それは何も悪くないはずだ。俺をこんな世界に勝手に
引き込んでるんだし、八雲が人間に冷酷なのは事実だ。

それに藍さんは己の願望を呟いただけであり、それを八雲に押し
付けたりもしていない。意見する、と言うには些か以上に無理があ
る。

疑念を抱く俺をよそに、藍さんは素直に頭を下げしてしまう。

「も、申し訳ありません。出過ぎた真似を……」

漫画や小説でしか見たことはないが、主従関係というものは、普
通優劣がこの上なくはつきりしている。例えば従者に非が無くても、
主が謝れと言えば頭を下げなきゃならない。

でも、だからってこんな横暴がまかり通っていいのか？それが主
従の正しいあり方なのか？

そう思ったら、もう独りでに口が動いていた。

「おい、自分勝手もいい加減にしとけよ」

努めて平静を保とうとしたが、それでも刺が出てしまう。

それを聞いた二人は、双方に似つかわしくない同じ顔でこちらを
凝視する。目をわずかに見開いた、小さい驚きの表情だ。

「……あなた、自分が何を言っているか分かっているのかしら？」

八雲が冷笑を隠すように、広げた扇子を口元に当てた。対して藍さんは両手を振り振り、あたふたと俺を諭そうとする。

「つ、翼。お前の境遇を考えれば怒るのも当然だ。だがここは一旦……」

「黙りなさい、藍」

非人間的な悪魔の瞳に威圧され、藍さんは黙り込んでしまう。八雲はその眼光の矛先を俺に向け、空間の穴から日傘を取り出し肩に担いだ。

「ふふふ、私に意見できたことに敬意を表して聞いてあげるわ。さあ、私の何がご不満なのかしら？」

相変わらず、眼は炯々と光っている。視線で人を殺す、なんて表現があるが、八雲ならそれが出来るのではないだろうか。

少なくとも、俺の小さな反抗心は殺されそうだ。しかし、負けたくない。だから、グツと足に力を込め、プレッシャーに押し潰されないよう拳を握った。

「他人を顧みないその自己中心的な性格だ。藍さんは何も間違ったこと言っただろ」

相手が人外だろうと大妖怪だろうと、関係無い。ここまでくれば、もう言いたいこと全部言っただろ！

「藍さんはお前に忠実な従者なんだろう？そんな人すら大事に出来なくて何が妖怪だ。情も持たねえ奴なんか、誰かの上にたつ資

格はねえよ」

剣を勢いよく抜き上から振り下ろして、切っ先を八雲に真っ直ぐ向けた。勿論攻撃の為なんかではない。ただ、自分に勢いをつけるために。

すると、剣が描いた軌跡と同じ、三日月型の光の刃が、八雲を斬り裂こうと弾丸の如き速さで放たれた。

「は……っ!？」

俺が瞬時の出来事に反応できない間に、その光はいつの間にか開いていた八雲の傘に阻まれ、霧散する。

「……威力は十分ね。有象無象の野良妖怪位なら楽に倒せそうだわ」

傘から半分覗いた顔が不気味に笑む。だが、瞳は氷柱を突き刺すかのような冷たい光を湛えたまま、瞬きもせずこちらを見ている。

そこでやっと俺は、凶らずも宣戦布告とほぼ同義の奇襲攻撃を放ったことを自覚した。

本能的な恐怖が全身を余すことなく貫き、脳が躍起になって警鐘を鳴らしているのか震えが止まらない。

逃げる。一刻も早く。この怪物の元から……!

「でも、まだまだね。力のむらが大きすぎる。私に挑むのは何百、何千年と早いわ」

静かに傘をたたみ、先端で床をコツコツと叩く。全然動いていないのに俺の呼吸は全力疾走したように荒く、心臓は張り裂けそうなほどに強く鼓動している。

殺される。逃げなきゃ殺られる……!

しかし、脚は頑として動こうとしてくれなかった。
完全にすくんだまま、妖の王に命を捧げようとその場に根を生やしている。

「もつと精進を重ねるべきだったわね。……もう、後の祭りだけど」

傘が天井付近に真一文字の線を引き、空間を裂く。

やがて次元のスキマから出てきたのは、手に手に武器を握った、
数えきれないほどの腕だった。

日本刀、鉄戟、青銅剣、サーベルにレイピア、トライデント。腕
共は一固まりの彫刻のように微動だにせず、各々の得物、国や時代
の境界を越えた千差万別の刃を振り上げている。

「あ、あ……！」

それらがもたらさだるう苦痛と恐怖に戦慄し、首を絞められたよう
な喘ぎが漏れた。

何があってもこいつにだけは逆らっちゃいけないのだと、今
更ながらに思い知る。これから俺は、圧倒的な力の前に為す術もな
く惨殺されるのだろう。

……絶望って、こんな気持ちを言うんだろうな。

「閻魔様によろしく言っておいてちょうだいね……ご機嫌よう」

ああ、こんなにも呆気ないもんなのか。たった一度のミスで、全
てを失うなんて。あまりに、酷い。

八雲は人を殺すというのに、一切躊躇い無く、立ち尽くす俺に傘
を向けた。それを合図に、逃れ得ない刃の一斉投擲が執行される。

俺は最期を悟り、しっかりと目をつぶってせめて無惨に果てる自
分を見ないようにした。

なあ神様、俺がまた生き返る時は、元の世界に帰してくれよ。
いや、平穩無事に暮らせるなら、魔界でも天界でも何だっていい。
ただ。

勝手に連れて来られて、勝手に殺される。

こんな理不尽が許されるような世界は、もう御免だからさ。

第四話 死への境目（後書き）

DEAD END。

ではありません。

まだまだ続きますよ！

第五話 幻想の翼、槍、そして河童と九尾の狐

足下に伝わる衝撃と絶え間なく響く重い音。

局所的な大地震を発生させたような、僅かな抵抗も許さない蹂躪とでも言うべき攻撃。

俺は恐怖のあまり、金縛りにあつたように動けなかった。

目を開けたらその瞬間串刺しにされそうかどうかどうなっているかも確認できず、声の限りに叫びたいんだけど、その声すら出せない。

無力な俺に出来るのは、この悪夢の終結を祈ることだけだった。

頼むから、早く止めるか殺るかしろよ……！

「もういいわね」

轟音の中だったが、それははつきりと耳に届いた。

やっと止めを指してくれるのか……。

実質今から殺しますと言われたのに、何も言えなかった口から出たのは安堵の吐息だった。

死ぬ怖さより、この地獄の時間が終わりを告げることに對する安心感の方が大きかったのだ。

「終了よ」

殺人の宣言に次いで、小気味良く指が鳴らされる。

その途端、床を抉り地を揺るがす白刃の雨が降り止んだ。

何か企みがあるのかと疑って数秒待ってみたが、しかし何も起こらない。

あるのは俺の荒い息遣いと吹き飛んだ砂粒が落ちてくる乾いた音だけだ。

「……………うえ？」

ここでやっと呪縛から解放された口が間抜けな声を発した。

同時に足の力が抜け、床に膝をつく。

たった数秒立っていたただけなのに膝が笑っていて、しばらくは元に戻りそうになかった。

「く、くく……………」

次に聞こえたのは、必死に笑いを堪えるような微かな忍び笑い。

声からして紫だろう。

彼女は数秒間耐えていたがやがて堪えきれなくなり、思いつきり吹き出したのを境に大笑いし始めた。

「ぐく、あはははは！はははは！駄、駄目、堪えきれな、はははははは！」

……………訳が分からねえ。

何故俺は生きている？

何故紫は笑っているんだ？

彼女の不可解な行動で緊張感が無くなって、何とも間抜けな空気が場に広がる。

そのお陰で、やっと俺は目を開けて現状把握を始めることができた。扉が消し飛んでいるとはいえ、この蔵の中は薄暗いので目はすぐに慣れる。

俺の周りにはこれでもかつて程の大量の武器が突き刺さっており、地面をガタガタにしていた。

衝撃のせいで棚から落ちてしまった少数の品は、幸い割れ物ではなかったので破損は見当たらない。

俺が壊したんじゃないじゃねえし、これは全部紫のせいってことで話せば大丈夫だろ。

そしていつの間にも移動したのか、扉の前で紫と藍さんが横に並んでいる。

藍さんは同情の眼差しを俺に送っているが、紫はまだ腹を抱えて苦しそうにしている。

……何？ムカつきを大量生産するのがお前の生業なのか？

職人級の腕前だってことはよく分かったから、早くその笑いを止めてくれるか？

苛立ちを込めた睨みをきかしてみたが、紫は何処吹く風で笑いつばなしだ。

再び険悪なムードを漂わせ始めた俺に危機感を覚えたのか、藍さんが本当に申し訳無さそうな顔で話し始めた。

「す、すまない翼。だけど紫様も何の考えも無しに攻撃した訳じゃないんだ。君の力を試すためにわざとこんな芝居むっ」

「ふふ、そこまでよ」

多少ましにはなったが、まだ口元に薄い笑みを張り付かせている。奴はその指で、優しく藍さんの口を塞いだ。

芝居？

はなっから殺す気なんて無かったってことか？

「紫様、どうして事実を隠すのですか。今この場で話すべきでは？このままでは誤解されて終わってしまいます」

藍さんの寂しそうな顔にも紫は微笑を崩さない。

表情は動いてないのに、それが一瞬優しげに見えたのは何故だろうか？

「……まだ、早いわ。翼」

全く予期していなかった自分の名前を呼ばれ、慌てて返事をする。

「あ？」

「あなたを怖がらせてしまったお詫びよ。持って行きなさい」

「持って行けって……これ何だよ？」

俺の前に落ちてきたのは、真っ白な羽で造られた一対の輝く大翼だった。

出石小刀とはまた異質の雰囲気を醸し出しており、神様から筆り取ったんじゃないかと思うほどの、神々しい力を感じる。

「ギリシヤ神話に登場する細工師の息子、イカロスの翼よ。私の妖力で編み直してあるから、お話のように蠟が溶けて壊れたりはいわ。出石小刀もあることだし、ある程度の妖怪はこれで相手に来るはずよ。スペルカードくらいは自分で作りなさいな」

くそっ止める。

分からないことを一気に喋られてもホント困るから。

スペルカードって何だ？

この翼の使い方は？

「じゃあ私はもう行くわ。藍、幽々子には私が話を付けておくから、あなたは翼を連れて、河童にこの宝物庫の修繕を頼みに行きなさい。その際、さっきの話は一切しないように。いいわね」

おい待て！

せめて説明責任を果たしてから行けよ！

いやむしろ逝け！

言葉は頭の中に浮かぶが、それを音に出来ない。

上唇と下唇の境界が無くなってしまったように、口が開かないのだ。藍さんも同じようで、恐らくこの元凶たる主を無表情に見つめていた。

そのまま紫は返事を待たずに、チャックが開くように裂けた空間のスキマへと足を踏み入れる。

そしてそれが閉じる最中に彼女がもう一度指を鳴らすと、出石小刀を除く俺の周りを囲んでいた武器が一瞬で消え去ってしまった。

つくづく人間離れた奴だな……本当に人間じゃねえが。

「しっかしこんなもん貰ってもなあ……どう使えばいいのやら。翼って元々生えてるもんだろうに」

ここでやっとこさ立ち上がり、今しがた自由になった口で呟きながら目の前の翼に目をやった。

……もしかしてあいつ、俺が腰抜かしてずっと膝ついてたから笑ったのか？

そう考えると、無性に腹立たしい。

分かり切っている力の違いをわざわざ見せつけられたようだ。

改めてあの妖怪が憎く思えてきた。

幸いその従者は良い人らしいので、疑問はここで解消しておくことにする。

「藍さん、さっきの話で聞きたいことがあるんですけど、スペルカードって何なんです？」

聞こえているはずだが応答がない。

不審に思っただけ彼女をよく見ると、尻尾と耳が少し垂れ気味になっていた。

目は一点、主が消えた場所から動こうとしない。
落ち込んでるのか？

「あの〜藍さん？」

背後から顔を覗き込む。

「ひゃっ！？い、いきなり何だ翼。脅かさないでくれ……」

その落ち着いた物腰からは想像出来ない可愛らしい声をあげて、藍さんは飛び上がった。

え？

いきなりって本気で気付いてなかったのか？

「聞こえてました？さっきの質問。スペルカードって何ですかっという」

彼女は首を横に振り、頬を掻きながら弁明した。

……意外と惚けた所もあるんだな。

「すまない、少し考え事をしていてね……」

そこで咳払いをし、彼女はスペルカードの説明を始めてくれた。

「スペルカードとは自らの魔力や妖力、或いは同様な力を秘めた道具と共に、自分が持つ能力に応じた技のイメージを記憶させた契約書のことだ。使用方法に制限はあるが、発動を宣言して封印を解けば更に技を強化することが出来る。簡単に言えば必殺技のようなものかな」

「へ〜……」

……よし、なんとなくは分かった。

しかし魔理沙に教わってたら絶対分からなかっただろうな。

大雑把そうだし。

「でも力を封じるってことは、実力をセーブすることになりませんか？」

「いや、想像を刻みつけるだけだから、封じ込める力は微々たるものだよ。発動時の力の消費量は技によってピンキリだけど」

ほほう、なるほどなあ。

必殺技か、是非習得したいが……。

「でも俺、力なんて持ってませんよ？それでもカードを使えるんですか？」

そう。

俺自身は力なんぞ持っていない。

能力を得たにしても所詮俺は人間なのだ。

扉を吹っ飛ばした時も普通の蹴りと同じ感覚だったしな。

「ふむ……紫様によれば君は幻想の道具を操れるらしいが、本当なのか？」

「はい、多分」

「じゃあまずはイカロスの翼を背中に着けてくれ……といっても自分では無理だな。翼、上着を脱いで後ろを向いてくれ」

別に抵抗することでもないのさ、さっさとブレザー、カッターシャツを脱いで後ろを向く。

しかし着けるってどうすんだろ。

留め具もついてないし、この世界にテープなんて無い……。

いや待て、常識に捕らわれるな。

ここは異世界、なんでもありな幻想郷だぞ？

何が起こるか分かったもんじゃ……。

その時、背中に翼をあてがっていた藍さんの手がぴたりと止まった。

「……うん。烏天狗もこんな感じだったしここでいいかな」

あれ、何か無性に背がかゆくなってきたんだけど。

何が起こってんだ？

「あの、これ」

「心配するな。君の背中に神器が根を伸ばしているだけだよ」

「それえらいことになってません！？」

根を生やすって何！？

俺の身体どうなるんだ！？

上半身裸だというのに脂汗がにわかに吹き出てきた。

得体のしれない物体に身体を侵食されて気持ちのいいはずがない。

抜いて欲しいが、それすらも恐ろしい。

俺が悶絶している間に、いつの間にか藍さんの手は背から離れていった。

「よし、これで君の中にはイカロスの翼の神力が宿ったはずだ。通常弾幕を張ることも、スペルカードを作ることも出来る。勿論その両翼で空を飛ぶことも……どうした？翼」

藍さんがいきなり崩折れた俺を心配そうに見やる。

「……いえ、もう流石に順応しきれないというか」

精神的にくつたりな俺は、両足を投げ出し手について長座していた。だつて異世界にダイブして異能力ゲットして、殺されかけた次は翼が生えたんだぞ？

非日常の大嵐じゃねえか。

精神力が人より弱い奴なら発狂してるだろ。

「お疲れのところ悪いが、今から行く所があるんだ。もう一頑張りしてくれないか？」

その申し訳無さそうな目は反則ですよ、藍さん。
何にも悪くないあなたにそんな表情されたら、人として動かざるをえないじゃないですか……。

「いいですけど、何処へ行くんです？」

こう答えた事を、俺は激しく後悔した。

「妖怪の山だ」

そこが聞くからに物騒な名前だったからだ。

「うお……」

無意識の内に顔をしかめてしまう。

口に出すのは憚られたので胸中に秘めておくが、100%の自信を持って言い切ろう。
命が危ない。

「危ない所だけど、いざとなったら私が君を守る。それでも駄目かな？」

反論の隙を全く与えないまま、俺の言い分を断ち切った。

一応聞いてはいるが、是が非でも連れていくつもりらしい。

悲しいことに、俺はもう行くと言ってしまった。

今更撤回は、無理だ。

「……………大丈夫です。行きます」

殺されたくはないが、このまま破壊された庫を放置することも出来ない。

俺は自分の迂闊さと紫の身勝手を呪いながら、出石小刀をベルトに差した。

上半身裸では外にも出られないので、ブレザーとカッターシャツに穴を開けて、そこからイカロスの翼を出した。

純白の大翼は学生服にそこはかとなく似合わない。

その上根元がちょっと窮屈なんだが、もうこれは自分の体だ。すぐに慣れると思う。

ちなみに俺達は既に冥界を抜け、暴走族も脱帽の猛スピードで幻想郷の空を翔ている。

一度だけ妖精らしきちっこいのが妨害を試みてきたが並んで飛行している藍さんが虫でも払うように容赦なく撃ち落とした。

赤、青、紫の光弾が目にも止まらぬ速さで放たれ、全弾が正確に妖精を叩き落としていく様は、中々の迫力だった。穏やかな方ほどやる時はやるもんだなあ。

「翼、左手に聳える高い山が目的地だ。中腹に大きな滝があるから、それに突っ込むぞ」

言い残し、藍さんは旋回しながら俺を置いて加速していく。

目だけを動かすと、なるほど斜め前、かなり遠いが茶と白の斑になった山が見える。

その麓は霧がかかってよく見えないが、景観は日本の山と何ら変わらない。

名前だけ聞いた時点では禍々しい瘴気が吹き出てそんなイメージだったので、良い意味で予想が外れたと言える。

しかし突っ込むって……冗談を言う場面でもないし、まんまの意味でいいのか？

この寒い時期に？

「あつ、ちょ、待って下さいよ」

まずい、離された。

逸れたら迷子は必定だ。

体を傾けて左へと曲がり、小さな点になっている彼女を追った。

加速しながら幻想郷の風景をざっと眺めると、下には木々が乱立する森、その先には江戸時代風な集落が見えた。村の周りには耕作中の田園地帯が広がっている。

実にのんびりした世界だ。
また色々と巡ってみたい。

今日はどうも河童さんに会った所で日が暮れちまいそうだけど。藍さんに大体の時間を教えてもらい、手動で時刻を合わせてみた携帯の内蔵時計は午後3時となっていた。

やれやれだ全く……。

携帯から山に目を戻すと、彼女は何故か空中で止まっていた。

何だ？

よく見ると誰かが通せん坊してるみたいだが……。
どうももめてるっぽいな。

加速し、程無くして追いついた俺を一瞥して、行く手を塞いでいる。そいつは首を傾げた。

赤く大きな目に、肩に少しかかる程度の白い髪の子で、犬耳と尻尾が生えている。

これは触りた……いや、忘れよう。

耳の間には赤い小さな頭襟が乗っており、右手には刀を、左手には

紅葉が描かれた盾を持っていた。

彼女は刀をこちらに向け俺達をキツと睨み付けたが、やはり妖夢と同じくあまり怖くない。

寧ろ何か一生懸命で可愛いとすら思える。

「…………だから通せないと言っているだろう。早々に立ち去れ八雲藍と…………人間、か？」

まあこんななりじゃ人間とは思えねえよな。

俺も今のところ、翼の生えた人類は自分を除いて見たことない。

「ああ、彼はれっきとした人間だ、白狼天狗。さて、私達も出来れば山の者達のテリトリーを侵したくないんだが、生憎主の命でな。にとりと会って少し話をするだけでいいんだが…………それでも駄目と言うならば力づくで退いてもらう」

いつもの優しさはどこへやら、闘争心を露わにした藍さんがスペルカードを片手に睨みをきかせるが、こっちは俺ですら身震いするほどの迫力があつた。

従者であろうと彼女は強大な妖獣、九尾の狐。

大妖怪であることに変わりはないということか。

「むう…………、しかし黙って見過ごすのも…………。いや、力量差が分かり切っているものと戦ってもな…………」

思案顔でブツブツ言っていた彼女は、やがて刀を鞘に収めると、くると背を向けた。

「私が去ったあとに急いで滝の裏まで行け。下っ端でも面子はあるんだ」

は？

何の話だ？

「すまない。全く天狗も大変だな」

苦笑いの藍さんに犬耳少女も苦笑を返す。

「式神ほどでもない。ではまた」

そうして彼女は何をすることも無く飛び去ってしまった。
何だったんだ、あいつ。

「あの」

「話は後だ。私を見失うなよ！」

直後、彼女はブースターでも付いているかのようなロケットスタートで山へと急ぎ始めた。

「あ、だから待って下さいって！」

待てと言われて待つ者はいない。

これ以上引き離されないよう、俺も全速力で彼女を追った。

山の妖怪、特に天狗は強固な社会性を持っている上に仲間意識が非

常に強く排他的で、侵入者は誰であろうと全力で排除するようになっている。

例えばさっきの白狼天狗、犬走椀は哨戒の任に就いている為、俺たちを追い返そうとした。

今度からはよっぽどのがない限り山には近づかない方がいい…。

「って当の山の妖怪に言われても説得力ねえけどな」

滝の裏に開けられた、ちょっとした居住空間になっている洞窟に河童、河童にとりの笑い声が響く。

ちなみに気持ち悪い緑色の化け物ではなく、なんと、というかやはり可愛らしい女の子だ。

青い髪をツインテールに結んでおり、屋内なのに緑の帽子を被っている。

彼女はどうも人見知りが激しらしく、俺達が入って来た時こそビクビクしていたが、以前から知り合いらしい藍さんから事情を話してもらうと、俺とも自然に話せるようになった。

「そりゃあ河童は人間の盟友だからね。他の奴等とは別物さ」

そうなのか。

人間の俺は知らなかったがここは軽くスル した。

「にとり、気になっていたのだが、ここは大丈夫なのか？別の天狗に見つかったら戦闘が怒ってもおかしくないのだが」

藍さんが落ち着かない様子で洞窟を見回している。
暗闇を照らすのはランプの光のみで、少々暗い。
不安を掻き立てるのにつつてつけど。

「だいじょぶだいじょぶ、ここに入ってきた天狗は、さっきの椀と
ブン屋の二人だけだよ。いざとなったら私特製の光学迷彩も貸して
あげるからさ」

なんかきらきらした服をひらひらさせながらにとりが自慢げに笑う。
光学迷彩……。

外の光景を見た限りでは、そんな技術が進歩した世界には見えなかつたが……。

にとり、すげえな。

「しかし何故私に頼むんだい？大工仕事なら里の人間でも出来るだろうに」

その通りだが、藍さん曰くそれには致命的な欠点があるらしい。
彼女は俺に言ったことを、そのままにとりに繰り返した。

「里の人間が、妖怪と一緒に冥界まで来てくれると思うか？」

藍さんは元より、俺も人間からかけ離れた姿になっている。
一般人なら、妖怪と出かけるなんて自殺行為は避けるはずだ。

しかも行き先が冥界など、普通は笑えない冗談にしか思えない。

「だから私に、か。そりゃ構わないけど、今回は流石に無料って訳にはいかないねえ。釘や螺も無限じゃないんだからさ」

腕組みしながら藍さんに目を向ける。
つまり俺には支払いを期待してねえってことだ。

にとり、その考えを撤回させてやるう。

「にとり、金はないけどこいつをやるからさ。これで頼めないか？」

そういつて俺が内ポケットから取り出したのは、携帯ゲーム機。
二つ折りになっているあれだった。

学校帰りのバスの中でいつもちよろつとやっていたので、鞆の中に入れていたのだ。

「これは？液晶画面があるし電化製品……なのかな。見たことないや。どうやって使うんだい？」

案の定、にとりは興味を示してきた。
聞いていた通りのエンジンアらしく、構造や仕組みを考えているのかあちこち眺めては首を捻っている。

「それは外の世界の玩具だよ。下側の左上にボタンがあるだろ？それを押してみてください」

充電は学校のコンセントを借りてフルにしておいたはずだ。
授業中の充電スキルから友達に与えられた、電気泥棒の称号は伊達じゃない。

「これかな……おおっ、何か映った」

青い目が日光を当てられた水面のようにキラキラ輝いている。
興味津々だ。

「じゃあ次はこのペンで、画面に触れてみてくれ」

予め抜いておいたペンを手渡しながら、下の画面を指差す。

「よし、次は」

「……?」

にとりが一番上の項目をタッチすると、見慣れたゲームのタイトルムービーと共にテーマソングが流れ始めた。

「な、なんだ?どうなってるんだこれ?」

そこで俺は素早くゲームを取り上げ、上の画面を倒してやった。

そして素早く音量をゼロにすると、にとりはおやつを横取りされた子供のようにしょぼくれてしまった。

「そ、そんなに気に入ったのか?」

「……条件は飲む。なんならそのガラクタから好きなものを持って行ってもいい。だから早く返しておくれよ。外の技術に触れられる機会は中々無いんだ」

顔をずいっと近付けて懇願してくるにとり。

ここまで必死にされるとちょっと引くな……。

「よし、交渉成立だな。明日には来てくれよ。ところでガラクタっ

「てどれだ？」

貰えるものは貰っておくという貧乏根性が顔を出してしまう。
人間外見は変わっても、中身は変わらないものだ。

「そのこの隅にでっかい壺があるだろう？そこからならいいよ」

彼女が指し示す先には、幼稚園児が隠れ場所にできそうなでかい壺と、洗面器サイズの小さな桶があった。

長い物を壺に、細々したものを桶に分けている。

さあ、なんか使えそうなもんは、と……。

ネジ穴が潰れた螺や動かないドリル、切り取った余りのプラスチック板等の工具や廃材が多く、俺が求めているいわゆる生活用品は無い。

工具を貰っても俺には役に立たない。

その後もしばらく桶を漁ってみるが、欲しいものはなかった。

ここは壺の方に期待してみるか……。

「……お」

古い釣竿を発見。

大分ボロいが、使う分には大丈夫そうだ。

これを拝借することにしよう。

満足満足。

「さて、それじゃ帰りましょうか藍さん……と、どうしたんですか？それ」

背後で手持無沙汰にしていた彼女は、背丈より少し長めの槍を持っていた。

日本槍ではなく、槍投げに使われそうな西洋風の槍。

プラチナで造られているかのように全体が白く輝いており、柄より若干幅広な刃はパチパチと小さな音を立てていた。

「いや、大したことじゃない。その岩壁に立て掛けてあつたんだが、この槍が微弱ながら放電しているようで気になったんだ」

「槍が放電？」

こちらの会話に反応したのか、にとりがゲームを手離さないままその槍を恨めしそうに見つめた。

「それは大分前に拾ったんだけど、仕組みがさっぱり分かんないんだ。電力も電圧も弱すぎて使い物にならないし、素材もプラチナじゃあないし。よかつたらあげるよ」

「え、マジで？こんな立派なもんまでくれんのか？」

「にとりもあのようになっていることだ。ありがたく頂いておけ」

藍さんが賞状の授与みたいに槍を両手の平に乗せて微笑んだ。

ありがたい話だ。

くれるなら、喜んで貰っておこうか。

「サンキューにとり。この借りはいつか必ず返すよ」

俺は槍を右手でしっかりと受け取った。

洞窟内が真っ白な閃光に包まれたのは、その瞬間だった。

視界は白で塗りつぶされ、にとりの短い悲鳴が不気味に反響する。

光を放っているのは、他ならぬ槍だ。

「くっ……！何だ？何が起こった!？」

藍さんが目を庇いながら慌てて飛び退く。

俺はというと、白光の洪水の中だというのに全く眩しさを感じておらず、刃が狂ったようにバチバチと弾けているのに、感電もしていなかった。

「……………」

俺はどうしていいか分からず、ただ槍が覚醒する様をぼんやりと眺めていた。

やがて、その柄と刃に、光で紋様が浮かび上がり始めた。

黄色の光が次々と浮き出て様々な姿を象る。

捉えようによつては文字のようにも見えるが、俺に読めたのは刃に書かれた英語の筆記体だけだ。

brionac。

「ブリオナク……いや、ブリューナクか」

この槍の銘か？

ここで槍が呼応するかのように電光が弾けると白の世界は消え、元居た薄暗い洞窟が視界に戻ってきた。

もう全ての紋様が光を失っていたが、どれも製作時から刻まれているように綺麗に掘り込まれていた。

「ちよつとちよつと、一体どうやったんだい!？」

「……翼、一体この数秒間に何をしたんだ?」

にとりと藍さんが驚愕に目を見開いている。

それはこつちが聞きたい。

俺、なんか特別なことしたか?

「さあ?俺は槍を握っただけですよ?」

事実だ。

これ以上彼女達に話せることはない。

まあこんな解答だ。

当然にとりは納得できないとジト目だったが、藍さんはだらうなと目を伏せた。

分かって頂けたようで何よりだ。

「やはりか。これも君の能力の一端と考えるのが妥当だろう。さてにとり、見たところ神力が形を変えたものではあるが、電圧、電力は以前より強力になっているぞ?」

人を一瞬で黒焦げにしそうな位にな。

なんで俺はこんなもんに触れて平気なんだろう？

「い、いらないよそんな危険物。翼が責任持って管理してくんなきゃ」

両手をぶんぶん振って拒絶するにとり。

だよな。

水辺に住んでるのにこんなん持つのは危なっかしい。

「ありがとう、大事に使わせてもらうよ。そんじゃまた明日よろしくな」

手を振る代わりに釣竿を軽く掲げると、にとりは口の端を吊り上げながら手を振り返してくれた。

「また外の世界の機械が見つかったら持ってきてよ。それ相応のお礼はするからさ」

全く、最後まで生粋のエンジニアだな。

俺は返事の代わりに彼女と同じ表情を見せて、藍さんと滝の外へと飛び出した。

黄昏の冥界に降り立った俺たちを門前で待ち構えていたのは、憤怒の形相で腕組みをしている妖夢だった。

全身からどす黒いオーラが撒き散らされており、相当お冠であることが見て取れる。

昼間の破壊行動がバレたに違いない。

こんなことならのんびり喋りながらじゃなくて、行きと同じように全速全身で帰ってくれば良かった……。

「初日から自分が望んだ仕事を放り出して、倉がどうなっているかも知らずにのんびり釣りですか？ さぞや楽しかったでしょうねえ」

大切な貰い物だが、この時だけは釣竿を膝でへし折りたい衝動に駆られた。

あははは、目が笑ってないぞ妖夢。

口の端が痙攣したみたいに震えてないか？

紫は言葉通り幽々子さんにはきつちりと伝えたようだが、妖夢には何も言わなかったらしい。

そのくらいは配慮しろ！

「知ってますか？ 丁度今頃の時間を逢魔時おつまがときというんです。どういう意味だと思います？」

知らないけど、抜刀しながら聞くことじゃないよな？

ゆっくりな動作と笑顔が逆に怖いんだが。

「妖怪や幽霊に出くわしそうな夕暮れ……。私は半人半霊ですから人は喰らいませんが、あなたを斬るくらいなら造作もない」

構えた。

一分の隙もない、本気の構え。

今日は厄日だ。

ホントにツイてない。

蹴っ飛ばした石ころがグリズリーの背中に当たるくらいツイてない。

頭に血が上っちゃってる以上、俺が事実を話しても

「問答無用！」

みたいな感じでバツサリやられそうだしな……。

俺はまだ生きたいので敵わないと分かっていたが、釣竿を置きぎこちなくブリューナクを構える。

そんな俺の前に、九本の尻尾が立ち塞がった。

「待ってくれ、妖夢」

ああ、救いの女神様ならぬ式神様が現れた。

彼女から事情を話してもらえば、妖夢も分かってくれんだろ。

「あの倉を壊したのは私の不始末だ」

あれ？

この人、まさか。

「つい先程、翼を連れてにとりに修繕を頼んできた。釣竿は彼女が土産にくれたものだ。彼が持つ機械が代金代わりに使えそうだった

ので、ついな……。倉のこと、彼を勝手に連れ出したことも含めこの通りだ、許してくれ」

藍さんはあの袖口を合わせる姿勢から、45度の角度できっちり頭を下げた。

ちよつと待った。

このまま彼女が全部悪いで解決なんて、そんな馬鹿な話があるかよ。一番謝るべきなのは俺と紫だろ。

ここは、俺が筋を通すべき所だ。

「藍さん、悪いのは俺なんですからそんな嘘吐かなくてもいいですよ。さあ、来いよ妖夢」

紫のことは藍さんの優しさに免じて黙っておくことにしよう。感謝しろよ？

トラブルメーカーめ。

しかし藍さんも譲ってくれなかった。

「翼、私を庇ってくれるのは嬉しいが嘘は良くない。私がちゃんと責任をとる」

こう言って顔を上げようとしないのだ。

おいおい、強情な。

そこまでしてくれなくても大丈夫ですって。

「他人を盾にするぐらいならボコられる方が幾分かマシです。後腐れもないですし」

それに、俺にもプライドはある。

妖怪であつても女性の後ろに隠れるなんて真似はしたくない。

こうして場は膠着状態に陥ろうとしていたが、妖夢が構えを解いたことで終息を迎えた。

「ああもう……何だか馬鹿らしくなってきました。責任が誰にあるのかはともかく、藍さんの話の大部分は信じるに足るものですし、もういいです。この件は水に流しますから翼は早く本殿に上がってきて下さいね」

くるりとスカート裾を翻し、大小の刀を鞘に収めると門を押し開いて奥へと消えていった。

……これでいいのか？

「藍さん、ありがたいんですけど、何で俺を庇い立てしてくれたんですか？」

あそこは説明してくれるだけで事足りたはずだし、聡明な彼女ならそれも分かっていたはずだ。

すると藍さんは振り返り、憂いを秘めた眼差しで意外のことを口にした。

「誇張しすぎたかもしれないが、主の不始末は私の不始末だ。悪いのは君ではないよ」

「いや、俺も扉を蹴破りましたし」

即座に反論すると、藍さんは倉のことだけじゃないよと笑った。

「外の世界からの強制送還や倉での芝居も……。霧咲翼にとっては迷惑なことばかりだ」

成る程……。

そのことをずっと気にしてくれてたのか。

白楼剣のお蔭で取り乱さずに動いているが、迷惑なのは否定できない。

俺の人生を滅茶苦茶にしてくれた紫は憎い。

「しかし紫様の行動には、必ず意味がある。私や君には到底理解が及ばない領域に、あの方はいるんだ」

彼女は俺の肩に両手を置いて、必死に語りかける。

紫のことを本当に尊敬しているから、俺に主を誤解して欲しくない。だからこそ、命に背いてまでこんなことを言っただろう。

「君を幻想郷に送り込んだ目的も、粗方聞かされている。なあ翼、紫様を嫌うなどは言わないが、どうか冗談で君を連れてきたのではないことだけは」

「藍!!」

俺と藍さんが、揃って身をすくませる。

有無を言わさず他を従わせるような、相手を圧倒する怒声。

声だけでも周囲を威圧する大妖怪は、立派な門の屋根瓦の上に空間の裂け目を作り、そこに腰掛けていた。

「いつからそこにいた？」

鳥肌の立った腕をさすりながら紫を見上げる。

「妖夢が本殿に戻った後。帰りが遅いと思ったたら……藍、そのことは一切話すなと言ったでしょう？」

笑顔なのは、藍さんの心中を察しているからだろう。あるいは話してしまうことも予測していたのか。

どっちにしろ、倉で見せた傍若無人ぶりは藍さんの言つとおり紫の芝居だったようだ。

「なんで隠すんだ？誰にも話さないと約束するから、教えてくれよちゃんとした理由があるのなら、俺には聞く権利があるはずだ。」

しかし紫は肯ぜない。

片目を閉じて人差し指を左右に振り、チツチと舌を鳴らす。

「まだ早いわ。時が来れば私から話すから、楽しみにしてなさい」

藍さんの前にスキマを開いて、入るように促した。

もうお喋りは終わりってことか……。

彼女が何も言わずに中へ入ったことを確認すると、紫は座っていたスキマを開いて中へと入り込んだ。

奴は最後に上半身だけを乗り出して、にこやかに笑いながら数枚のカードを投げた。

足元に散らばった一つを見ると、普通ならモンスターや呪文の名前が書かれていそうな枠に

“ Spell Card ”
の文字が。

「まずはブリューナク、出石小刀。あとどれくらい集まるかしらね？カードが足りないようなら藍に持っていかせるから安心なさい」

持っていかにせるって、俺の行動を逐一観察でもしておかなきゃ無理

……。

いや、やりかねん。

こいつならやりかねん。

「……はあ、そりゃ」丁寧にごうも

「どう致しまして……そうそう、神器をいつも持ち歩くのも不便でしょうし、見つけた片っ端からスペルカードにすることを勧めますわ。それじゃあね」

結局皮肉っぽく礼を言うぐらいしか出来ない俺の腰に目をやり、最後にそう付け加えて紫はスキマへと落ちた。

……俺、やっぱりあいつは苦手だな。

第五話 幻想の翼、槍、そして河童と九尾の狐（後書き）

一話あたりの字数が安定しません。

こんな長さで大丈夫か？

もしこの程度の長さにして欲しい、このくらいなら読みやすいのではなどのご意見があれば感想に書いてください。

参考にさせていただきます。

第六話 幻想郷の最果て（前書き）

今回は八雲家の方々の視点です。これからも時々視点は変わります。

第六話 幻想郷の最果て

幻想郷の秘境に建つ日本家屋。

深い山奥にあるため人々が恐れる妖怪が跳梁跋扈しているが、その輩達ともからは今や私を恐れ滅多に近付かない。

近づいたとしても無様な亡骸を晒すことになるだけだということを、殆どの妖怪は学習したのだ。

実際最初は寄り付く妖怪がかなり鬱陶しかった。

それを逐一討伐して、漸く平穩を手にしたのだ。

誰にも乱されることが無い平和な私達の家。

私と藍がその我が家に帰ってきた時、橙ちえんはすっかりご機嫌斜めだった。

庭に着地した私達の元へと駆け寄りお辞儀をするが、顔は膨れっ面だ。

二又に分かれた猫の尻尾も立っている。

「藍様、紫様、お帰りなさい。もう、藍様一体何処へ行つてたんですか？お腹減っちゃいましたよう」

猫耳の間から自慢の帽子が落ちたことも気にせず、藍の服の袖をぐいぐい引つ張る橙。

やはりまだ幼い。

可愛いことには違いないが式神としてはもう少し成長して欲しいところだ。

「分かった分かった。今すぐ支度するから手伝ってくれ」

そしてその橙を上手く御せない藍にも、未熟な面がある。

彼女は彼女でよくやってくれてはいるが、時として自らを殺しきれない。

あまり従順過ぎても温かみを感じられないし、今のままが一番いいのかもしれないが。

台所へと向かった傲慢の式達の背を見送り、同じく縁側から上がって居間に腰を下ろす。

「……ふう」

恐らくあの少年もこうして息を吐いたことだろう。

彼にとっては激動の一日だったはずである。

妖怪達の樂園に訳も分からないまま送られ、あれよあれよという間に能力だの神器だのを取得する。

これで混乱しない方が異常だ。

そう考えると翼に悪い気がしないでもないが、自然な成り行きで白楼剣を振るってもらったためだけにわざわざ出石小刀を預けて白玉楼に住ませたのだ。

藍が苦慮している精神面については心配ないと思う。

今はむしろ、彼の幸運を喜ぶべきだ。

出石小刀とイカロスの翼を託して暫くは様子見だと思っていたが、

もう三つ目の神器を手に入れるとは、
しかも二品より遙かに強力な物だ。

ケルト神話に登場する光の神、長腕のルーが持つ雷の槍ブリューナ
ク。

神々の四至宝に数えられ、一度投げられると五つの稲妻となり必ず
敵を貫くと語られている。

翼はまだ能力の全容を把握しきれていないようだが、有り余る神力
と強大な神器をもって力押しするだけでもう大抵の妖怪には太刀打
ちできるはずだ。

幸い彼は能力の一端として神器の神力を限界まで高めることが出来
るようだ。

この分なら次に会う日はそう遠くないかもしれない。

「ふふふ……」

思わず笑いが漏れる。

ここ数年ずっと心を碎いていた問題が、ようやくと解決の兆しを見
せた。

自らの力だけではどうにもならなかったが、彼の協力さえあれば事
は俄然楽に運ぶ。

タイムリミットはまだまだ先のことだし、翼が能力をじっくり分析
し新たな神器を探索するぐらいはどうかということはない。

まさに順風満帆である。

「どうしたんですか？やけに楽しそうですね」

藍が湯気をたてている皿を二つ持って現れた。後ろから橙も同じ皿を運んでくる。

「あら、もうできたの？早いわね」

「切って炒めるだけのチャーハンですからね」

皿をちゃぶ台におきながら藍が微笑む。

「美味しそうね。それじゃあいただきますようか」

「はい、いただきます」

私と藍はさっさとそれを平らげていくが、橙は当然ながら猫舌だ。

湯気を恨めしそうに見つめて冷めるのを待っていた。

「藍、翼は上手く飛べたのかしら？」

暫くは食器が音を立てる音だけが響いていたが、ふと気になったのでレンジを動かす手を止めて藍を見た。

私も藍もすでに半分以上は食べ終わっている。

「はい、それはもう驚く程上手に。神力のコントロールも容易になしているようです」

苦笑が漏れた。

あまりにも上手く出来すぎているのだ。
これ程までに円滑に進むと逆に恐ろしい。

イカロスの翼も神力の保有量は決して少なくない。
それすら簡単に操れるのならどんな神器も瞬く間に使い慣らし
てしまえばいいのだ。

……もしかしたら、私はとんでもない麒麟児を連れてきてしまっ
たのだろうか？

「……飼い慣らすのが大変そうね」

私にも、大妖怪と呼ばれる自負がある。

万一協力を拒否されても、能力持ちである外来人一人屈服させるぐ
らい赤子の手を捻るようなものだ。

言い方が気に障ったのか、藍が苦々しい顔をして皿に目を落とした
が流すことにしたらしい。

手早く完食すると空いた私の皿を持って引つ込んでいった。

橙は遅れまいと急いで食べるあまり、喉に突つかえさせている。

「……さて、あの子は何をしているかしら？」

橙に自分のコップを渡してから、正面にスキマを開いて白玉楼へと
繋げる。

彼は自室に戻っており、畳に胡座をかいて宝物庫から持ってきたら
しい白瑠璃の杯を丹念に磨いていた。

夜まで手伝わせるつもりはないと幽々子が言っていたのに、変わっ
た奴だ。

「……ただブリューナクつても味気ないか。技のイメージはきっちりできてんだけどなあ……」

彼は手を動かしながら、傍に置いてある電光迸る槍を横目で見た。スペルの名前に悩んでいるようだ。

しかし武器なんか持ったこともないだろうに、技のイメージをもう練り上げる想像力は称賛ものだ。

「やれやれ、しょうがないわね」

今度は右側にスキマを展開し、以前外の世界で仕入れたハードカバーの分厚い本を取り出した。

長い間ほったらかしだったせいかわりページが黄ばんでいるが、読む分には問題無さそうだ。

「これでも読んで知識を深めなさい」

部屋の中へ本を落としスキマを閉じる。

やる事が無くなったからか、ここで大欠伸が出てきた。

あとは藍に、私が去った後の詳しい報告をしてもらうくらいか。

大体は見えていたが、その場に居合わせた彼女が何を考え、感じたかも聞いておきたい。

意見が噛み合わない可能性が高いが、やる価値は大きい。

彼女としても、私に言いたいこともあるだろうし。

「橙、藍に後で話があるから、部屋へ来るよう伝えておきなさい」

私は漸く食べ終わった式の式に、胡乱な目付きで告げておいた。

「失礼します、紫さま」

私は障子を開けると同時に取って付けたような挨拶をした。主人の部屋に入るというのに非礼極まりない態度だったが、私の気はそれほどに急いでいたのだ。

今日の私の態度は従者としてあまり褒められたものではなかったが、あれも主人の為を思つてのことだ。あの方が私の身勝手な行動を罰した後、またお話ししておきたい。その後また罰されようともだ。

目の前に座る主人、紫さまはいつも通り笑みを浮かべていた。

「藍、何を急いでいるの？ただ話がしたかっただけだというのに」「話、ですか」

これが偶然の一致だと思ふほど、私は愚かではない。私の考えていることを見通した上での発言だ。

まるで読心されたかのようなのだが、不愉快だとは思わない。こんなことは私にとってよくあることだ。

それに考えを読まれるのは、私のことを理解してくれているからこそだと思つ。

「そう、お話。あなたも私にあるでしょう？どんなことを言つても

いいわ、話しなさい」

「……はい」

人間の寿命の何倍もの時間を共に過ごしてきたが、私が紫様に真正面から意見するなんて初めてのことだ。

前々から気にはなっていたが、そんな無礼を行うわけにはと自分を押し殺していた。

紫さまから促されるということは、少しは従者として認めてもらっているのだろうか。

表情は豊かでも、隠したい本音はおくびにも出さない方だから、はつきりとは分からなかったが……。

「では、僭越ながらお話をさせていただきます。紫さまの人間に対する態度について」

彼女は姿勢を正し、扇子を広げた。

いつも逆の立場なため、なんだか居心地が悪い。

「私が思うに、紫さまは人間に対してあまりに非情だと思うのです」

「非情」

笑顔は消え、無表情になった。

他の妖怪なら鼻で笑うような台詞だが、紫さまは私の言葉を真剣に受け止めてくれている。

やはりこの方なら、あるいは理解を示してくれるかもしれない。

「妖怪の本質は、人を襲うもの。我ら妖怪と人間は敵対すべき関係。それは承知しております」

これは全ての妖怪と人間にとっての常識だ。
食う者と食われる者、この上下関係は未来永劫絶対に覆らない。

「人を襲わない妖怪など、他の生き物たちと大して変わらない。だからこそ、形骸化してでもこの関係は残さねばならない。紫さまはそう仰いましたよね」

「ええ。そのためのスペルカードルールだもの。私はおろか、他の大多数の妖怪もそう思ってるんじゃないかしら？」

あからさまな彼女自身に対する皮肉だ。

それはそうだろう。

紫さまがご自身で説いてまわったのだから。
私も幻想郷中を奔走したことを記憶している。
あれほど忙しかったことは数えるほどしかない。

あの頃を思い出しているのか紫さまは苦笑していた。

「仰る通りでございます。そのスペルカードルールのお陰で、今の幻想郷は平和でありながらあるべき秩序を保っているのです。しかし、です」

一度話を切って、紫さまの顔を窺ってみる。

一応だが、彼女自身が気付いているのかを聞いてみたかった。
本当はこんな主を試すようなことをするつもりは毛頭なかったが、せつかく何を言っても良いとお許しが出たのだ。
遠慮しては駄目だ。

私の無言の問いを察してくれた彼女は、苦々しそくにぼつりと呟いた。

「……時代は、常に移ろい変わっていく」

やはり、気付いておられたか。

「妖怪と人間の距離は、昔の面影などまるでないほどに近くなっています。妖怪退治に生涯を捧げるような人間も消え、妖怪も人を食らうことがなくなりました」

「今や敵対、というよりは共存ね。ゆるいけど、理想的な関係だわ」

「はい。妖怪も人間も弱体化することなく、共に競いながら発展しています。この環境のせいか、中には妖怪に届こうかという強大な力を持つ人間まで現れ始めました」

これでいい。

形としては、一つの最高の形だ。

今の幻想郷は、まさに妖怪の理想郷。

力を失わず、人間と表面上は敵対し続け、上位の存在として君臨し続ける。

紫さまがこの構想を私に打ち明けて下さった時、その聡明なる頭脳に感服した。

妖怪の賢者とも呼ばれる我が主を内心誇ったものだ。

しかしそこで、一つ大きな障害が出来てしまう。

「そんな時代となった今、妖怪は人に対する認識を改めねばならない」

私が常々考えていたのは、ここだ。
固定観念の打破。

口で言うだけなら簡単に聞こえるが、これはとても難しい。

妖怪が人を食らってきたという事実は、妖怪達に妙に高い自尊心を持たせた。

妖怪にとつて、人間を下に見ることは当たり前になってしまっていたのだ。

現れたのがごく最近の妖怪は、博麗の巫女や白黒の魔法使いの強大さを思い知らされていることも多い為、この傾向はまだ少ない。
しかし、ここで問題になるのは古参の妖怪だ。

彼等だつて伊達に長い年月を生きてきた訳ではないのだから、頭の中で理解はしているだろう。

しかし、この問題はもう理解を越えた範囲にある。

人間ならば、豚という種族を友人と思うには無理があるのと、全く同じだ。

流石に今はそこまで酷い認識はなくなっているだろうが、それでも同位種だと考えるのは難しいだろう。

私は雑務や買い物等で、よく里を訪れる。

そのお陰で色々な人間と話す機会を得られ、自分の考えを見つめ直し、改めることが出来た。

どちらかというと、人間に一種の情が芽生えたのかもしれない。
私達と何ら変わりなく言葉を話し、笑い、泣き、怒る彼等に。

「敵対ではない、新しい人妖の関係。言うなれば好敵手のような、

互いに認め合い高め合う関係の方が今の幻想郷には相応しい筈。例え仮初めでも、いつまでも敵対していれば何かしらの報復を受ける可能性だってあるのだから」

翼に關してもそうだ。

彼がもし更に力を増し、巫女に並ぶほどの力を得たならばどうなるか。

自分の世界を奪った紫さまに、復讐しないとも限らない。

「とうにご自分でご理解なさっているでしょうが、紫さまもまだ人を下に見るきらいがあります。そこを改めるべきだと言うのが、私の意見です」

話はこれで終わりだが、紫さまは動かない。

扇子で口元を隠しながら、畳を見つめている。

どうやら、一考していただけの程度の価値はあったようだ。

「……藍、今の話、少なからず私情を挟んだわね」

今回の紫さまへの話は、私自信の願望が少しばかり混ざってしまった。

しかし、ここで嘘をついても意味がない。

私が普通の妖怪より人間の肩を持つことに、この方は前から気付いていた。

「その通りです。ですが、それだけで話したわけでもありません」

毅然として言うと、紫さまは黙って頷き今しがた閉じた扇子で障子

を指した。

暫く一人で考えたい、ということだろうか。

「では、失礼致します。またご用があればお呼びください」

私は固まったように動かない主人を残し、部屋を後にした。

第六話 幻想郷の最果て（後書き）

次回はオリキャラその二が登場します。

一度かすかに出てきてるので、気づく人もいるかも？

そんなこんなな次回、お楽しみに。

第七話 夢、現となる

八雲の二人が帰った後、幽々子さんと妖夢と晩飯を食い、その間に辺りはすっかり暗くなっている。

今いる俺の部屋も、その例に漏れずだ。

俺は薄暗い部屋で、床に落ちている一枚のカードをちらりと見る。

「光槍、ライティングスピア……違うな。何かガキっぽい」

よく考えてみれば必殺技の名前を考えている時点でガキか。いや、でもこれはちよつとな……。

自分のネーミングセンスの乏しさに対する溜め息を、杯に注いで磨き続ける。

照明は頼りないろうそくの明かりが一本だけと、足元のカードのみ。本当はもっと明るくしたいが、電灯がない以上仕方がない。

晩飯時に妖夢にカードの作り方は聞いておいた。

どうにか武器を封じ、後は名前を付けて完成という所までこぎつけたが、肝心の名前が決まらないのだ。

妖夢や幽々子さんみたいがいい名前を付けたいんだが、中々浮かばねえもんだ。

カードはさっさと決めると言わんばかりに淡い光を点滅させているが、ダサイ名前を付けて笑われることだけは避けたい。

「どうしたもんかな……」

こつも浮かばないと、つい天のお告げのなものを期待してしまう。
そんなもんが都合よく降りてくるのなら苦労しねえっつ。

「それでも読んで知識を深めなさい」

おいおい神様、せつかく降りてきたのに、そんな適当な……。

「って誰!？」

ツツコミを入れながら、真っ暗な天井を見上げる。

そこには一冊のとんでもなく分厚い本が、目の前に並べられた西行
寺家秘蔵の品々にボディープレスをかけにくる姿が。

「ぎいやああああ!？」

半狂乱になりながらも、身を呈して背中を受け止めたことで最悪の
結果には至らなかった。

転がっている本が傷を付けたのは、幸運にも俺の背中だけだ。

「いって……何なんだよこれ」

杯を置いた手で背中を擦り擦り、悪魔召喚の魔法が掲載されてそう
な落下物を観察する。

染みが付いた黒いハードカバーの表紙には、金文字で

“The Fantasy Weapon”

とだけ書かれており殺風景極まりない。

英語のタイトルだが、見開きには横文字の下に日本語で

“（幻想の武器）”

とあるあたり洋書ではないようなので、読めないことはなさそうだ。

分厚さからして、図鑑か？
ずっしりくる重さだ。

「やれやれ……」

つたく、普通に渡せねえのかあいつは。

誰が投げてきたか、断言は出来ない。

しかし俺の知る限り、こんな芸当が出来るのは一人しかいないし、
多分そいつで合ってるだろう。

次会った時はお礼を言うべきか、それとも皮肉でも言っておけば良
いのか。

ま、とりあえず読んでみるか。

「どれどれ、中身は」と

こつこつ図鑑や資料集等が結構好きだったりする俺は嬉々として目
次を開いた。

そこには武器の名前らしい膨大な量の片仮名と漢字が五十音順にビ
ツシリと羅列されており、中には草薙剣やエクスカリバー等の聞き
慣れた物も幾つかあった。

名前の後ろには剣や槍、弓等の分類がなされており、何処の神話に
出てくるのかまで記されている。

全部読んでと夜が明けそうなので、今はブリーナクと出石小刀
の二つだけにするか。

果たして、どんなエピソードが語られているのやら……？

「……ん？」

いつの間にか、意識が飛んでいた。
寝てしまったのだろうか。

板の床から起き上がり、目を擦る……板の床？
畳ではなく？

ここでやっと、俺は別の場所に移動していることに気が付いた。
自分の部屋に居たはずなのに、いつの間にこんなところに？
それ以前にここは何処だ？

状況把握に努めるが、視界が酷くボヤけていてやりづらい。
薄く靄がかかっているように、目に見えるものが不確かだ。

夢の中、か？

まずは靄の中で目を凝らして、なんとか回りを確認する。
真っ先に白玉楼の宝物庫を疑ったが、そうでないことはよく観察す
ればすぐに分かった。
同様に刀剣類や銅鏡、勾玉等が納められているが、数が圧倒的に少
ない。

蔵自体の広さも大幅に劣るし、何より格段に暗い。

記憶を辿ってもこんな場所に覚えはない。

此処は何処なんだ？

「し……反応……ね。他は……った……ら？」

聞き覚えがある声が出た。

しかしこれも不明瞭で、途切れ途切れにしか聞こえない。

精々女の声だとしか分からなかった。

姿を確認しようにも、彼女を隠すように声のする方向だけ濃霧が渦巻いている。

こいつは誰だ？

「案ずるな、まだ生き長らえてはいる。意識は失っているが、まだ手遅れではない」

苦渋に満ちた声が答えた。

口調に反し、こちらは俺より幾らか年下の少女の声。

だが何故かこの声はしっかりと聞き取れた。

濃霧の反対方向に目を向けるが、そこには細剣が一振り置いてあるだけだ。

周りを見渡すが、やはり人影は見えない。

こいつも濃霧の向こう側にいるのか？

「……の……い。……も……。……よ」

霧の向こう側の声は、更に不鮮明になっていく。

しかしこの感じ、初めて聞いた気がしない。

正確には、この声を持つ雰囲気、前にも味わった気がする。

冷たく、鋭い。

鋭利な刃のように突き刺さる言葉。

「承知した。しかし、おぬしの話は真であろうな？我らを欺くような真似は許さぬぞ」

視界が歪む。

どうやら思い出す前に覚めてしまいそうだ。

靄も、剣も、闇に溶け込んで消えていく。

黒を増していく閉ざされた世界の中で、最後に聞こえた声は重かった。

「うむ。任せたぞ」

頬を撫でる風に、意識が現実を引きもどされた。

眼を擦りながら身を起こし首を鳴らす。

畳の感触が背中にある。

やはり布団も敷かずに寝てしまったようだ。

お陰で体の節々が痛い。

「……………くあ……………」

俺が起きると同時に、隣に正座していた見知らぬ少女が欠伸をした。

……………ん？

眼を擦り、もう一度見る。

隣には、変わらず見知らぬ少女が座っていた。

「……………え……………？」

なんだこの展開は？
こいつは誰なんだ？
いつから此処に居たんだ？

起き抜けの不測の事態に思考がフリーズ。
口を馬鹿みたいに開けたまま、数秒呆気にとられていた。
誰かが行動を起こさない限り、俺は永遠に固まっていたと思う。

彼女から話しかけてくれたのは幸いだった。
俺の方を見て、こう言ったのだ。

「御早い起床だな、主。^あまだ寝てても構わぬのでは？」

「は？」

「は、じゃあるまい。何処か具合でも悪いか？」

ああ、そうかもしねえ。
むしろそうであって欲しいな。
依然として固まっている俺に、彼女はしばらく思案顔をしていたが、
やがて何事かに気づいたらしく手を叩いた。

「ああ、そうか。この姿では初見参であったな」

すると彼女はおもむろに立ち上がり、実に堂々とした声で名乗った。

「我が名は出石小刀、主に仕える者だ。今後とも宜しく頼み申す」

「……俺は霧崎翼だ」

一応名乗り返しておきながら、俺はすっかり覚醒した頭で考える。

出石小刀？

俺の記憶に間違いが無ければ、それは神剣の名だったはずだ。

少なくとも、こんな少女の名前ではなかった。

本当に見覚えがないか、立ち上がってじっくりと彼女を見てみる。

切れ長なスミレ色の目をしていて、かなり色白だ。

日本的な長い黒髪を、薄手の白布で二つに結んでいる。

服装は白い剣道着に、金糸の装飾を惜しみなく施した黒い剣道袴。身の丈は俺より頭一つ分小さいから、150cmちよいくらいか。

「何事だ？私の面に何か付いているか？」

残念ながら、全く見覚えが無い。

主なんて呼ばれる理由も全く分からなかった。

だが、今聞いて思い出したが、この声は聞いた。

さっき夢の中に出てきた少女の声だ。

口調も似ている。

しかし、お前は夢の中の少女が、なんて聞けないので当たり障りの無い聞き方をしてみた。

「まず、お前は誰だ？まさか本当に、自分は剣だ、とでも言うんじゃないかねえだろうな？」

腕を組んで訝しげな眼を彼女に向けると、彼女は顎に手をやり、視

線を足元に向けた。

「む、どうも剣の名を借りるべきではなかったようだな。私が剣、
というのは些か語弊があるやもしれぬ。如何様な表現が適当である
うか……」

自称神剣の少女は暫くの間独り言を漏らしていたが、やがてこちら
に向き直った。

「そうだな……。私は、あの剣に対する信仰から生まれた神霊。こ
う呼ぶが適当か」

「神霊？」

「うむ、私はあの剣を依り代として生まれたのだ。なればその剣の
所有者であるおぬしを、主と呼ぶのは当然であろう？」

駄目だ、到底理解が追いつかねえ。

これはもう理解をせず、事実だけを受け止めておいた方がいいかも
しれねえな。

この幻想郷に飛ばされたことだって十分すぎるほど非現実的だが、
それが現実起こっている以上、受け止める他は無い。

この場面でも、同じ事が言えると思う。

なるようになる、だから大丈夫だ……多分、な。

「つまり、お前はこの剣に宿る神様ってことでいいのか？」

「まあ、左様なものだ。あまり難しく考える要もあるまい」

彼女はくるりと背を向け、大きな伸びを一つした。首をふるふると振ると、結んだ髪が二本の尻尾のように揺れる。背を向けたまま、彼女は首だけ向けて言った。

「さて、主よ。よろしくばまずはその窮屈そうな格好をどうにかして頂けぬか？こちらまで息が詰まる」

「何の話……、ああ、そういうことか」

俺はカッターシャツに学生ズボンのままだった。昨日のことを思い出してみると、本を読んで、その後二枚のスペルカードを完成させた所で記憶が途切れている。そのまま寝ちまつたんだろう。

着替えようとシャツを背の翼から引っこ抜いた所で、重大な事に気が付いた。

「……服がねえ」

毎日毎日、学校に普段着を丸々持っていくような馬鹿はいない。つまり俺が持っている衣類は、今着ている制服を除けば精々……。

「あれのことか？しっかり洗われているが」

彼女が指差した、部屋の隅に畳まれている野球のユニフォーム一式だけだ。

……アンダーシャツだけならともかく、ズボンまでは無理だろ。

「他の物が良いならば、その横にある着流しにせよと申ししていたな」

「……ああ、そうさせてもらっよ」

実に気が利く方達で助かったよ。

彼女は現れてすぐ、衣類を持ってきた妖夢に見つかったらしい。

斬りかからんとする妖夢をなんとか宥め、ここに居候する約束も取り付けたと聞いて、俺は重い肩の荷が一つ降りた気がした。

次に彼女は屋敷の構造を把握したいと願い出たので、俺もよくは知らないが、分かる範囲で教えることにした。

「主よ、実はもう一つ頼みがあるのだ」

屋敷を歩き回っている最中に、彼女は唐突に切り出した。

スマシ色の目が真っ直ぐに俺の目を見つめている。

「何だ？俺に出来ることなら喜んで引き受けよう」

何か彼女からただならぬ空気を感じたので、真剣に答えた。

すると彼女は、思い詰めたように地面と俺を交互に見ていたが、やがて重々しく口を開いた。

「あの……私に、名前を付けてくれぬか？」

「名前？」

聞き返すと、彼女は照れくさそうに笑いながら頬を掻いた。

「う、うむ。今まで剣として信仰されてきた故、私自身には名が無いのだ。現界した以上名が無くは不便であろうし……主が付けてくれぬか？」

成る程、道理だ。

それに名前が無いというのは可哀想な気がする。

責任重大だが、俺が付けてあげるべきだろう。

「いいけど、難しいな。名前か……」

女の子の名前で無難なものが幾つか浮かぶが、どうもじっくりこない。

そもそも名前は、親が子にこんな人に育ててほしい、という願いを込めて付けるものだ。

彼女の親でもない俺が、願いをかけるのはおかしい気がする。

ここは、名は体を表す、という言葉の通り、彼女の見た目や特徴から付けるのが妥当だろ。

「そうだな……」

「うむ」

「えーっと……」

「うむ……」

……物凄く期待されているらしい。

目が子供のようにキラキラ輝いている。
俺のネーミングセンスはゼロだが、ここは何としても捻り出さなきゃな。

とりあえず名字は出石いしでいいとして、名前はなまえどうするか。

「出石、出石……」

「出石？」

頑張れ、考える俺。

こんなに大きく無邪気な期待を裏切るなんて、最低だぞ。
脳の隅々まで機能させて、良い感じの名前を作り出すんだ。

「閃珠せんじゆ！閃く珠で閃珠はどうだ？」

これなら剣の要素を残しながら、綺麗な感じも出ないか？
考えたのが俺にしては良い名前だ。

「閃珠……」

彼女は暫く黙ったまま、自分の爪先を見ていた。

「あー、もしかして、気に入らなかったか？」

これじゃ漫画の登場人物みたいだもんな。

普通はこんな名前付けないし。

ネーミングセンスなくて、ホント御免……。

また考え始めた俺を驚かせたのは彼女の大声だった。

「おおおおお！良い名だ！出石閃珠、素晴らしい響きではないか！」
彼女は余程嬉しかったのだろう、満面の笑みでくるくる踊り始め、
終いには俺に抱きついてきた。

「主よ、見事な名を頂き恐悦至極だ！これより私は出石閃珠を名乗
る！主も是非呼んでくれ！」

「そ、そうか、気に入ってくれて何よりだ」

外見もそうだが、どうも中身も子供っぽい所があるようだ。
神様なら俺よりずっと長い年月を生きていそうなものだが、そこは
気にしないことにした。

何か、素直で可愛いな。

彼女を見ていると自然と顔が緩んでくる。

しかし、この屋敷には他の住人もいる。
もしこの場面を誰かに見つければ、あらぬ誤解を抱かれそうだ。

それに……、やっぱり気恥ずかしい。

幾ら見た目幼いと言っても妖夢と同じくらいには見えるし、子供と
認識するのは難しかった。

一人の女性、とも意識は出来ないが。

「なあ閃珠、そろそろ離してくれ。ちょっと苦しい」

だから暫くされるがままにしておいてから言ってみたが、彼女はピ
クリとも反応しなかった。

「……………閃珠？」

彼女はゆっくりと肩を上下する以外は動かない。
俺を抱き締める力も緩んでいた。

不審に思っ て顔を上げさせると。

「……………すう……………すう」

案の定、寝ていた。

ちよつと揺らしてみるが、全然起きる気配がない。
正しく爆睡だ。

仕方無い、俺の部屋まで運んでやるか。

「まったく……………」

本当に子供のような奴だ。

俺の事を主とか呼んでる癖に、これじゃあ俺がこいつを支える従者
みたいじゃねえか。

苦笑を漏らしながら、所謂お姫様抱っこの形で持ち上げる。

「んん……………ふふ……………」

楽しい夢でも見ているのか幸せそうに笑っている。
起きる気配は一向にない。
何かこの安らかな寝顔を見ていると、何でも許してしまえる気がし
た。

何故こいつが現れたかはともかく、仲良くはやっていきたいな。

俺は彼女の寝言をBGMに、自分の部屋へ向かった。

第七話 夢、現となる（後書き）

若干小さな侍娘、閃珠が登場。

第一話冒頭で紫と喋ってたのが彼女です。

やっぱバレバレ？

それではまた次回。

感想、批評、お待ちしております！

第八話 大桜に風が吹く

押し入れから布団を引っ張り出して敷き、その上に閃珠を寝かせる。

心地良さそうに寝ている彼女を見てると少し睡魔が襲ってきたが、平日の朝から眠るのは気が引けたので我慢した。

今の状況では平日も休日も関係ないのだが、こんな事を考えるのは学生根性が抜けていないせいだろう。

とはいえ、このまま時間を無為に過ごしたくはない。

とりあえず現在時刻を確認する。

AM 4 : 50。

「うわぁ」

何でこんな早くに起きたんだ？

三文の得とは言つが、これはやり過ぎだろ。

閃珠が寝てしまうのも無理はない気がした。

ともあれ、どうやって暇を潰そうかと考えていると、畳んである「ニフォーム」の上に紙片が乗っている事に気が付いた。

角張った小さい字が、きつちりと列を揃えて並んでいる。

裏側がざらざらしているA4サイズの和紙には、このような事が書かれていた。

“お早うございます、翼。今朝方現れた少女については、あなたと同じく居候させる事になりましたので、気になさらないで下さい。それと、この幻想郷で生き抜く為に役立つ弾幕についてお教えしたいと思っております。私は中庭で木刀を振っていますので、朝食までにお越しく下さい”

中庭か、多分大広間の向こうにあるあの庭だな。
待たせるのも悪いし、さっさと行くか。
閃珠はその後で起こしにすればいいな。

それじゃ、向かうとするかな。

俺は中庭への第一歩を踏み出す。
それと同時に、何か固いものを蹴っ飛ばした。

「ん？」

それは剣だった。
その脇には真つ二つに裂かれたカード。

これは俺をこの世界に引き留め、非日常に誘った細剣だ。
これに宿っている神霊は、俺の背後で安らかに眠っている。

出石小刀。

「どうして……？」

こいつは昨日俺のスペルカードに封じたはずだが、なんでまた出てきたんだ？

閃珠が剣と共に出てきたから、カードが破けたのか？

それは少々強引すぎる気がする。
それなら、俺が寝ていた間に誰かが故意に破ったという方が余程し
つくりくる。

なら、何の為に？
どういった意図で？

閃珠ならこの訳を知っていそうだが、昨日は出てこなかったしな…
…。

待て。

そもそも何故あいつは昨日出てこなかったんだ？
いくらでも出てくる機会があったはずだ。

そういえばあいつ、“この姿では”初対面って言ってたな。
剣の時には自覚はあったんだ。

じゃあ尚更何故だ？

俺を主と呼ぶ以上、嫌っているわけではないだろう。

偶然か？

それとも何か理由が……？

「ああ、止め止め！」

ここまで考えて、俺は止めた。

こんな勘繰りはするべきじゃねえ。

閃珠は勿論、お世話になってる妖夢や幽々子さんまで疑うなんて最
低だ。

そんなことより、妖夢に会いに行くのが先決だろ。首を振り、障子を開けて早足で中庭に向かう。

今の生活には、不自然がある。そんな疑念を抱きながら。

背中に大翼の着流し姿という不自然この上ない格好で見事な枯山水の中庭に現れた俺を、妖夢はちよいちよいと手招きする。歩いて十秒の距離だが、そばの下駄をつっかけてからは、ふわりと飛んで玉砂利の地面に着地。飛べるって便利〜

お互いに挨拶を軽くかわすと、妖夢は額の汗を拭いながら木刀を近場の木に立てかけた。

不意に閃珠や破れたカードのことについて聞きたくなかったが、これはもう触れるべき話ではない。

だから俺はそれを飲み下して、手紙について聞くことにした。

「なあ妖夢、手紙に書いてあったけど、まず弾幕って何なんだ？」

昨日藍さんや紫が出した弾の幕だというのは分かる。

しかしあれがどういった物かは全く知らない。

紫のは武器だったが、藍さんのはよく解らん光の弾だったし。

だから俺としては率直な疑問を述べただけなんだが、妖夢の顔があらさまに引きつった。

「うあ、そこらなんですね……。あ、いえ、問題無いです、すいません。では簡単に」

仕方ない仕方ない。

昨日来たばつかなんだからさ。

俺が不甲斐ないからではない、断じて。

気を取り直して、聞き入ろう。

「弾幕は自らが持つ力、霊力、妖力、翼の場合は神力ですね、それをそのまま撃ち出し弾としたものです。光弾が一般的ですが、力を札や人形に込めて攻撃手段とする人もいます。戦闘における基本攻撃ですね」

基本、か。

是が非でも覚えないとまずそうだ。

出来れば戦わないのが一番だけど、そうもいかないだろうしな。

「一つ聞いておきたいのですが、藍から弾幕の出し方を教えてもらったりは……してませんよね」

答えは当然ノーだ。

昨日は飛ぶことしか覚えてないからな。

「ああ、まだだ。妖夢、教えてくれないか？」

彼女は最初からそのつもりだったらしく、答えを聞く前から二刀の片割れである長刀の柄に手をかけ、鯉口を切っていた。

「ええ、そうしようと思っていたところですよ。では実演を織り混ぜながら説明しますので、よく聞いて下さいね」

そして腰を少し落とすと、抜き打ちに暁の空に向かって鋭く半円を描くように振るった。

するとその剣筋に沿って白い矢尻型の光弾が生まれ、真つ直ぐに飛んでいく。

形こそ違つが、俺が昨日倉で紫に放った弾を彷彿とさせた。

「今のように力を宿す武器は、振るうだけで高威力の弾幕を精製できます。しかし弾幕に多様性を持たせることは難しいです」

神器の攻撃はこれにあたりそうだ。

弾幕にあまり変化を付けられない代わりに、単純なパワーやスピードは強力ってことか。

「反対に」

今度は長刀を収め、左手で天を指差すようなポーズをとる。

すると頭上に白い旋風が巻き起こり、少し離れた地面に突進をかまして玉砂利を飛ばした。

……よく見たら妖夢の半霊部分じゃん。
痛くねえのか？

「自らに流れる力は扱いやすく、多様性に優れています。例えば体や物に纏わせて強化し、弾幕としたり、弾に誘導性能を持たせたり。人によって弾幕が違つのは、そのために個性が反映されやすいから

なのです」

「個性？」

「はい、自らが操るのですから、自ずと性格が影響してくるのです。例えば幽々子様なんかは、広範囲に大量にばらまいて拡散させる代わりに、発生のスピードは遅い弾幕が多い」

「ああ、そういうことか」

まったりほんわかしてるもんな、あの人。

「ですが、弾幕の出し方は皆変わりません。上手くは言えませんが……そうですね、神力を血に乗せて全身を巡らせるようイメージしてみてください」

目を閉じ、頭の中で光の粒を全身に送ってみる。

光は腕を、脚を巡り、電光のように血管を刺激していく。

光が行き渡っていくにつれて、神力の高まりからか身体が徐々に火照ってきた。

「はい、もういいですよ」

妖夢がパンと手を叩いた音が中庭に響く。

しかし目を開けても、火照りは治まらない。

「ふう、この熱さはどうにかならねえのか？」

例えるなら、神力が行き場を求め、唸りをあげて燃えているような

感じた。

正直この状態で戦うなんてちょっと洒落にならない。

「今はきついかもしれませんが、直ぐ慣れるので我慢して下さい。これだけで神力の底上げができるので、戦闘には欠かせないことですからね」

妖夢は苦笑の後に続けた。

「あとはその神力に、行き場を与えてやればいいのです。ある程度なら想像通りに力は放出されますから、後は色々試して自分で覚えていくといいでしょう」

何と。

説明それだけ？

「えらく簡単だな」

「本来飛ぶことの方が難しいですから、翼なら簡単にマスターできますよ。それでは、私は朝の見回りがあるのでこれで」

妖夢はくるりと背を向けた後、低い塀の向こうを指差しながらこう付け足した。

「そうそう、今から練習するなら庭に出て下さいね。くれぐれも、奥に見える巨大な桜には近寄らないように」

俺は妖夢が飛び去る姿を見送りながら、首を捻った。

桜に近寄るなって、何で？

とりあえず行ってみれば分かるかな？

その場から軽く飛び立ち、塀の向こうに広がる庭を一望する。

「……………おお」

眼下に広がる光景に、自然と感嘆の溜め息が漏れた。

中庭の向こう、桜が規則正しく並ぶ広大な庭。

今はまだ咲いていないが、これだけの木があれば月末には大花見大会が開けるだろう。

その向こうにそびえ立つ巨大桜は、咲けばどれだけの花が見られるのか。

その光景は、想像するだけでも楽しい。

科学に支配された外界で森や海がどんどん汚され姿を消していく中、これだけの桜を集めた場所がはたしてあるだろうか。

外で忘れ去られたものが集う幻想の郷。

それは、ある意味理想郷なのかもしれない。

「奥……………行ってみるか」

ここいら一带は手狭だし、やはりあの巨大桜は見てみたい。

あの近くで練習を開始しよう。

なに、すぐ傍まで寄らなければ問題ないだろ。

「しっかし……………」

これが庭だったよ。

どんだけ広大な敷地持ってんだよ、幽々子さん。

この素晴らしい景観を潰すことにプラスなど有りはしないが、桜さえ伐採すれば立派な公園が出来そうな広さだ。
御屋敷も広いし、西行寺家って超大金持ちなのか？

でもあの人、金なんかに興味なさそうだしなあ……。
今度妖夢に聞いてみるか。

「うん……？」

庭の半分ぐらいまで来た所で空中静止。

そこかしこに幽霊が飛んでいるのは、冥界なんだから当たり前だ。
庭の奥へ向かうほど、幽霊がどんどん増えていたことにも気付いていた。

でも、これはいくらなんでも多すぎねえか？

その量は、雲霞の如く、というに相応しい。

白くて半透明なだけに、そこら中が霧に包まれたようだ。

数匹ならもうさほど気にならねえが、ここまできると流石に少し不気味だ。

「……………行くか」

引き返そうか迷ったが、他に練習場所の当ては無い。
顔を軽く叩き、首をゴキリと鳴らす。

そして幽霊がたゆたう中に弾丸の如く突っ込んだ。

実の所、びびって避けるだろうとたかを括っていたのだが、通り抜けるから気にならないらしい。

思いつきり幽霊を貫通していく。

寒っ！

畜生、何でこんな冷てえんだよこいつら！

お前らそれでも人間……じゃねえな。

幽霊だ。

そんな他愛もないことを考えている間に、逆風に細めていた目が下に土の色を捉えた。

「……でけえ」

着地し乾いた土を踏みしめた時の、第一声がこれだ。
勿論それは、目の前に立つ巨大樹に向けられた言葉。

とにかくでかい。

結構離れているが、木のうろに入ったひびも見えそうな程に大きい。春だというのに全く葉が付いていない節くれだった枝は、幽霊が集まりすぎて白く霞んでおり、それがいかにも儚げで幻想的だった。

その物悲しい美しさに暫く見惚れていたが、ふと妖夢に忠告されているのに、近くで見たいという思いが湧き起こってきた。

最初は堪えていたがだんだんと思いは募り、遂にはもうその事しか考えられない程になっていた。

誘惑に負け、ふらふらと桜へ歩き始めた俺。

その首根っこを、誰かが掴んで現実へと引き戻してくれた。

「行ってはいけません」

はっと我に返り、後ろの声の主に目を向ける。

少し短めの黒髪を風に靡かせている少女。

白いシャツに黒のスカートと外界にいても可笑しくなさそうな服装だ。

だが彼女が妖怪であることは、背に生えた漆黒の翼から明々白々。

「まったく、人間を死に誘う西行妖に自ら近寄るなんて、正気の沙汰じゃありませんよ。あなたがフラフラ歩き出した時は、胃の腑が凍りつくかと思いました」

緊張に険しくなっていた赤い目を閉じ、首を垂れて深々と溜め息を吐いた。

頭の上のこれまた赤い頭襟は固定されているのか落ちる気配を見せない。

これ、たしか白狼天狗が同じもの乗せてたよな？

「ーことは天狗の仲間か。」

彼女曰く俺はあのままだと死んでいたっばい。

実感は全くねえが、お礼は言うべきだな。

「どうもありがとございました。俺は霧崎翼って言います。あなたは？」

とりあえずはこの恩人の名前をお伺いしよう。
多分人ではないが。

「そんなに畏まらなくてもいいですよ。私は烏天狗の射命丸文しやめいまるぶんと申します。気軽に文と呼んで下さい。以後お見知りおきを」

幻想郷は変わった名前が多いな。

屈託なく笑う彼女の握手を受け入れながらぼんやりと思った。

「では翼さん。早速取材をさせていただきたいのですが、お時間よろしいでしょうか？」

シュバツと音が出そうな位素速く取り出したのは、ペンと手帖だった。

「取材？」

相変わらずスマイルのまま次は新聞を取り出す。

「私はこの文々ぶんぶんまる。新聞を発行している新聞記者なのですよ。はい、あなたにも」

さっと広げて一面の見出しを見してみる。

“謎の外来人、幻想郷に現る”

不覚にも吹き出した。

明らかに俺のことじゃねえか！

しかもいつ撮ったのやら、俺と藍さんが並んで飛んでいるところがバッチリカメラに収められていた。

俺の反応を見て、文は確信したように頷く。

「やはりあなたでしたか。写真の姿、椀やにとりさんに聞いた特徴。一目見た時からあなただと思っていましたよ」

目を爛々と輝かせにじりよってくる文。

にとりもそうだったが、妖怪の山には情熱家が多いのか？

「あなたは間違いなくネタの宝庫ですよ。是非是非取材を」

彼女には借りがあるんだし取材は別に構わない。

だが、気になることが一つある。

「いいけどあの白狼天狗、椀さんはどうなったんだ？俺と藍さんを見逃したせいで責を問われたりしてないよな？」

「甘いですね。彼女は自分の役割を果たせなかったのですから、しばらくは当然です。幸い大天狗様の有り難いお説教フルコースで済みましたが」

……… すいません椀さん。

今度菓子でも作って持っていきます。

「そうか。山に戻ったら椀さんに俺が詫びてたって伝えてくれるか？」

「律儀な人ですねえ……。まあお安い御用です。ではもういいですね？」

迷惑かけたら謝るのは当然じゃねえか？

まあいいけど。

取材だよな？

どうぞどうぞ。

その位の恩返しはさせてもらいますよ。

「ああ、それでは宜しく願います」

「あはは、ですからそんなに畏まらなくてもいいですって」

開始早々、苦笑と共にペンが走った。

何書かれたんだ。

聞かれたのは俺が幻想郷に来た経緯、能力や背の翼について等。ありがたいことに、俺が幻想郷に来る前の話は聞いてこなかった。軽薄な印象とは裏腹に、他人の気持ちは斟酌出来るようだ。

特に俺の能力については深い所まで質問された。

俺だってまだよく理解していないのに、教えると言われても難しい。それでも何とか全て答え終わると、文は左手でパンと手帖を閉じてこんなことを口にした。

「どうもありがとうございます。最後に出来ればの話ですが、一枚だけスペルカードを体験させていただきませんか？あなたがどの程度強いのか把握しておきたいのです」

来た。

来るんじゃないかと恐れていた質問が。

俺が昨夜作った二枚のスペカは、勿論まだ発動したことがない。しかも一つは完成早々何者かに破られてしまった。

どちらのカードもどういう技にするかしっかりイメージして刻み込んだつもりだが、これで外したらいい見世物だ。

そこでこんなナイスな言い訳を思い付いた。

「体験つて、俺のカードは鋭利な武器だぞ？命にかかわるだろ」

半分は本音だ。

俺が文に攻撃する理由はどこにもない。

嘘をつくコツは少しの真実を混ぜることだつて聞いたことがある。

しかし文はあっけらかんと笑って胸を張った。

「妖怪を甘く見てはいけませんよ？大多数の妖怪は治癒能力が人間より数段優れています。剣でばつさり斬られても妖力さえ尽きなければすぐ治りますよ」

まさかの課題クリアー。

いや、そういう問題じゃなくてだな。

どう断ろうか頭を悩ませている俺に、文は少し狡い手を使ってきた。

「心配しなくても、これは私の個人的な興味に過ぎません。恐らく失敗作でしょうし、記事にはしませんから」

ぐ……。

他人に、しかも女にそうまではつきり言われると退き下がれない。ここまで露骨に挑発するか普通？

「分かった。どうなっても笑わずにいてくれよ」

腹の底では前言撤回させてやるつもりだがな。
上手く乗せられたんだろぅが別段悪いことをする訳じゃねえし、そ
の挑発、受けてやる。

お互い図ったようなタイミングで同時に真後ろへ20m程度飛び、
俺は朝教わった通りに神力を高める。

身体の熱さは相変わらずだが、耐えられないほどじゃない。

俺は一枚になってしまったカードを取り出した。

カードには白金の槍が描かれている。

昨日妖夢に教わってなんとか槍をカードに封じ込めた時、その瞬間
イラストが浮かび上がったのだ。

今の俺にはこれしかカードが無いので、一発勝負だ。

果たして正しく起動するのか……。

「せーのでスペルを唱えてくださいね〜！」

準備が整ったのか、文が葉で作られた天狗の団扇を振って合図を送
ってきた。

逆の手にはしっかりと握られたカード。

場が数瞬緊張と静寂に包まれるが、一陣の疾風が吹いた時それは破
られた。

「いきますよ！せーのー！」

第八話 大桜に風が吹く（後書き）

毎回サブタイトル考えるのに十分くらいかかる（＾o＾）／

さて、読んで下さりありがとうございます。
次回も宜しく願います。

第九話 ささやかな復讐

「五光」

右手に紫電を纏った神槍が召喚される。
光の神が愛用したとされる至宝の槍。

「マッドアイ・ペネトレーション！」

平常時とは比較にならない強烈な電流を纏ったそれを、俺は有らんなりの力を込めて投擲した。

槍は己を十字に囲む真つ白な閃光を従え、地を抉り砂塵を巻き上げながら神速で文に迫る。

直線状にあるものは全て焼き払われそうな破壊の雷。
その姿は文字通り、全てを“貫くもの”だ。

「旋符、紅葉旋風！」

文が負けじと声を張り上げ団扇を天に掲げると、彼女の目の前に竜巻が現れ槍の進路を遮った。

その風の強さに庭の木は傾ぎ、西行妖ですら枝をしならせる。
中に入れば体を引き裂かれそうなほどの暴風は礫をこちらに弾き飛ばしているため、俺は眼を庇いながら事の行く末を見守る。

しかし、事は一瞬だった。

ブリューナクは竜巻をものともせず、風の防壁を裂いて文を貫いたのだ。

「……………！！！」

一瞬目も眩む光が辺り一面に走り、激しい雷鳴に混じって声にならない絶叫が聞こえる。

槍は文の腹にぐっさり突き刺さっていた。

本当に、本当に大丈夫なんだよな……？

光が止んでも彼女は暫くふらふらと立っていたが、やがてそのまま仰のけに倒れて動かなくなった。

竜巻が巻き上げた砂や小石がパラパラと降り注ぐ音が妙に大きく聞こえる。

「う、お、おい文！大丈夫か！？」

上ずった声で叫び、翼を広げてからおおよそ二秒で彼女の脇に到着。

そこには、腹に大穴を開けて血溜まりを作り、黒い翼と白いシャツを深紅に染め微動だにしない文の姿が……なんてことは全然無かった。

「痛っ……！翼さん、そんなに驚かなくても。先程妖怪を侮るなど言っただでしょう？むしろ私の方が驚かされましたよ」

彼女は上体だけを起こし、自分の腹に刺さっている槍を指に刺さった棘を抜くように自力で抜くと、啞然としている俺に平然と渡してきた。

槍はカードの効果時間が切れたらしく、跡形もなく霧散する。

しかし刃は余さず血に濡れていたのに、あつたはずの風穴はもう塞

がっている。

人間なら電撃が無くても絶対死んでいただろう。

「何ですか？人のお腹をじろじろと見つめて」

文が眉寝に皺を寄せる。

服は蘇生出来ないのでシャツには大きな穴が空いているが、体は無事だ。

「……いや、妖怪つてすげえなと思って」

姿形は今のところ皆可愛らしい少女や美人ばかりだが、改めて彼女達は根本的に人とは違う存在なのだと言認識させられた。

人間は弱く、短命だ。

それとは逆に幾星霜の時を生き抜き、強力無比な力を持つ彼女達はどんなことを考え生きているのだろう。

学べることが多そうだ。

「文、お前の新聞って普段はどんなことを書いてるんだ？」

彼女は脈絡のない質問に少し戸惑ったが、ふらつきながらも立ち上がって説明をしてくれた。

「え？ああはい、主に幻想郷の女の子達にスポットを当てていますが……。もしかして、購読して下さるのですか？」

顔色が微妙に悪そうな文の目に光が宿る。

本当に新聞を書くのが好きなんだな。

「内容いかんでは、な」

さつき貰った新聞を懐から取り出し、もう一度よく読んでみる。

一面の俺についてはそこそこ事件性のあるものだったが、二面、三面はもう殆どとある女の子の日常に関することとしか受け取れないものだった。

しかし、面白い。

記事の内容ではなく、同時に掲載しているインタビューで交わした会話の抜粋が良い。

言葉の端々にその人の人格や思考、価値観や信条が現れており、勉強になる。

よし、購読しよう……ん？

何か忘れているような気が……。

「あ」

そうだ、購読だ。

立ち読みじゃない。

つまり、この世界で無一文の俺では新聞も購読出来ないということだ。

なんてこったい。

「悪い文。やっぱり無理だ。俺はこっちの世界の金を持ってない」

がっくりと肩を落とす俺だったが、文は脂汗を浮かべながらもニコリと営業スマイルを浮かべて新聞の角を叩いた。

「それなら、ここで働けばいいじゃないですか。あなたなら里の守護者にもきつと歓迎されますよ」

「ここ？」

記事の隅に、取って付けたような求人広告欄。

そこには異能者歓迎、労働時間は昼間限定。

詳しくは人里の上白沢かみしろさわ慧音けいねまでとだけ書いてあった。

怪しくねえ？

「あのさ、これ仕事内容が書いてねえんだけど」

「大丈夫、危険な仕事ではないですよ。多分」

「多分!？」

そこで背を向けて言うか？

またくるりと半回転した文は笑っていたので冗談だとは思うが、どうも幻想郷の住人には遊ばれることが多い。

「あはは、ではでは、私は新聞を配り終えなければなりませんので失礼します。取材へのご協力、ありがとうございます」

彼女はおどけた敬礼の後にへにやりとお辞儀をすると、黒い翼を広げた。

「ま、待ってくれ」

このまま帰られては申し訳なさで胃が擦れそうなので、俺は飛び立

とうとする彼女の腕をがっちり掴んだ。
昨日もこんな場面があったような気がする。

「命を助けてもらったのに恩を仇で返すような真似をしてしまったし、お詫びをさせてくれ。服は働いて弁償するしかねえが、具合が悪いなら休んでいつてもらうくらいは出来る。俺がなんとか二人に頼んでみるから、白玉楼に寄って行ってくれよ」

さつきから息も荒いし、そんな格好では人間なら確実に風邪を引いてしまう。

もうへそ出しルックなんて次元じゃない。

もしあと少し上に刺さっていたら……いや、何でも無い。

「あやややや、それは助かります。傷口を塞ぐことに妖力を使い果たしてしまって……。ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきますね」

後ろ髪をわしやわしやと撫でながら苦笑する文。

と、なれば善は急げだ。

「決まりだな。じゃあ行こう」

太陽が既に顔を出している晴天の空に向けて、二対の翼が飛び立ったのだった。

AM:6:30。

中庭に出たのが大体5:00くらいだったから、もう一時間以上経っている計算になる。

いくら敷地が広いと言っても妖夢も空を飛べるのだし、そろそろ見回りを終えて屋敷に戻っているはずだ。

幽々子さんは起きているか分からないし、彼女に話を通すしかない。何処にいるのか……お。

「あれ？翼、なんでブン屋が……。随分酷い格好ですが、どうしたんですか？」

中庭にて、今度は真剣の素振りをしていた彼女が汗を拭いながら、成り行きがさつぱり分からないと首を傾げている。

そりゃそうだよな。

俺が妖夢の立場でも同じ反応をしただろう。

「そ、それは……。うふふ、翼さんったら強引なんですから」

あれ？

くねくねしながら何言ってるんだこいつは？

確かに槍をぶつ刺すのは強引とも言えるけどよ。

「おい、何語弊のある言い方して」

「翼さん、また二人っきりの密着取材、受けてくれますよね」

文さん、暴走も大概にして下さい。

妖夢の口があんぐり開いてるんだよ。

「待て待て、言い方を考えろ。考えてくれ。間違いなく誤解されるから」

「何を言ってるんです？私達は心行くまで語り合った仲でしょう？」

腕にしなだれかかると、頬を染めるなあああ！！
全力で振り払おうとするがそこは妖怪。
ガツチリ抱きしめられた腕は微動だにできなかった。
あ、でも腕に柔らかな感触が。
こ、これはしばしそのままでも……。

「失望しましたよ、霧崎翼」

良くねえ！

すいませんでした本当に！

「ま、待て妖夢！冷静に考えろ！安直に与太話を信じるな！」

俺の願いもむなしく、妖夢は長刀を片手に持ち変え短刀の柄に手をかけた。

それを見た文はにんまりと笑いながらその場を離れ、屋根に座り嬉々としてカメラを構えだした。
表情は健康そのものだ。

「貴様、凶つたな……！」

ありつたけの恨みを込めた視線をファインダー越しに捉えた文だが、暢気に欠伸をして流された。

「ほらほら、余所見しないで。背中を斬られちゃいますよ？」

「おほおおおう!?!」

間一髪。

俺が咄嗟に飛び上がらなければ唐竹割りにされていただろう。

「……………逃げさん」

目が本気だ。

ここは戦略的撤退を図るべきだろう。

三十六計逃げるにしかず！

「おお、おはよー翼あ。朝から何やってんだい？」

しかし、後ろに逃げようとした俺の行く手を遮るものが一人。

リュックサックを背負い、でかい工具箱を抱えている青髪をツインテールにした女の子だ。

……………約束をきつちり果たしに来てくれたのは嬉しいが、一つだけ言わせてくれ。

「にとり、タイミング悪すぎ……………」

「覚悟おおお！ー！」

一瞬の静止が命取りとなった。

見事な色彩の弾幕が飛んでくる中で聞こえたシャッター音を、俺は絶対忘れないだろう。

「お早う妖夢、翼……………あらあら、どうしてこんなに雰囲気が悪いのかしら？せつかくお客様が来ているのに」

ようやくお目覚めのご様子な幽々子さんが、居間に入ってきた。

気にしているのかどうかいまいち解りづらい。

「ふん、私は不埒者を成敗したまでです」

未だに信じてくれない妖夢が、むすつとしながら机の上に食事の配膳を済ませていく。

メニューはご飯に味噌汁、沢庵に焼き魚といたってノーマルな和食で食欲をそそるものだったが、その米をよそっている剣士が放つオーラが食欲を減退させていた。

そんなことはお構いなしに、閃珠は朝飯を黙々と食っている。何も言わずとも、我関せず、と目が語っていた。

傷は痛い、それ以上にこの空気が心に痛い。

文は服を漁りに行ったし、にとりは宝物庫に籠ってるしなあ……。

「あらそう。妖夢、私の分もあるかしら？」

「今盛り付けます。少々お待ちを」

あ、スルーなのか。

器がでかいのか、大雑把なのか。

それともただ単に無関心なのか？

「翼、今日はあなたにお願いがあるの。聞いてくれるかしら？」

隣にぺたんくと座り込んだ幽々子さんがにこやかに尋ねてきた。

昨日は結局迷惑かけっぱなしだったし、今日こそは役に立たなきやな。

箸を置き居住まいを正すと、彼女は

「食べながらでいいわよ」
と苦笑した。

照れ隠しに味噌汁を啜り、咳払いをする。

「勿論です。それで頼みというのは？」

彼女は沢庵を口に放り込み、飲み下してから続けた。

「簡単なことよ。今日は閻魔様が休暇で幻想郷を見て回る予定だから、彼女を見つけ出してこの文書を届けてほしいの」

閻魔ねえ。

妖怪やら幽霊やらが出て、ついに地獄の王とも顔を合わせることに
なったか。

もう驚かねえけどな。

「その閻魔様ってどんな人なんですか？」

ただ一つ言えることは、彼女と言っていたことから恐らく美少女か
美人だということだ。

悪人の舌を抜く女の子……想像できん。

むしろ想像したくねえ。

目の前に座る美人な亡霊は味噌汁のワカメを箸で掬いながら、左手
の人差し指をピコピコ動かして説明してくれた。

「とげとげした敵めしい帽子を被っている緑色の髪をした可愛い娘
よ。よく道行く人に説教を垂れているわね」

なるほど。

そんな目立つ特徴を持っているなら簡単に見つけられそうだな。仕事の話聞きに行く前に探し出しちまうか。

「分かりました。幽々子さん、代わりについてことじゃないですが俺からもお願いがあるんです」

「あら、何かしら？」

「里に仕事があるらしいのでそこで働こうと思っんです。許可を頂けますか？」

彼女は焼き魚を職人芸のように綺麗にばらして、骨を取り除きながら首を傾げた。

「許可もなにも、それはあなた自信が決めることでしょうか？好きにしないな。これからも何かする時は事前に話してくれるだけで十分よ」

言われてみればその通りだ。

よっし、頑張るか！

「妖夢く、味噌汁とご飯まだあるかしら？」

もう！？

見れば彼女の前に盛り付けられていた朝食はすでにきっちり平らげられていた。

早い……否、速い……！

もし幽々子さんが外の世界にいたら、早食いなしは大食いで生計を立てられるのではないだろうか？
ビジュアル良し、キャラ良しでファンも出来そうだ。

「あらら？翼、手が動いてないわよ？食欲がないのなら私が頂いちやうけど」

気付けば幽々子さんの箸が俺の魚に延びていた。
いかん、朝飯を盗られてしまっではまずい。

「大丈夫です、食べます食べます」

俺は彼女の魔の箸を左手で食い止めながら、魚を急いで食べきった。
しかし、そんなことをしたらこうなることは誰でも分かっただろうに。

「んっ、あゝあゝ、うんうん！」

小骨が喉に刺さるよな。
そんな食い方したら。

米をせっせとかき込む俺を見て幽々子さんは笑い、閃珠はむせ、怒っていた妖夢ですら顔を背けてプルプル震えだした。

ピリピリしていた雰囲気が無くなったのは良かったけど、もう少し普通に機嫌を直せないものかと、俺はお茶を飲んで一息つきながら思った。

第九話 ささやかな復讐（後書き）

ついにPVが1万を突破しそうです。

（これを書いているときに9930くらい）

これも皆様のお陰、ありがとうございます。

まだまだ序章ですが、これからも宜しく願います。

感想、批評、指摘などあれば、些細なことでも是非に！

第十話 里へ（前書き）

本当は二話に分けたかったのですが、どうしても中途半端なので繋げました。

無駄に長〜い駄文ですがまったりと読んでいただければ幸いです。

第十話 里へ

「あやややや？なんだか楽しそうですねえ。何かあったんですか？」

文が障子の蔭からひよこりと顔を出した。

彼女は花柄を配した灰緑色の着物に決めたようだ。

新聞記者という活動的な仕事には向いてないと思うのだが、見た目的には意外と似合っている。

「何でもねえよ。それより取材もその服装でやってみたらどうだ？ さつきよりは誠実そうに見えるから、初対面の相手なら確実に騙せると思うぞ」

「そんな騙すだなんてとんでもない。私は真実を追い求める誠実な記者なのです」

えへんと胸を張る文。

記事は少なくとも本当のことを書いてるようだが、内容を見る限りは誠実さの欠片も無いと思うんだがな。

あろつことか嘲笑ネタまで書いてるじゃねえか。

「真実を追い求めるなら妖夢に事情を説明してくれよ。俺から話したって信じてくれねえし」

「そんな些細なことはいいいじゃないですか。あなたのお陰でネタが出来て、これからは嘲笑ネタまで頂けそうなのが予感できた。それ以上のことがありますしょうか」

「俺の尊厳は!?!」

最初に見たあの礼儀正しい態度は営業用だったのか。道理で彼女を見る妖夢の目がちょっと険しいわけだ。

幽々子さんは……欠伸をしてからお茶を啜った。興味無いんですね。

しかし、閃珠は違った。

彼女の言葉を聞いた途端弾けるように立ち上がった。

「貴様、我が主を愚弄するか！？そこに直れ、斬り伏せてくれる！」

しかもいつの間にか持ち出した出石小刀の鞘を投げ捨てている。こいつ、軽口叩いた位で斬るつもりか！？

「うおおお！？待て！落ち着け閃珠！」

「離せい主！私はあやつに用があるのだ！」

慌てて彼女の左手を掴んだが、彼女は剣を片手に声を荒げる。

「その前にその物騒なもんをしまえ！」

「ぬう、ならば剣をしまおう、代わりにこの拳で殴ればよいのだな！？」

「それも駄目だつーの！とにかく落ち着け！」

地団太を踏む彼女をなんとか繋ぎ止めている俺を見て、文は乾いた声で笑った。

「あ、あはは、大丈夫ですよ、あのいざごきは記事にしません。真実しか記事にしないのが私のポリシーですから。あなたの記事だって、配るなど言われれば即座に全て捨てますよ」

文はびつしりと文字が書き込まれたメモ帳をひらひらさせながら営業スマイルを浮かべているが、流石に信用できない。

閃珠も同意見らしく、剣こそ下ろしたがまだ文を睨みつけている。疑いの目を向けていると、幽々子さんがホッと一息ついてから眠そうに言った。

「どんなに疑っても結局事態は好転しないわよ？天狗の言葉を信用する以外に道は無いわ」

まあそれもそうか。

一応恩人だし、ここは文の言葉を信じよう。

「分かった、信用するよ。服の代金はお金が貯まったら持って行くから、椀さんよろしく言うておいてくれ」

「承知いたしました。それでは！」

彼女はくるりと半回転すると、逃げるように縁側から飛び出していた。

みるみる小さくなっていく姿を見送っていると、後ろからぼそりと呟く声が。

「まったく、人をからかうのもほどほどにしてくれないかなあ……」

「なんだ、分かってたのか？」

幽々子さんが飲みかけにしていったお茶を片付け机を拭いている妖夢に声をかけると、彼女は申し訳なさそうに俯いてしまった。

「いえ……さっきの会話を聞いてやっと気付きました。私、熱くなるとどうしても冷静に物事を考えられなくて……」

「うむ、それは私も分かる気がするぞ。思考の前に体が動くのだな。……先の私のように」

二人とも下を向いて落ち込んでいる。

閃珠はともかく、妖夢はこんな素直な性格だから、人にかかわれやすいんだろうな。

俺も最近は割とかわられることが多いから、ちょっと同情する。

それでも悪意を持ったからみは無いから別にいいんだけどな。

「分かってくれたらそれでいいよ。それよりその敬語どうにかならねえか？出来れば普通に話して欲しいんだけど」

部活の後輩も敬語だったけどもつとフランクな感じだったから、どうにも畏まった喋り方は苦手だ。

背中がむず痒くなる。

「いえ、翼は西行寺家の客分として扱うよう紫様から仰せつかっているのです。幽々子様は当主ですから対等だとしても、私はその幽々子様には仕える身。礼を尽くす必要があります」

妖夢、言ってることとやってることが矛盾してるぞ。

「客分だと本当に思っているなら、何をしようど刀を向けたりしないわよね。あなたは紫が悪戯しても、同様に刀を抜くのかしら？」

幽々子さんからの絶妙な指摘は凶星らしい。

目を見開いて口を半開きにした顔がそれを証明している。つくづく分かりやすい奴だなあ。

「敬語など形を繕うものに過ぎぬ。本当に敬う気概があるならば、そんなものは不要よ」

閃珠にまで説得され、妖夢は苦笑いしている。

しかしそれは馬鹿にするようなものではなかった。納得してくれたか？

「だからもう紫の言うことは気にしないでいいよ。俺のことは迷惑な居候くらいに思ってくれ」

妖夢は目を閉じて暫く考え込んでいたが、やがて腕を組みながらこんなことを言った。

「でも言葉遣いを急に变えるのも……。今は保留ということはどうでしょう？」

かなり考えてこの結論なのだから、これは彼女なりの譲歩なんだろう。

これ以上を要求するのは酷だ。

「分かった、じゃ、出かけてくるよ。幽々子さん、書状をこちらに」

「はい、気を付けて行ってらっしゃい。くれぐれも食べられないよ
うにね。」

「行ってらっしゃいませ。」

二人に見送られ、俺は部屋を後にした。

出かける前に挨拶はしておこうと、宝物庫に向かう。

しかし玄関前にまで聞こえていたこの音、絶対ドリルの音だよな？
相変わらず河童のテクノロジーは幻想郷一のような。

扉が外れた入り口を潜るとにとりが汗を拭って顔を上げた。

「おお翼。何か用かい？」

「いや、様子を見に來ただけだ。どうだ、扉や格子窓は直りそうか
？」

にとりは苦笑を浮かべながら両手をあげた。

「格子や床はどうにでもなるけど、あんな風に入こんだ扉は初めて
見たよ。完全にお手上げさ。」

「お手上げって、扉が無いのは流石にまずいだろ。にとり、なんと
かならないのか？」

手を合わせてこう言うと、彼女は頬を掻いて目の前の巨大な板に目

を落としました。

「仕方無いから、簡単な木製の扉を造って付け替えるよ。見た目は出来るだけ似せるけど……複製は無理だねえ」

「いや、良いよそれで。悪いなにとり」

彼女はからからと笑いながらスカートに幾つもついたポケットの一つを叩いた。

音からしてあそこには携帯ゲーム機が入っているのだろう。

「何、代価を支払われればそれに見合った仕事をするのは当然さね。他に直して欲しいところがあつたら言っておくれよ」

幻想郷には紫みtainな滅茶苦茶な奴もいるけど、良い奴も結構いるよなあ。

波乱だらけの生活を送る今の俺には、ちょっとじ〜んとくる。

「いや、今は大丈夫だ、ありがとう。俺はちよつと出かけてくるよ」

「いつてらっしゃい。そうそう、完成するかは分からないけど、用事があるから夕方頃には帰るよ。その時はまた明日再開ってことでもいいね?」

「ああ、勿論だ」

外に出てからイカロスの翼に神力を漲らせ、ぐつと足に力を込める。しかし飛び立とうとする間際、背後からこんな声が聞こえた。

「主、ここにおられたか。探したぞ」

「おお、閃珠か、見ないと思ってたよ。何をしてたんだ？」

「妖夢殿の手伝いを。私もこれから世話になるのだ、その程度はこなさねばなるまい」

成る程、筋は通さないとして訳か。

こいつ、俺とちよつと似てるかもな。

今日一日でも、仲良くなるのは難しくなさそうだ。

帰ってきたら、ゆっくり話でもしてみるか。

「そつか。じゃ、また後でな！」

「あ、ちよつとま……」

俺は空に飛び上がり昨日飛んだ方角へと加速した。

何か聞こえた気がするが、気のせいか？

イカロスの翼から得た神力を解放して、幻想郷の空を翔ること十分くらい。

里についた俺は、時代劇のセットみたいなそこをぐるぐる回りながら閻魔様を探していた。

ちなみにこの搜索の間、人々から奇異の視線を浴び続けている。

羽が生えた人間がいたらこうなるよな、やっぱり。

それだけなら別にいいのだが、人に話を聞こうとすると避けられる

のには少し弱った。
これじゃあ閻魔様が里にいるのかすら分からない。
どうするか。

「ちよつと、その人」

履き慣れない草履で地面をなじりながら黙考していると、すぐ後ろから声を掛けられた。

不意の事に、ビクツと身が震える。

澄んだよく通る声だったので余計に驚かされてしまった。

振り返ると、そこには長い青みがかつた銀髪を揺らす一人の少女がいた。

弁髪帽の上部だけを取り外したような特徴的な帽子に、6つ穴が開いた青いロングスカートを着ている。

彼女は警戒しているのか、文に似た赤い目を油断なく光らせていた。

「先程から同じ所をぐるぐる回っていますが、里に何か用ですか？」

見た目は妖怪なのだ、大方不審者かと思われたのだろう。

事情を説明しておいた方が良さそうだ。

「はい、実は今日閻魔様が幻想郷にいらっしゃるといふことで、西行寺幽々子様からお手紙を授かっているのです。何処を訪れているか御存じですか？」

自分で言いながらかなり胡散臭い返答に思えたので、縦長に折られた文書を出して見せた。

捻られた所に紙縫りが解けない長さで封をしているので、開封は出

来ない。

こうなることまで計算済みだったのか、書状の裏には素人目にも達筆と分かる字で幽々子さんの名前が添えられていた。

「ああ、閻魔様なら昼頃に来るはずですよ。それまで里をのんびり見物してみてもどうですか？ここに来たのは初めてでしょうか？」

信用してくれたらしく、彼女の目尻がふつと緩んだ。

利発そうなスツキリした顔立ちで中々に可愛い。

妖怪だったら話は別だが、年頃はそう変わらないだろう。

「ええ、そうです。どうして分かったんですか？」

尋ねてみると彼女はくすくす笑いながら、あちこちを指差した。

「歩きながらずっとキョロキョロしていましたから、誰でも分かりますよ」

あー、なるほど。

初めて来る所って色々気になるからな。

町並みもなんだかタイムスリップしたみたいで、見るだけでも楽しいから殊更に挙動が目立ってしまったのだろう。

「いやはや、お恥ずかしい限りです。あの、図々しいですが、案内をお願い出来ないでしょうか？」

見て回るといつても何があるやらサッパリだしな。

ざっと見渡してみても、今見える建物で何屋かはつきり分かるのは

八百屋と酒屋ぐらいだ。

特にあの店、やつめって暖簾に書いてるけど何を売っているんだ？

「ええ、構いませんよ。昼までくらいなら退屈せずに過ごせるですよ。」

彼女は嫌な顔一つせず快諾してくれた。

いい人だなあ……。

「ありがとうございます。僕の名前は霧崎翼です。貴女のお名前は？」

俺は彼女がにこやかに差し出した右手をしっかりと握る。

「上白沢慧音です。この里で寺子屋の教師をやっています。」

上白沢さんね……え？

「あの、もしかして、求人広告を出してました？」

上白沢さん宅は丁度里の入り口辺りに位置しており、他の建物と少し離れているためすぐにそれと解るようになっていた。

客間だろうか、小綺麗に片付いた部屋に案内してもらった後は、座布団に正座しながらお茶を入れた彼女を待っていた。

軽く新聞を読み返していると、彼女がお茶と共に数枚の和紙を持ってきた。

「待たせてすまないね、これを探すのに手間取ってしまったんだ。」

仕事について重要なことを纏めたものだから、家に帰った時にも目を通してくれ」

「え？でも、まだ何の仕事かも分かってないし、採用だってまだ」

「まあいいから持つておいてくれ。用が無くなったらそれは知り合いにでも渡してくれればいい」

結構強引に手渡されたので一応受け取っておいた。

満足したらしい上白沢さんは、俺の向かいにきちんと正座し、咳払いをしてから真っ直ぐ視線を合わせた。

「さて、翼。まずは君がどんな妖怪なのか教えて欲しい。それによつて出来る範囲も限られてくるからね」

ああ、やっぱり勘違いされていたようだ。

これから何回勘違いされるんだろうと思うと少しげんなりする。

「俺は人間ですよ。昨日八雲紫に連れてこられたばかりの、白玉楼に住む外来人です。勿論お察しの通り能力持ちですが」

「またあいつか……。何人連れてくれば気が済むのやら……。うん、色々あっただろうし、経緯は聞かないでよくよ。能力については教えてくれるかな？」

「まだ詳しくは分かっていないのですが、出来ること、変わったこととは……。飛行、身体能力の向上、スペルカードの使用。あとは弾幕の形成でしょうか」

我ながら、ホント化け物じみた人間だな。

そこいらの妖怪なら倒せるだろうと言われたのも納得だ。

上白沢さんも同意見なのか額に手を当てている。

「たった一日で随分と人間離れしているな……。君はよく現実を受け入れられたね」

「うーん、受け入れたというか、無理矢理飲み込まされたという方が正しいかもしれません」

白楼剣の効果も大きいのが、何より色々起こりすぎて現実的な思考が麻痺していると思えない。

自らを取り巻く環境が目まぐるしく変わっていくせいで、対応に追われっ放し。

これでは一昨日といえども、過去のことなんて気にしてられない。

「無理矢理、か。戻りたくはないのかい？」

一番強かった、“戻りたい”という未練は既に斬られている。

しかし俺は今まで外で過ごしてきたことは忘れていないし、世話になった人たちの顔もしっかりと憶えている。

それらを思い出せば寂しくなることは否定できない。

しかし、だ。

「出来ないことを望んだって、仕方ありませんから。過去よりも今に目を向けようと思います」

俺はこうありたい。

出来るかは分からないが。

「ということ、上白沢さん。仕事内容を教えて頂けますか？」

彼女は面食らったように目を見開いていたが、一度目を伏せてから普段通りの顔に戻った。

「慧音でいいよ、翼。君には配達屋をやってもらいたいんだ」

「配達屋？」

思っていたよりは随分まともな商売だ。

てつきり妖怪退治でもやらされるのかと思っていたので安心した。

「その通り。実は里の人間がそんな商売を誰かやってくれないかとこぼしていたのを小耳に挟んでね。何人かに聞いてみたんだが、皆が異口同音に賛成してくれたんだ。しかし私には寺子屋の授業も、歴史の編纂作業もある。そこで」

「誰かを雇おうってことですか」

「そういうことだ。私が竜神の石造近くに張り紙をしておく。そこに里の人々が先着順に仕事を書き込んでいくから、君はそれを順々にこなしていけばいい。どうだ、簡単だろう？」

単純明快だ。

難しい技術もいらねえし、俺でも出来そうだな。

「ええ。でもどうして新聞に仕事内容を載せなかったんですか？」

こんな仕事ならいくらでも働き手が来そうなものだ。すると慧音さんは困ったように笑ってこう言った。

「普通の人間ならこんな仕事はやるうと思わないからね。配達途中で妖怪に襲われてもしたら目も当てられないだろう？かといって妖怪はこのような三文字で説明できる面白くも無い仕事には興味無いだろうから、載せても無駄だと思ったんだよ」

なるほど、少しでも話を聞きに来てくれる人を増やそうとしたのか。

「まさか早速興味を示してくれる人がいるとは思わなかったけどね。翼、君のような人間が一番この仕事には適任なんだ。やってくれな
いかな？」

職を探していたのに、断る理由なんてない。
俺は畳につき頭を下げた。

「はい。こちらこそ、宜しく御願います」

「そうか、いや助かるよ。さて、閻魔様が来るまで他に用事はある
のかな？」

いえ、と答えると慧音さんはスツと音がしそうなくらいスムーズに
立ち上がりながら顎に手をやりながら思案した。

「ふむ、まさかこんなにとん拍子で話がまとまるとは思わな
ったな。まだ来るまで時間があるし、どうする？外をぶらついてく
るか、それとも家でゆっくりしていくかい？」

「外を見て回ります。仕事上、店の位置なども把握しておいた方が
良いでしょうし」

それもあるが、折角異世界の町に来たのだから色々見てみたい。
金が無いから何も買えないのが残念だが……。

「そうか、ならば先程約束した通り里の守護者として私が案内しよう。その方が覚えやすいだろうからね。早速出ようか？」

「ありがとうございます。では、行きましょう」

二人して立ち上がり、向かうは美人ガイド付き幻想郷人里ツアー……
…だったらよかったのに。

分かってる、これが挨拶回りだということぐらいは分かってる。
どうせ俺はモテない野郎ですとも。

斯くして俺と慧音さんは、人里の店という店を回っていく事になったのだった。

ぶはつと一息。

お茶を飲むと心が落ち着くのは、何処の世界でも共通だろう。

「お待たせしました。どうぞごゆっくり！」

簪を挿した元気ハツラツな女の子が注文していた団子を持ってきた。
慧音さん曰く、彼女はこの茶店の看板娘だそうだ。

「どうだい、里を回った感想は？」

同じく茶を飲んでいる彼女は、両手を振る無邪気な笑顔の子供達に
手を振り返していた。

教え子だろうか？

あの様子だと、きつと慧音さんは寺子屋でも良い先生なんだろう。

「いや、良い所ですね」

とは言っても、町としては目立つたところは無いかもしれない。

この世界ならではの店や商品が並んではいるが、見た目は本当に想像した通りの昔時の里だ。

しかし俺が目を見張ったのは、里自体に対してではない。

この里に住む人々の温かさだ。

俺達はあの後貼り紙をしてから、予定通り挨拶回りをしていた。

俺はこんな見た目だから多分怖がられるだろうと踏んでいたが、嬉しい誤算が起こった。

店の人もお客さんも、こんな俺に気さくに話しかけてくれて、駄菓子屋ではお近づきの印にということ羊羹まで頂いた。

慧音さんがいたからこそその結果だろうが、これが外の世界なら背中の翼が無くてもどこか遠慮が入ってぎくしゃくした、契約の關係に留まっていただろう。

「そうか。そう言ってくれと、この里に長く住んでいる身としてはとても嬉しいよ」

「長く、ですか。どの程度ここに？」

「少なくとも人間にとっては悠久の時を過ごしてきたとだけは言えるね。元人間の私が言うのだから間違いない」

「元……?」

「ああ、私は後天性の半獣だ。それを踏まえれば、君とは似た立場にいるのかもしれないな」

まだ人間か妖怪かの違いこそあれど、普通の人間から変化した所は同じだ。

彼女もなりたての頃は相当戸惑ったはず。

俺に驚きを示したのは、そんな経験があつたからかもしれない。

しかし俺って奴は、人が気にしてそうなことをづけづけと……。

「その、すみません。人の事情も知らずに」

俺がおずおずと頭を下げると、慧音さんはちょっと驚いたような顔をした。

「いやいや、私は自分の立場については全く気にしていないよ。私のこの能力は里の歴史を、繁栄を守るためにあるのだと思ってるからね。だから今は、力があることを誇りに思っているくらいだ」

彼女の眼には一点の曇りもない。

偽りなしの本音らしい。

「君が力を貸してくれるお陰で、また里は活気を増す筈だ。本当にありがとう」

「え、あ、はい」

……な、何か慧音さんみたいな立派な人に、笑顔で面と向かってお

礼を言われると照れるな。
顔が赤くなつてねえといいが。

「翼？どうかしたか、顔が赤いぞ？」

「……大丈夫です。何でもないです」

小っ恥ずかしくて堪らず顔を逸らす。

すると、向かいの大きな酒屋にいた客と偶然目が合った。

肩と腋を露出した紅白の衣装に身を包んだ黒髪の少女で、少し派手な気もするが巫女に見えなくもない。

そいつはしばし俺をじっと見ていたが、何故か俺を手招きしてきた。

誰だあいつ？

とりあえず行つてみるか。

立ち上がり、隣の慧音さんに告げる。

「慧音さん、ちょっと呼ばれたので行つてきます」

「え？ま、待て翼。私も付いて行かせてくれ」

慧音さんが慌てて代金を支払い、後ろに続いてくる。

正面の巫女（？）は片手をあげて挨拶してきた。

「あら、慧音じゃない。久しぶりね」

「久しぶりだね、霊夢。翼に何用かな？」

齡は俺と同じくらいか。
艶やかな黒髪を風に靡かせる紅白の巫女は、酒樽の間に寄りかかって俺達を笑顔で見ている。

……笑った感じが紫や文のそれに似ていると思ったのは気のせいか？

「あなた、名前は？」

「霧崎翼だ。この里で配達屋をやらせてもらうことになった外来人だよ」

「私は博麗霊夢、博麗神社の巫女よ。呼ぶ時は霊夢で構わないわ」

彼女の表情は変わらない。

言うなれば、裏がありそうな微笑だ。

そして慧音さんは、探るような顔で霊夢を見ている。

「……霊夢、悪いが俺は今から閻魔様を探しに行かなきゃならないんだ。話はまた今度にしてくれ」

別に急ぎの用事はないが、これをだしにでもしてここを離れた方がいい。

俺は割と勘が良い方だと自負している。

その勘が、これ以上この場にいると厄介事を背負いかねないと告げているのだ。

左足の爪先を僅かに動かした時、霊夢は周囲の人間に伝えようとするかのようなでかい声でこう言った。

「配達屋さん、今日中にこの酒樽を運んで欲しいのだけど、頼めるかしら？」

爪先を左に動かしたまま、足が止まる。

……してやられた。

こんなことを言われては逃げられない。

曲がりなりにもこれは俺の初仕事だ。

ここで逃げれば、俺の信用は早くも失墜するだろう。

狭い里なら、配達屋は初仕事すら突っぱねるような怠け者だという噂はあつという間に広まるはずだ。

「あの〜、慧音さん、こういった急な依頼はアリなんですか？」

最後の望みを慧音さんに託したが、彼女は気の毒そうに首を縦に振った。

「正当な理由を私に伝えてくれれば、ね……」

彼女が溜め息をついたのはその理由を知っているからだろう。

それを聞いて、賢しい巫女は満面の笑みを湛え、右手の甲でこつこつと樽を叩いた。

「今日は宴会だっていうのに、お酒が切れちゃったのよねー。運んでくれないと宴会が中止になっちゃうわー」

運ぶしかない。

この、バカでかい酒樽を俺一人で……。

しかし、俺の考えはまだ甘かった。

霊夢が近くにいた酒屋の店主さんに、お金を見せながらこう呼びかけたのだ。

「ねえねえ、あともう一つ樽を追加してくれる？天秤棒も持ってきてね」

「あいよ、随分羽振りがいいねえ嬢ちゃん。おい！もう一つ4斗樽を追加だ！」

恰幅の良い店主さんが野太い声で奥に呼び掛けると、言うが早いか俺と同じ年くらいの男二人が酒樽を持ってきた。

大の男が二人がかりで運ぶような物を、俺は二つ運ばなきゃならないのか……！

絶句している俺に、酒屋の店主が更なる追い打ちをかけた。

「しかし配達屋の坊主は頼りになるなあ。ここから神社までの距離も、妖怪の出る獣道もものともしないってか。お前さんのお陰で商売繁盛間違いなしだな！うはははははは！」

笑い事じゃねえよ！

俺死ぬかもしれねえぞ！？

「じゃ、お願いね。これを担いで飛べるかしら？」

霊夢がウインクしながら樽を擦る。

軽く言ってくれるなよこのヤロー。

そして慧音さんは気の毒そうに、店主は期待を込めてこちらを見ていた。

ああ、分かったよ、担いで飛べばいいんだろ！？
やってやるうじゃねえか！

半ばやけくそで、天秤棒の中心を首の後ろにかけて両手で持ち、目を閉じ神力を全身に漲らせる。

体の火照りが出てきたところで目を見開き、ジャンプして背の翼を思いつきり羽ばたかせる！

「うおらあああぁー！！」

踏ん張る時に声が出てしまったのはご愛嬌として……上手くいった。
滅茶苦茶肩が痛いけど、なんとか飛べている。

下では三人を含め、通りの人たちが拍手喝采を送ってくれていた。
……駄目だ、気を張っていないと樽を落としそうだ。

「霊夢！どっちへ飛べばいい！」

口を開けてこちらを見ている霊夢に向かって大声で呼び掛けた。
すると彼女は軽やかに飛び立ち、すれ違いざまに

「こつちに真つ直ぐよ」
と言いきり残し飛んで行った。

俺は樽が落ちないように気を付けながら霊夢をゆっくりと追いかけるが、彼女はもう点になっている。

他人への気遣いってもんがねえのかあいつは……。

第十話 里へ（後書き）

汚い流石紅白汚い。

十話にしてようやく原作主人公登場。
全キャラ制覇はまだまだ遠いですねえ……。

第十一話 暗い世界の明るい妖

結局、見失った。

もう点すら解らない。

霊夢め、まさにやりたい放題だ。

勝手なイメージだが、神職に従事する者があんなのでいいのか？

やるせなくなってきたが、しかし愚痴を言っても仕方ない。

嘆息し、気持ちを切り替えるようにした。

そもそも飛べるようになったのが昨日なのに、ここの住民に並ぶというのが無理なことなのかもしれない。

それに元々は霊夢の身勝手から始まった、非公式の仕事だ。

そんな物にまで全力を尽くす必要もないし、義理もない。

肩の上の荷物を落とすわけにもいかないし、せいぜい自分のスピードで行かせてもらおう。

さて、霊夢は真っ直ぐと行っていたが、その指標が消えた今、進んでいる方向は合っているのか。

このまま直進して訳の解らない場所に辿り着いたなんて事になれば、ますます笑えない事態になる。

鳥居か何かが見えればありがたいのだが、どうも見つからない。

「まずいな……」

当然俺に土地勘はない。

周りを見ても、辺りは木、田んぼ、山。

不運なことに、耕作中の人間も見当たらない。

一旦里に引き返す？

いやいや、それはタイムロスが大きすぎる。
閻魔様を探す時間まで消えてしまいそうだ。
このまま行こう。

「……ん」

進行方向に、異様な物体を発見した。

黒の球体。

ふよふよと、シャボン玉みたいに浮かんでいる。
この例えだけならファンシーに聞こえるかもしれないが、見た目は
些か気味が悪い。

黒すぎて外からは内部の様子が全く窺い知れず、生きているらしく
あっちへフラフラこっちへフラフラ。
不気味だ。

あれは、関わるべきではない。
どうせ妖怪か何かだろう。

進行方向を若干変え、球体を迂回していく。
が。

「……ち」

気付かれた。

こちらへ向かってくる。

全速力で逃げたいが、四斗樽二つは流石に重い。

「お酒の臭いがする」

遠くから暢気な少女の声。

追われるのも、これのせいか……。

普通の人間なら樽を捨てて逃げ出すのだろう。

しかし、その心配がないことこそ俺の売りである筈。

食われるのも御免だが、最初から諦めるのも御免だ。

出来るだけ、慎重にスピードを上げる。

向かうべき方角はもう分からないが、今は目の前の球体を振り切る
ことが最優先だ、気にしてられるか。

「待つてよ、少しくらい飲ませてよ」

ゆっくりだが、球体との距離が開いていく。

声もギリギリ届いているレベルだ。

向こうが諦めるまで、このまま逃げ続けよう。

暫く追いかけてこは続いたが、数分後、向こうは遂に痺れを切らした。

「あ、ん、もういいや！遊びに行こつと」

黒い球体が自ら遠ざかっていく。

ようやく帰ってくれるらしい。

随分と遠ざかってしまったが、撒けたから良しだ。

一応警戒し、下の森に着陸しておく。

俺は肩を痛め付ける荷物をゆっくり土に下ろし、もたれかかった。

さて、どっちに向かっていたんだっけ。

もうさっぱりだ。

完全に迷った。

周囲は里の近くみたいな田んぼではなく、森。

中々の距離を逃げてきたらしい。

人どころか、生物の気配すらない。

この状況だと、もう妖怪でも何でもいいからいてくれた方がましだったのだが。

見回す。

やはり、何もいない。

居心地の悪い場所だ、と思う。

何が嫌なのかは上手く表現できないが、幻想郷の他の場所とはどうも異質だ。

空気も生暖かいし、木々も心なしか元気がない。

ここだけ幻想郷から切り離されたような、寂しい雰囲気。

背の翼が震え、違和感を覚える。

離れた方が、いいのだろうか。

時間も勿体無い。

ろくなことが起こらない内に、待避しよう。

適当に方角を決め、天秤棒を担ぎ直す。

顔を上げたときに見たものは、衝撃的だった。

それは、ここが異常であることを決定付ける物でもあった。

視界に移る景色が、石を投じた水面のように揺れたのだ。

「な………?」

声を失う。

無音が耳に痛い。

そして、静かになって、初めて気付かされた。

小さく、鼓動が聞こえる。

自分の心臓の拍動、ではない。

空気の胎動。

世界全体を微かに揺らす、小さくも大きな動き。

「なんだ、今の？」

音の方へと近づく。

そして景色のぶれの中心に手を伸ばすと、見えない壁に触れた。

生き物のように脈打っている。

何故だか生温かく、優しい感じがした。

触れているだけで、心地よい。

「……何だろ」

この向こうも、こちら側と変わらない森だ。

この透明な壁は何なのか、一体何のためにあるのか。続けて触ってみるが、見当もつかない。

壁の鼓動は俺に反応したのか、段々と、より力強く、早くなってきた。

温度も微かにだが上がってきている。

本当に、生きているみたいだ。

鼓動は空気を震わせ、大地を揺らす。

さっき感じた世界の胎動はこれで間違いなさそうだ。

気付くかどうか怪しいほどに小さな動きだが、幻想郷がこの動きに呼応しているらしい。

正体は解らないが、途方もなく大きな力が幻想郷に働いているようだ。

「……………熱っ」

数分はそうしていただろうか。

自分でも忙しい中何故こんなことに時間を費やしたのか不思議だったが、後悔はない。

そうしていたかったのだ。

そんな俺の意思に反して温度はどんどん上昇し、ついには手で触れられない程になった。

名残惜しいが、火傷する前にさっと手を引っ込める。

しかし……………いくら珍しいにしても、たかだか壁に何故こうも惹かれるのだろう。

そして胸に湧いてくる、包み込まれるような暖かさや安心感は何なのか。

不思議には思いつながら、そろそろ時間の浪費が本気で惜しいので壁に背を向けた。

俺が彼女の存在に気付いたのは、その時だ。

「そいつをいじくっちゃいけないよ」

「へ？」

「博麗の巫女が五月蠅いからさ。尤も、お前さんみたいな人間なら

大丈夫だろうかね」

俺に忠告を促したのは、金髪の少女だった。
金髪といえば紫が思い浮かぶが、目の前の彼女は雰囲気から全く違
う。

胡散臭いあいつのそれよりも、取っつきやすく気さくな笑みを浮か
べていた。

「俺が人間だって、分かるのか？」

「分かるさ。美味そうなもの」

「なっ!？」

「ははは、冗談さ、気にしないでくれ。とりあえずこっち来なよ」
彼女はからからと笑い、俺を手招きする。
どうも悪い奴ではなさそうだ。
警戒しながらも、大人しく近付いてみる。

「迷子なんだろう？神社まで送ってやるよ」

「……代価に俺を食ったりしないよな」

「するもんかい。あたしはこれでも優しいんだ」

「……そうかい、それじゃ頼むよ」

「あいさ、お任せあれ」

そう言うと、彼女は森の中をのんびり歩き出した。俺は酒樽を再度担ぎ直し、彼女の隣につけた。襲われないよう、一応気を張ってはおく。

「飛ばないのか？」

「ここから神社はそう遠くない。それに、飛んできるところを見つくと面倒なんでね」

「面倒？」

「あたしは地底の住人なのさ。八雲なんかに見つかれば厄介なことになる」

「地底……」

地の底。

土の中にも住んでいるのか？

妖怪だろうとは思っていたが、そんな変わったのもいるんだな……。

「そ、地底。そう言うお前さんはこくらじゃ見ない顔だけど、何処に住んでるんだい？」

「訳あって、冥界の白玉楼に居候させてもらってる。この辺に来たのは初めてだよ」

「冥界？冗談だろう？死人には見えないよ」

「ちゃんと生きてるから当たり前だ。幽霊だらけだけど、良い場所なんだぞ？」

「へえ……変わった奴もいたもんだ」

「おいおい、それをあんたが言うのか？」

「えっ……ふふ、確かに」

彼女は楽しそうに笑い、俺の背に視線を向けた。そこにはイカロスの翼が生えている。

「本当に変わった人間だ。名前は？」

「霧崎翼だ。あんたは？」

「あたしは土蜘蛛の妖、黒谷ヤマメ。よろしく、おかしな人間」

「ああ、よろしく」

今更だが、互いに軽く会釈する。

「土蜘蛛かぁ。見た目は人間そのものだけど……」

今までの経験からして、幻想郷では妖怪が妖怪らしい姿をすることはあまりないようだ。

ヤマメにも蜘蛛の要素は見当たらない。

しかし彼女は俺の言葉を聞いて、不敵に笑った。

「くくく、あたしをよく見てみなよ翼。本当に、あたしは人間そのものかい？」

「よく見ろつつつても……」

ヤマメには人間として別段おかしいところはない。強いて言えば、服装が随分と特徴的な所ぐらいだ。

長いスカートを何故か紐でグルグル巻きにしており、中程が膨らんでいる。

まるで中に何かを隠しているかのようだ……。

「……まつ、まさか……」

本当に、隠したい何かがある？

ヤマメは俺の心を読んだかのようにニタリと歯を見せて、低い声で呟いた。

「翼、蜘蛛の足が何本あるか、知ってる？」

「……っ!？」

蠢く蜘蛛の足。

それを想像して、思わず息を飲む。

そんな俺を見て、ヤマメは満足したらしい。

森に響き渡るような笑い声を上げた。

「あっはははは！良い反応するねえ、翼！ふふ、あははは！」

「く………笑いすぎだぞ、ヤマメ」

「はは、いや、ごめんごめん。久々に人を脅かしたのが愉快だね」

ヤマメは涙目を擦りながら俺の肩を叩いてくれる。
彼女には見事に一本取られてしまったようだ。

「しかし……妖怪と既に名乗られてるのに驚くだなんて、おかしな奴だねお前さんは」

「おかしなって酷い言い方だな。俺から見たらお前も十分おかしいぞ？行動がかなり妖怪らしくねえっつーか」

ありがたい事なのだが、考えてみればおかしな奴だ。

見ず知らずの人間に対して親切すぎる。

にとりには対価を支払ったし、藍さんは紫の命で俺を案内したまで。慧音さんは元人間だ。

対してヤマメは、何の理由もないのに俺に忠告し、道案内までしてくれている。

立派な妖怪でありながら、何故俺に良くしてくれるのか。分からない。

俺の質問に、ヤマメは少し口ごもった。
頬を掻きながら、はにかむように笑う。

「それは……気紛れ、かなあ？」

ヤマメは嘘をつくのが苦手なようだ。
誤魔化しているのがバレバレだった。
気恥ずかしそうな顔が結構可愛い。

そして反応から、隠している内容は、話すだけで気分が悪くなるよ
うなことではないらしい。

恥ずかしいだけかな？

「俺に聞いても仕方ねえだろ。本当のところ、どうなんだ？ ヤマメ……づっ！」

軽い拳骨が降ってきた。

ヤマメにとっては軽く小突いたレベルだろうが、それは妖怪の基準。俺は天秤棒を置き、頭を押さえて踞る羽目になった。

「初対面なのに、調子に乗るんじゃないよ。また今度気が向いたら話してあげよう」

「ぐう……それでも殴るこたあねえだろ」

「お前さんが無遠慮過ぎるから、無遠慮に返しただけさ」

「ごもつともだ。」

慧音さんの時と同じく、人の気持ちを斟酌できないのは俺の悪いところだろう。

「……悪かった」

「ん。謝ったならそれでいいさ。ほら、早くそれ担いで」

「あい、よっ！んじゃ、引き続き道案内頼むよ」

「分かってる。さ、行こうか」

ヤマメと二人、森の中をひたすら歩いていく。

進んでいくにつれて、野鳥やら虫やらがパラパラと見え始めた。

これが本来あるべき森の姿なのだが、だとすればあの場所は何だったのか。

「ヤマメ、結局あの壁は何だったんだ？」

注意してきた彼女なら、当然知っているだろう。

「あれは外と幻想郷を隔てる結界だよ。詳しい話は巫女に聞いてくれ」

巫女、霊夢のことか？

まだ分からねえが、他に該当者がいるのだろうか。だとしたら、なんであいつなんだろう。

まあ、目的地が霊夢の家なんだから、そこでまた聞けば良いか。

「じゃあさ、あの結界はなんで生きてるんだ？」

「生き……は？」

理解不能といった具合のヤマメ。

あれ？

何で俺が電波発信中みたいな目で見られてるんだ？

「あの近くでさ、ドクンツって鼓動が聞こえただろ？あれだよあれ」

「あれって言われても……あたしには、何も聞こえなかったよ？」

「ええ？確かに音は小さかったけど……本当に？」

空気の震えだつて感じたのに。
しかしヤマメの答えは変わらずだった。

「こんなところで嘘ついてどうすんだい。お前さんの気のせいか何かだと、あたしは思うがね」

「そう、かな」

確かに、あり得なくはねえが……。
釈然としない。

神妙に考え込んでいると、ヤマメに軽く背を叩かれてしまった。

「そう深く考えなさんな。気楽に生きた方が、色々楽だよ」

「……ふふっ、そうだな」

ヤマメの言う通り、あれしきの事を気にしていても仕方ねえな。
気楽に行こう。

俺達はくだらない雑談を交わしながら、森をずんずん進んでいく。
次第に視界は開け始め、木々や草花ばかりでなく先の様子も分かる
ようになってきた。

そして、ある程度の時が過ぎて。

「よっし。やっと道に出たね」

「ああ、あれか」

ようやく、広場のような場所に出た。

真ん中には大木がでんと構えている円形の敷地。

その先には、明らかに人為的に草木を伐採して作られた一本道があった。

「あの道を真っ直ぐ行きや博麗神社だ。ここからは一人で行けるだろつた」

「そうか、ありがとうヤマメ。助かったよ」

「いやいや、礼には及ばんよ。あたしが助けたくて助けたんだからさ」

ヤマメは照れながらも、快活に笑う。

「やっぱり、良い奴だ。」

「それじゃあまた。大っぴらにや言えないけど、この近くに地底への洞窟があるから、暇な時にでも来ておくれ」

「オーケー。またな、ヤマメ」

手を振り、森の奥へと去っていく陽気な土蜘蛛を見送る。

住み処の洞窟はあっちにあるようだ。

また今度行くことを心に決め、俺は天秤棒を担ぎ直し神社に続く一本道へ歩き出した。

第十一話 暗い世界の明るい妖（後書き）

ヤマメ回。

あのスカートの中には蜘蛛の足があるのだと信じてます。

さて、読んでいただきありがとうございました。

次回もよろしく願います！

第十二話 砕けし仮初めの決意（前書き）

またまた、長いです。

どうかゆるりとお読みください。

第十二話 砕けし仮初めの決意

「お疲れ様。それは大広間に運んでおいてね」

さつさと先に行ってしまった霊夢は、一本道の先、神社の鳥居の下で暢気に煎餅をかじっていた。人の気も知らないで……。

「ちよつとは休ませてくれよ、こっちは大変だったんだ。妖怪に絡まれるわ、道に迷うわ」

体力的にも精神的にもかなりしんどかったのに。

ヤマメがいなきやどうなっていたことやら。

仕事を頼むのはいいが、それならちゃんと先導をして欲しい。

ちよつとくらい罪悪感を覚えてくれても良さそうなものだが、霊夢は煎餅に伸ばす手を止めなかった。

「どちらも自業自得ね。道に迷ったのはあなたの知識不足、妖怪に絡まれたのはあなたの力量不足よ。私なら、里と神社を何回往復しても絡まれないでしょうね」

「……凄い自信だな」

「当たり前でしょ？私は博麗の巫女、妖怪退治の第一人者。妖怪に舐められて堪るもんですか」

彼女にとって、謙遜とは無縁なものらしい。図々しいまでの自信だ。

今の自分の言葉が、自分に相応しい表現だと本気で思っている。しかし照れも誤魔化しもなく、自慢気な風も出さずに平然とこんな台詞を吐ける奴は少ないだろう。

そして、そういう奴は大抵本物だ。

「なら、その知識を補完したいな。実は途中で結界を見付けたんだが、あれはどんなものなのか教えてくれないか？」

結界に詳しい巫女が霊夢なら、詳しい話を聞けるだろう。霊夢は何て事ないように話し始めた。

「博麗大結界。外の世界と幻想郷を隔てる結界よ。代々博麗の巫女が管理しているもので、今は当然私がやってるわ」

結界。

一定地域を守る為に囲われた聖域。妖怪や魔法が存在するこの世界は、外の世界からしたら聖域と呼べるかもしれない。

「物理的な干渉は殆ど効かないし、通り抜けは出来ないわ。あれを抜けるには、紫に頼むか、私に頼むかしないと無理ね」

「ふん、成程な。教えてくれてありがとう」

「あら、もっと詳しい話は聞かないのかしら？知っておいて損はないわよ？」

よく言うよ。

面倒だからってまだ配達屋でもない俺に100Kg超の荷物を押し

付けたくせに。

別に恨んではないが、流石に憎まれ口の一つも叩いてやりたくなる。

「知りてえけど、聞いても面倒だとか言っただけ教えてくれなさそうだからな」

「失礼ね、最低限やるべきことはきっちりやるわよ」

彼女は齧りかけの煎餅を一気に口に放り込み、大きな咳払いを一つした。

「あの結界は、正確に言えば二つの結界に分けられるの。一つは、さっきも言った博麗大結界。外の世界の常識と幻想郷の常識で隔てられた結界よ」

「常識で隔てる？」

「まあ、難しく考えなくてもいいわ。さっきも言った通り、この結界が幻想郷を外の世界から物理的に隔離しているの。そこまでは分かった？」

「やっぱり面倒臭がりだな、こいつは。自分で聞いておけとか言っただけに。」

「ああ。それで、もう一つの結界は何なんだ？」

「幻と実体の境界。外の世界に対して、幻想郷を幻の世界と位置付ける結果よ。こっちは紫の管理下ね」

「幻の世界？」

そう言われても、こうして幻想郷はしつかりと存在している。外の世界に対してつてのが重要なんだろうが、よく分からない。

「悪い、どういう意味なんだそれは？」

「つまり、外の世界で幻となったものが、この幻想郷に流れ込むようにしてるのよ。妖怪やら魔法やらが存在できるのはこの結界の効力ね」

幻となる、つまりは忘れ去られるってことか。

妖夢がこの世界について説明してくれたときも、同じようなことを言っていた。

出石小刀やブリューナクが存在しているのもそのせいかもしれない。神話や伝説も、年月が経つにつれて忘れられていくだろう。そしてやがては幻となり、この幻想郷に流れ着く。

一応、話の辻褄は合っている。

「その現象は頻繁に起こるようなものなのか？」

結構気になったのだが、残念ながら霊夢の反応は両手を広げるだけだった。

「さあ？出てくる場所は様々だし、全部を把握するのは無理よ。紫ならやりかねないけど、あいつに聞いても仕方ないでしょ？」

「そうだな、適当に誤魔化しそうだ……。あれ？俺が紫と知り合いだって知ってるのか？」

俺、まだそんなこと言ってないよな？

「新聞に書いてたわよ。自分の記事なのに読んでないの？」

霊夢は何でもないうちに脇から新聞を取り出した。

何枚も渡されたようで、境内のそこら中に散らかっていた。

文、これじゃ紙が勿体無いだけじゃねえか……？

「最後に言っておきたいことがあるんだけど、いいかしら？」

新聞紙が風に飛ばされていく様子を眺めていると、霊夢が肩を叩いてきた。

「二つの結界があるからこそ、この世界は成り立っている。ないとは思うけど、結界をいじくるような真似は絶対にしないで。もしそんなことをしたら、私は博麗の巫女としてあなたを倒す。良いわね？」

脅しじゃない。

彼女の目は厳しく、燃えていた。

適当だとか、面倒臭がりだとか思っていたが、彼女の言葉は本当だったようだ。

最低限のやるべきことは、きっちりやるらしい。

尤も、俺が博麗の巫女としての彼女のお世話になることはないだろうが。

「そんなことは、俺にとっても百害あって一利無しだよ。安心してくれ」

俺の返答を聞いて、霊夢はさつと目から敵しさを取り除いた。紫には敵わないだろうが、器用な奴だ。

「ええ、そうね。それじゃあ家の縁側に行って萃香を呼んできて」

「西瓜？果物を呼ぶってどういう」

「あー、違う違う。伊吹萃香。長い角を生やした小さい鬼よ」

鬼、か。

やっぱ強面なんだろうか。

でも、妖怪が怖いものっていう概念が既に崩壊してるし、会ってみないと分からねえな。

「了解。ついでに少し休んでいてもいいか？へとへとなんだ」

あれだけでかい荷物を運んだんだ、ちょっとくらいは構わねえだろ。

「先客がいると思うけど、好きにしなさい。賽銭箱にお金を入れて、そのまま左側へ向かうと縁側よ」

ごく微量の嘘が含まれているが、気にしないことにする。

「はいはい。それじゃ、ゆっくりさせてもらっぞ」

ゆっくりといっても閻魔様への手紙のこともあるし、あんまりのんびりは出来ねえんだがな。

しかし今からまた飛ぶのもきついから、精々十分くらいか？

霊夢の視線と賽銭箱を完膚無きまでにスルーし、左へ向かう。そこに広がっていたのは、何とも微笑ましい光景だった。

「よう、翼。あれから随分とえらい目にあったらしいな」

縁側に腰掛け、新聞片手に陽気に笑っているのは他ならぬ魔理沙だ。それではその魔理沙に膝枕をしてもらって、可愛らしい寝息を立てている子が件の伊吹萃香だろうか？

「まあな。ところでその子が萃香か？」

長く捻れた二本の角。

大きな赤いリボンを結んだ淡い栗色の長髪を、かなり下の方、腰の辺りで束ねている。

なにやら鎖やら分銅やらを付けているのは何故だろうか？

熟睡している彼女の頭を撫でながら、魔理沙が再度笑う。

「その子、なあ。これでもお前なんか及びもつかない程の長寿なんだぜ？」

……全つ然見えねえ。

見た目だけなら小学校高学年程度、角が無ければ魔理沙の妹に見えなくもない。

人と妖怪は見かけによらないってことか。

「それじゃあ魔理沙、萃香さんを起こしてくんねえかな？霊夢が呼んでるんだ」

「オーケー、萃香起きろ。霊夢が呼んでるってよ」

彼女が萃香のおでこをぺしぺしと叩くと、むず痒そうな声を出しながらお腹の方へとすり寄る。
その様は鬼というより小動物のようだ。

「む〜……う〜……」

「ふう、一度寝たらなかなか起きないんだよな……おい、起きな萃香」

「むづ……なに……?」

トロンとした目を擦りながら、萃香はようやく魔理沙に答えた。

「霊夢が呼んでるんだと。早く行ってやれ」

「れーむ……ん。分かったよ」

彼女は首をふるふると振り仕上げに腰の瓢箪に口を付けた。
水でも入ってるのだろう。

「ところで魔理沙、一つ聞きたい事があるんだけど」

「何だ?」

「こいつ誰?魔理沙の知り合い?」

彼女の人差し指は俺を指している。

しかし別に構わねえが、初対面の人にこいつって結構遠慮無しだな。

今思えば、そんな堅苦しくない雰囲気の間人が、この世界には多い気がする。

その分気さくで接しやすいというのは有難いが。

「ああ、そいつは霧崎翼。昨日こっちに來たばかりの外来人らしいぜ」

「ふうん。私は伊吹萃香、種族は見ての通り鬼だよ。これからよろしくね、翼」

萃香は軽くジャンプして俺の前に着地すると、右手を差し出してきた。

手を取り握手を交わすと、今度は左手で紫色の瓢箪を突き出してこつと言った。

「ささ、友の契りを交わそう。ぐいっと一杯、景気よくどうぞ！」

ふわりと漂う独特の臭い。

萃香自身からも仄かに臭ってくるこれは……。

「ぐいっと、て……これってもしかして酒か？」

「そうだよ。私の宝物、無限にお酒が湧く伊吹瓢。どれだけ呑んでも大丈夫だから、遠慮なくいつちやって！」

遠慮なくつて、俺未成年なんだが。

法律なんか無い世界でも、何か気になる。

そして何より、俺は遺伝的な問題で、長い間嗅いでいるだけで気分が悪くなるほどに酒が苦手なのだ。

しかし萃香の大きくくりくりした目から放たれる期待の眼差しを裏切るのは、かなり心苦しい。それに付き合い上、ここで断ることは得策じゃない。

「ここは、ここは……。」

男を、見せる！

「いきますー！」

ぐいっと瓢箪を傾け、イツキ飲み/body勢を取る。

大きく喉を鳴らすこと、三回。

「……ぶはあ！」

頭がくらくらする……。

気持ち悪っ……。

ちょっとフラついたが気合いで何とか持ちこたえた。萃香がけらけらと笑いながら背中をバシバシ叩く。止めて、出ちまっから止めて……。

「いやあ、よく頑張った！翼、下戸なんでしょ？」

無言で頷く。

今は喋ることすらままならねえ……。

「やっぱり、呑んだ後の反応で分かったよ。今度からはなるべく控えるよ、なるべく、ね。あはははー！」

出来れば、一生勘弁してくれ。

とりあえず横になりたいので縁側を指差すと、萃香は俺を軽々と抱えて横に寝かせてくれた。

「待ってる、水汲んできてやるよ」

魔理沙らしき気配がだんだん遠ざかっていく。

ああ、俺って、今日すごい頑張ってるなあ。

とりあえず、責務は果たさなきゃ……。

「萃香……霊夢が、呼んでるから、鳥居まで」

「うん、それじゃゆっくりしてなよ。吐きそうだったらその桶にね」

麗らかな日差しの中、ぐらぐらする頭を抱えながら、とてとて走り去る萃香を横目で確認する。

「ちつくしよ……何やってんだ俺は……」

このままでは、手紙を渡せないまま帰る羽目になるんじゃないか？ その理由が酒を飲んで潰れたからなんて、ますます笑えねえ。

下戸は訓練しても治らないらしいが、アルミ缶一本程度の酒でこれはちよつと酷いよな……。

家族揃って酒が飲めないから、親戚が集まる時なんかは苦勞していた。

今年の一月、お袋と洗面所で鉢合わせして苦笑いしたことを覚えている。

親父は酒豪の叔父さんに潰されて居間でダウンしていたな……。その後一家でリバーズして、酒はもうこりこりだと愚痴ったっけ。

尤も、もう会うことは無いだろう。
彼らが今どうしているのかすら、俺には窺い知れない。

「皆……今頃」

どうしているんだろうか。

彼らだけじゃない、俺に関わっていた全ての人々。

いつも傍にあった何でもないことが一番大切なんだ、なんて大層なことは言わないが、それでも少し気になる。

慧音さんの家ではあんなことを言ったが、やっぱり簡単には忘れられない。

親父はちゃんと会社に、お袋はパートに行ってるのだろうか。

友達連中は、いつも通り下らない話で笑い合っているのだろうか。
部活仲間、サボらずちゃんと練習しているのだろうか。

皆、俺が居なくなったこと、どう思ってるのかな……。

「翼、水、持ってきてやったぜ」

魔理沙が湯飲み一杯の水を持ってきた。

寝転がりながら受け取って一気に飲み干し、口をぬぐう。

「どうだ、落ち着いたか？」

「ああ、少し楽になったよ。ありがとう」

「そりゃよかった。険しい顔してたから、悪化したかと思ったんだが」

「……気のせいだ」

辛気臭いことを考えるのは止めよう。

考えてどうにかなるものでもないし、周りに余計な心配をかける。

今はこの酔いをさっさと覚まして、閻魔様を探しに行かなきゃあな

……。

「……なあ魔理沙、閻魔様ってどんな人だ……？」

彼女は明後日の方向を向きながら頬を掻いた。

どうも閻魔様は嫌われ者らしい。

「どんな、なあ……。一言で表すなら、面倒臭い奴だな」

「そーそー、口うるさいんだよねえ。私もお酒を控えるようになって
会うたびに注意されるんだ」

四斗樽を二つ吊り下げた天秤棒を片手に持ち、萃香がうんうんと頷く。

……ん？

この光景、そこはかたく違和感があるんだが？

「す、萃香、お前」

「何？」

「いや、何って……。その樽、中身入ってるよな？」

聞くと、彼女は顔の前で左手をパタパタと振った。

「あはは、いくら私でも宴会前にこれを飲み干すような真似はしないよ」

「飲み干すってお前一人でか!？」

酒豪なんてレベルじゃねえだろそれ!

ポンプかお前は!？

「流石にそれは言い過ぎだぜ。ぶっ倒れるまで呑んでも、一気ならいいとこ半斗だな」

うんうん、冗談だよな。

さらっと言うから一瞬信じちゃったよ。

えーっと、半斗ってことは五升……9リットル!？
水でもそんなに飲めんだろ普通!？

「いやいや、前の宴会なら六升は呑んだね。鬼を舐めちゃあいけないよ」

「いや、酒量云々よりそれ以前に、どうやったらそんなにそ重たいもん片手で持ち上げられんだ」

見た目に囚われてはいけないと分かっている。
だがどう考えても、俺より小さくて細い女の子が、100kg超の荷物を軽々と持ち上げているのはおかしい。

「そりゃあ私は鬼だからねえ。このくらいは朝飯前、もとい晩酌前だよ」

彼女はどかりと樽を置き、左手でどんと胸を叩いてからからと笑った。

晩酌前って。

「鬼って、凄いな。俺よりちっちゃいのに」

「ぐ……ち、ちっちゃいは余計だよ」

「おっと、すまん。悪気はない」

彼女は背丈のことを気にしているらしい。

そして萃香が少し俯いた時、魔理沙の目が怪しい光を帯びた、ように見えた。

「確かに小さいな。私もあまり高くはないが、萃香は子供並だ」

「う……五月蠅いよ」

「体の凹凸も無いしなあ。同じ鬼でも勇義とは大違いだぜ」

「ぐ……」

「もしかして威厳が足りないのも見た目のせいじゃないのか？鬼と言えは誰もが怖れる種族なのに、お前を警戒してる奴等なんて山の連中くらいだろ」

「……言ってくれるねえ」

あ、何かが切れた。

萃香の額に青筋が浮いている。

それを見て魔理沙は、しめたと言わんばかりに口元を緩めていた。

「魔理沙。鬼に喧嘩を売るなんて、いい度胸してるじゃないか」

「いや、最近は平和だっただろ？だから本気の鬼と戦うくらいの刺激があってもいいかな、と思ってるな」

「刺激的すぎて弾け飛んでもしらないよ？それじゃ、神社の裏手で待ってるからね」

言いが早いか、萃香は霧になって消えていった。

「魔理沙……」

少し呆れ気味に喧嘩の発端を見ると、実に爽やかな笑顔で答えられた。

「そういう訳だ。翼、悪いが一人で横になっててくれよ」

「ああ、気を付けて……」

うおっ、また盛り返してきた。

あんまり喋らない方が良さらしい……。

颯爽と筭に跨って空へと消えていく魔理沙を見送って、水をもう一度汲もつとふらふらよるめきながら立ち上がる。

だが、その腕を誰かが掴んで引き倒した。

「ふらふらじゃないの、おとなしくそこで寝てなさい。水くらいなら私が汲んできてあげるから」

焦点の合わない目を懸命に動かして捉えたのは、腰に手を当てている黒髪の紅白少女。

「悪いな、霊夢」

「いいのいいの、私も多少無茶言っちゃったからこれでおあいこよ。借りにしてくれるなら喜んで頂くけど?」

言葉とは裏腹に、表情は打算的な笑みでは無かった。しかし先程のやり取りを思い出すと、笑えない冗談ではある。

「いや、おあいこにしておくよ」

「それでよし。おとなしくそこで待ってなさい」

巫女が視界から消え、また一人になる。

一人は嫌いじゃねえが、今だと色々考えちまいそうだな……。

「あんたもさっさと帰りなさい。こんな状態だとろくに話も出来ないでしょうしね」

「そうですか。ですが、どうしても彼には言っておきたいことがあるのです。聞かせるだけでもいいませんか?」

誰だ、この声は?

聞きなれないきびきびとした声。

寝返りを打って確認するとそこにはやはり見知らぬ人が立っていた。大きな蔽めしい帽子を被った、緑髪の女性。蔽めしい帽子に、緑の髪……？

「あの、もしかして、閻魔様ですか？」

失礼かもしれないが結構苦しいので、寝転がったまま聞いてみる。彼女は俺の問いにゆっくりと頷き、帽子をとった。

「はい。幻想郷の担当をしている四季映姫・ヤマザナドゥと申します。あなたが西行寺の使いで間違いありませんね？」

「はい、この手紙を渡してくれと」

閻魔様とあつては失礼な真似はできない。

慌てて居住まいを直し、きちんと正座をしてから懐に入れてある手紙を渡す。

ぐらぐらする頭は左手で支える。

彼女は署名を一瞥すると、それを胸のポケットにしまい込んだ。

「ふむ、確かに受け取りました。さて、ここからが本題ですね。霊夢、少しの間離れていてもらえますか？」

閻魔様の頼みに対して、霊夢は唸るような声を出してから答えた。

「構わないけど、具合悪いんだからあんまり長い間喋らないようにね。悪化して私が一晚介抱する羽目になるなんてのは御免だから」

「了解しました。そうそう、貴女へのお話もありますので逃げない

「よし」

振り返った霊夢の顔には微妙な違和感があった。
どうやら凶星らしい。

「あら、私がそんなことするはず無いじゃない。心外ね」

「それは失礼しました。この間来た時の二の舞になることを恐れていたのですが、杞憂でしたか」

「ぐっ……。出来るだけ早くしなさいよ、宴会の準備だってあるんだから」

霊夢はそれだけ言うと、さっさと奥へ引っこんでいった。

「閻魔様、皆、話を聞いてくれているのでしょうか？あの感じだと聞き流しているとしたか思えないのですが」

善意からの行動なのに、それだと彼女が不憫だ。
しかし閻魔様はにこりと笑って俺の横に腰掛けた。

「ええ、大体の人はなんとなく聞いているでしょうね。しかし、それでもいいのです」

「え？いいんですか？」

「はい、なんとなくでも自分の行動を省みて、少しでも変えてみようつという姿勢を持つことが肝要なのです。霊夢だって嫌な顔はしていても、話せば少しは反省するものですよ」

「……そう、なんですか」

まずい、どんどん酷くなってきた……。

堪らず手で目を覆うと、彼女が申し訳なさそうにこう言った。

「ああ、あなたは寝たままで構いませんよ。気がつかずにすみませ
ん」

「……有難うございます。お言葉に甘えさせていただきます」

半ば倒れるように横になる。

我ながら無様だなあ……。

一応桶をこちらに引きよせておく。

「ふむ、大分悪そうですね。では、至極手短に話させていただきます
す」

彼女はコホンと一つ咳払いをして、静かに、重みのある声で話し始
めた。

「ここに来る前、里の守護者に貴方について概略を聞いたのですが、
貴方は外来人だそうですね」

黙って頷く。

本格的に吐きそうだ。

「そこで貴方はまだ幻想郷に来て間もないというのに、もう外の世
界に未練が無く、過去を忘れて生きようとしていると聞きました。
本当ですか？」

少々躊躇したが、これにも頷く。
そうしなければつらすぎる。

「……そうですか。しかしそれは、貴方が今まで出会った人、全員
に対する一種の裏切りだということに気付いていますか？」

「裏切り……？」

「スキマ妖怪が貴方を連れて来たことは、どんな理由があろうと悪
です。それは疑いようがありません。ですが、それと貴方が過去を
忘れようとすることは関係ありません。それは貴方の罪です」

全くの道理だ。

それは俺自身の問題で、他人が関与することは無い。
しかし何故罪なのか？

「過去を捨てるという行為は、貴方が今まで受けて来た恩や親切、
愛情をそのまま切り捨てることに等しいです。今まで生きて来た時
間だけ、貴方は他人と関わってきたのですから」

閻魔様は表情を崩さない。

何処までも涼やかで、揺らぎの無い目で俺を見つめている。

「貴方を失って悲しんでいる人が、外の世界には必ずいます。彼ら
と過ごした大切な時間を、貴方は踏みにじるのですか？」

「……！」

横っ面を張られた気分だった。

目を覚ませと、拳でぶんなぐられた程の衝撃だった。

そうか。
その通りだ。

俺が今まで関わってきた人間が、果たして何人いただろう。
一人一人がどんな感情を抱いていたか、そこまでは分からないが、俺に対して好意的に接してくれた人は少なからずいた。
長い間一緒に生きてきた人もいたし、短い間だったけど俺に大きな影響を与えた人もいた。

俺が消えたことで、何人の人が影響を受けた？

しかもそれだけのことを起こしておきながら、俺は軽々しく考えて、あまつさえ忘れようとしていたのだ。
身勝手にも程がある。

「貴方は過去を、重荷を背負うべきなのです。忘れるのではなく刻みなさい。貴方が生きて来た時間の重みを噛み締め、頭に焼き付けるのです。最早恩に報いることは出来ないでしょうが、せめて忘れずに善行を積むことで償いなさい。そうすれば、貴方が地獄に落ちることは無いでしょう」

ああ。

俺は、馬鹿だ。

何が今を生きる、だ。

大切なものを失ったことから、目を背けたかっただけじゃねえか。

「貴方は本質的には真面目で、義理堅いはず。予定外の仕事なのに、お酒を運んだのも、自分の請け負った仕事で、雇い主である里の守護者に迷惑をかけたくなかったからでしょう？」

背中を向けながら、首肯。

この人は、何でもお見通しか。

「ならば、私の言ったことは分かかって頂けたはず。自分の弱さを誤魔化さず、真っ直ぐに見つめなさい。私から言うことは以上です」

後ろでござござと立ち上がる音がした。

せめて立ってお礼を言おうと思ったが、体と心が異常に重い。

一言一言が鉛となって腹の底に溜まってしまったようだ。

「そうそう、無理はいけません、今日は早めに帰ることを勧めますよ。では、私は霊夢と話してきますので、そこで休んでいて下さい」

足早に立ち去る閻魔様が襖を閉めた。

そこで俺は空気に堪え切れなくなり、重い溜め息を吐き出した。

地獄に行くことは無くなったかもしれないが、どれだけの幸せが逃げただろう。

暗澹としながら、俺は閻魔様が避けられる理由が少しだけ分かった気がしたのだった。

第十二話 砕けし仮初めの決意（後書き）

これで現代の世界に対して一応のけじめはつきましたかね。説教と言えはこの方と思ひ閻魔様に御越しいただきました。

さて、今度はポイントがついに百ポイントに達しそうです。

密かに目標にしていた数値にもう届くとは……本当にありがとうございます。ございます。

これからもポイントはもちろん、感想、批評、誤字報告など随時お待ちしております。

では、また三日後にお会いしましょう！

第十三話 行きは良い良い……

あの後暫くして帰って来ていた魔理沙に白玉楼へと戻る旨を伝え、飛び立ったのが午後7時。昼寝してしまったのだ。

もうすぐ幽々子さんや妖夢も来る宴会が始まるから泊まっていけと言われたが、極度の下戸が宴会に参加するなんて、只の自殺行為なので断った。

理由は不明だが、閻魔様も早めに帰れと言っていたしな。

付き合い悪いぜ翼あとか、今度は無理矢理飲ませないからさとか色々説得されたが、こればかりは勘弁して欲しい。

そんな訳で俺はスッキリした頭で方角を考えながら飛んでいた。現在は里へと続く獣道の上だ。

「宴会、ねえ」

付き合い上参加した方が良かったのかもしれないが、そんな気はまるで起こらなかった。

今夜は閻魔様に言われたことをしっかり反芻し、ゆっくりと考えに耽りたい。

そこまですそ真面目に捉える必要は無いと萃香と魔理沙は笑っていたが、俺にしてみれば一大事だ。

俺は此方の世界、幻想郷に来た時点で、外の世界で世話になった人達に重荷を背負わせた。

ならば俺も彼等を失った重荷を背負うべきであり、忘れるなど言語道断である。

一分も反論の隙が無い、完全な正論だ。

今後の身の振り方についても少し考える必要があるだろう。

しかしそうになると、一つ問題が発生する。

「一体、何をして償えば良いんだ……？」

善行を積み、と言われはしたが、具体的に何をすればいいやらさっぱりだ。

人に優しくするとか、困っている人を助けるとかで良いのか？

それとも自分を高めるため修行の旅に出るとか、山にこもるとかまですなきやならねえのか？

後者なら無理だ。

前者だと信じよう。

随分と簡単そうだが、それを意識し続けて継続することは難しい。人間は忘れやすいのだ。

文字通り心に刻むように意識していかなきゃあな。

思考が一段落した所で、辺りをもう一度見回す。

下にはまだ真つ暗な森が広がっている。

夜目が利く生物じゃないと動き回れなさそうだ。

こんな所で妖怪に襲われたら一堪りもないだろう。

配達中じゃなくても夜の森には近づくな、と回った店の先々で言われたのも頷ける。

向こうの方にぼつぼつと明かりが見えるのが恐らく里だろう。それ以外は嘘のように暗いのですぐに分かった。

人工的な光が満ちている世界に住んでいたから、この風景は新鮮だ。

里があつちで神社が後ろだから……こつちか。

方向をくるりと変え、速度を上げようとした、その時だ。

「いやあああー!!」

耳をつん裂くような叫び声が辺りに響いた。

驚いて前後、続いて左右を確認するが、やはり誰もいない。

残る可能性は、真下。

森の中からだ。

「おいおい……」

まさかとは思うが、万が一ということもある。

早鐘を打ち始めた左胸を右手で押さえ耳を澄ませる。

……微かだが、藪を掻き分ける音と共に、話し声があった。

音の出所は本当に真下のようだ。

何を話しているかまでは聞き取れないが、一つは声が怯えている。

「……マジかよ」

風が吹く。

同時に下の黒が揺れ、木々が騒めいた。

ここで何が起ころうと、この黒は覆い隠すだろう。声の様子からして、朝の光がここを照らすまで待っている余裕はない。

そして回りには当然、俺一人。

ここは神社からも里からも遠く、誰かを呼びに行けば手遅れになるかもしれない。助けられる可能性を持つのは、俺だけだ。

「……よし」

俺が行った所でどうにかできるか分からねえが、見殺しには出来ねえ。

それに俺が悲鳴の主を抱えて全速力で飛べば、逃げ切れる可能性もあるはずだ。

とりあえず、胸から飛び出しそんな心臓を多少なりとも落ち着かせるため深呼吸をする。

さらに念のため、神力を高めておく。

そしてたった一枚のスペルカードを右手に持って、森の中へと下りていった。

音を頼りに、木々の上から叫びの主を探す。

元々近かっただけに、発見に時間はかからなかった。

そこには森の中を一心不乱に走る二人の少女がいた。

一人は抜き身を引つ提げ、一人はその後ろで泣いている。

さっき聞こえたのは後ろの娘の声だろう。

着物は擦り切れ穴が空いており、髪はグシャグシャに乱れている。

刀を持った年上の方はかなり酷く、顔や腕、脚の到る所に傷があった。

二人共顔には恐怖の色が、額には汗が浮かんでいる。

「来ないで……。お願い、来ないで……」

「大丈夫、大丈夫だから。あたしが守ってあげるからね」

「お姉ちゃん……うっ、お姉ちゃん……!!」

彼女等の後ろからも音がしている。

距離はそう遠くない。

すぐにでも出ていかなきゃまずそつだ。

俺は二人の横に並ぶように飛びながら、右手を突き出した。

「刀、貸せ。俺が何とかするから」

突然の声に姉妹は驚いて飛び上がったが、幸いなことに敵だとは思われなかったようだ。

「え？な、何を」

「いいから早くしろ!!」

彼女達に負けない必死の形相で急かす。

俺に戦いの心得なんてものはまるで無いが、このままだと確実に追いつかれる。

何が追いかけてきているのかはさっぱり分からねえが間違いなく友好的な存在じゃねえ。

捕まれば、最悪の結果も考えられる。

そうして刀の柄を握った、直後。

「ほう、今度は貴様が相手してくれるのか？」

こちらのスピードを軽々と上回る速さで突っ込んできた何かに、本能的に刀を振った。

剣と剣がぶつかり合い、夜の森に金属音が響く。

空中で振った為に踏ん張ることが出来ず幾許か後ろに押され、ぶつかった姉妹が倒れ込んだ。

その前に仁王立ちし、姉妹を襲う何かを睨みつける。

そいつは俺の視線をまるで認識していないようで、宙にふわふわ浮かびながら薄い笑みを口元に張り付け、ぼんやりと月を見上げていた。

黒い服を着た小さな女の子で、金紗の髪が月明かりを浴びてぎらぎらと輝いている。

彼女はその姿に不釣り合いな、禍々しい漆黒の長剣を手に哄笑した。

「ふはは、ふあはははははは……！最高だ……！」

体が震えた。

もし襲われているのが一人なら、確実に抱えて逃げ出しているだろう。

自分から助けに来ておいて何だが、本当に怖い。

紫に脅かされた時にも等しく感じた明確な命の危機。

昨日まで感じる事が無かった、全身が委縮するような恐怖。

これが、妖怪なんだ。

彼女が小さい体から放つ威圧感に、俺は思わず後ろに一步下がった。

「助けて、お願い……！」

足音に混じって聞こえる震えた声。

見ると少し後ろ、姉妹が木に寄りかかって手を組んでいる。

この二人の命が、俺の双肩にかかっているのだ。

怖気づいて、られない。

再度深く深呼吸をし、しっかりと相手を見据えた。

「全てを、ばらばらに、ずたずたに、切り刻む。ふふふ、ははははは……」

落ち着いて聞けば、この声に俺は聞き覚えがある。

多分、昼間俺が担いでいた酒樽に寄って来た、黒い塊から聞こえてきた声だ。

しかし、こんな妖怪だったか？

昼間は酒を諦めて遊びに行くような妖怪だったのだが今のこいつにはそんな呑気な気配が全く無い。

人を殺すことが楽しいと言うほど、邪悪な存在じゃなかったはずだが……。

それともこれが、妖怪の本質なのか？

「ふふふふ、ははははは！」

狂ったような笑いを一段と大きくして、またも正面から突進してきた。

足が地につく度に土が抉れて、砂煙が上がる。

そのまま振りかぶって袈裟懸けに大きく斬り下ろされた剣を、刀で受け流した。

「つつ………！」

重い。

足を目一杯踏ん張っていなければ吹っ飛ばされたに違いない。

これが妖怪のなせる業か。

休んでいる暇はない。

剣の嵐が襲い来る。

戦いの経験などろくにない俺にとっては、一撃一撃が恐怖の対象だ。ただ避け、逃げ、回避するだけで精一杯だった。

このままでは、埒が明かない。

暴れ狂う斬撃の猛ラッシュに耐えかね、一旦空に逃げる。

しかしそうして宙に浮けば今度は黒い弾が列をなして妖怪の右手から放たれた。

闇の一斉掃射が俺の全身を撃ち抜こうと唸りを上げて迫る。

弾幕の隙間を探して避けるが、避わしている最中、剣を構えた妖怪が砲弾のように飛んできた。

回りは弾に囲まれている。

逃げられない。

俺に残された選択肢はそれを刀で受けるのみだった。

夜の森に剣の叫びが木霊する。

「ぐあつ……！」

勢いよく地面に墜落。

その俺を追って、邪剣を大地に突き刺す形で妖怪が落ちてくる。転がって回避したその場所には、着地と共にクレーターが出来上がった。

人間には規格外の力だ。

妖怪はその黒い大剣で俺を指し、笑った。

「ふはは、人間風情が中々頑張るではないか！もつと私を楽しませろ、さっさと立て！」

「言われるまでも、ねえ」

口は強気だが、体は言うことを聞かない。

墜落のダメージが効いている。

一応身体能力、強度も上がっているようだが、それでも痛いものは痛い。

それでも何とか立ち上がると、妖怪は口角を更に吊り上げた。

「良いな、実に良い！さあさあ、もう一度行くぞ！」

「くそ、化け物があ！」

悪態をつきながら、またがむしやらに剣閃を避けていく。焦りと恐怖を口で誤魔化しながら俺は必死に考えた。

この相手に正面から立ち向かっては駄目だ。

まず勝負にならない。
これ程までに強いのか、妖怪は。
どうすれば、どうすれば俺はこいつに勝てる……？

「隙だらけだ！」

「がっ………！」

身体を両断しようとする一閃。

何とか後ろに下がるが、無理矢理の回避ではどうにもならない。
ふらついた所に容赦なく面を割る追撃。

これも、避けられない。

仕方ない………！

「あああああ！」

全力で刀を邪剣に叩きつけた。

妖怪は全く動じず、その軌道に剣を合わせてくる。

鋭い金属音が響き、俺たちは剣越しに睨みあう形となった。

腰を入れての、鏢迫り合いだ。

今度は地面に足をついているため、両者共にしっかりと踏ん張りが利く。

こうなると、後は純粹な力比べ。

勿論体重をかけやすい背の高い俺の方が有利、のはずなのだが。

「ぬ………く………！」

結果は相手の優勢。

地面に罅が入るのではないか。

俺より二回りは小さい背丈なのに、信じられない怪力だ。
恐らく萃香と比べても遜色無いだろう。

「くふふ、ひはは……！」

力の均衡は起こらない。

虚ろで焦点が定まっていない目が、剥き出しにされた犬歯が、ゆっくり、ゆっくりと近づいてくる。

ギチギチと軋んだ音を立てながら、剣先が俺の首に伸びてくる。

「くあ……！つ……！」

全身全霊を刀に込めるが、止まらない。

蒸気のようにゆらゆらと黒煙を上げる剣が、眼と鼻の先にある。

……このままでは、首を引き斬られる。

しかし力を抜けば、剣はあっさりと刀を躲わして体を斬り裂くだろう。

小さな頭をフル回転させて打開策を考えるが、焦りと恐怖が満ちる中で思い浮かぶ筈もない。

俺の命が潰えるまで、あと数cm程度の時だった。

「本当に馬鹿ね、隙だらけなのよ」

いきなり爆音が響き、力が逸れる。

全く予期していなかった横槍に対応できず、俺は強く後ろに吹っ飛ばされた。

「がつ……！あ……！」

そのまま背中から木に叩きつけられ、呼吸が止まるかと思うほどの衝撃に喘ぎが漏れた。

咳込みながら前を見ると、あの妖怪も同様に木の下でしゃがみ込んでいる。

そして俺達二人の間点には。

「御機嫌よう翼。お邪魔だったかしら？」

日傘をライフル銃のように肩にかけた、金髪の女が妖しく微笑んでいた。

第十三話 行きは良い良い……（後書き）

ようやくとのファーストバトル、如何でしたか？
ご意見いただけると嬉しいです。

これでやっと、タグに戦闘がつけられる……。

それではまた。

あの方が大活躍な次回にてお会いしましょう。

第十四話 闇は森の底に沈みて

「何で、げぼっ、お前が、ここに？」

俺達二人を軽々と吹き飛ばした張本人は、笑みを崩さずに傘で背後の妖怪を指した。

剣を支えにしてふらふらと立ち上がっているが、その口には未だに狂気の笑いがある。

「あなたが殺されそうだったからちょっと手伝いに来たのよ。宴席をこっそり抜け出してね」

まるでちょっとコンビニまで行ってくるような、軽いノリで言うてるのける。

そのまるで危機感の無い背中に、妖怪は文字通り飛びかかった。大上段に構えて、何の捻りも無く真っ向から面を割ろうとする一撃は、分かりやすい代わりに重く、強烈なものだった。

まともな人間なら千人が千人、反応も出来ずに死んでいただろう。しかし、彼女は違う。

「話の途中で邪魔をしないでくれるかしら？ルーミア」

自然体の状態から傘で、しかも片手で受けてみせた。

受けたまま言葉を発することが出来るのは、余裕の証だ。

そのまま細い腕で苦も無く押し返し、傘を下から上へ流れるように動かす。

すると、数本の青いレーザーのようなものが妖怪に向かって一直線

に放たれ、全弾が直撃。

小規模な爆発が起こり、リプレイのようにもう一度妖怪を木に叩きつけた。

生えそろうた葉が、強い衝撃にざわざわと揺れる。

誰がどう見たって、力の差は歴然だ。

紫は戦いの最中だというのに悠然と伸びをしている。

片や妖怪、ルーミアは血を吐いた口元を拭っていた。

しかし彼女は背骨が砕けそうなスピードでぶち当たったのに、それでもなお笑っている。

……正気の沙汰じゃねえ。

「あなたにその剣は荷が重いわ。さつさと手放さないと、もっと酷いことになるわよ。尤もその様子だと、私の忠告なんて聞こえて無さそうだけど」

首を捻りながら、大儀そうに紫が欠伸をした。

前半は全く分からないが、後半の彼女の推測は恐らく当たっている。普通なら痛みで立ち上がることも出来ないだろう、裂傷、火傷、打撲傷等見るに堪えない程に傷だらけなのに、ルーミアはまだ戦おうとしている。

体が思うように動かないらしく足元が覚束ないが、剣だけはしっかりと構えていた。

その姿は正しく幽鬼に憑かれた狂戦士だ。

紫が言った言葉と合わせて考えると、本当に剣に呪われているのかもしれない。

「く、はは……ありがたいな……また、強そうな奴が現れた……！」
自分の身体が傷付いていることにも気付いていないように、恍惚の表情を浮かべている。
今の彼女に話など、何の意味も持たないだろう。

「はあ……面倒ね。腕ごと切断するのは忍びないし、かといって今の彼女に、気絶レベルの攻撃が耐えきれるかしら」

紫は腕を組みながら宙に目を泳がせていたが、やがて結論が出たらしく前に向き直った。

そして愚直にも再度突撃を仕掛けるルーミアの剣を弾き返し、早口ではつきりところ唱えた。

「出てきなさい、八宝の一翼、皇子の刃よ」

途端に彼女の背後の空間が揺らぎ、形を変える。

そこに大きな穴が生じ、中から落ちてきた一本の太刀が地面に突き立った。

彼女はルーミアの攻撃を後ろに飛んで避け、神さびた光を湛えるその側の側に軽やかに着地した。

しかしそれを手に取る前に漆黒の風が彼女を捉えた。

体勢もバランスも何も考えず、只ひたすらに標的を追う獣が首を狙って突きを繰り返す。

しかし紫はそれすら完全に見切っていた。

元々力量差が違いすぎるのだ、ルーミアは何をしても無駄かもしれない。

彼女は首だけ動かして紙一重の距離で避け、すかさず傘で突き返し

た。
至近距離で放たれたそれは彼女自身が避けた物とは比較にならない程に速い。

ルーミアは無理矢理に体を捻ってそれを脇腹に掠らせるが、先程の無理な突きが祟ってバランスを崩した。
彼女がそのまま転ければ勝敗は決していたのだが、妖怪たる彼女の身体能力がそれを許さない。

彼女はそのまま片足からのバック宙で、高く飛び上がったのだ。
そのまま重力を無視してふわりと空中に浮かび、月を背に剣の切っ先を墨を流したような夜空に向ける。

「あ、ああ、ああああ………！」

多分、これは本能から出た声だろう。

表情こそ変わらないが、この声には狂った笑いの中には無い苦痛の色が混ざっていた。

瞬間、彼女の体から、剣から出ているものと非常に似通った黒煙が噴出する。

普通なら煙はそのまま風に浚われて消えるものだが、この黒煙は全て剣の切っ先に吸い込まれていく。

「な、何だ？何が起こってやがる………」

俺が困惑している側で、紫は苦々しげに齒噛みをしている。

「妖力を使い切ったわね。このまま生命力を喰らい尽くされたら…

……」

その言葉が示す通り、ルーミアは煙が吸い込まれるほどに、声が徐々に弱々しくなっていた。

一秒一秒が彼女を蝕んでいくように、ビクビクと体は痙攣し、腕は絶えず揺れている。

しかし彼女が持つ剣は持ち主とは裏腹に、一秒毎にその力を増しているように見えた。

持ち主の命を燃料にして稼動するように、黒い刃が紅の光を強めていく。

暗い闇の中に浮かぶ血のような紅は、毒々しい程鮮やかで戦慄を誘う。

「うっ、あああああ！！」

苦しいのか、それとも再び狂気に捉われたのか、ルーミアの絶叫に近い咆哮が轟いた。

それに合わせて剣が鼓動するように光り、破壊的な力が渦を巻く。

全身の毛が逆立つような感覚が襲ってくるが、紫の方は涼やかな顔で太刀を引き抜いていた。

そのまま構えればよかったのだが、彼女は何故か太刀の峰を肩に当てたまま動かない。

「暢気にしている場合か馬鹿！早く構えろよ！！」

誰がどう見たって、あれは危険な物のはずだ。

いくら紫でも、あの状態ならあるいは負けるかもしれない。

しかし彼女はにやりと笑って答えるのみだ。

腹立たしいほど、自信と確信に満ちた笑いで。

「大丈夫、私がやられるなんてことは有り得ないわ。だってね！」

彼女は突如太刀をルーミアに投擲し、一枚のスペルカードを取り出した。

投げられた武器はいつの間にか標的に到達していたが見切られられない。

弾かれ、もう勢いを失っていた。

「式神、八雲藍！」

宣言と共に紫の目の前の空間が裂け、中から九尾の式神が現れる。

彼女は瞬く間に黄色い閃光となって飛んで行き、重力に従って自由落下を始めた太刀を掬い上げ、ルーミアに迫った。

二人がぶつかり合った途端凄まじい剣戟の響きが一带を支配した。

最早弾幕に等しい斬撃の応酬は、人間には入り込めない領域だ。

機関銃のように途切れることが無い上に、一撃一撃が必殺の威力を持つ。

正気を失っているルーミアはさておき、俺は藍さんがその動きに対応できていることに驚いた。

決して舐めていた訳ではないが、彼女のあんな姿はまるで想像が出来なかったのだ。

「ふふふ、どう？ 私にはあんなに頼もしい式神がいるんだもの。負けるわけ無いでしょう？」

戦う従者を誇らしげに見守りながら、紫が笑う。

例えが平和的すぎるが、頑張る我が子を見守る母親に見えなくもない。

「確かにそうかもしれないねえが、早く援護に行ったらどうだ？二人ならもつと楽に勝てるだろ？」

「その必要は無いわ。もうじき終わるでしょ」

それが号令だったかのように、神聖なる太刀が呪詛の剣を弾き飛ばした。

呪いが解けたらしく空中から落下しそうになったルーミアを、藍さんが抱きかかえている。

紫は近くの地面に突き立っている魔剣を抜き放ち、しげしげと眺め始めた。

「黄金の柄に、ルーンが刻まれた漆黒の刃は異様な輝きを放つ……。どっちなのかしら、これ」

「お、おい……。お前、大丈夫なのか？」

拾ってしまったから言っても遅いが、紫が暴走するなんてことになったら手に負えない。

此処にいる者は間違いなく皆殺しだ。

しかし紫はいつもと変わらない様子で、にやにやと笑いながら答えた。

「え？ああ、大丈夫よ。ルーミアが狂気に捉われた原因は、この剣の呪詛を抑え込むだけの力が無かったから。心配してくれて嬉しいわ」

お前のことは心配してねえがな。
後ろの姉妹や藍さんの方だよ。

姉妹の方は木にもたれかかってびくりとも動かないが、藍さんは無傷だ。

あれだけの剣撃の応酬の中での完全勝利か。
やっぱり藍さんって、滅茶苦茶強いんだな……。

「紫さま、ルーミアはどうしますか？妖力の殆どを失い気絶していますが、生きてはいるようです」

「ここで死なれても寝覚めが悪いから、あなたの妖術で治療してあげなさい。その後はここに放置していればいいでしょう」

「了解しました。しかしその前に宴会場へ戻ってもいいでしょうか？いきなり消えたので橙が心配しているかもしれません」

「構わないわ。全く、貴女は少しあの子に甘すぎるわよ？」

「あはは、申し訳ありません。では、少しの間失礼します。それと、翼」

彼女は笑顔を消し、紫が開いた地面の穴を覗き込みんでいる。

その顔が昨日の印象からは想像できない程険しいものだったので、俺は自然と背筋を正してしまった。

「今回は紫さまが見ておられたからよかったが、そんな幸運が何度もあるとは限らない。人助けもいいが、もっと自重してくれ」

「……分かりました。気を付けます」

「分かってくれたならいい。では、また会おう」

藍さんはそのまま穴に飛び込み、姿を消した。

やっぱり他人の心配より先に、自分の心配をするべきだったよな。俺はまだまだ弱い。

今のままじゃいつ殺されてもおかしくないのかもしれない。強くなるなら、今紫が持っているあの剣を使えば簡単だろう。しかし……。

「その剣、どうするんだ？」

一応聞いてみる。

すると紫は、さも当然であるかのようにこう答えた。

「どうするも何も、あなたが使うに決まってるでしょう」

あー、やっぱりか。

驚きはしなかった。

この剣が呪われた剣であると分かった時点で、なんとなく予想はしていたから。

しかしだ。

こんな危なっかしい剣を使うわけにはいかない。

回りの無関係な人を傷付ける、最悪殺してしまうかもしれないし、自滅してしまう危険性もある。

「お断りだ。俺にこの剣は御せねえよ」

俺は至極真面目に答えたのだが、紫はきよとんとしてしまった。冗談でしょ？とでも言いたげな顔で。

「あなた、自分が幻想の武器を操れることくらい気付いてるでしょ？」

「それは分かってるよ。だがその剣が使えるかは分からねえだろ？」

再度真面目に返答。

しかし今度は溜め息と共に肩をすくめられた。呆れられたらしい。

「あなた、本当に頭固いわね。だからあなたならどんな道具だろうと使えるわけで……うん……ああ、面倒臭い」

説明する気が数秒で失せたようだ。

彼女は苛立った様子で木にもたれかかっている俺に歩みよる。

「な、何だよ？意見を变えるつもりはねえぞ？」

彼女は俺の言葉を無視し、無言で俺の右手を引つ掴んで、いとも簡単に立ち上がらせた。

そしてキラキラとした金色の目で瞳の奥を覗き込んでくる。

何もかもを見透かしてしまいそうな、無機質な光を宿した目だ。

それは美術品のように綺麗だが、代わりにとても冷たい。

体の一部というより、八雲紫という一個体を構成するパーツの一つといった感じだ。

こんな目をした奴を、俺は見たことがない。
何を見て、何を感じれば、こんな感情を抜き取った目になるんだ？

「ゆ、紫？」

恐い。

彼女の目には、心が何も見えない。

どんなに表情が乏しい人でも、少しは感情が顔に出る。

しかし今のこいつを見た後では、彼女は感情に関係無く顔を作っているようにさえ思えた。

無機質というか、冷酷というか、行動があまりに効率的で合理的だ。
自分の意思を含めず、結果だけを鑑みている。

俺はもしかして、とんでもない奴に目を付けられたんじゃないか？
…？

「ほら、何ともないじゃないの。自分の手を御覧なさいな」

顔が離れた。

口元には胡散臭い笑みが復活している。

はっとして自分の手を見ると、紫が両手で包んでいる右手には先の呪われた剣が握られていた。

出し抜かれたようだ。

「まったく、本当に面倒臭い奴ね……」

紫は何事かを呟きながら土いじりのように傘で地面に円を描き、穴

を開けた。

入れ、ということだろう。

「ありがとう。紫、最後にその二人を里まで送ってやってくれな
いか？」

「二人？ああ、そういうことね」

木に背を預けて気を失っている姉妹を一瞥して、紫は再度溜め息を吐いた。

その後何か言いたそうに口をひくつかせていたが、結局鼻を鳴らすだけにしたようだ。
何だったんだ？

「その剣の名は恐らくティルフィングよ。他は自分で調べることね」

「ああ、それじゃあな」

若干の違和感を覚えながらも、俺は彼女に従うことにした。

第十四話 闇は森の底に沈みて（後書き）

戦闘描写ってやっぱり難しいですね……。

さて、出石小刀は侍少女になっちゃいましたからやっとな神器二つ目。オーバースペックな武器は大好きです。

それでは、また三日後もよろしく願います。

第十五話 翡翠と水晶

私の能力はとにかく便利だ。

境界を操る能力、これはほとんど何でもありな反則的能力。

例えば今のように意識の境界を操れば、簡単に気絶状態から立ち直らせることが出来る。

この能力を扱えるのは、この八雲紫ただ一人。
そう考えると、少し誇らしく思えてくる。

「あなた達、大丈夫かしら？」

私は意識を取り戻した二人の少女に、最上級の笑顔で問いかけた。
ともかくにも、まずは安心させることだ。

ここで警戒されたら面倒極まりないことになる。

「あ……はい。貴女は？」

姉らしい少し背が高い方の少女が、不安げに問いを返した。

背が高いと言っても、私はおるか藍にも届かないだろう。

精々妖夢より高い程度だ。

長い翡翠色の髪はぼさぼさに乱れ、同色の大きな目の下には大きな傷が出来ている。

磨き上げられたようにきめ細かく白い肌も、傷が目立つ。

飾り気のない麻織物も、擦り切れただけだ。

そんな風体にも関わらず、存在感が異常に希薄だ。

何なのだろう、この異和感は？

どうも普通の人間を相手にしている気がしない。

「私は八雲紫、通りすがりの人よ。貴方達の名前は？」

聞き返すと何故か彼女等は返答に困り、二人で二言三言会話を交わした後、結局妹の方がおぼろげと口を開いた。

姉と本当に瓜二つだが、髪と目の色が違う。

こちらは水晶のように色素が薄い銀色だ。

よくよく見れば姉よりも若干頼りなさげな顔つきをしている。

「あの、私達には、名前が無いんです」

「名前が無い？」

人間なら、そんなことはあり得ない。

名前は生まれてすぐに貰うべきものであり、親を失っていたとしても必ず誰かが付ける。

その後の生活において、著しく不便だからだ。

つまり、見た目十代半ばの少女二人なら、名前が無いなんてことはまず起こらないのだ。

それがないとなると。

「失礼になるかもしれないことを、聞いてもいいかしら？」

「……どうぞ」

「あなた達、人間じゃないわね？」

妹の方はばつが悪そうに足元を見つめたまま動かなくなった。その様子を見た姉の方が助け船を出した。

「はい、その通りです」

「種族を聞かせてもらってもいいかしら」

妖怪か、魔法使いか。

幽霊か、はたまた神か。

何であろうと構わないが、把握はしておかなければならない。

可能性は限り無く低そうだが、もし彼女らが幻想郷に仇なす存在となつた場合、私は彼女らを始末しなければならぬ。

その為にも、情報は持つて置くべきだ。

「……すみません、それは話せないんです」

「理由は？」

「ある人から、自分のことについては他人に話すなと言われていまして……。話したら私たちの身が危ないので」

「ある人とは？」

「……すみません」

徹底した情報封鎖だ。

何のためにここまで秘匿するのやら。

しかし、身が危ない、か。

彼女等が言っていることが本当なら、その対象は限られてくる。

力が殆ど感じられないとはいえ、彼女等は人外。

この時点で、ある人が人間の可能性は除外していい。力の弱い下級妖怪や幽霊、妖精、一般的に知能が低い妖兽も除外だ。強大な力と聡明な頭脳を持ち、尚且つ支配することに躊躇いを感じない者。

上級の妖怪、神、亡霊、魔法使い、蓬莱人……。

何にせよ、真偽を確かめなければ考えても無駄か。

「あなたたちが話さないなら仕方ないわね。力づくで聞こうかしら」
傘を彼女等に向け、妖力を込めた。

やがてその先端部分に光が集まり、危うい均衡を保ち始める。

この力を解放すれば、光弾の嵐が姉妹を襲うことになるだろう。ただでさえ弱っている今この攻撃をまともに受けて、生き残れるかは疑問だ。

無論こんな状態で私相手に逃げ切れる可能性は零。

今の話がハツタリなら、そんな分の悪い賭けはしないだろう。

命乞いをするか、本当の事を話すか、又は嘘を重ねるか。

さあ、どんな反応を取る？

「くうっ……」

しかし彼女等は、何の行動もしなかった。

ただされるがまま、万策尽きたといった様子で目を閉じ、二人で抱き合い震えている。

どうも嘘をつく余裕もないようだ。

「冗談よ。そこまで私も非道じゃないわ」

私は背を向け、傘を地面に突き刺した。

勘に過ぎないが、多分本当の事を話したのだろう。

今までの話が全て本当なら彼女等に出来ることは何も無かった。

真実を話した後の嘘は騙せる可能性が薄いし、話せば口止めた奴に殺されてしまう。

しかし黙っていても、私に殺られるだけ。

八方塞がりな状況だった筈だ。

「よ、よかった……。折角二度も助かったのに、また駄目なのかと……」

「二度？前にも襲われたことがあるのかしら？」

「え？ええ。妖怪は恐ろしいものです」

姉はやんわりと微笑んでいたが、私は疑念が深まったことで内心渋い顔をしていた。

妖怪が恐ろしい？

てつきり下級妖怪だと思っていたが、そうではないのか。

否、妖怪であるかとかそれ以前に、人間以外の種族ならば妖怪という種族そのものに嫌悪感は抱かないものだ。

この二人、本当に何者なんだろうか。

今思えば反応が少し鈍かったのも気になる。

ただ聞いていなかったただけだと流す事も出来るが、とらえ方によっては慌てて取り繕ったようにも聞こえるような……。

「では、私達は帰ろうと思います。今夜は助けをいただいて、本当にありがとうございました」

「あつ、ちよつと……！」

私が考えている間に、姉妹は丁寧に辞儀をしていた。そして声をかける間もなく、森の奥へずんずん歩いて行ってしまった。

何処へ向かっているんだろう？

あちら側にあるのは神社と地底への入口だ。道を知らないのか？

それともあれが忌まわしい地底の住人だとも言うのか？

以前霊夢を間欠泉の件で地底に向かわせた時は見かけなかったが……。

「只今戻りました……紫さま？」

藍が帰ってきたようだ。

彼女は首を捻る私を見て同じく首を傾げている。

「……やっぱり貴女は甘いわね」

「え？あ、はい、申し訳ありません」

「いえ、いいのよ。どちらかと言うと私のミスだし」

「え？えー……？あの、紫さま、何の話をされておられるのですか？」

ここに藍を残しておけば、彼女の意見も聞けたのに。
何なんだ、あの二人は。
全く分らない。

種族は不明。

力は人外としては微弱なのに、誰かが困うほどの価値を持っている
ようだ。

住処も全く予想できない。

どうせ力は弱いんだから放っておいても大丈夫な気がしなくてもな
いが、何か彼女らには嫌な胸騒ぎを覚える。
転ばぬ先の杖、一応憶えておいた方がいいか。
用心するに越したことは無い。

出来れば詳しく調べておきたかったが、今はそれより優先すべきこ
とがある。

あの姉妹に構っている場合ではない。

とりあえずルーミアの事は藍に任せて、私は白玉楼に向かうとしよ
う。

「藍、その子は任せたわ。処置が終わり次第好きにしなさい」

「はい。承知しました」

言い残し、私は白玉楼の門へ続く穴を開き、そこに飛びこんだ。

第十五話 翡翠と水晶（後書き）

書き貯め分がこれで大体半分尽きた……。

三日って経つの早いですね。

出来ればこのペースで完結させたかったのですが、これからはおそらくもう少し間を開けるようになると思います。

五日毎、若しくは一週間ペースでしょうか…… 申し訳ありません。

書き貯め分が無くなるまでは、遅くても一週間以上は開けないようにします。

こんなだらしのない作者ですが、これからも東方翼閃光をどうぞ宜しくお願いいたします。

さて次話ですが、久々なあの子が登場です。

実は登場させた後すぐにフェードアウトさせてしまったので、忘れ去られてないか心配だったり……。

今回とは違い、まあまあのもりゅうみでお送りできると思いますので、また何日後かも是非読んでくださいね。

それでは、また次回！

第十六話 明かされる予定

中庭に着地した俺を出迎えたのは、つまらなさそうに月を見上げる閃珠だった。

玉砂利が響かせた音で気付いたようで、彼女はこちらにづかづかと歩み寄ってきた。

とりあえず右手に持っている邪剣を地面に置く。
持っているだけでも体が少し重いのだ。

「遅かったな、主」

無表情を保とうとしているみたいだが、明らかに不機嫌だ。

顔は動いていないが、右足は忙しくなく地面をなじり、腕組みまでしている。

表情を隠してる意味ねえじゃん。

閻魔様が言ってたのはこの事か。

「ああ、ただいま。なあ閃珠、なんでそんなに不機嫌なんだ？」

帰りは遅くなっただが、別段怒ることでもないだろ？

俺の返事を聞かずに踵を返す背に問うと、わざとらしいくらいに目を見開いて驚いてくれた。

見ている飽きねえ奴だな。

「な、何故分かった？よもや主は読心術の心得さえあるというのか……！」

「これが読心術なら誰もがエスパーだよ。で、なんでだ？俺が原因

なら謝るからさ、教えてくれ」

なるべく優しく聞いたつもりだったが、閃珠は気に食わなかったらしい。

そっぽを向き、さっきの無表情もどきに帰ってしまった。

「……御身の行動を省みるがよい」

どうやら原因は俺らしい。

心当たりを探してみるも、全く思いつかない。

そもそも出会ってから一日と経過していない相手に、故意に嫌われるような真似をする程、俺はねじまがった性格はしていない、はずだ。

俺、何かしたかなあ？

考え続ける俺に痺れを切らしたか、彼女は深々と溜息をついた。

「主よ、貴公に邪意の無いことは承知している。しかし、私は解せぬのだ。せめて行き先を伝えてくれれば後を追えたものを……」

「行き先？」

ああ、そうだ。

もしかして今日、閃珠がついて来なかったことについてか？

もしくは、ついて来れなかった？

そういえば今日、飛び立った直後に何か聞こえた気がしたが、思い返せば閃珠の声だった気がする。

「え〜っと、もしかして、置いて行ったことか？」

彼女は動かない。

次の言葉を探しあぐねていると、彼女は再度溜め息をついた。

「私は未だ自力で飛べぬ。しかし同行する手だてはあるのだ。其を話そうとしていたというに、貴公が話す間もなく去ってしまった故に……」

確かに、それは俺の落ち度だ。

閃珠が怒るのも無理はねえな。

「あー……、その、ごめんな。今度からは気を付けるよ。許してくれ」

気まずいとはいえ、我ながらはつきりしない言い方だと思ったので、その分しっかりと頭を下げて謝る。

閃珠は齒切れ悪くも頷いてくれた。

「……う、む。謝るほどのことではなかったのだが。私は従者として貴公の側に侍らねばならぬ故、それさえ御理解頂けたならばよい」
何でこいつは俺に仕えることに拘るのだろう。

いちいち何か言っても多分納得はしてくれないだろうから、何も言えないけど。

「ご理解致しましたよ。ところで閃珠、さっき言ってた方法ってのはどんなのなんだ？」

「うむ、それだがな、百聞は一見に如かず、実践した方が早いであろう。主よ、何が起ころうと混乱してはならぬぞ？」

人差し指を立て、悪戯っぽく笑う閃珠。
俺が頷くと彼女は瞑想するかのように目を瞑り、微動だにしなくな
った。
何をするつもりだろう？

「大広間」

不意に彼女が口にしたその瞬間、電化製品のコードが切れたような
音と共に、視界がブラックアウトした。
何が起こったのかを確認する間もなく、また同じ音がする。

すると俺は、白玉楼の大広間に立っていた。

「はああ!？」

俺、絶対中庭にいたはずだよな。
どうなってんだ？

周りを見回すが、間違いなく大広間だ。
疑う余地も無い。

どうなってんだ!？

ここで障子が開き、閃珠が顔を出した。
悪戯が成功した子供ののように、にこにこ笑っている。

「ふふ、魂消たであろう?これぞ我が能力、“居場所を操る程度の
能力”よ」

「居場所？」

「有り体に言えば、人や物の在処の瞬間的移動を可能とするのだ。能力の捕捉範囲は自らを含む手で触れることが可能な距離まで、移動先は既知の場所、或いは目視している範囲に限られるが、必要なのは神力と精神集中のみ。移動のみならず」

彼女の姿がテレビ画面のようにブレた。

見間違いかと思つて目を擦ると、もういない。

彼女の姿を確認しようとするが、その前に後ろから肩を叩かれた。

「出現場所を厳しく特定すれば戦闘にも応用できる」

彼女は固まっている俺を見て気分が良くなったのか、大層自慢気に両手を腰に当てた。

「ふふん、如何かな？なかなかのものであるう。この能力を応用して連続移動すれば、天駆ける主を追走するも容易い」

「あ、ああ」

まさか剣道着の女の子がテレポーターだったとは。

何でもありだなこの世界。

まあ、もともとワープをする性悪女もいたから、テレポーターがいともおかしくねえか。

いい加減俺も、頭おかしくなってきたなあ。

「行き先を教えてくださいればってのはそういうことか。すげえな、閃珠」

ほんの少し褒めただけなのに、閃珠はにわかに満面の笑顔を咲かせた。

無邪気で子供らしい、明るい笑顔だ。

「ふふ、そうであろう？主よ、もっと褒めてもよいのだぞ？」

「おお、すげえよ閃珠。お前は最高の奴だ」

そんな彼女が微笑ましかつたので頭を撫でてやると、くすぐったそうに目を細めた。

なんだか妹が出来たみたいだ。

外の世界では兄弟とかいなかったから、ちょっと嬉しいかもしれない。

小さい頃は兄弟や姉妹がいる友達が、無性に羨ましかったっけなあ。

感傷に浸っていると、背後から声が。

「あら、良い雰囲気じゃない。これはお邪魔だったかしら？」

「そう思うなら帰れ。思わずとも帰れ」

ついさっき凶刃から護ってもらったばかりなのに、こんな言葉が口をついて出たことに自分でも驚いた。

この分だと、俺は生涯、こいつに気を許すことはないだろう。
妖怪、八雲紫には。

「あら、ご挨拶ね。その可愛いお嬢さんには優しいくせに」

可愛い、と紫に指差された閃珠は、顔を赤くしながら名乗った。

「……出石閃珠だ」

「八雲紫よ。ゆかりんって呼んでちょうだい」

にこやかに手を振る紫。

似合わない。

いくら閃珠でも、馬鹿正直にそう呼ぶのは抵抗があるだろう。

「話はそれだけか？用がないなら帰ってくれよ」

しかし紫は、さっきの馬鹿みたいな顔を瞬時に消し、俺を見据えた。

「帰らないわ。大事なお話があつて来たんだもの」

戦いの最中すら聞けなかつた真面目な声だ。

こいつの思考を読むこと自体が無茶だが、そんなにも重要なことつて何かあつたか？

「あなたの能力についてきちんと話しておこうと思つてね。どうせ、まだ解つてないんでしょう？」

「“幻想の武器を操る程度の能力？”」

それ以外に思い付かない。

しかし紫は両手で×マークを作つた。

「ブー、はずれ。それは神器である出石小刀が能力強化の触媒になつてしまったから、オマケでついた能力よ。また次回の挑戦をお待ちしております」

「しねえよ、お手上げだ。ヒントもないのに解るかっての」

両手を上げて降参の意を示す。

だが紫の返答は答えではなかった。

「あら、ヒントならたくさんあったわよ？あなたが扉を蹴りだけで吹き飛ばしたこととかね」

全く解らない。

それだけで何のヒントになるんだ？

幾つかあるらしいが、そんな出来事あったか？

思い悩んでいると、また紫が×マークを作った。

「ブー、時間切れ。正解は“活動を活性化する程度の能力”よ」

「活動を、何だって？」

「活動の活性化。あなたはあらゆる運動、活動を活発に、強力にすることができると。例えば筋肉の収縮、神力の生成活動等ね」

成程。

扉が蹴りでぶっ飛んだのはそのせいだ。

「無意識下で発動してしまうこともあるけど……故意に使うには、活性化させたい活動が、活発になっている様を思い浮かべればいいの。例えば神力の生成を活発化させるなら、膨大な神力が体を駆け廻っていく様子を想像すればいい。簡単でしょう？」

紫は平然と話しているが、俺はこいつに対してうすら寒いものを感じた。

これは朝に妖夢に教えてもらった、神力の高め方に酷似している。ということは、妖夢は紫が教えたことを、そのまま俺に喋っただけということになる。

そして幽々子さんは紫の頼みで、俺をここに置いている。

つまり妖夢も、幽々子さんも、紫の協力者だ。

俺が住んでいるこの白玉楼の主、そしてその従者がこいつに従っている。

しかし紫が何をしようとしているかは分からず、俺は知らず知らずの内にこいつの思い通りに動いている。

「さて、話すことは話したから、私は帰るわ。御機嫌よう」

得体の知れない計画の真つただ中にいながら、真実を知らない。

あの二人が協力しているんだから、その計画自体は悪いことではないだろうが、こんな気持ちの悪い状況を維持したくはない。

このまま俺は紫の思惑に意図せずに引きずられ、駒として動くのか？都合よく動いて、知りもしない計画のために利用されるのか？

そんなのは御免だ。

例え命の恩人でも、卑怯なやり方はして欲しくない。

「閃珠、俺を東京という町に送ってくれ」

「は？」

だから、これは紫に白状させるためのハッタリだ。

閃珠も察してくれたらしく、黙って頷いてくれた。

名前だけで移動できるのかは定かではないが、元々帰るつもりなんてさらさらないから、それは問題ではない。

出来ようが出来まいが、要は紫が出来ると信じ込めばいい。

「あなた、今の自分がどんな姿をしているか分かってるの？翼を生やし、異能を携え、戻ったところで何が出来るのよ」

この奇襲は少しは効いたようだ。

笑顔の仮面は剥がれなかったが、いつもの余裕な対応ではなく好戦的な物言いだ。

らしくない対応だな。

涼しい顔をしているが、内心は焦っているのだろうか。

「知るかよ、ただ、戻ればお前は困る」

「……随分な物言いね」

紫は眉を顰め、親の仇を見るような目で俺を睨む。

その迫力は、さっきのルーミアがただの子供騙しに思えるほどだ。

プレッシャーで押し潰そうとするかのような、冷利で静かに殺気立った瞳。

何度見ても慣れない。

はつきり言って怖すぎる。

逃げたいし、目を逸らしたい。

それでも、このままは嫌だ。

何でもお前の思い通りになんか、なつてたまるか。

震える体を律し、息を吸い込み、言った。

「嫌なら話せ。俺を使って何をするつもりだ？」

俯く紫。

賢しい彼女のことだ、今でも頭の中はめまぐるしく回転しているの
だろう。

しかしまだ話すことを躊躇っている。

話しても話さなくても、全部台無しになるかのように。

今まで積み上げてきたものが崩れ去るかのように。

それでも、選択肢は一つしかない。

「……分かったわよ、ただし、計画から降りないように。そうなれば、私があるたを殺すわ」

散々懊悩した結果なのだろう、目が並々ならぬ気迫に満ちている。

しかし、これだけ強い脅し文句を吐いているのに、その言葉に敵意は感じられなかった。

どちらかというと、自らに言い聞かせているように感じた。

「断る、まずは話せ。乗るか降りるかは俺が決める」

従者曰く、紫の行動には、必ず意味がある。

それが正しいならば、紫にそんなことは出来ないだろう。

俺の存在がなければ、多分計画は破綻する。

断られたとしても、自分から説得の可能性を潰すなんて、馬鹿のやることだ。

説得出来ないにしても、俺を殺すことにメリットは無い。

ただの時間の無駄だ。

もちろん紫にも感情はあるはずだから、絶対の自信を持って言い切

ることは出来ない。

怒りに任せて俺を殺しにかかるかもしれないし、無理矢理服従させようとする可能性も十分にある。

これは、一種の賭けだ。

「……あなたを選んだのは失敗だったかしら」

賭けは俺の勝ちらしい。

紫は両手を上げ、首を振った。

そして、苦虫を噛み潰した様な顔で渋々話し始めた。

「あなたには地の底、地霊殿に行ってもらいたいの」

「地霊殿？」

ヤマメが言っていた地底のことだろうか。

「地底の怨霊の管理者が住んでいる場所よ。あなたには、その秘宝が封印されている場所へと行ってもらいたい。地底は、忌み嫌われた妖怪の巣窟。あなたが強くならなければ、とても入れない場所よ」

俺にスペルカードやイカロスの翼を渡したり、弾幕の出し方を教えたのはそのためか。

しかし、これだけの説明では駄目だ。

まだまだ疑問は山積している。

「幾つか質問がある」

紫は眉をひそめたが、結局黙って頷いた。

「まず一つ目、なぜ俺が地底に行かなきゃならねんだ？他の奴らが行く方が合理的だろ？」

「地上と地底の妖怪は互いに不可侵条約を結んでいるから、地上の妖怪は入れないのよ。人間にしても霊夢には別にやってもらうことがあるし、白黒の魔法使いは信用しきれない。律儀で裏切らない人間が行く必要があるのよ」

律儀な奴か。

褒められてるんだろうが、嬉しくはねえな。

「そりゃどうも……ってちょっと待て、霊夢も協力者なのか？」

「ええ、何か問題でも？」

「いや……」

あいつ、自分からすすんで人に手を貸すような奴に思えないんだがな。

霊夢にも利益があることなのか？

「二つ目、外の人間の中から、何故俺を選んだ？」

律儀で裏切らないなんて条件なら、他の人間も腐るほど該当する。今からでも鞍替えは出来るはずだ。

「重要なのは、あなたの能力よ。それがあから、この計画は成り立つの」

「何故必要とする？」

「あなたの能力なら、私が求める物から失われた、強大な力も取り戻せるから」

強大な力？

そんなものを得なくても、こいつは既に大妖怪の域に達している。何がしたいんだ？
別の目的があるんだ？

「三つ目、お前が求める物とは何だ？」

この質問をすると、紫は瞬く間に硬直した。

彼女は宙に浮かぶ言葉を探すように、視線をあちこちに彷徨わせてから、漸く口を開いた。

「……どうしても、言わないと駄目かしら」

「どうしても、だ」

強くキツパリと言う。

紫はまたも溜め息をつき、観念したように両手を上げた。

「はあ……。もう、分かったわよ。私が必要としている物の名前は、如意宝珠」

「こよいほづじゆ？」

「そう。何でも望むものを好きにだけ取り出すことが出来る、奇跡の宝よ」

何でも、望むものを？
馬鹿げてる。

そんなものが存在したら、その持ち主は世界を支配出来るほどの力を得られるだろう。

神器やら兵器やら金やら、何でも無尽蔵に取り出せるなんて恐ろしいの一言だ。

正直、嘘だと思いたい。

しかし紫の顔は本気だ。

「如意宝珠は遙か昔に幻想となって、この世界に出現したわ。当然、如意宝珠を巡って大規模な争いが起きた。私が皆を叩きのめして地底に封印するまで、その争いは続いたわね」

妖怪たちの繰り広げる大きな争い。

想像するだけでも身震いする。

「……その、如意宝珠は、今どうなってるんだ？」

「地底で成れの果てが保管されているわ。外界との結界の傍に封印、さらに宝珠の力を結界の維持のために使用しているから、もう願いを叶えることはできないわね」

「は……？」

願いを叶えられない？

それならもう、その如意宝珠には価値がないのでは？

「おいおい、ちょっと待てよ。お前、そんな成れの果てを手に入れ

てどうするつもりだ？」

「手に入れるんじゃないわよ。あくまであなたには如意宝珠が封印されている場所に行ってもらって、その力を活性化させてもらうだけ」

彼女は、微笑んだ。

それはとても優しく暖かい笑みで、いつもの胡散臭さが全て消え去っていた。

これまで見てきた姿が、嘘のように感じられる顔だ。

こいつ、こんな顔もできたんだな……。

「そうして、弱まっている幻と実体の境界を修復するのよ。私の宝物を、幻想郷を守るために」

幻と実体の境界。

霊夢曰く、紫が管理している結果。

その崩壊は幻想郷の危機になりえる、そういつことらしい。

「……そうか。話してくれて、ありがとう」

紫は、悪だ。

性格は悪いし、冷徹で計算高く、時には非情な手段も辞さない奴だ。

しかし、心の根まで腐ったような奴じゃない。

彼女の優しく、強い言葉はそう思わせるに足るものだった。

俺が彼女から感じたのは、固く揺るぎない信念。

偽りない素の心だった。

あれが嘘の顔、嘘の言葉なら、俺はこれから誰の言葉も信じられな

いだろう。

彼女の告白は、それほどに真に迫るものだった。

それに、幻想郷を守るといふ事は俺のためにもなる。

そのために俺が必要なら、喜んで協力しよう。

困っている人に手を貸すのも、善行の一つだ。

それに命の恩人を見捨てるなんて、人として筋が通らねえ。

「お前がいなきゃ俺は死んでたしな。俺に出来ることならやるぞ」

その答えを聞くと、紫は身体中の空気を出し尽くすように、大きく息を吐いて胸を撫で下ろした。

「ありがとう、本当に助かるわ……。とはいっても急ぐことはないから、今は自分の強さを磨いてちょうだい。まずはティルフィングのカードを作ることね」

ティルフィングか、多分中庭に置きっぱなしだ。

今から拾いに行くか。

紫は溜め息混じりに、独り愚痴をこぼすように背を向けて続けた。

「せめて並の妖怪くらいは楽に退治出来るようになってちょうだい。自分の身は自分で守るのがルールなんだから」

「分かってるよ。お前に助けられるようじゃ駄目だってことだろ？
毎回助けられてちゃ、きりがねえもんな」

「ええ、そうね」

彼女は疲れたような笑いを見せてから、大きく伸びをした。

「今日は疲れたわね……。そろそろ帰るわ、いい加減眠いし」

「了解。またな、紫」

「ええ、また会う日まで」

穴の中に消えていく彼女を見送る。

それからレポートに慣れておきたいので閃珠の姿を探してみたが、もう大広間にはいなかった。

部屋に戻ったかな？

まあいいか。

何かにつけてレポートするのも考えものだ。

俺は自分の足を使って、邪剣が置いてあるだろう中庭へ踏み出した。

第十六話 明かされる予定（後書き）

更新日時を決めました。

次回からは毎週土曜日に更新することになります。

何故今日更新したのかというと、今から待つと十五話から一週間以上空いてしまうからです。

ややこしいこととしてすみません。

それでは土曜日に、またお会いしましょう。

第十七話 覚悟二つ

藍と橙は、今頃宴会場で酔い潰れているだろう。

先に帰ると耳打ちしておいたから、追いかけてくるようなことはない。

その上、あれで藍は酒好きだ。

日頃怠惰な主人に仕え、ストレスが溜まっているのだろう。

だから今、この家には従者が誰もいない。

目の前の客人と、私の二人だけだ。

「何故来たのかしら？」

客人は白の剣道着に、黒地に金糸の装飾が施された剣道袴の少女。

私の計画を崩した、協力者の一人だ。

彼女は畳にきちんと正座して、ばつが悪そうにツインテールをいじっていた。

「お主に一言、詫びを入れねばと思ってな」

「詫び？」

「うむ、我が能力のことなのだが、実はお主を欺いたことがある」

それだけで、ピンときた。

私は彼女が翼を外の世界へ帰すことを恐れ、計画の大部分を喋ってしまった。

これは仕方がないミスとなるが、一つ例外がある。

「既知の場所とは言えど、名前一つでは移動できぬ。可能なのは私
が実際に行った場所のみだ。里に関しては、お主が一度、私を剣の
姿で案内してくれたから可能なまでよ」

その心配が杞憂だったならば、これは完全なミスとなる。

つまり私はしなくてもいい心配をして、勝手に自滅したのだ。

まったく、なんたる間抜けだろうか。

一応他言無用とは言ったものの、これで万が一話が広まればまずい
ことになる。

何でも願いを叶える如意宝珠。

そんな話が広まれば、大昔の闘争が現代に蘇っても不思議ではない。
そうなれば結界の修復どころではなくなり、崩壊のタイムリミット
に間に合わず幻想郷は一貫の終わりだ。

これで、完全が崩れた。

壁に亀裂が入れば、そこから劣化していく。

亀裂は大きくなり、小さな風穴を生み、そこからさらに侵食が始ま
る。

そして、やがては崩壊するのだ。

僅かながら、失敗の可能性が生まれてしまった。

「ああ〜もう……、何なのよ……」

床に身を投げ出し、天井を見上げる。

隣からは、神霊少女の申し訳なさそうな声。

「いや、誠にすまぬ。私とて、斯様な人道に反する真似は、本意で

はなかつたのだがな」

「じゃあ、なんで教えてくれなかつたのよ」

むくれ顔で問う。

しかし彼女は、キツパリと糞真面目に言い切った。

「主の望みが、我が望みだからだ」

「……え？」

「つまり私は主の望むことを叶えたいのだ。だから今は主が望む通り、おぬしにも協力しよう」と

「え？」

「な、何だ？私は妙なことを言っているか？」

「いや、うん……」

沈黙が部屋を満たす。

私が固まっている間、彼女は不思議そうに首を捻っていた。

「あなた、会って数日の人間に、よくそこまで真摯に仕えられるわね」

彼女の顔は、相も変わらず馬鹿みたいに真面目だ。

「主への忠義は絶対だ。主に従い、尽くし、時に導くことに、私は己が命を捧げる」

……私には解らない。
例え命を救われようと、それでは助かった意味がないではないか。
他人に拘束された命に何の価値がある。

考え方の違い、と言ってしまうえばそれまでだが、やっぱり彼女はおかしい。

騎士や武士が主のために命を張ったのは、大体は自らの報酬、家族、家名のためだ。

義の為に己の生涯を捧げた義士などいないとは言わないが、いくら大恩があるうと、無償で仕えたものはいない。

ある種、歪んでいる。

彼、霧崎翼が彼女をねじ曲げたのか、これが元々の彼女の性質なのか。

どちらにしる……。

「一種の狂気ね」

個々に差はあるが、本来生きとし生けるものは全て身勝手な所を持っている。

彼女はその枠から外れているのだ。

「狂気でも構わぬよ。私はこの道が正しいと信じている」

「……あつ、そう」

「……む？如何した？」

「はあ、何でもないわよ」

何故私が連れてきた協力者二人は、こつも癖のある扱いにくい奴等なのか。

私の予定を、掻き乱していくような。

賢すぎる人間も面倒だが、保身や利害を考えやすいため、ある意味御しやすい。

それに例え少々賢しかろうが、数百数千の時を重ねてきた私に敵うはずがない。

年季と経験が違いすぎる。

問題なのは、この協力者たちがそういつたことを省みない馬鹿の類いであることだ。

せめてもう少し自分の為に動いてくれたら、やりやすいのに。頭を抱える私。

そんな私を見て、彼女は朗らかに笑った。

「何を考えているかは窺い知れぬが、おぬしは神経質に過ぎるやもしれぬな。肩の力を抜いては如何か？」

「あなたも私の立場になれば、嫌でも神経質になるわよ。普段はもつといい加減なのに」

今回の件も出来るなら藍に一任したいが、彼女は普段の仕事で手一杯だ。

私以外に、計画の統轄役はいないのだ。

「否、手を抜けとは言わぬよ。ただ、人は完全にあらず、何を為すにも少々綻びが出るのは当然であろう？」

嬉しい言葉だが、温い。

そんな覚悟では取り零してしまう。

人妖問わず、他人の手は借りてもいい。

必要なら、そこいらの犬畜生だつて利用してやる。

だが、失敗だけは出来ないのだ。

どうしても、出来ない。

許されない。

失敗すれば、幻想郷の全てが消えてなくなるのだから。

「私は妖怪だから、完全じゃなきゃいけないのよ。綻びなんて、自分で繕えるほどにね」

殆ど睨み付けるように、強く彼女を見据える。

反論なんて無駄だと思えるように、強く。

「左様か。しかし私が手を貸せることがあらば、遠慮なく申せ」

分かってくれたようだ。

閃珠は寂しそうに目を逸らした。

「ええ、勿論よ。他に用件は？」

「……最後に一つ、質問を」

やっぱりか。

彼女は私と行動すると決めたとき、しつこいほどに一つの事を確認した。

もう口にこそ出さないが、彼女の根底にはやはりそれがあるのだろう。

仲間の安否が。

「あの子達はまだ生きているわ。まずいと感じたらそちらに手渡す

から安心しなさい」

「……かたじけない。ではこれにて失礼する」

彼女の姿が陽炎のようにぶれ始めた。

能力を使うのだろう。

「ちょっと待って、頼みたいことがあるの」

「うむ！遠慮は要らぬ、心置きなく申せ！」

彼女ははっきりとした姿に戻り、心底嬉しそうな満面の笑顔で、ろくに無い胸を張った。

神様と言えど、見ていて微笑ましい。

翼が優しくするのも無理はない気がする。

私なら、いじってあげたくなくなってしまっけど。

「折角来たんだし、二人で一杯呑みたいわ、どうかしら？」

境界の穴から一升瓶を取り出し、軽く掲げて見せる。

お言葉に甘えて、いじり倒しながら愚痴でも聞いてもらおう。

「心得た！」

彼女は畳に腰を落ち着け、お猪口をニコニコしながら受け取った。

「残念ながら、お神酒のような上等な物はないわ。それでもいいかしらっ。」

「何、些細なことよ。どぶろくはあるか？」

「ええ、ここに。種類だけは揃っているわ。それじゃ乾杯といきましょ」

酒を入れ替え、栓を開ける。

「では、そうだな……乾杯の音頭は、我らの願いに、で如何かな？」

我らの願い、か。

私、閃珠、翼、霊夢、藍、妖夢、幽々子。

計画を知る者はこれだけだが、皆が賛同してくれた。

もう、私だけの願いではないのだ。

そんなことを思うのは今更のような気もするが、不思議と心地よかった。

案外、目の前の神様も頼りになるかもしれない。

「そうね、じゃあ、我らの願いに」

「我らの願いに！」

「乾杯！」

最初の一杯を、一気に飲み干す。

今日のどぶろくはしつこいほどに甘かった。

だが、たまにはこんな酒も美味しいものだ。

私と同じく一気に飲み干して、小さな神様は陽気に笑う。

回りまで明るく照らすような、口調に合わない可愛い笑みで。

「よし、ゆかりんよ。今宵は暁まで語らおうぞー！」

「ふふ、いいわよう、もう今夜は寝かさないから覚悟なさい！」

今夜は彼女を存分にいじり倒してやるぞ。

第十八話 忠君の士

この世界に、電灯なんて便利なものはない。

にとりの洞窟にはあったような気もするが、河童は他の種族に比べて技術力がずば抜けているので、恐らく彼女等だけだろう。

事実慧音さんの家にも、里のどの店にも無かった。

この白玉楼にもだ。

そんなわけで、夜になると光が非常に心許ない。

閉めきられた室内においてはゼロといってもいいほどだ。

だから普通は蝋燭の灯りを使うのだが、今まで明かりが氾濫していた外の世界にいた俺には、それではとても足りなかった。

やっぱ、使うしかねえな。

「五光」

一枚のカードを手に、短く囁く。

期待通りに、朝と同じく電撃の槍が召喚された。

それを手頃な壺に入れて、スペル名を唱えることなく放置しておけば、立派な電灯の完成だ。

スペルカードには効果時間が設定される。

しかしその中でも道具を封じた物、俺の場合は神器だが、それを取り出すだけなら時間制限は反映されないのだ。

神力の消費もほとんどないのか、独特のたるさも出ない。

ちなみに昨日は槍を封じる前だったので、そのまま少しの間床に置いていたのだが、その部分が焼け焦げたので慌ててカードに封じた。

今日は教訓を活かし、丈夫そうで見すばらしい壺を選んで蔵から持ってきてある。

焦げた部分は、壺が下敷きになっている。

……金が溜まったら、またにとりに頼むつもりだ。

ともあれ、この方法なら殆ど何も消費せずに十分な光を得ることが出来る。

欠点といえば、光の量や向きを調節できないくらいだ。

これで、本を読むことも出来るようになった。

昨日この部屋に降ってきた“幻想の武器”のページを捲り、ティルフィングの項を探す。

しかした行まで辿り着いたとき、何を探しているかすら頭から飛んでいく雷のような怒声が轟いた。

「なあにをやってるんですかああああ!!」

「ぐほおっ!!」

何事かを確認する前に、頬に痛みが走り畳を転がる。

無様に床に倒れ伏す俺の上から、容赦なく罵声が浴びせられた。

「神器を明かりにするなんて馬鹿ですかあなたは!? 屋敷が火事になったらどうするんですか!」

「ご、ごめん、悪かった! 次から気を付けるから!」

脇差を抜いている妖夢を見て肝を冷やした俺は、座った状態から慌てて頭を下げた。

閃珠といい彼女といい、すぐに刃物を出すのは遠慮してほしい。

「まったく……明かりなら蠟燭で十分でしょう？早く神力の供給を絶ってください」

昨日も蠟燭の明りで色々作業をしていたが、かなりやりにくかった。しかし斬られるよりは我慢する方がましなので、ブリューナクを戻すことにしよう……。

あれ？

戻す？

戻すって……どうやって？

神力の供給を絶つと言っても、スペルの使用とは違いブリューナクの神力だけで賄っているみたいだから絶つ神力が無い。そもそも俺は神力の絶ち方を知らない。

下手に努力してブリューナクの神力生成が活性化されようものなら、それこそ本当に白玉楼が灰になりかねないし……。

「なあ妖夢」

「なんでしょっ」

「ちょっと外に出てもいいか？」

「……お好きにどうぞ」

察したらしい。

しかし下手に失敗するよりは呆れられる方がいい。

既に妖夢の中では、俺の評価は地に落ちていそつだし気にすることはねえよな。

うん、気にしねえよ……。

俺は無言で槍を掴み、妖夢のジト目を華麗にスルーしながら障子を開けた。

白玉楼の上空にブリューナクを空撃ちした後で俺の部屋に戻ると、妖夢がまだそこにいた。

蝋燭一本の薄明かりの中、きちんと正座して目を閉じている。

寝てるのか？

それにしては随分と窮屈な姿勢だ。

瞑想？

それならこんな弛緩した空気にはならない。

「妖夢？」

俺は小声で聞いてみたが、反応はない。

何なんだ、この状況は。

俺にどうしろと？

考えた結果気にしてもしょうがないと結論付け、俺は無視して蝋燭を自分の方に引き寄せて本を開いた。

とりあえず暫く様子を見よう。

テイルフィングは勿論、昨日は見れなかった出石小刀やブリューナクも見直す。

それが終わったら、慧音さんに貰った仕事に関する資料に目を通す。
暫くして、また障子が開いた。

「む、主」

閃珠だ。

「おう、紫が消えてから見なかったからちょっと心配したぞ。どこか行つてたのか？」

「うむ、少し友の愚痴を聞いていたのだ。酒が入って寝てしまったので帰ってきた。主よ、斯様な夜半まで学に励んでいるのか？」

「ああ……知識なら幾らでも付けられるからな」

今日の紫とルーミアの戦いに、俺は何一つ役に立てなかった。

元々俺があ姉妹を助けようとしたのに、結局逆に助けられる形になってしまったのだ。

俺は幻想郷と妖怪を甘く見ていた。

俺は今日ルーミアに襲われるまで、妖怪を自分と同じ人間のようにしか見ていなかった。

妖怪だろうが何だろうが、自分に危害を及ぼすような存在じゃないと勝手に決めつけていたようだ。

もう、そんな甘い考えは捨てなければならぬ。

妖怪には危険な者もいる。

幻想郷で生き抜くには、力が必要なのだ。

紫や藍さんには及ばないにしても、今の弱いままでは駄目だ。かといって、すぐに強くなれるわけではない。ならせめて、知識くらいは付けておくべきだろう。

閃珠は俺の隣に正座し、半開きの目を擦りながら言った。

「主よ、もう子の刻はとうに過ぎている。これ以上は体に障るので
は？」

「えっ？マジかよ、明日は早出しなきゃなんねえつてのに……。分かった、なるべく早く寝るよ。閃珠は隣の部屋に布団敷いておいたから、そこでゆっくり寝てくれ」

さつき読んだ慧音さん直筆の資料には、日の出頃に里に来て欲しいとのことだった。

この時期ともなると日の出はそう遅くないので、睡眠時間はかなり削られるだろう。

閃珠の睡眠まで奪っては申し訳ない。

しかし、俺の勧めを聞いても、閃珠はその場から動かなかった。

「気遣い痛み入る。しかしだ……。主、まだ起きている所存ならば、私から一つ、話しておきたい事がある」

「話？明日じゃ駄目な話なのか？」

「可能な限り、早くしておきたい。紫殿が全てを話した以上、私も話し、謝っておきたいのだ……。その、従者としてあるまじき、我が所業を」

閃珠の両眼に、平時の鋭さはない。
苦々しげに俯いている。

紫を引き合いに出したってことは、何か俺に隠し事があったってことか？

こいつ武士みtainな性格だし、その手のことは嫌いそうなので意外だ。

それでも黙っていたという事は、恐らく余程の事だったんだろう。これほど苦しそうな顔をしてでも隠さなくてはならなかったのだから。

隠し事をしていました、などと言われて、いい気分にはならないが、彼女には彼女の事情がある。

それを無視して文句を言うのは、いくらなんでも自分勝手に過ぎるだろう。

俺は彼女に向き直り、頷いた。

「分かった。お前の秘密、納得行くまで俺に話してくれ。謝りたいなら謝ってくれ。俺は多分、それを笑って許すからさ」

閃珠は

「かたじけない」

と深々頭を下げ、話の口を切った。

「では、遠慮なく。さて主よ、話す前に聞いておきたいのだが、主は我が伝承をご存じか？新羅の王子が日の本に訪れ、八つの宝物を献上なさった話だ」

「八つの宝物……。ああ、知ってる知ってる。昔日本に来た天日槍

つて王様の孫が、爺さんに習ってまた日本に行く話だろ」

出石小刀もその八宝の一つで、王子一番のお気に入りだったはず。献上する土壇場で小刀が惜しくなった王子は袖の下に小刀を隠したが、天皇に酒を注ごうとした時にそれがバレてしまう。

仕方なく真実を話し王子は小刀を献上して帰るが、不思議なことに小刀は王子の元へ独りで帰ってきた。その後また姿を消し、淡路島で見つかった小刀は、そこで神として崇められたらしい。

俺が知ってる通り一辺の伝承を話す。すると閃珠は、こんなことを言った。

「然り。では、その続きはどうであろう」

続き？

たしか淡路に行った後の事は書かれてなかった筈だ。俺が知らないだけなのか？

「知らないな。続きがまだあるのか？」

「愚問。私が今ここに居るのだから、話が終わる筈があるまい。淡路の神社で私は暫く落ち着いていたが、天皇の死後、私は他の八宝と共に別の神社へ移ったのだ」

「別の神社？」

「但馬の国、今では兵庫県であったかな？そこにある立派な神社だ。そこで我等は八宝揃って奉られた」

「八宝全部でか。つーことは、お前みたいな神霊がそこには八人も

いたのか？」

「うむ。巫女や神主は大家族のようだと語っておられたな」

謝罪の為の前置きだというのに、閃珠は笑っていてとても楽しそうだった。

昔の思い出を懐かしんでいるのだろう。

目は俺の向こう、遙か遠くの何処かを見ていて、意識もそちらに飛んでいつているようだ。

昔の仲間はいいい奴等だったらしい。

ならば何故、その仲間を置いて幻想郷に来た？
尚更それが気になる。

「よし、伝承は分かった。閃珠、そろそろ本題に行こう」

俺の言葉に、閃珠は居住まいを正した。

「承知した。私が幻想郷に招待された経緯について、お話しさせていただきます」

「招待？誰に？」

今の言葉で半ば以上予想は着いているが、一応聞き返してみた。
招待できる者というだけでかなり絞られる、ツーカーあいつくらいだろう。

「私も主と同じく紫殿に連れてこられたのだ。彼女の計画を手伝うために」

「やっぱりか……災難だったな」

閃珠にだって簡単には捨てられない生活があっただろうに。俺の同情を、彼女はあっさり否定した。

「災難だなど、とんでもない。紫殿は私を主に引き合わせてくれた、命の恩人なのだ。勿論の事、主も我が救世主であった」

「命の恩人？俺が？」

紫はともかく、俺はまだ閃珠に何かしてやった覚えがない。

普通の思考をしていれば、今日の朝一に出会ったばかりの少女に命の恩人だとか言われても、冗談としか取れないだろう。

彼女は大真面目に続けた。

「外の世界にいた私は、神力を失いかけていた。人間が信仰から離れていったせいで、神霊である私は仲間共々消滅の危機にあったのだ」

そう言えば神は信仰を力とすると、幻想の武器辞典にもチヨロツと書かれていた気がする。

信仰されればされるほど強大な力を持ち、逆に信仰されなければ消えてしまう。

お祭りの日以外は大概の神社がガラガラの外の世界は神様にとって地獄だったはずだ。

「実体すら保てなくなり、最早これまでかと思っていたある日、紫殿が我が元に現れたのだ。彼女は私に、斯様な話をした。お前を助けてやる。その代わりに、私の手伝いをせよ、と」

手伝いの内容はもう聞かずとも分かる。
結界修復計画の参加者になれ、ということだ。
他人の弱味に突け込むとはいかにも紫らしい。

「私は如何にして私を助けるつもりかと、鼻で笑いながら問うた。
当然よな、それが簡単に出来るなら苦勞せぬ。それに対して紫殿は
こう答えた」

俺が閃珠にとって命の恩人である。

それは俺がその問題を解決する鍵だったからだろう。
神力が枯渇している者に対し、俺が出来ることは一つだ。

「俺の能力を発現させて、神力の生成を活性化すればいい、か？」

神力の生成自体は彼女自身が行っている。

その働きを強めるのが信仰心だ。

つまり、俺が能力で絶えず神力生成を活性化させてしまえば、信仰
心がなくとも問題はない。

閃珠は流石は主と言わんばかりに大きく首肯した。

「然り。私は疑いはしたものの、結局紫殿を頼りにする以外道がな
かった。故に話に乗り、幻想郷の住人となり、白玉楼に預けられ主
と出会い、今に至る。これが私が此方に来た経緯だ」

「……」

何も返せない。

まさかそんな止むに止まれぬ事情を抱えていたとは、つゆとも思わ

なかった。

俺とは比べ物にならない覚悟の元、彼女はこの世界に来ていたようだ。

自らの意志で得体の知れない世界に飛び込むなんて、俺には出来ない。

俺は無理矢理連れてこられて、覚悟も何もないまま事態を飲み込まれ、結局未練を強引に消し去りここに住むことを決めた。状況を全て知った時は絶望と恐れで震えていた。

断言しよう。

情けないが、俺には自力で前の世界を離れるなんて絶対できなかった。

白楼剣が無ければ、まだ未練を引きずっていたに違いない。

「……お前、怖くなかったのか？」

だから、知りたかった。

どうすれば、そこまで強くあれるのか。

心も体も弱いままの自分をどうにかしたい。

紫や閃珠の助けを頼り続けるのは嫌だ。

彼女は俺の問いに、極めて当たり前のように答えた。

一切の迷いもなく。

「怖かった。しかし仲間を救うためならば、私は命も差し出せる」

「……そっか」

どこまでも真つ直ぐな答えだ。
この時ばかりは、目の前に座る袴の少女が本物の武士に見えた。
こいつは武士っぽいんじゃない。
本物の武士なんだ。

綺麗な生き方だと思う。

彼女は自分が信じた道を完璧に貫いている。
しっかりとした芯が心にある。

俺にはそれが、とても貴いものに見えた。

「もうお分かりかと思う。私が謝罪したいことは、他でもないその仲間についてだ。私は紫殿とこう約束した、この計画が成就した暁には、残る七人も助けてくれと。当人を差し置いて甚だ身勝手な約束ではあるが、もう彼等を助ける道は他に無い」

話の核心に入り、閃珠の動かす口が速くなる。

「黙っていたこと、主を利用して目論んだことは謝る。申し訳なかった。だが後生だ主、どうか我が仲間を助けてやってくれ！この出石閃珠、それさえ叶えば奴隷とも娼婦ともなる！だから、頼む……！」

土下座し、額を畳に付けて彼女は固まった。

その姿は、心意気は、かつこいと思う。
仲間のためなら、自分を犠牲にしてもいい。
それほどに仲間を思い、自らの道を貫ける者はそういないだろう。

でも、俺はその姿に憧れることはできなかった。

閻魔様は、残された者の気持ちを背負え、過去を忘れるなど言っていた。

いくら道を貫き美しく死のうが、死ねばそれで終わりだ。

残された者は悲しむし、自分の可能性は閉ざされる。

自己犠牲なんて、過去を忘れ、仲間の気持ちを考えない、単なる自己満足でしかない。

閃珠が仲間を大切に思うのと同様に、仲間も絶対閃珠を大切に思っている。

彼女が彼等を仲間だと捉えるなら、その思いに応える義務がある。

「閃珠」

だから俺は、彼女の仲間のために、閃珠の主として命じたい。

「お前の気持ちは分かったが、その願いを叶えるのに一つ条件を付ける」

「……何なりと」

「もう、自分を蔑ろにするな。自分を大切にしろ。危なかったら助けを求め、死にそうだったら逃げる。それが出来るなら、俺はお前に協力する」

このままでは、彼女は危ない。

この幻想郷は妖怪の楽園、危機に直面する時は遠からず来る。

その時彼女は自らの志をどうにか折るまいとして、危機に対応できず倒れるんじゃないか。

そんなのは許さない。
こいつが危なくなったら、例え武士の恥だとしても俺が助ける。
部下を守るのも、主人の仕事だろう。

閃珠は俺の命令を受け、今まで見たことないような穏やかな笑顔を
見せた。

「主は、優しいのだな」

「そうか？お前が俺に仕えるなら、俺はお前を守るのが筋ってもん
だろ」

「左様か。私は主といえば絶対君主が思い浮かぶ故、何やらくすぐ
つたいような奇妙な感覚だ」

閃珠は可笑しそうにクスクスと笑っている。

「おいおい、まさかお前、俺のことも絶対の君主として見てたのか
？」

「一応は。しかし何と言おうか、主がそれらしい素振りを丸つきり
見せぬので、私は親しげに接して大丈夫かどうか、判断に困ってい
た所なのだ」

「いやいや、お前いきなり抱き付いてきたりしたじゃん」

「あ、あれは……名を頂戴したのが嬉しくて、つい」

お、赤くなった。

本当に表情がコロコロ変わる奴だ。
話してて楽しい。

「ま、何にせよ、俺はそんな偉い奴じゃねえ。だから閃珠、これからは主従関係だろうが、仲良くやっていこう」

「ふふ、承知。では主よ、親交の握手を」

閃珠は満面の笑顔で俺に右手を差し出した。
俺はその小さく白い手を、がっちり握る。
握り返してくる力も、また強かった。

彼女はやがてその手が離れるとふわりと立ち上がり、小さく欠伸をした。

「ふあ……少し飲みすぎたかな。いつになく語ってしまった。では主よ、話はここらにしておこう。明日起きれなくば事だ」

「はいよ。お前も、付いてくるんなら頑張って起きろよ」

「うむ。では、これにて失礼致す」

少しふらつきながら、閃珠は襖の向こうに消えた。

俺の従者、出石閃珠。

彼女もまた、外の世界の住人だった。

自らとその仲間を救う為、幻想郷にやって来たのだ。
わざわざ紫の計画に賛同してまで。

そしてその両方の鍵は、俺の能力にある。

つまり俺の双肩には、幻想郷の平和と八人の神霊の命が乗っかっている。

こうなると、ますます死ぬわけにはいかない。

正直なところ、重責すぎて気がどんよりしてきたが、そうも言ってもらえない。

二人の多大な信頼を裏切るなど、死んでも御免だ。

そのためにも、強くなりたい。

話の途中でも、閃珠がどうして強くあれるのか聞いたが、その答えは仲間のためなら勇敢にもなれるとのことだった。

閃珠の心の強さは、その自らの芯の強さにある。

なら俺も、これだけは譲れないって芯を持つべきなのかな。

大きな心の支えの一つになるような、信念……。

「……ま、ぐだぐだ考えるには遅い時間だよな」

初日から慧音さんに迷惑はかけられない。

閃珠の言う通り、明日の行動に支障をきたすような真似は出来ないから、さっさと終わらせよう。

とりあえず放っておくと危険極まりないから、ティルフィングの力ードは完成させるか。

今日既に何度も読み返したティルフィングの一節を、また読み返す。

「栄光と破滅をもたらす魔剣。一度鞘から抜かれれば所有者の力と自我を奪って自らの糧とし、やがて死をもたらすが、剣の所有者は必ず戦いに勝利できる程の能力を得る」

なんとも物騒な剣だ。

普通そうまでして戦いに勝ちたいと思うか？

「爆発的な身体能力と戦闘技能の向上、能力強化、痛覚遮断、第六感付与。これらを備えた者が狂気に顔を歪めながら死屍累々を築いていく様は、まさに悪魔のようであったと語られている」

確かに、これだけ揃えば接近戦では敵なしだ。

太古の戦いには銃が存在しなかったのだから、必ず勝つと言われても仕方ないだろう。

「更に持ち主の願いを三度叶える力を持っているが、これを使ったものは完全に剣の虜となり、ただ人を斬ることに悦楽を感じる狂戦士に変貌する」

やっぱりおっかない。

何をするにも、この剣は多大な代償を求めるようだ。

願いを捧げたら、紫や藍さんでさえこの剣に操られるのだろうか。

使わなきゃしょうがないんだけど、使いたくねえなあ、この剣。

人を狂わせる栄光の魔剣。

危険以外の何物でもない。

「さて、スペル名は……やっぱり単純にいくか」

色々捻っても、やっぱり意味が伝わらなければ本末転倒だ。

栄光を代価に持ち主を破滅させる。

この剣を示すにはこの一言で十分だ。

指に神力を集中させ、カードの中央にスペルを書いていく。

名前の部分に書いたとおり銀文字が浮かんだのを確認し、その名を宣言する。

これで、本日の作業は終了だ。

さて、さつさと寝るか。

「ん、んん……」

立ち上がるうとした時、ふと沈黙が破られた。

見ると隣にいる妖夢が、正座の体勢のまま首を倒してゆらゆらと揺れていた。

どうやら寝ていたらしい。

さて、ここは起こしてやるべきなのだろうか。

こんな姿勢のままでも、これだけぐっすり寝付いていては起こし辛い。

そっとしておいてやるべきだろうか？

「みゆう……」

普通の生真面目な姿からは想像できない可愛い寝言を洩らしている。それだけなら和むだけでよかったのだが、下手に動いたせいでバランスを崩し、こちらに倒れて来た。

慌ててキャッチしたが、流石に衝撃をゼロには出来ない。

結果として、彼女を起こしてしまった。

俺の腕の中で。

「なっ、ななななっ!？」

悲しいことに、どうやら寝起きは良いらしい。

彼女は俺の顔を見上げて、茹で蛸のように顔を真っ赤にしながら驚愕している。

軽く抱き締めるような体勢で、尚且つ左手が触れてはいけないデッドゾーンの上に来てしまっていたので当然の反応……。

「うおっ!？」

やばっ!

不可抗力とはいえ何処触ってたよ俺は!

何でよりによってこんな状態になっちゃうかな!？

「待て妖夢!何か誤解をする前に言っておく、俺は倒れてきたお前をキヤッチしたただけだ!」

こういうタイプの誤解は危険だと文のせいで経験済みなので、すぐさま訂正しておく。

だが、このタイミングですら遅かったようだ。

「ひゃあああ!」

バッチーン!

豪快に横っ面を張られ、もう一度床に倒れ伏す。

ああ、痛い。

頬も痛い、心も痛い。

女の子にビンタされるのって、精神的にキツいなあ。善意の行いが、まさかこんな形で返ってこようとは。それにしても、やっぱり小さかったな……。

こんなどうしようもないことを考えながら、妖夢が

「ああ！？体が勝手に！！すいません翼！本当にごめんなさい！」

と必死で謝る声を聞きながら眠りに落ちた。

第十八話 忠君の士（後書き）

やっと計画の背景が大方出ましたね。

一段落です。

大袈裟ですが第一章完。みたいな。

これからも遅筆な作者ですが、よろしくお願いします。
それではまた来週！

第十九話 茜空への飛翔

「はあ、はあ……」

「閃珠、大丈夫か？」

「心配には、及ばぬ。しばし時間が経てば、自ずと回復するである」

翌朝、まだ太陽が顔を出し切っていない時間帯。

俺達はまだ目が覚めない内に、静まり返った里を訪ねていた。

隣を歩くのは、大分疲れた面持ちの閃珠。

彼女の額には玉のような汗が光り、剣道着は乱れ、妖夢に借りた紺の剣道袴には早くも葉っぱやら泥がついていた。

彼女はテレポートが出来るはずなのだが、はぐれたらことだし、朝は体を動かしたいと引きつった笑顔で言っ、冥界から里まで走ってきたのだ。

いくら俺の能力で筋力を強化しても、流石に疲れるだろう。

若干気分が悪いのか、青い顔をしている。

歩き方もどこかおぼつかない。

「しかし、わざわざ走らなくても良かったんじゃないか？せめて俺の後ろから短い距離を連続テレポートしていくとか」

そもそもこの方法は、昨日彼女が口にしていたものだ。

背の翼で少し風を送りながら言ってみたら、彼女は目を丸くした。

そして一瞬硬直した後、頭を抱えて俯く。

「くっ……。その手があつたか、不覚だ……！」

「いや、そんな絶望しなくても……。ほら、手を貸せよ。神力の生成を活性化させれば多少はマシになるかもしれないぞ」

昨晩色々と試してみたところ、神力と筋力は簡単に活性化できた。他にも植物の成長を促進したり、鉄の酸化を進めて錆を増やすなんてことも可能だ。

色々と応用が利くようなので、気付いたことがあれば試したいと思う。

「い、いや、それは関係ない。そもそも神力が不足しておるならば、主に触れておくだけで解決出来る。しかしこれは……うえ」

右手で額を抑えながら歩く閃珠が、突如としてえきそうになる。この症状を何度も見てきた俺は、彼女に何が起こっているのか一発で分かった。

「酒、か。なら、なんとかかできるかもしれないねえな。閃珠、ちよつと胸元まで服をたくしあげてくれ」

そう促すと、閃珠は少し顔を赤らめ、剣道着の裾を抑えた。

「……主、他意は無いのだな？」

「馬鹿なこと言っていないで早くしろ。酔いを覚ましてやるから」

見た目は妖夢くらいの年なので、可愛くはあるが、正直色気なんてものはあまり感じられない。

それにこんな壁の如き幼児体型じゃ、女の子には思っても欲情なん

てのは難しい。
幽々子さんや紫みたいな体型なら話は別だが、生憎俺にそんな趣味はない。

勿論例え神様といつても女の子にこんなことを言っっては、腰に差した出石小刀で斬り殺されても文句は言えないので、黙っておくが。

「むう……。致し方あるまい」

彼女は少し恥ずかしそうにしながら、片手で剣道着を帯から抜いて胸元ぎりぎりまでたくしあげる。

もう片方は胸元が弛まないようにしっかりと抑えていた。

そして俺は、彼女のお腹の右上辺りに右手を当てて目を閉じた。

……何かこう、今は往来が全くないからいいが、他の時間帯なら変態の烙印を押されかねない気がする。
さっさと終わらせることにしよう。

「あ、主、何をしておるのだ？」

「アルコールの分解」

短く答え、イメージを開始する。

どんな想像をすればいいのかわからなかったので、血の中をめぐる玉のような物質が、次々と壊されていくイメージを試してみた。

そのまま数秒待つと、閃珠が小さく息を吐いた。

「ほう……。何だ、頭が軽くなったぞ？」

「よし、気分はどうだ？」

「うむ、快調そのものだ。主、医学の心得が？」

上手くいった。

あまり鮮明なイメージじゃなくてもどうにかなるようだ。

「いいや、これも能力の応用だ。簡単に言えば、肝臓には二段階でアルコールを分解する二つの酵素があるから、そいつらの活動を活性化させてやれば、酔いも治ると思ったんだ」

酒に強くなりたくて調べたことが、こんな所で役に立つとはな。しかし、本当に便利な能力だ。

これなら酒も少しくらい……、いや、止めておこう。

「ふうむ、よく分からぬがかたじけない。主よ、いつか必ず、この恩義に報いて見せるぞ」

「そんなの良いって。治ったんならそれで十分さ」

さっきの青い顔はどこへやら、閃珠は全開の笑顔を見せた。

こんな嬉しそうな顔をしてもらえるなら治してやったかいがあったってもんだ。

「それで主よ、明朝に里まで何用だ？」

「ん？仕事だ、配達屋。お前風に言うなら……飛脚だな」

首を傾げた彼女のため、少し補足してやる。

「ほう、適任であるな。その翼があらば何処であろうと早急に品を届けられるであろう」

「だろ？お前の能力も合わせりゃ、幻想郷一の飛脚になれるぜ」

「おお……これは頑張らねばな」

さて、雑談しながら辿り着いたのは、慧音さんの家。

資料には今日の早朝、日の出後にここへ来るよう書かれていたが、少し早すぎたか？

家からは、全く物音がしなかった。

「主よ、家主は起きておるのか？」

「どうだろう、寝てたら申し訳ねえな……」

インターホンがあれば一発で解決なんだがなあ。

ちよっと躊躇していると、背後から声が。

「おお、随分と早いね。おはよう」

「慧音さん、おはようございます」

彼女は眠気や疲労を一切感じさせないスッキリとした顔だ。

規則正しい生活をしていれば、そんなものも出ないのだろうか？

俺には真似できないな。

「日の出後で良かったのに随分早いね、いい心がけだよ。ところで、そちらの女の子は？」

「出石閃珠と言います。俺の相棒です」

本人曰く従者らしいが、そう呼ぶのは気が引けたので相棒にしておいた。

今の立ち位置的にもそれが一番しっくりくると思う。

当の閃珠は不服そうに横目で冷たい目線を送ってきたが、結局流し てくれた。

「よろしく頼み申す。可能であれば閃珠と呼んでいただきたい」

「私は上白沢慧音だ。こちらこそよろしく頼むよ、閃珠。さて、翼、まずはこれを見てくれ」

慧音さんにはにこやかに閃珠の手を握ると、こちらに一枚の紙を差し出してきた。

昨日言っていた張り紙だろう。

しかし、彼女は何故気まずそうに笑っているんだ？

「うおっ……！」

そこには上から字がビッシリと隙間なく並んでいた。ざっと見ても二、三十行はある。

書かれている升目も完全に無視されていた。

まさかこれほど期待が大きいとは……！

「あはは……まさか、こんなに依頼があるとは、ね。商売繁盛は結構だが、まさか紙の裏面まで埋まるとは予想がつかなかったよ」

「あはは……、だ、大丈夫ですよ。数が多くても荷が軽ければ、何とかなりますし」

乾いた笑いを上げ、今度はお届け物の欄に目を通す。

米俵、四斗樽、屑鉄……。

いじめか？

これは俺への新手のいじめなのか？

軽いものなんか一つたりともありはしなかった。

どうみてもこれ、全部三十キロは超えてるぞ。

しかも届け場所が妖怪の山やら神社やら、どこもかなり遠そうだ。

そのことも知っていた様子の慧音さんは、俺に向かって手を合わせていた。

合掌。

慧音さんなら純粹に申し訳なさからだろうが、俺はお陀仏だ、という意味に取れなくもない。

「軽い物なら、わざわざお金を払ってまで頼まないということだね……。昨日の活躍も数に拍車をかけたみたいだ。翼、悪いが頑張ってくれ。今日の給金には色を付けておくから」

「うおお……おお？」

絶望しかけた俺だが、一つ重要な事に気が付いた。

俺には、閃珠がいる。

彼女のテレポートを利用すれば、荷物ごと目的地まで移動できるんじゃない？

消費する神力は俺の能力で幾らでも賄えるし、延々と里と目的地の間をテレポートし続ければ荷物や数が何であろうと関係ない。

これだ！

俺はいい相棒を持った！

「閃珠、ここに書いてある場所までテレポートできるよな？」

いや、出来ないと困る。

出来なかったら俺の体がぶっ壊れるかもしれないぞ。

主思いのお前なら、否定なんかしないよな？

頼む、しないでくれ。

しないでください！

「あー……、すまぬ。移動は可能だが、それは私が足を運んだ場所に限定される。今行けるのは、白玉楼と里、妖怪の山のみだ」

「……だよな」

世の中、そんなに甘くない。

しかし、シヨックで魂が口から抜けそうだ。

もう何にも考えたくねえや。

最後まできつちりやるけどね？

そりゃあ自分で志望したんだし、放棄はしねえよ？

でもなあ……。

「あ、うう、すまぬ。我が未熟を恥じるばかりだ」

「お前が謝ることじゃあねえよ。俺の覚悟が足りなかっただけさ」

そうだ、働くつてのは大変なことなんだ。

己の身一つで重い荷物を運ぶくらい、当たり前だ。一度やると言った以上、それを後悔なんてしたら嘘になる。約束は約束、裏切るのは人として筋が通らない。

自分に喝を入れ直すため、朝の空気を胸一杯に吸い込み、空を見上げる。

そして、自分なりにシャキツとした顔をしてから笑ってみせた。

「では、行ってきます。慧音さん」

「あ、あははは……え、依頼は、一番上の人から順番だよ」

慧音さんは気まずそうな笑いを崩さないままだった。

根っからの善人なんだろう。

慧音さんが気にすることもねえのに。

「一番上は……あー、成程」

この人なら納得だ。

考えてみれば、この人が一番上なのは当然だろう。

しかし……ちょっとずるいけど、この程度で気まずそうにすることもねえだろうに。

本当に善人だな、この人。

「運ぶものは本数十冊か。あなたらしいですね、慧音さん」

彼女は視線をあちらこちらに彷徨わせながら、意図不明のジェスチャーをつけ、おたおたと聞いてもいない弁明を始めた。

「いや、な？ほら、つい魔が差したというか。どちらにしる頼むな

ら、表を作った時に書いておいた方が効率的じゃないか。もう一度書き込みに行くのはだな、その、二度手間だし」

「いえ、いいんですよ。それで、宛名は霧雨魔理沙とありますが、なんなので泥棒にわざわざ本を？」

放っておいたらずっとこのままになりそうだったので、無理矢理遮った。

俺に言い訳されても何にもならないし、そこまで悪いことじゃないしな。

「お、彼女を知っているのか？」

「はい。白玉楼の暗い倉庫の中で、予期せず出会いました」

慧音さんもこの言葉が意味するところが分かるのだろう。

苦笑混じりに

「成る程な」

と頷いていた。

「不要になった本を片付けようと思ったんだが、魔理沙にその事を話したら、燃やすのも勿体無いから譲ってくれと言われてね」

いかにもあの魔法使いが言いそうなことだ。

本、というのが少し似合わないが。

「納得です。それで、その本の山は何処に？」

「こっちだ。ついて来てくれ」

慧音さんが俺の横を通りすぎる。

その後ろについて行くこうとすると、一本の腕が俺の行く手を阻んだ。

「玄関先までなら移動できる。ここは私に任せられよ」

「え？いや、そのくらいは俺一人でも」

「ま、か、さ、れ、よー！」

一音一音を強調された。

横顔は無表情だが、引くつもりが毛頭無いのは丸分かりだ。

こんなところで意地を張り合っても仕方ねえし、ここは任せてやるか。

「分かった。閃珠、運んできてくれ」

「心得た！」

途端にダッシュで慧音さんに追い付く。

背を向け庭へと向かっている慧音さんも、きつと笑っているだろう。あんなに忠義を尽くされる覚えはねえんだがなあ。

二人が角を曲がって見えなくなる。

手持ちぶさたになったが俺は、ひとまず届け先を確認しておくことにした。

霊夢や魔理沙以外は、やはり初めて聞く人ばかりだ。

中でも気になるのは、十近い注文をしている最後の依頼人、十六夜咲夜さん。

結構とるに足りない物も注文しているけど、金持ちなんだろうか？
届け場所は紅魔館と、でかいお屋敷っぽい所だから、もしかしたら
小間使いみたいな人かもしれない。

しかし、その紅魔館って何処だ？

里にはそんなでかいお屋敷は無い。

そしてこの外に住むのは余程の物好きが変わり者、もしくは人な
らざる存在だけだ。

もしかして、妖怪のお客さん？

あれこれ考えていると、突然小さな爆発音が響いた。

あまり大したことない音だが、流石に側でやられるとビビる。

「主、書はこの中に」

閃珠はでかい白の布袋を担いでいた。

クリスマスに大活躍なオジサンの袋みたいなそれは、あちこち角張
っていて痛そうだ。

閃珠は素知らぬ顔をしているが、手が震えているのだから重いんだ
ろう。

普通に持っていくのはキツそうなので、閃珠から袋を受け取ってす
ぐに筋肉を活性させておく。

ちょっと重いが、四斗樽に比べたら可愛いものだ。

「慧音さん、魔理沙の家は何処ですか？」

「魔法の森の中だ。あっちの方向に飛べば森は見えるだろう。家の
詳しい場所は分からないが、空から探せばそんなに苦労せず見つけ

られると思うよ」

「分かりました。閃珠、しっかり付いて来いよ」

慧音さんが指差す方向を向いてから、翼を広げる。

肩から担いだ袋が結構邪魔なので、胸の前で腕からぶら下げるような格好に持ち変えた。

神力の生成を活性化しながら隣の閃珠に声をかけると、無言で頷く。準備万端、だな。

「よし、行くぞ！」

異世界での奇妙な一日が、今日も始まる。

第十九話 茜空への飛翔（後書き）

話あんまり進んでないですね、すいません（汗）

どうにかしてパツパツとテンポよく出来ないものか。

さて、前話の後書きに書いたとおり、ここから第二章です。

そこで、どれがどの話なのか分かりやすいかな〜と思い、章管理機能を使ってみました。正直新しい機能が出たから使ってみたかったというのが大きいのですが（笑）

ともあれ、読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

それでは、また次週！

第二十話 無邪気にして無鉄砲

森の上を滑空していると、それはすぐに見つかった。

木々が倒され少し視界が拓けた所にひっそりと佇む、小綺麗な洋館。煙突からは目印のように煙が上がっているので、この家の主はもう起きているのだろう。

「主、あそこか!？」

俺の数メートル下、木々の上をレポートで渡る閃珠が大声で呼びかけた。

「分からねえ!とりあえず行ってみるぞ！」

あまり朝早くに他人の家を訪問するのも失礼だが、これも仕事だ。魔理沙なら知り合いだし、まあ大丈夫だろう。

高度を下げ、鬱蒼とした森の中へ沈んでいく。着陸した目の前の家からは少し物音がしていた。

俺は翼を畳んでから、遠慮がちに木製の扉をノックした。

「すみません、霧雨魔理沙さんのお宅でしょうか？」

「ヒトチガイダヨー、マリサニナンノヨウ？」

中から出てきたのは、一体の小さな人形だった。可愛らしい女の子で、遠目から見れば小人ではと疑うほどによくで

きている。

手のひらサイズのそれは、ふわふわと浮かびながら首を傾げていた。もしかして、この小さい人形が家主さん？
喋ったんだから、やっぱり生きてんだろっし。

「ああ、間違えてしまつてすみません。実はこの本の山をお届けするところなのですが……魔理沙さんのお知り合いですか？」

「ソウダヨー」

「そうですか。では、申し訳ないのですが、魔理沙さんのお宅が何処か教えて頂けないでしょうか？また他のお宅を訪ねてしまつのも不味いので……」

「ソレハアリスニキイテミナイト。チョットマツテテネ」

人形はくるりと背を向け、ドアを閉めて奥へ引つ込んでしまった。

「アリス、か。やっぱり人形なのかな」

いかにもそれらしい名前だが、それについては閃珠が首を振った。

「いや、恐らく妖怪。それも魔法を糧とする類いであろう」

「何で分かるんだ？」

「ふむ、主は人の身であるからな。しかし私は神霊の身。此処に渦巻く並々ならぬ魔力にも、鋭敏に反応してしまうのだ」

魔法使いか。

魔理沙の知り合いというのもそれらしい。
妖怪なんていつても人の姿をした者ばかりだから、人間と関わることもままあるだろう。

「主、少し失礼する」

「え？」

彼女は突然ドアから離れ始めた。

三分だけ間を空け、背後に広がる森を睨み据えた。

何があつたんだ？

「はっ！」

目にも止まらぬ、居合い一閃。

彼女に返した出石小刀は、紫の時と同様に半月型の軌跡をなぞった弾丸を打ち出した。

それは何物にも阻まれることなく、枝を落とし、木の葉を切り裂いて空へと消えていった。

何がしたかつたんだ？

「閃珠、一体何が」

「ふぎやあ！」

一際大きな枝が落ちてきた場所から、突如として悲鳴がした。

同時に何もなかったそこに人の輪郭が現れ、色が着いて、やがて完

全な姿を現した。

そこには四人の小さな女の子が、折り重なって倒れていた。実年齢は分からないが、見た目は閃珠や妖夢よりもさらに年下、萃香とどっこいどっこいか少し下。

顔付きはてんでばらばらだが、その四人は共通して、昆虫のような複数枚から成る羽を有していた。

その内の一人、上から二番目の子がじたばたと手足を暴れさせた。金髪がわさわさと揺れ、日光のように輝いている。

「ひゃあああ！冷たい冷たい冷たい！」

「あら、ごめんなさいねサニー。今どくわ」

一番上の、長い黒髪に青いリボンの子がゆったりと立ち上がる。

その後暴れていた金髪の子が慌てて飛び退き、次いで下の子がよろよろと立ち上がった。

全員の下敷になっていた、漫画に出てくるお嬢様みたいな金髪縦口ールの子は、ぐったりと倒れたまま動かない。

……大丈夫かな。

「貴様ら、森に入ってからこの今まで我等の背後を追け回しておったな。首と胴を離したくなくば、目的を吐け」

細剣の切っ先を向け、閃珠が冷利な声で唸った。

あんな凶器を目にして平気でいられるのは、余程胆の座った奴か相当の実力者、もしくはとてつもない馬鹿くらいだろう。

びくりと身をすくませる四人が可哀想だったので、閃珠を宥めようと俺が口を開いた矢先。

「ふ、ふん、あたいを脅そうだったってそうはいかないわよ」

一人が一步前に出て、偉そうに腕組みをして胸を張った。子供らしい大きな瞳が、根拠不明の自信に満ち溢れて輝いている。水色の髪に青のリボン、水色のワンピースととにかく青い子だ。背中からは氷でできた羽が生えていて、見ているだけで寒そうだった。

「……貴様ら、何者だ」

「あたいはチルノ。ルーミアちゃんの敵討ちに来たのよ!」

あ、普通に目的言っちゃったよ。

何がしたかったんだ、この子は？

「私はサニー、チルノの付き添いで来たわ。後ろでのびてるのがルナ、もう一人はスターね」

チルノの威勢の良い声に励まされたか、後ろの元気な金髪の子も名乗り、もう二人を指差して紹介してくれた。

「あたいたち四人で、ルーミアちゃんの弔い合戦をしにきたわ」

……弔い？

まさか、昨日の一件のせいだ……。

「ちょっと待て、ルーミアは……死んだのか？」

「うづん？生きてるよ？」

なんだそりゃ。

俺のシヨックを返せ、チルノ。

「主よ、先程から、何のことだ？」

閃珠は剣を下ろし、こちらを向いて首をかしげた。

「いやー、多分、勘違いだと思う」

確かに昨日、俺はルーミアと剣を交えたが、最初の一合目だけだったし、結局彼女から邪剣を奪い取ったのは他ならぬ紫だった。息はあったようだし、恨まれることはねえ筈だ。

「違わないわよ！翼の生えた人間と戦ったって聞いたもの、あんたで間違いないわ！」

自信ありげに俺を指差すチルノ。

しかし俺が言いたいのは勘違いであって、人違いじゃねえんだがなあ。

「ああ、確かに俺は彼女に会ったよ。でも、ルーミアは他に何も言っただけだったか？思い出してくれ」

「そんなの忘れたわ」

即答かよ。

これでやっと分かったけど間違いない。
こいつ、生粋の馬鹿だ。

「とにかく、あたいはあんたを倒すんだから！スペルカード戦で勝負よ！」

スペルカード戦か。

カードはあるけどまだ二枚だけだし、弾幕もまだ張れねえんだよなあ。

カードだって、どっちも下手に使ったら人を軽々と殺しそうだし……。

決めあぐねていると、背後からドアの開く音がした。

「……妙に騒がしいと思ったら、どうして妖精まで混じっているのかしら？」

両脇に浮遊する人形を従えている彼女は、四人の姿を見て眉をひそめた。

金髪に赤いカチューシャ、青い目、異常なほどに白い肌。
まるで彼女自身も一つの西洋人形のように見える。

「ア、アリスさん……」

これは、ノックアウト状態のルナは幸運だったかもしれないな。

そう思うほどに、サニー、スターのアリスさんに対する反応は、可哀想な物だった。

蛇に睨まれた蛙のように、木を背に手を取り合って震えている。
何だろう、トラウマでも植え付けられたのか？

「まあいいわ。その馬鹿が大きな声出してたけど、スペルカード戦なら私も参加させてくれないかしら？私が配達屋さんの方につけば、人数的にパワーバランスも丁度良くなるでしょ」

確認をとる言い方だが、彼女はもうカードを複数枚出していた。

なかなか好戦的な人らしい。

チルノはどっちにしる自分が勝つとも言いたげに「好きにきなさい」と偉そうに頷いており、サニー、スターはどちらも反抗できないらしく、ひくついた笑顔を浮かべていた。

二人は互いに目配せをすると、急いでルナを叩き起こしにかかった。当のルナはどうやらのびているふりをしていたらしく、頬を引つ張ったり上に乗ったりとやりたい放題な二人を止めようと、必死で抵抗を試みていた。

もみくちゃになっている三人を無視し、反対意見が上がらないことを確認すると、アリスさんは俺に右手を、閃珠に左手を差し出してきた。

「魔理沙から少し話を聞いてるわ。私はアリス・マーガトロイド、魔法使いよ。あなた達は？」

「霧崎翼だ。もう知ってるみたいだけど、里で配達屋をやってる人間だよ」

「出石閃珠。主に仕える者だ」

彼女は閃珠の言葉に少し面食らったようだが、気にしないことにしたようだ。

差し出された右手を握り返すと、彼女はチルノに向き直った。

「面倒だから、チーム戦でやりましょう。カードは三枚まで、相手のチームを全滅させたら勝ちでどうかしら？」

三枚？

俺、そんな持つてねえぞ。

このままじゃこっちの不利になっちまうな……。わざわざこちらが不利になるようなことをする必要は無いし、訂正しておいた方が身のためか。

声をかけようとする、閃珠が横から肩に手を置いて不敵な笑みで言った。

「主、頼りにしておるぞ。私が全力で背を守る、主は思うがまま敵を討て」

……言いずれえ……。……。

こんなこと言われた後に、そんなせこいことどうやって言えっただよ……。……。

忠誠を誓ってくれた小さな相棒が、今だけはちょっと恨めしい。期待されすぎるのもなんだなあと、俺は唇をひくつかせながら思ったのだった。

第二十話 無邪気にして無鉄砲（後書き）

遂に二十話。でもそれほど話進んでない不思議！

さて来週は、お久しぶりに戦闘パートです。

チームのパワーバランス明らかにおかしい気もしますが（汗）
もし見かけたら、また読んでください。

第二十一話 輝く清水と煌めく黄金

「オーケー！それじゃスタートオ！」

「うおっつ！？」

用意をする間もなく氷柱が飛んできた。
不意を突かれたので慌てて空中に逃げるが、そこに光弾の追撃が容赦なく迫ってきた。

「そう簡単に、当たってたまるか！」

旋回、回転、加速。

さながら戦闘機のアクロバット飛行のように避け続ける。

伝説に語られるイカロスの翼は熱に弱く、太陽の光で蠟が溶けて壊れたが、この翼にそんな心配は無用らしい。
どれだけ速く飛ぼうが、弾にかするうがびくともしない。
しかも一昨日背中に着けたとは思えないほど、心地よく体に馴染んでいた。

この分なら、例え一日中戦い続けても当たらないかもしれないねえな。

さっさと着地して反撃と行きたいが、地上では空中ほど素早く動けないので、避けながら筋繊維を活性化させていく。
弾幕が出せない以上、俺の攻撃は肉弾戦かスperlカードに限られる。
筋力の強化をしておいて損はないだろう。

「面倒ね、さっさと当たりなさいよー！」

「ハッ、そんな遅い弾で当たるかよ！」

紫が放つ弾や剣の、投擲とうてきに比べたら、スピードも量も段違いだ。あれを見ている以上、この程度では怖くもなんともない。案外宝物庫での小芝居も、無駄じゃなかったかもな。

「ああ〜もう！凍符！」

チルノが早くもカードを天に掲げた。

間違いなくスペルカードだろう。

早速仕掛けてきたか……！

「パーフェクトフレイイズ！」

宣言と同時に、広範囲へ光弾が乱射される。

狙いも何もあつたもんじゃない、大量にばらまくだけの弾。

物量だけで攻める、本当に大雑把な攻撃だ。

「……………」

これなら、避け続ける必要もない。

こちらに向かつてくるものだけ対処していればいいだけだ。

あの馬鹿、こんなものをスペルカードにしてどうするんだ？

「スター、任せたわ！」

「オツケー……！」

スター？

チルノが呼びかけた方向を見ると、スターが大きな和弓を引絞っていた。
そして狙いを定める彼女を守る為に、ルナとサニーが協力してアリスと閃珠を足止めしている。

スターは弓に自信があるのか、矢を同時に二本つがえている。黒い羽根ですかれた物と、白い羽根ですかれた物。どちらも稲妻のような光を迸らせ、こちらに^{やしり}鏃を向けていた。

「あれは……！」

今までに二つも見てきたから、直感的に分かる。

ブリューナクやテイルフィングとは少し毛色が違うようだが、根本は同じに違いない。

あれは人の手に余る武器、幻想の世界にのみ存在するものだ。超常的な力を宿す、神秘の塊。

「や、やばい……！」

あんなものを喰らってはただでは済まない。

俺は力を得たにせよ、結局ちよつと変わった人間に過ぎない存在だ。

ただの矢に貫かれただけでも相当まずいだろうと言うのに、あんなものが直撃したら、体ごと吹き飛んでもおかしくない。

何とかしてかわさなければ命の保証は無い……。

急いでチルノが放った弾幕の隙間を探そうと試みるが周りを見回して絶句した。

「……！？」

弾幕が、止まっている。
まるで空気中で凍結したかのように、その動きを失っていた。
色彩も失われ、鮮やかな極彩色だった弾は抜け落ちたような白一色
に変わっている。

それだけならまだよかったが、更に悪いことに、俺の周りは弾幕で
固められて殆ど身動きが取れない状態になっていた。

バーフェクトフリーズ
完全凍結。

それが意味する所を、今になって思い知った。

「いつけえい！」

黒と白の閃光が放たれた。

二つの光はチルノの弾幕を容易く蹴散らし、俺を射抜こうと迫る。
今からスペルカードを出しても迎撃には間に合わないだろう。
こうなつては仕方がない、多少のダメージは覚悟で弾幕を正面突破
するしか！

「喝！」

気合いの声に重なって、覚えのある爆発音が耳に届いた。

目の前は一瞬だけ真っ暗になり、二本の矢も弾幕も消え失せ、いき
なり足が地面をとらえた。

心構えができておらず地に片膝を着いた俺の側には、頼もしい相棒
が涼しげな顔で立っていた。

出石小刀を抜き放ち、冷たい光を宿したスミレ色の眼で敵を射抜い
ている。

「主、大事ないか？」

「ああ、悪いな閃珠」

「礼には及ばぬ。主を守るのは当然のことよ」

テレポート、か。

本当に便利な能力だ。

こいつがいるだけで、もう大抵はどうにかなりそうな気さえしてきた。

「主、背は私が守る。主は思うがまま戦場を駆けよ」

彼女は俺と会話を成立させながら、チルノ、スターを眼力だけで威圧している。

そしてアリスはサニーとルナを一手に引き受けながらも、なお余裕の表情で応戦していた。

彼女等にとって、チルノ達はその程度の敵なのか？

だとしたら、そいつらに苦戦してる俺が閃珠を形式上だけでも従えてて良いんだろうか。

こんな状態では自分がすげえ情けなく思えてくるし、最悪これからずっと閃珠に頼りっぱなしになるかもしれない。

このままでは、駄目だ。

自分の身は、自分で守るのがルールだろ？

「閃珠、アリスと一緒に三妖精の相手をしてくれないか？俺は馬鹿と一騎討ちで決着を着けたい」

彼女は一言も自分の意見を言わずに頷いた。

ただアリスに報告だけ残して、スターの元へと駆けていった。

「アリス殿！私がスター、主がチルノを引き受ける！貴公にはそのままサニーとルナを頼みたい！」

「了解したわ。あなたたちも気を付けなさい。あの子たち、他にもおかしな武器を持って来てるみたいよ」

「他にも？」

成る程、チルノはいつの間にか金色に輝く三ツ又の槍を持っていた。恐らくルナとサニーも、スターが使っていた弓矢と同じようなものを持っているのだろう。

「あと、チルノは妖精にしてはそこそこ強いから、油断はしちやダメよ」

「分かった。ありがとう」

彼女は戦闘を片手間に俺にアドバイスをしてくれた。

こんなこと、相当余裕が無いと出来ないだろう。

やっぱり妖精相手に手こずってはいは駄目、ということか。

俺も頑張らなきゃな。

「ふん、あたいのパーフェクトフリーズを避けるなんてやるじゃない」

一対一となり、俺とチルノは真正面から正対する。

閃珠、三妖精、アリスさんの流れ弾に気を付けながらの会話なので、

あまり集中できない。
むしろこいつは早めに倒して、二人を相手取っているアリスさんに加勢したかった。

ここは挑発してさっさと戦いに臨んだ方がいいな。

「ぐだぐだと面倒な御託はいい。さっさと来いよ、チルノ」

「ごたくつてなに？」

「偉そうで自分勝手な言葉のことだ」

「あたい知ってるよ！そういうの、ゆいがどくそつって言うんでしょ！」

「ゆいさん、よっぼど足が速いんだな」

駄目だ、もっと単純な挑発じゃないと効かねえ。

単純で分かりやすい、小学生相手に使えるような挑発の言葉……。単純な、単純な……。

「……チルノのばーか！さっさと来いよ！」

……自分で言うておいて何だが、もっとましな挑発があったと思う。やばい、高校生にもなってこんな挑発するの、こっちが恥ずかしい。小学生どころか幼稚園児レベルじゃねえか。

「こんのお、馬鹿つて言うな！あたいは天才なんだから！」

うわぁ、通じるとは思わなかった。

チルノに効いたからいいけど、俺だったら逆に笑っちゃうだろうな、こんな挑発されたら。

ともあれ、チルノは俺に明確な敵意を向け、重そうな槍を構えた。明らかに体躯と釣り合っていない武器を持って、何をするつもりだ？ 近接戦ならテイルフィングを使って決着を着けられそうだが、それならあの馬鹿のことだ、もう突っ込んできてるだろう。出石小刀みたいに遠隔攻撃が出来るのかか？

あれこれ予測を立ててみるが、チルノはその全てを裏切る行動をとった。

「そう、れえい！」

その槍を、地面に突き刺したのだ。咄嗟ひしとに身構えるが、チルノにも槍にも変化はない。何なんだ？ ただのハッターリか？

「主！そこから離れよ！」

「お、おう！」

閃珠の叫び声に、慌てて後ろに飛びのく。その判断が、俺の身を救った。

「っ！？」

亀裂。

何も無い地面に不自然な線が走る。

地の僅かな揺れを感じたので地震かと思ったが、それは違った。直後、それは卵の殻を破るように容易く地面を突き破り、豪快に水飛沫を飛ばしながらチルノと俺の間に立ちはだかった。水流だ。

正しくは、水竜。

巨大な竜を象った、水の奔流だった。

「あーはっはっは！びっくりしたでしょ！あたいつてばさいきよーね！」

竜の影からチルノの高笑いが聞こえてくる。

……悔しいが、とても言い返せねえな。

こんな化け物、どうしろってんだよ。

「やっちやいなさい、アクアドラゴン！」

チルノが命じると、物言わぬ竜が鎌首をもたげた。

こんな奴と真つ正面からやり合うなんて御免だ。

逃げるが勝ち！

奴が地面に体当たりしたのは、俺が後ろに飛び退いた直後だ。

頭が砕けて辺りを水浸しにしたのを見て、一瞬死んだかと思ったが、それは楽観的すぎたようだ。

数秒の間に飛沫が集まり再生し、再度突進してきた。

「くっそがあ！」

その顔面に思いっきり回し蹴りを放つ。

その成果を見る限りでは、俺は最大限に筋力を高めると、人間には不可能だろう打撃力を持つようになるらしいことが分かった。

竜の頭が吹き飛んだのだ。

頬が削れるとか、そんな生易しいもんじゃない。
まさに爆砕。

頭部だけが跡形もなく消え去った。
その成れの果てである水滴は四方に雨を降らせ、土に染み込んでしまった。

「やつ……た、か？」

ただの柱のように棒立ちになった胴体を見て、二度目の淡い期待を抱いたが、そんな甘いはずはない。
頭がまた再生し始めた。

今度は首が二又に分かれている。
二頭竜だ。

しかし、それだけでは終わらない。
腹部、俺の真正面にあたる部分から、突如として鉄砲水が吹き出した。

全く予測しなかった一瞬の攻撃を避けられる訳がない。
巨人に腹を蹴り飛ばされたような重い衝撃を受け、俺は後ろに吹き飛んだ。

「ぐはっ……！」

木に叩きつけられ、目の前に星が飛ぶ。
明暗や色彩が滅茶苦茶の目は、それでもかろうじて機能してくれたようだ。

二頭竜が俺に大口を開けて迫ってきている。

「まだまだ！」

背中からぶつかっても、この翼は傷一つ付かないらしい。

全く問題なく広がり、俺を空へと運んでくれた。

またも突撃を避けられ、盛大に水飛沫が跳ねる。

二頭の方だけ回復も遅れるようで、地上でふらふらと首を揺らしていた。

ここだ。

再生する前に全身を破壊すれば、或いは倒せるかもしれない。

なら、狙うのは再生を待つこの瞬間だ。

打撃では素早い攻撃が可能だが、どうしても当たる範囲は小さくなる。

ブリューナク、ティルフィングは威力、神力消費の両面で申し分ないが、たった二枚しかないので簡単には使えない。

なら、残る選択肢は一つ。

弾幕。

妖夢曰く、弾幕は指示通りに出せるらしい。

他の五人から一々命令が聞こえないのだから、頭の中で念じるだけでも良いはずだ。

能力を使うときにイメージを浮かべるような感覚だろうか？

何にせよ、やってみれば分かることだ。

「……」

チルノが放つ氷柱を避けしながらイメージを練る。

イメージするのは、右腕から放たれた極太のレーザーが竜をぶち抜く光景。

光が竜をそのまま包み込んでしまうような、巨大な光だ。

神力の消費もかなりの量になるだろうが、それでも構わない。

中途半端に威力を弱めて失敗するよりは良い。

とにかく大きく、強く。

他はどうでもいい、威力だけを追求する。

「っっ……」

神力の使いすぎか、空中に留まることが難しくなってきた。体の制御が効かないせいで氷柱が何本か体を掠めた。

代わりに、右腕が燃えるような熱さを持ち始める。

神力の生成を活性化させた時と感覚は同じだが、その強さは前の比ではない。

右腕を火で炙っているようだ。

これ以上溜め込んだら腕がもたないだろう。

しかし、これだけ使えば十分だ。

この力全てをそのまま叩き付けてやれ。

覚悟しろよ、化け物！

「っおおおお！」

拳を竜に向けて突き出す。

勿論腕は空を切るだけだが本命はそこから放たれた弾幕、レーザーだ。

イメージ通りとまではいかなかったが、一軒家ぐらいなら丸々ぶち抜けそうな威力だ。

頭を失って動けない竜は、これをもろに喰らった。

奴の全身がもれなく吹き飛び、砕け散る。

木々を濡らしていく様は、森に潤いを与えるスプリングラーのようだ。

神力を限界まで注ぎ込んだかいあって、地面に小規模なクレーターまで拵えていた。

これだけやれば、流石に復活できねえだろ……。

チルノは俯いていて表情は見えないが、肩を震わせていた。

それだけあの神器に自信があったのだろうか？

そんな彼女を見てみると少し罪悪感が襲ってきたが、やらなければこっちが殺られていたし、もうしょうがない。

せめて終わった後に謝っておこう。

チルノとの戦いは終わっていないが、あんな状態の女の子に追撃できる程、俺は外道な性格をしていない。

先に三妖精を倒した方が良さそうだ。

このままアリスさんや閃珠の援護に行っても足手まといだから、着地し、神力の生成を活性化させる。

「く、ふふ、あは、あーはっはっは！」

「え？」

油断ならないからと一応様子を見ていたチルノが、大声で笑い始めた。

何処にも落ち込んだ風はなく、むしろ楽しげだ。

もしかして、笑いを堪えてただけか……？

それなら、何故笑っていられるんだ？

「何がおかしいんだ？自慢の竜が倒されたつてのに」

「馬鹿ね、倒されてなんかないわ。目の前をよく見なさいよ」

「目の前？」

当然、目の前にはチルノがいる。

その間には何も無い。

時々五人の流れ弾が通り過ぎるくらいだ。

少し前方には竜が残した水溜まりがあるが、他は特に変わったことはない。

「水よ、集まれ！」

チルノが再び黄金の槍を地に突き刺した。

もう一度地面を突き破って現れるのかと思ったが、足元には何の変化もない。

なら、やはり目の前？

「……は！？」

目の前には、大きな変化が起きていた。

水溜まりは綺麗に消えて、その上空に泥や木屑で濁った水が浮かんでいる。

生き物のように絶えずうねうねと蠢くそれは、見ていてあまり気分が良いものではなかった。

形は微生物のアメーバに見えなくもないが、問題はその大きさだ。

でかい。

とにかくでかい。

学校のプールの水がそのまま浮いてきても、これほどでかくはならないと断言できる。

これに覆い被さられたら、まず助からないだろう。

さっきの竜よりも一回り大きい。

「おいおい……」

ここまできたら、さすがに気付く。

俺は大量の神力を無駄使いた上に、相手を強化してしまったのだ。もう、やるせない。

あれだけの神力をぶつけて倒しても、更に状況が悪化するとは。

巨大アメーバは縦に伸びていき、太さを増し、頭を、角を、目を牙を作り出していく。

隙だらけだが、ついても無意味だ。

ただ攻撃するだけでは、こいつには勝てない。

俺だって、出来るものなら男らしく真つ向勝負で戦いたいが、それでは時間稼ぎにしかない。

崩れては再生、崩れては再生の繰り返しだ。

相手が無機物である以上、持久戦は確実にこちらが不利。

それに何より、時間をかけすぎれば次の配達が遅れてしまう。

さっさとチルノ本体を仕留めればいいのだが、さっき頭の再生中に鉄砲水が攻撃してきた以上、迂闊うかつに動けない。

一から形を作るからか、再生はまだ半分しかできていない。頭がアミーバから突き出ているような状態だ。竜が吠えるように大口を開けた姿に、少し背筋が寒くなった。

紫やルーミアは、人の姿をしていたが、それがどれだけありがたいことか、今身に染みて理解した。

化け物然とした姿は、それだけで人を威圧する。紫には遠く及ばないが、こいつも十分に怖い。

強さにしても、今の俺にはつらい相手だろう。

体格差は歴然、ダメージを与えても水で構成された体は数秒で復活する。

相手がダメージを受けないのでは、物理攻撃、弾幕、スペルカードだって無意味だ。

どうやって攻撃すればいいんだ？

「あはは、何も打つ手がないんでしょ？そのまま間抜けに突っ立つてなよ、ははは！」

チルノがいかにも痛快そうに笑っている。

あの馬鹿、ちよっと懲らしめてやる必要があるそうだな。

しかし、打つ手がないのも事実。

熱くなつては相手の思いつば、限られた時間で冷静に対策を打たなきゃ負ける。

あの水の化け物を倒す方法を、考えるしかない。

「……………水？」

待てよ？

あれ、全部水で出来てんだよな？

ならば他の攻撃、あいつだけに通じる最高の攻撃がある。

俺にしか出来ねえし、まだ出来るかも分からねえが、この方法なら倒せる。

安全に、しかも確実に。

しかしこんな方法をパツと考え付くとは、今日の俺は冴えてるかもしれねえな。

「ふっふっふ、今度こそ捕まえるんだから！行け！」

チルノの号令と共に、完成された巨大な竜が俺を飲み込もうと迫った。

踊る尾から水飛沫が宙高くまで跳ね上がり、朝日を受けて輝く。

そうして光に包まれた水竜は、俺を喰らい尽くそうとしているのに少し美しく感じられた。

飲まれれば窒息は確実。

それにあれだけの勢いと質量だ、体当たりだけでも死ぬかもしれない。

しかし、今度は逃げない。

「覚悟しろよ、傀儡かいらい！」

第二十一話 輝く清水と煌めく黄金（後書き）

バトルはやっぱり書いてて楽しい。

いつまでも厨二な私にはたまらんです。

さて、まさかの後半へ続く。

来週もチルノ戦です。

みかけたら読んで下さいね！

それでは、ありがとございました！

第二十二話 約束の証

先の戦いで学習したのか、水竜は身を捨てた突進ではなく鉄砲水を至近距離から放ってきた。

俺は横っ飛びにそれを避け威嚇に少量の弾幕を想像して放つ。

瞬間的なイメージでは上手く狙いを定められず、真っ白な弾幕が適当にばら蒔かれたが、ラッキーなことに数発が顔面にクリーンヒットした。

顔が崩れるが、またうねうねと水が欠けたところを補完していく。

「無駄無駄！また復活するだけよ！」

もう勝ちを確信したような最高の笑顔を浮かべてやがる。

んなこたあ分かってるっての、あの馬鹿。

チルノが放つ弾幕に気を配りながら、更に竜の動向まで見ておかなければならない。

かなり辛い状況だが、あと少しの辛抱だ。

神力が最大限に生成されるまで。

戦うことで初めて分かったが、俺の能力は戦闘に使う場合とにかく神力を食う。

人外の身体能力に追い付くため、筋繊維は常時活性化状態。

飛ぶためにもイカロスの翼を使うし、弾幕は言うまでもない。

俺の神力は元々体に宿っていたものではなく、イカロスの翼から吸収した物だ。

今でこそ翼は背中にくっついていているが、元は俺の体ではない。

つまり俺の神力は、結局別々だった物から借りているに過ぎない。

同じものでも、他人のものはどこか使い辛い。

それと同じように、俺もまだこの力には慣れておらず、生成もあまり早くは出来ないのだ。

翼自体を動かすのは慣れたのだが、中々上手くはいかない。

何とも歯がゆいが、今の所打開策は一つしかない。

回復さえ出来れば勝てるのだから、今は焦らず、逃げ回る。

「それ、もう一回行けえ！」

また数秒の間を経て、真っ直ぐな狙いの放水。

飛んだ方が楽なのだが、それで神力を消費しては本末転倒だ。

活性されている筋力を活かして思い切りジャンプし、さつき閃珠が木の上部だけ斬り倒した切り株の上に着地する。

この高さ2、3mはあるんじゃないか？

能力使えばこんなに跳べるのか、俺……。

「甘い！」

「うおっ!?!」

そこからまた跳躍し、空へと飛び立つ。

そのすぐ下を、大樹のようなでかさの尻尾が通過していく。

狙いを外した尻尾はその軌道上にあった枝を残らずへし折り、今は欠けたところをまた再生していた。

あんなものを叩きつけられていたら、全身の骨が砕けてもおかしくないだろう。

……つくづく恐ろしい化け物だ。

「もう、何なのよあんた！逃げてばっかじゃない！」

チルノが地団駄を踏みながらこちらを睨む。

よし、この展開はありがたい。

このまま動かずに神力生成に集中すれば、然程時間はかからねえだろ。

「仕方ねえだろ？どうしようもねえんだから」

適当に返事しておき、手頃な木の上に着地してから横目で閃珠とアリスさんの様子を窺う。

閃珠はスターを仕留めたのか、あの輝く和弓の弦を引き絞って弾幕を避けながらルナを狙っている。

袴を着ているだけあって、凄く様になっており見た目も似合っていた。

時折レポートを使ったり矢を出石小刀に持ち替えて弾幕を放ったりして、上手く相手を攪乱している。

全身びしょ濡れで泥も跳ねてる俺とは雲泥の差だ。

俺もあんな風に華麗に戦えたらなあ……。

一方アリスさんはサニー相手に戦っているが、俺の視線に気付くと軽く手を振ってくれた。

口元には薄い笑みがある。

……遊んでる？

「何よ……、あんたも、他の人間や妖怪と同じってわけね」

「おいおい、どういう意味だ？」

俺は彼女の予想外の発言に少し面食らってしまった。

他の人間や妖怪と、同じ？

見た目や能力のことを言ってるんじゃないことは分かるが、こいつは一体何が言いたいんだ？

チルノは爪が食い込むほど強く拳を握り、憤怒の形相で歯噛みしている。

恐くはないが、ここまで怒らせるとヤバそうだ。

何で怒ってたんだ、あいつ？

俺が逃げてばっかだから苛ついてんのか？

「もういいわ。あんなんか、ぶっ殺してやる！」

ぶっ殺すって……。

まずいな、これは本気で逆鱗に触れたらしい。

全く触った覚えはねえんだがなあ。

まあいい。

俺もある程度神力の生成が済んだところだ。

消費無しの状態からなら、数秒で生成を終わらせることくらい簡単だ。

さっきから散々追い立てられた分、今度はこっちから行かせてもらうか。

「五光」

木から飛び降りてカードを取り出し、槍を召喚する。
しかしこのまま投擲しても意味がないので、更にブリューナクの神力生成を活性化させる。
より高電力、より高電圧にするために。

「ふん、偉そうにしておいて結局だんまりじゃない。そんな口も利けなくしてやるわ!」

予想通り、竜がまたも突撃してきた。

ありがたいことにチルノは頭に血が上っているからか、弾幕を放っておらず竜だけを動かしている。
これならいくらか楽に戦えるな。

何度も同じ手を使っていたら、相手に慣れられてしまう。

俺もその例に漏れず、大分竜の動きが見えるようになっていた。

怖がって大きく避けちゃ駄目だ。

限界まで引き付けて、最小限の動きで避ける。

相手に隙を与えず、一瞬でケリをつける。

全神経を研ぎ澄まし、奴の大きさと避けるべきタイミングをはかる。
俺は急速に近付いてくる竜の頭を仰視して、足に力を込めた。

待て……まだ……今だ!

「はっ!」

左足で思い切り地面を蹴り右に飛ぶ。

足先こそ掠めたが、その巨体が当たるギリギリの所で避わすことが

できた。

狙うのはがら空きになった胴体だ。

竜はそのまま通過していくが、ここを逃すわけにはいかない。

俺は着地した右足でまた地面を蹴った。

槍を持った右腕を、後ろに引いて。

「おおおおお！！！」

膨大な神力と共に、その胴体に槍を突き刺した。

「え……？な、何？何のつもり……！！？」

竜に対して物理攻撃は意味がないのに槍を突き刺した俺を見て、チルノは初めこそ困惑していたが、その表情はどんどん驚愕の色に塗り替えられていった。

彼女が絶句するのも無理はないだろう。

あんなにでかかった竜がどんどん小さくなり、消えようとしているのだから。

俺は槍を突き刺したまま動いていないので、本当に竜が独りで消えているように見えるだろう。

アイツには、その理由も分からねえよな。

電気分解。

化合物に電圧をかけることで酸化還元反応を引き起こし、科学分解する方法。

詳しいことは知らねえが、小学校か中学校で実験として水の電気分解を行なったのは覚えている。

俺はこれを思い出し、折角ブリューナクがあるんだからやってみようと考えたのだ。

勿論こんな莫大な量の水を分解するのは時間がかかるので、能力を利用して酸化還元反応を最大限に活性化し、分解スピードを爆発的に速めた。

本当はここからブリューナクを投げて決着したいが、これで火が出たりしたら森を吹き飛ばす大爆発が起こりかねない。

俺はまだブリューナクをカードに戻せないから、水が槍を包めるギリギリまで分解してから、もう一つのスペルカードを使って強制的に解除する。

「破滅、コスト・オブ・グロウリー……！」

槍は戻り、紅い瘡気を纏った漆黒の長剣が姿を現す。

同時に体全体を締め付けるような痛みが襲うが、そんな程度で躊躇してられない。

神力はきっちり生成してあるのだから、少しぐらい剣に食わせても大丈夫だ。

剣の効果でさらに飛躍した身体能力で、我に返ったチルノに接近する。

彼女もカードを取り出し、早口で叫んだ。

「氷塊、グレートクラッシュャー！」

飛び上がった彼女の手の上に、巨大な氷の塊が出現した。

一般乗用車くらいはありそうな、鈍器として使うには過剰なでかさだ。

そのまま頭を狙って振り下ろされた必殺の一撃。

俺はそれを避けず、剣で一息に薙ぎ払った。

伝説にまで語られる剣が、たかが氷の塊に負けるはずはない。

ティルフィングはその長い刃と立ち昇る瘴気で氷塊を容易く真つ二つに裂き、攻撃として成立しなくなった氷の残骸は消えていった。

「う、そ……」

当たると確信していたのだろう。

それ故に、ここまで近づいてしまった。

今俺が剣をもう一度逆方向に振れば、チルノの胴体は真つ二つだ。

「チルノ、俺の勝ちだ」

しかし妖精だろうが妖怪だろうが、一昨日まで一般人だった俺に殺せる訳が無いし、そんなのこっちから願ひ下げだ。

だから俺は刃を振ると見せかけて止め、彼女に降参を促した。

「あ……うう……」

チルノは放心したようにペタンと膝をついて、俯いてしまった。

今度こそ、終わったな。

未だにティルフィングが消えないので処理に困っていると、独りで消えた。

効果時間はもう少し長かった筈だが……消えるよう念じれば消えるのか？

なるほど、これである程度使い勝手も……。

「うわああああん!!」

「うおおっ!?!」

座り込んでいたチルノが、いきなり大声を上げた。
今、声音に不穏な物を感じたのだが……もしかして。

「うええええん、うあああ……!!」

やっぱりか……。

やばい、がち泣きだ。

小さい子って、ほんとどう扱っていいのか分からねえな。

妹でもいればこんな時どうすればいいのか分かるんだろうが、生憎俺は一人っ子だ。

そもそも俺、泣かせるようなことしたか？

さっきまで元気有り余ってたのに、何で今度は泣いてんだ？

どうしよう、誰か助けてくれない？

「何なのよ!手加減して、見下して、その何が楽しいのよ!あた
い、頑張ってるのに……!!」

て、手加減？

俺は一杯一杯で手を抜く余裕なんて微塵も無かった。

そんなことをしたら俺がやられていただろう。

なのにこいつは、何を勘違いしてるんだ？

訝しむ俺をよそにチルノは正体もなく号泣している。

あんなに気の強そうな彼女が、唇を噛み締めて拳を握りしめている。

「人間も妖怪も、どいつもこいつも、あたいのこと馬鹿にして……！妖精だからって舐めてかかって、誰も本気で相手してくれない！何で！？何でなのよお……！」

……そういえばアリス、チルノを妖精にしては強いつて言ってたな。こいつ、妖精っただけで格下に見られてんのか。

それが正当な評価かどうかはさておき、自分の力を認めてもらえないことはとても悔しい。頑張って頑張って、誰にも負けないってぐらい努力しても無駄になる。

それでも諦めずに見返してやろうと頑張り続けて、心を磨り減らしていく。

こんなことでは、耐えきれずに心が折れるのは時間の問題だ。

彼女がどれ程努力したのかは分からない。

だが、ろくに努力もしていないことに対して、真剣に涙を流せる人間なんていない。

自分が懸ける思いが強いからこそ、その不実にも悔しくもなるし、悲しくもなる。

だから彼女の涙は、そのまま努力の証だ。

限界まで耐えてきたが、ついにその心が折れかけている。

そんな彼女を放っておくのは、あまりに報われない。

安い同情だが、それで少しでも彼女の気持ち救われるかもしれないなら、する価値はあるんじゃないか？

「チルノ、他の奴らは知らねえが、俺は違つぞ」

「何が違つたのよ……。本気出したら勝てるのに、逃げ回ってばっかで、最後に情けまでかけて……。！」

「勘違いするな、あれが俺なりの戦い方だよ。それでも納得いかないのなら、明日でも明後日でもまた戦おう。勿論本気でだ」

「えつく……。本、当？」

俺はしつかりと頷いた。

同情だけなら、誰でも出来る。

本当に人に信用されたいならば、まずは行動で示すこと。

あまり口が達者じゃない俺が、出会ったばかりの人の心を動かすなんて土台無理な話だ。

だから、せめて次に会った時には、今より少しでも信用してもらえようにしよう。

今すぐに信じてもらうのは無理だが、無駄にごちゃごちゃと話すよりは良いと思う。

しかし、結局は俺に対する信用が少しでもないと駄目だ。

今の言葉すら信じてもらえないなら、俺には情けないがなす術がない。

チルノは相変わらず啜り泣いているが、多少は落ち着いてきたようだ。

ここでやっと回りを見渡してみると、どうやら戦闘はとっくに決着していたようで、閃珠とアリスがのびている三妖精の傍らで気まず

そうに佇んでいる。

閃珠はあの和弓と矢を、アリスは銀色に光り輝く剣と真つ赤に燃え盛る扇を携えていた。

あれが三妖精が持っていた武器か。

扇が武器にカウントされるかは謎だが、鉄扇なんて代物があるんだから多分戦闘にも役立つのだろう。

「あー、お取り込み中な所悪いけど、そろそろ仕事に戻る事をお薦めするわよ、配達屋さん？」

アリスが苦笑いをこぼしながら肩をすくめた。

確かに、もう引き際かもしれない。

かけられた言葉は少なかったがこれ以上何か言っても蛇足だし、伝えたいことはちゃんと伝えたから、あとは彼女がどう応えてくれるかだ。

もう太陽は東の空にすっかりと顔を出している。

空を見上げる限りでは、今日は気持ちのいい天気になりそうだ。

時計代わりの携帯を開くと日の出から一時間を過ぎていた。

時間はたっぷりあるけど、油断していたら今日のノルマが達成できなくなるかもしれない。

今後、寄り道は控えよう。

「……さて、チルノ。もう俺は行くよ。またな」

彼女はいつの間にか立ち上がっていたが、氷像のように俯いたまま動かない。

放っておきたくはないが仕方なしに別れを告げ、俺はイカロスの翼に神力を巡らせる。

そこで彼女は小さく頷き、黙ったまま右腕を突き出した。そこには黄金の三叉槍が握られている。

朝の日差しを受けて、槍先も柄も等しく黄金色の輝きを放っていた。

「なんだ、もしかしてくれるのか？」

「……勘違いしないでよ。今度あたいが勝ったら、返してもらおうんだから」

彼女は聞き逃しそうなほど小さな声でボソツと呟き、そのままそばを向いてしまった。

顔を見られたくないのか、涙は溢れていないのに俯いたままだ。

約束の証、だろうか。

これで彼女は俺と戦う理由ができる。

それなら、受け取ることを拒む理由はない。

少しは、信用してくれたかな？

そう思うと、自然と顔がほころんだ。

「オーケー、暫くこいつは預かせてもらおう。次の挑戦を楽しみにしてるよ」

チルノはまだ元気がないがこれだけ強気な発言が出来るなら大丈夫だろう。

幸い傍に友達もいるしな。

俺は安心して彼女から離れて、二人の共闘者の元へ足を運んだ。

「色々とお疲れ様。結構やるじゃない」

「ご苦労様だ、主。流石と言うべきか、見事な戦いであつたぞ」

「いや、俺はそれほどでもないさ」

謙遜なんかではなく、本気でそう思った。

彼女等は俺の戦いを見ながら、尚且つ俺より早く複数の敵を撃破しているのだから。

俺は、まだまだ未熟。

「それよりね、翼。道案内の代わりにお願いがあるんだけど」

「ああ。朝早くから訪問したし、ある程度の我が儘は聞くよ」

そう答えると、アリスは傷一つない真っ白な腕で、銀色の剣と燃える扇を差し出した。

「悪さしないよう、あの子達から武器を奪つたの。それはいいんだけど、正直処理に困ってるのよ。魔法とは違う理の元で力を生み出しているから、研究対象にもならないし。だから、厄介払いに貰ってくれないかしら？」

断る筈がない。

これでまたスペルカードを増やすことが出来る。

今持っているスペルカードと黄金の槍を含めたら、これで五枚。それだけあれば、自己防衛には十分だ。

でも、これだけ強力そうなものをなんで手放すんだろう？

「そりゃ大歓迎だが、アリスは使わないのか？」

「まさか、私には人形だけで十分よ。使えないこともないけど、どうにも合わないからいらわないわ」

「合わない？」

「こつという道具には使用者との相性があるのよ。妖精がこんな強力なもの扱えたのも、相性が多分良かったからでしょうね。でも」

アリスはここで言葉を区切り、俺を呆れたように見てから再び続けた。

「あなたは相性の概念から逸脱していた。その翼も、雷の槍も、黒い長剣も、力をしっかり引き出して使いこなしていたわ。あれだけかけ離れたものを全部扱えるんだから、この二つだって多分上手く使えるでしょう？」

紫はそれが俺の能力の一つだと言った。

聞いただけではどの程度の能力なのか分からなかったが、アリスの口振りからすると結構凄そうだ。

活性化も合わせ、俺はどうやら能力には恵まれているらしい。

気は進まないが、宝の持ち腐れにならないよう、対妖怪戦闘の腕は磨いていくべきかな。

「まあ俺が使えるか云々はともかく、ありがたく頂戴するよ。それじゃアリス、改めて道案内を頼む」

「任せなさい。魔理沙の家でよかったわよね？後ろから付いてきてアリスが飛んだのを確認して翼を広げたとき、後ろから閃珠の声がした。」

「主、貴公は己が職務も忘れたか？」

振り向くと、彼女は俺が里から運んできた本の巨大袋詰めを指差していた。

……俺は魔理沙の家に、何をしにいくつもりだったんだろう。

「主……」

「……みなまで言っな」

こんな自分が少しだけ嫌になりながらも、俺は黙って袋を担いでアリスを追ったのだった。

第二十二話 約束の証（後書き）

ちよつと話に色々と無理があつたかな？

難しいものですね……。

とりあえず戦利品を幾つも抱えて、VSチルノは終了。

次回からは舞台を移します。

それではまた次週、2010年最後の更新にてお会いしましょう。

第二十三話 紅魔の宴（開幕）

「あー……しんど」

「気をしかと持て、主。これが最後であろう？」

「そうだな。じゃあ最後ってことでお前が荷物を持つと言うのは」

「……すまぬが、重さの許容範囲を超えている」

「あっそ……」

夕暮れ。

下らない雑談を交わしながら、最後の配達場所へと向かう。

今日は魔理沙の他にも霊夢や道具屋さん、その他明らかな妖怪のお客様に荷物をお届けするなど、幻想郷中を飛び回るようになった。里へ戻るには閃珠のレポートを使ったが、まだ行ったこともない場所も多いため行きは殆ど使えず、結構しんどかった。中には妖怪の山の頂上なんていう滅茶苦茶な注文まであったが、なんとか仕事は果たせた（当然椀さんや他の天狗に追い回されたが、どうやら許可が下りていたらしく途中で謝ってそそくさと帰っていた。とんだ追われ損だ）。

そして今、俺はゆっくりとしたスピードで最後の目的地へ向かい、霧の深い森の上を飛んでいる。

両手には、およそまともな人間が持てそうもない量の荷物がぶら下がっていた。

野菜、米、肉等の食品、食器に本、掃除用具等の生活用品、e t c、

e t c……。
総重量何kgだよ？

「主、目的地は何処であつたか」

下を一定感覚でレポートしている閃珠が尋ねた。

その右手には昼の小休止の合間に急いで作ったスペルカードが握られている。

余程嬉しかったのか、今日は半日中ずっとカードを眺めっぱなしだった。

これに加えて俺の新しいカード三枚を作っていたせいで配達が遅れそうになったが、これだけ喜んでもらえればやったかいもあつたつてもんだ。

「こうまかん、だったか。字は紅の魔物の館だな」

物騒なことこの上ない。

亡霊が住む屋敷に居候している人間が言えたことじゃないが。

「なら、どうやら着いたようだ。あれで間違いあるまいよ」

「あれ？ああ、あれか」

霧の中から、正面に真っ赤に染められた邸宅が姿を現した。

確かに、これ程に紅い建物は他に無いだろう。

窓はかなり少なく陰鬱な雰囲気漂っていて、いかにも悪魔が住処としそうな場所だ。

目を凝らし、館の中央に聳える時計塔で時刻を確認する。

午後六時過ぎ、か。

「セーフ、かな？とりあえず柵を飛び越えるのもあれだし、門から入るか」

「了解だ」

高度を下げ、門の前に着地する。

両手の荷物を下ろして一息ついてから、俺は大きな鉄門を見つめた。

「さて……どうしよう」

ここはインターホンがない世界だ。

こんな豪邸に来て、どうやって自分が来たことを伝えれば良いのかが分からない。

しかし、その問題はすぐ解消された。

「主、あの女はもしかや門番では？」

「ん？あ、本当だ」

鉄門の横、高い石壁にもたれ掛かっている紅い髪の女性がいた。

深いスリットが入ったチャイナ服に、龍の文字が刺繍された帽子を被っている。

中国の方か？

確かに武術とか得意そうな見た目だが、本当に門番なのか。

日本語が通じるかは分からないが、とりあえず声をかけてみよう。

「あの、すみません」

彼女はこちらを無視しているのか、無言で俯いたまま動かない。肩をゆっくりと上下させたまま……。

「……寝てる？」

「そのようだな。まったく職務怠慢とは感心出来ぬ」

根がくそ真面目な閃珠は、門番さんを見て若干ムツとしている。

それは良いとして、これでまた来訪を知らせる方法がなくなってしまった。

少し気の毒だが、起こしてみようか……。

「まったくもってその通りですね、情けない。紅魔館の門番失格です」

頭上から、冷ややかな声。

それと同時に、反応する間もなく門番さんの肩にナイフが刺さる……。

「うぐうつ……!？」

「う、うああ!？だ、大丈夫ですか!？」

う、嘘だろ!？

たかだか居眠りでナイフ刺された!？

門番さんは当然目を覚まして、痛そうに顔をしかめながらナイフを抜いた。

「ぐつ……!何方かは存じませんが、大丈夫ですよ。体は丈夫ですから」

「じよ、丈夫つて！そんな問題じゃ……」

言いかけて、そこで口をつぐんだ。

彼女の肩から、血が出ていなかったからだ。

俺はその違和に既視感を覚え、そしてすぐに思い出した。

文がブリーチナクを腹から抜いた時と酷似している。

傷があの時と同じように塞がったのなら、確かに問題はない。

彼女が妖怪ならば、この程度の傷は楽々修復できるだろう。

でも、だからってそれで良いんだろうか……。

俺が納得いかないままに、ナイフの投擲手と思われる人物が門から出てきた。

白いメイドカチューシャに青と白のエプロンドレス。

銀色の髪はあまり伸ばされおらず、同じ銀の目は綺麗だが何処か冷たい。

見た目と年齢が一致するならば、俺と同じくらいだろう。

彼女は門番さんの肩に手を置き、深く溜め息を吐きながら言った。

「美鈴、貴女いい加減に居眠り癖を直せないかしら？私も貴女を好きで傷付けている訳ではないのよ？」

「うう、すみません咲夜さん……。気を付けてはいるのですが……」

「まあいいけど。それよりも」

ここで彼女はくるりとターンし、俺達に向かって頭を下げた。

「お待たせして申し訳ありません、お客様。配達ご苦労様でした」

あまりの変わり身の早さに俺は少し面食らったが、一応取るべきと思われる対応を試してみる。

「いえいえ、こちらこそ配達サービスをご利用いただきありがとうございます。次の機会も是非、ご利用下さい」

「ええ、勿論ですわ。ところで」

ここで彼女は一旦区切り、好感の持てる笑顔を浮かべてから続けた。前の行動を見ているせいで、同時に不気味さも感じてしまう。

「あなた方に紅魔館の当主である、レミリア・スカーレット様がお会いしたいと申しております……。少しばかり館に寄って頂けませんか？」

彼女の誘いを受ければ、帰りは遅くなる。

しかしいきなり無理なんて言うのも失礼か？

「主、如何する？」

小声で閃珠が尋ねてくる。

「まあちよつとくらいなら良いんじゃないか？閃珠、一応白玉楼に行つて二人に遅くなるかもしれないと伝えてきてくれ」

「承知。暫し待たれよ」

弾けるような音を残して、閃珠が消える。

「あら、瞬間移動ですか？随分と便利な能力ですね」

笑顔のまま、咲夜さんが話しかけてきた。
さっきの冷たい光は微塵も見えない。

「はい。彼女のお陰で仕事が楽になっていますね」

「成る程、配達にはもってこいの能力というわけですか。もう一度
利用しようかしら……。お名前をお聞かせ願えますか？」

「霧崎翼です。相棒は出石閃珠と言います」

「私は十六夜咲夜と申します。この紅魔館のメイド長を務めており
ますわ。その門番は紅美鈴です」

「今後ともよろしくお願いしますね、霧崎さん」

「ええ、こちらこそ」

丁度挨拶を交わした所で、閃珠が隣に現れた。
あの独特の破裂音にも慣れつつある。

「只今戻った。問題はないそうだ」

「お、そうか。では十六夜さん、中へ案内してもらえますか？」

「はい、それでは此方へ。後に着いてきて下さいね。ああそうそう」

彼女はにこりと笑いながら振り返り、笑えないことを門番さんに言
った。

「美鈴、そこにある荷物を食糧庫まで運んでおいて頂戴」

「これだけの量を一人でですか……分かりました」

美鈴さんは項垂れている。

どうやら彼女に拒否権は無いようだ。

そんな彼女に十六夜さんは苦笑していた。

「そう嫌な顔しないの。仕方ないじゃない、力仕事出来るのが貴女くらいなんだから。後でお茶でも淹れてあげるから」

「は、いい、了解です」

とほとほと荷物の方に歩いていく美鈴さんがかなり不憫だったので、俺はすれ違いざまにこう呟いた。

「……今度、愚痴くらいなら聞きますよ」

「……ありがとうございます」

彼女は乾いた笑みを浮かべて歩いていく。

あの人も、苦労してるんだなあ……。

そんな俺たちを余所に、十六夜さんは門を開け、敷地内へどんどん入っていく。

彼女に続こうと一步を踏み出すと、閃珠が唐突に俺の腕を掴んだ。

怪訝な顔で振り向くと、早口で小さく指示してきた。

「前を向いたまま、聞いて頂きたい。お二方から伝言を授かってい

る」

黙って頷く。

そのまま前へと歩き出すと閃珠がさらに話を続けた。

「まずは妖夢殿から、ただ用心せよとのみ。魔の館の名は伊達ではないらしい」

用心か。

しかし今更悪魔だろうと何だろうと、怖がっても仕方ないような気もする。

閻魔様ともお会いしたし。

まあ妖夢が冗談で脅かすとは思えないから、気を付けるようにはしよう。

「幽々子殿からは……意味もなくぼかさされたが一応。懐刀は側にいるから役に立つ。常に手放さぬよう、だそうだ」

懐刀？

俺、そんなもん持ってねえぞ？

懐に納める武器なら……スペルカード？

妖夢と同じく注意しろってことか？

まったく幽々子さんもはつきり言ってくれば良いのに……。

「分かった、ありがとう閃珠」

小声で礼を言い、引き続き咲夜さんの背を追う。

広い庭の中央を横切り、彼女の待つ大きな木製の扉の前に辿り着いた。

「それでは、霧崎様、出石様。お二人を紅魔館へとご招待します。どうぞお入りください」

十六夜さんが大きな扉を引き、俺たちを中へと招き入れる。入ってすぐは大きな広間になっていて、頭上にはシャンデリアが下がっていた。

正面には二階へ続くでかい階段がある。

「お嬢様は二階にてお待ちです。それでは参りましょうか」

「あ、はあ……」

引き続き彼女の後ろをついていき、階段を上る。

「主、何か気に病むことでも？しきりに周囲を見回しているが」

「あ、いや……でかい家だなと思ってな。ちょっと落ち着かないんだ」

庶民的金銭感覚の持ち主たる俺には、この家はでかすぎる。

白玉楼もどっこいどっこいだが、こっちは雰囲気的にも贅の限りを尽くしましたみたいな感じで本当に落ち着かない。

しかし閃珠はいつもと変わらないきびきびとした歩調で、隣を歩いていた。

「家の大小より、其処に住む人の大小こそ肝要。従者を連れている辺り小人ではないようだが……主、所有物ごときに御心を惑わされぬよう」

「あ、ああ」

閃珠の言うことはずれているような気もするが……確かにキヨロキヨロしているのもみっともねえか。もっと堂々としていた方がいいよな。

窓のない暗く長い廊下を、奥へ奥へと進んでいく。

そして一つの扉の前で、十六夜さんが立ち止まった。

「この部屋にて、お嬢様がお待ちしております。失礼のないようお願いしますわ」

「分かりました」

紅の悪魔の館。

その館主は、当然悪魔だろう。

どんな力を持っているのかは定かではないが、妖夢や幽々子さんから言われたように用心はしておこう。

「咲夜です。お客様をお連れしました」

「いいわ、入りなさい」

十六夜さんがノックをすると、中から少女の声が。

「では、失礼します。お二人もどうぞ中へ」

「はい、失礼します」

「失礼任る」

十六夜さんに続き、俺、閃珠の順に入っていく。その部屋の奥で、ゆったりとソファに座る少女が牙を見せて笑っていた。

この館と同じ、赤い瞳。

髪は青く、冷たい氷のような印象を与えられる。

そして背中には、俺と対照的な黒い蝙蝠の翼。

彼女は玉座に座る王女のように、頬杖をつきながら妖しげに微笑した。

「我が紅魔館にようこそ。歓迎するわ、人間。まずは二人とも座りなさい。咲夜、お茶の用意を」

「畏まりました」

レミリアさんの命と共に、十六夜さんが閃珠のように消える。あの人も瞬間移動が出来るらしい。

俺と閃珠がテーブルを挟んで向かいのソファに座ると、レミリアさんが尊大な口調で自己紹介を始めた。

「多分咲夜から聞いてるでしょうけど、一応名乗っておきましょう。私は永遠に紅い幼き月、レミリア・スカーレット。吸血鬼よ」

「霧崎翼です。隣の相棒は出石閃珠と言います」

「翼は新聞でなら見たことあるわね。よろしく、翼、閃珠」

「よろしくお願ひします」

「宜しく頼み申す」

二人で頭を下げる。

見た目は幼いが、彼女は自らを吸血鬼と言った。

ならば彼女から見れば、俺なんてまだまだひよっこだろう。

そういったことを気にしない連中ならともかく、それ以外には敬意を払っておくべきだ。

しかし彼女も、どうやらそうだった連中らしかった。

「敬語なんて使わなくていいわよ、従者じゃあるまいし。私のことはレミリアでいいわ」

発言もそうだが、物腰からも余裕が溢れている。

成る程、閃珠の言う通り、小人ではなさそうだ。

では、そんな者が俺に何の用だろうか。

「そうか。それじゃあレミリア、俺に何か話があるんだろう？なら、それを始めてくれないか」

俺が真剣に問うと、レミリアは楽しそうに笑って首を振った。

「ふふ、面白いことを言うじゃない。別に大事な話なんて無い、強いて言うならあなたという外来人に興味を持ったから、話を聞きたい。それじゃあ駄目なのかしら？」

「え？いや、駄目と言うことはないが……何を話せば言いんだ？」

俺はそんな面白い人間なのか？

幽々子さんにも言われたけど、自分ではそう思わねえからな……。

「そうね、例えばその背中の翼。外来人なのにどうしてそんな物が生えているのかしら？」

イカロスの翼か。

確かに俺が人間だと知っていれば、普通は疑問に思っつよな。

「これは八雲紫に植え付けられた物だよ。元々は生えてなかった」

「植え付けられた？そんな簡単に翼を得られるなら、咲夜にも私みたいな翼を生やせるかしら。黒い蝙蝠の翼を」

レミリアはその姿を思い浮かべているのか、目を伏せて薄く微笑んでいる。

冗談だろうが、普通の人なら中々に怖いジョークだ。

「どうだろうな。ただ、嫌がられるとは思っが」

「あら、どうして？」

「昼夜問わず働けなきゃ、メイドなんて務まらないだろ？吸血鬼じや日中の買い物なんて難しい」

「その為の配達屋さんだろうに。あなたの仕事が増えていいじゃない」
「い」

「あなたの血を出前して欲しい、なんて言い出しそうだから嫌だな」

「お、あなたの血液型がB型ならそれもいいかもね」

「残念、O型だ。因みに閃珠にいたっては血液型が分からない」

視線が左に動いたので言ってみると、彼女はやれやれと溜め息をついた。

「あなた、鋭いじゃない。いや、それ以前に」

眉間を指で押さえ、レミリアは唸る。

「いやに胆が据わってるけど、本当に外来人なの？普通は吸血鬼相手にまともにお喋りなんて、怖くて出来ないよ？」

彼女の言う通りだ。

俺もこの世界に来る前なら、妖怪は恐怖の対象だったろう。しかし今は、妖怪全てが危険なものだとは思わない。

「そんなこと言われても、もう何人もの妖怪に会ってきたし今更怖がる方が難しいな。既に死にかけた事もあったし話すだけじゃ怖くない」

危険な者もいる。

昨日はそれを思い知らされた。

だが、だから妖怪は敵だと決め付けるのは間違っていると今でも思う。

閃珠、紫、藍さん、妖夢、幽々子さん……。

他にも沢山いるが、皆まともな人間ではない。

しかし、良い人達だ。

「人間か否かなんて大した問題じゃない。俺も妖怪の域に片足を突

っ込んでるようなもんだしな。大切なのは種族関係なしに、どう生きるかだろ?」

だから俺は、目の前の吸血鬼もきつと善であると信じている。俺は偏見なしに、人間と同じように礼儀を考え、ここに来た。

だから彼女にも、俺を対等の存在として見て欲しい。血を吸うなんて真似をせずとも、気軽に話せる相手として。

「……そうね」

レミリアは神妙に頷き、何を考えているのか、俺そっちのけで窓の外を眺め始めた。

目線を追いかけると真っ赤な満月が見えて、少しドキリとした。

紅い悪魔の館には、こんな月が相応しい。

だが人間には、この月は危険な夜の象徴にしか見えない。

まさかとは、思うが……。

期待しながらレミリアを見るが、彼女は動かない。

そのまま少しの間を置いてから、彼女は月を眺めながらうわ言のように言った。

「あなたの運命、少し覗いてもいいかしら?」

「運命を、覗く?」

「そう。既に大きく捻じ曲げられた運命が、どう変化していくか。それを見たいの」

「そう、か」

運命を覗く、か。

未来予知みたいなものか？

そんな突拍子もないことをこの場面で言い出すのだから、多分最初からその為に俺を招いたんだろう。

閃珠は嘘をついたことが不服なのか少し表情が険しくなったが、俺はそう気にしないので彼女の申し出を許諾することにした。

「好きにしてくれ。体を傷付けなきゃならないようなら断るが」

「そんなもの必要ないわ。目を閉じて座っているだけでいい。それじゃ、見せてもらうから目を閉じて」

「あ、ああ」

言われた通りに目を閉じ、じっとしておく。

実を言うと、俺はこういった占い染みたことはあまり好きじゃない。いや、信じないといった方が正しいか。

そんなことで未来が分かるなら、誰だって苦労しないからだ。

しかしレミリアは吸血鬼、そういった能力を持っているのかもしれない。

なら、彼女の望むようにさせてみよう。

「ふうん……ん？」

レミリアの小さな独り言が聞こえてくる。

何か不可思議なことでも見えたのか？

「如何した？主の運命に何かあったか？」

「ちよつと黙つてて」

閃珠も気になつたらしく聞いていたが、ピシヤリと言い切られてしまふ。

その言葉と口調で空気が少し張り詰めたものになり、後は静寂が俺達を飲み込んだ。

レミリアも閃珠も、もう喋らない。

重い空気の中、ただ時間だけが過ぎていく。

目を開けられないために視界は真つ暗で、この上なく退屈だ。

それに無音の闇の中だと、色々考えてしまふ。

俺は目の前にいるだろう吸血鬼、レミリア・スカーレットを信用したい。だがこれはあくまで俺の願いであり、レミリアの感情とは無関係だ。

俺がどう思つかなど関係なしに、血を吸われ殺されることも十分考えられる。

隣に閃珠が座っているから死ぬことはないだろうが、これで怪我をしても文句は言えない。

……今思えば、妖夢や幽々子さんにわざわざ忠告してもらつたのに目を伏せているなんて、俺はかなり間抜けなんじゃねえか？

こんな調子だから藍さんに自重しろなんて言われるのかもな……。

この世界の常識が欠落している俺には分からねえが、やっぱり一般的には妖怪は忌避すべき存在なんだろうし。

「もう良いわ、目を開けなさい」

「そうか。ところで……どうだった？俺の運命は」

息を飲む程なんだから、何かしら特筆すべき大きな事があったんだろう。

いくら信じないとはいえ、そんな反応をされたら少し気になる。

しかしレミリアは黙ったまま腕を組み、テーブルの真ん中を見つめている。

……俺、そんなに悪い運命が見えたのか？

「……咲夜」

彼女は同じ姿勢のまま、この部屋にいない人物に呼び掛けた。

当然返事はない、と思ったが。

「お呼びでしょうか、お嬢様」

湯気の立ったカップを乗せた銀の盆を片手に、十六夜さんが現れる。瞬間移動って、やっぱり便利だな……。

レミリアはソファから立ち上がり、俺に背を向けながら言った。

「晩餐会を開くわ。翼を案内しなさい」

晩餐会？

えらく唐突だな。

しかしもう遅いし、流石にそれは気が引ける。

ここは遠慮しておこう。

「御意。では霧崎様、参りましょう」

「え？ちよつと待つ……」

静止は無視される。

俺は側に近付いてきた十六夜さんに手を掴まれ、瞬きの間に応接間から姿を消した。

移動先は、パーティーでも開けそうな大広間だった。

奥には舞台があるが、今は血のように紅い幕が下りている。

頭上には豪華なシャンデリアがぶら下がっており、広いこの部屋を明るく照らしていた。

しかし、ある物といえばそのくらい。

隅に並ぶテーブルの山が、今この部屋が使われるときではないことを証明している。

「……十六夜さん？」

今からここで晩餐会を開くとは思えない。

部屋を間違えたか？

しかし十六夜さんは俺から数歩離れた後に、面と向き合ってこう言った。

「ご安心下さい。私のご案内する部屋は、ここで間違いありません」

「そう、なんですか？人数的に広すぎませんか？」

質問を更に投げ掛ける。

彼女は頷く。

俺を見つめる銀の両眼は、どこまでも冷たい。
背筋まで凍らせるような、凍てついた無表情だ。

俺は無意識的に、一步後ろに下がった。

「いえ。広すぎる程度がいいのです」

「……何、故」

俺は、勘が良い。

その上妖夢や幽々子さんから、忠告までもらっていたのだ。
もう、その答えは分かっていた。

しかしそれでも、何故と問うしかない。

本当に、何故……。

「広すぎる方が、戦うには動きやすいでしょう？」

何故、戦わなきゃいけないんだよ。

さっきまでレミリアとも普通に喋っていたのに。
なんでその従者と戦うんだよ。

十六夜さん、否、十六夜は銀のナイフを数本両手に持ち、俺に殺気をぶつけてくる。
完全に殺る気だ。

「不憫ですが……お嬢様の命です、ご容赦ください。闇討ちを仕掛けなかったことを、せめてもの償いとさせて頂きます」

「……やるしかねえのか」

答えはもう殆ど出ているようなものだ。
ならば最善を尽くすためにも、それ相応の準備をしておくべきだろう。

身体能力向上、神力生成強化……。

「あなたが生き残りたいならば。尤も私は、あなたを逃がすつもりなど毛頭ありませんが！」

十六夜の足元が爆ぜる。

こうなつては話など意味を為さない。

生きるか死ぬか、ただそれだけだ。

こんな所で死んでたまるかよ。

俺も生き延びるため背の翼を広げて、十六夜から逃げる形でホール
の扉へと飛んだ。

第二十三話 紅魔の宴（開幕）（後書き）

年の終わりからまさかの開幕。

そんなこともありますわな。

さて、次回は元旦の投稿になるみたいですね。

2010年の読者様、読んでいただきありがとうございます。

2011年も宜しく願います！

それでは、良いお年を！

第二十四話 紅魔の宴（賓客来会）（前書き）

明けましておめでとございます。元旦からの投稿ですが、こゆるりとお楽しみください。

第二十四話 紅魔の宴（賓客来会）

銀のカーテン。

そう形容するのが一番それらしいか。

後ろから迫るナイフの幕。

止まれば針鼠にされそうな殺人弾幕。

一人の少女が投げたとは到底思えない量の凶器が、俺を追走してくる。

これでは出入り口に辿り着いても、開かなかつたら終わりだ。逃げるのが最良の選択だが失敗して死んではもとも子もない。まだ力は有り余っているのだし、賭けに出るには早すぎる。

扉の前で上昇し、ナイフをかわす。

結果それらは壁に嫌と言うほど打ち付けられるが、一瞬で消え去り、再び向きを変えて俺を狙った。

鬼ごっこはまだまだ続くようだ。

「……ちいつ、んなのありかよ!？」

慌ててUターン。

しかし十六夜は最初からそこを狙うつもりだったのだらう、既に同じ高さまで飛び上がり待ち構えていた。

予期していなかった俺は、不用意にも何ら警戒せず無防備な身体を晒している。

これは、まずいか……! !

「戦闘に卑怯も何ありませんよ。勝てば官軍、と云うでしょう!」

「……!?」

目の前にいたはずのメイドはいつの間にか移動し、俺の頭上からヒールを振り下ろしていた。

避けられる筈もなく、そのまま腹を蹴られ床に叩き付けられる。

一瞬呼吸が止まるが、怯んでいる暇はない。

眼前には降り注ぐようにする刃の雨が控えていた。

「……っ、焦土!」

出し惜しみしている場合じゃない。

全力で倒しにいかなければ簡単に殺られる。

懐からカードを取り出し、叫ぶ。

続きを唱える時間はなかったため、召喚した武器、燃え盛る熾天使の扇を倒れたまま横に振った。

起こした風は炎をはらんだ暴風となり、凶刃の壁を容易く吹き飛ばす。

「へえ、面白い物をお持ちなのですね」

無力化されて床に落ちていく自らの武器には目もくれず、十六夜は中空から真っ直ぐ俺を見ていた。

口元の微笑、話しぶりからも、全く余裕が崩れていない事が見てとれる。

まだまだ安心できない。

かなり厄介な相手に噛み付かれてしまったようだ。

「フラベルム、神への情熱に燃える熾天使の扇だ。焼かれたくなけ

れば逃げるんだな」

「笑止ですわね。私は完全にして瀟洒な従者、主人に殺せと命じられた相手に対して背を向けるとでも？」

十六夜は鼻で笑って新たなナイフを周囲に展開する。

彼女の指示一つで銀の雨がまた降るだろう。

叩き付けられたときに受けた傷を残して、かわしきれとは思えない。

正面から纏めて対処するしかないか……。

「だろうな。残念だ、戦わずに終わるかと思ったのに」

「この期に及んでまだそんな戯言を……。もういいです、死んでください」

十六夜の指先が俺を指す。

その一点へ向けて、ナイフ達は一斉に突撃を開始した。標的を突き穿ち、その肉を刺し貫くために。

俺は扇を構えたまま動かず、限界まで集中し機を図る。視界一杯に広がるそれらを引き付け、引き付けて。ただひたすら、機を待つ。

死が迫りくる恐怖にも、耐えて、耐えて。

待つ……！

「……アポストリック！」

時が来た。

ナイフが纏めてスペルカードの射程圏内に入った。

刃が届くのが先か、スペルの宣言が先か……！

「ブラストオ！」

烈風。

空を薙いだ扇から放たれた暴風は無数の火球を引っさげ、眼前に迫ったナイフの群れを容易く払う。

吹き荒ぶ炎の嵐が、ナイフ達を近づけさせない。

二度、三度と薙ぐたびに火球は数を増し、押しきろうとするナイフの軍勢を退ける。

いくら十六夜が増援しようと思駄なことである。

こちらから見ても、奴の顔が歪んでいるのが分かる。耳元でゴウゴウと鳴り響く風に乗る、十六夜の苛立ちが聞こえてきた。

「この……鬱陶しい！」

こちらが優勢。

ならば、一気にカタをつける。

痛みを堪えて立ち上がり、扇を構え、右腕を大きく後ろに引いて。

「……これでも、食らいやがれえ！」

止めに大きく一薙ぎ。

津波のような炎が出現し、風に押されて全てのナイフを飲み込む。

十六夜が用意した銀の刃を突破した後は、炎はすべからず、天を焼き尽くすように十六夜へ向かって殺到した。

使徒の聖なる鉄槌が、悪魔の従者に下る。

「な、馬鹿な……！？」

十六夜の声に重ねて爆音が轟き、衝撃が館を揺らす。

爆炎が奴の体を包み込んでしまい、炎と煙で天井は見えない。彼女がどうなったかも。

しかし、あれを受けて無事な奴はいないだろう。今のうちに逃げて、閃珠の元に。無数のナイフで抉られた扉へ、一步を踏み出す……。

「何処へ行くのです？」

「うおっ、ちい……！」

しかし俺は、そこから宙へ飛び上がらざるを得なかった。そうしなければ、俺はここで死んでいただろう。背後では首をかすめたナイフが、赤い輝きを放っていた。

「くそ……あれでも無傷かよ」

十六夜の身体には傷一つ無い。

服の裾が少し焦げているくらいか。

瞬間移動がどれだけ恐ろしいものか、見せつけられたような気分だ。

十六夜から離れ舞台の方に逃げるが、彼女は追ってこない。

不思議に思いよく見ると、その右手には一枚の紙片。

間違いない、スペルカードだ。

相手もどうやらどこまでも本気らしい。

「幻葬」

幻とされた悪魔を葬る銀のナイフ、幻葬の刃が円を描くように現れ、ホールの中空に佇む十六夜の周囲を回転する。

時計の短針のように回転、回転。

その一本が十六夜の真上、零時を指した時、時は動いた。彼女の元から刃は散り散りに離れ、その切っ先が全て一点を向くように配置される。まるで意思を持っているように、ピタリと俺を狙っていた。その数は、先程の比ではない。軍隊の兵士全員に銃口を向けられたような、圧倒的な数の暴力だ。これは避けられる物じゃない。

「銀火」

だが諦めるにはまだ早い。召喚された銀光の両刃剣は全てを断ち切り消滅させる神の至宝。その聖なる光は巨大な刃を形作り、輝きに腕は包み込まれる。まるで巨人の腕となったかのようだ。例えホルルの端からでも、光の刃は十六夜に届くだろう。こいつは俺が持つ神器の中でも、ブリューナクと肩を並べる最高峰の神格を持つ武器。これに全てを賭ける。

俺の得物を見て十六夜は片眉を吊り上げたが、結局問題なしと判断したようだ。

カードを天に掲げ、宣言した。

「夜霧の幻影殺人鬼！」

引き金は引かれた。

雲霞の如く押し寄せるナイフの軍勢。

飲み込まれれば、当然命はない。

かわすなんて選択肢はとうに消えている、ならばどうするか。そんなことは決まりきっている。

避けられないなら薙ぎ払うまでだ。

こんなところで死ぬわけにはいかない。

俺が死んだら、困る人がたくさんいるのだ。

十六夜も、吸血鬼も、全員倒して、閃珠と一緒に無事に帰る。

絶対に、勝つ。

俺は下がるよりむしろ前進し間合いを詰め、今度こそ逃がさないように鋭く腕を振るった。

剣が作り出した、巨人の腕を。

「インビンシブル・レイディエンス！」

不可避の剣、その不可避の所以は大きすぎる攻撃範囲にある。

スペルを唱えて力を解放すると、銀の炎剣は広間の壁を切り崩しながら弾幕を残らず消し去った。

十六夜もろとも、驚異となるもの全てを飲み込んでしまう。

この光に触れたものはその身を焼かれる、十六夜も五体満足とはいかない筈だ。

今度こそ、倒す！

「勝った、とでも思いましたか？」

真後ろに回り込まれた。

そうだ、前方の空間全てを攻撃されては回避場所はそこしかない。

このまま、スペルを外し隙だらけの俺に攻撃を叩き込んで勝つつもりだろう。

だが、奴がここに来るのは予想通り。

狙うべきは、ここだ！

「おおおおお！」

剣を振った反動を使い、腰を思いきり捻る。そのまま移動直後の十六夜に休む間もなく、もう一度剣閃を浴びせた。

どんな能力であれ、連続使用は難しい。

瞬間移動は強力だが、その分使う霊力も多い筈だ。

能力を使つてすぐは、その反動で次の使用が出来なくなる。ならば移動した矢先に攻撃を当ててやればいい。

眩い銀の光に十六夜が包まれる。

勝ちを確信した、その時。

十六夜が、消えた。

「捉えましたよ」

背後から殺気が迸る。

分かつてはいるが、抵抗は出来ない。

一か八かの大勝負だったから、俺は全身全霊をあの一撃に注ぎ込んだ。

攻撃後のことなど微塵も頭になかったのだ。

そんな俺が、どうして次の奇襲など避けられようか。

「ーっ！？」

すぐさま発生した激痛。

背が爆ぜたような、意識まで奪うような痛み。

悲鳴を上げる間もなく追撃の蹴りを背に喰らい、床に再度激突する。

「あ、ぐ……！」

骨が嫌な音を立てた。

背中での痛みで何処をやったかは分からないが、多分折れただろう。

動けない俺の隣に十六夜はふわりと着地し、相変わらず冷たい目で俺を見下ろした。

「……正直、驚きました。人間、しかも外来人であるあなたに、少々でも苦戦させられるとは」

「そ……かよ」

駄目だ、動くどころか声すら上手く出せない。

このままじゃ、殺られる。

「くそ……妖怪が……」

「お嬢様と同種、ですか。そうであるなら誇らしかったでしょうが、残念ながら私は人間です」

「馬鹿、な」

「本当ですよ？ただし心は悪魔に捧げました。だから殺しも躊躇わないのです」

十六夜がナイフを振り上げた。

動けない、故に回避は不可能。
これまで、なのか？

死の一字が頭を支配しそうになるが、必死に否定する。
駄目だ、諦めるな。

昨日の晩、閃珠と約束したばっかだろ。

あいつの仲間を助けてやるって。

紫の計画にだって手を貸さなきゃならないんだ。

そう簡単に諦めんなよ。

自らを叱咤し、意識が飛びそうな痛みの中で考える。

この最悪な状況を打破するにはどうすればいいか。

能力を発動する余裕はもうない。

いや、今俺の能力がどんな役に立つんだ。

助かるには他を頼るしかない。

でも、どうすればいい？

俺は何を頼ればいい？

今の体ではスペルカードを使っても満足に戦えない。

腕が動いてくれないと、剣も槍も意味を成さないのだ。

……詰み？

ふざけんな、認めてたまるか。

何かあるはずだ、どうにかすれば助かれる筈なんだ。

嫌だ、死にたくない！！

「何か言い残すことは？」

十六夜が何か言っているが、構っている暇などない。

どんなに無様でもいいし、命さえ助かるならどんな方法であれ構わ

ない。

それこそ悪魔に魂を売ったって良い。
どうにかして助からないと……！

死ねるか、死んでたまるか。

誰か、誰でもいい、助けてくれ！

届くはずもないSOSを心中で叫ぶ。

勿論それは誰にも応えられず、虚しく消えていく。

……はずだった。

“助けてやろうか？”

「……え？」

何だ、今のは？

頭に響く不快な声は？

十六夜の声、には聞こえなかった。

誰、だ？

“助かりたいんだろう？まだ生きたいんだろう？”

勿論だ。

助けて欲しい。

まだ生きたい。

そう頭で唱えると、何かの胎動が聞こえた気がした。

“ならば、願いを捧げろ。それが私の糧となる。何者をも寄せ付けぬ力の糧に”

その声は妙に不信感を募らせる物だったが、もうこれにすがらぐらいしかない。

死にたくないのだ。
方法は選べない。

助かるなら何でもいい、俺を助けてくれ！

一心に願う。

得たいの知れない何かに、ただ生き残れるようにとだけ祈る。
死にたくない、死にたくない、死にたくない。
だから助けてくれ、お願いだ……！

“くはははは……、いいだろう、その願い、叶えてやる！”

「……ぐ！？」

痛みが走る。

頭を万力で締め付けられているような激痛。
痛い、痛い痛い痛い！

「あああああああ！」

何だ、これ。

頭が割れる。

動けない体なのにのたうちまわらずにいられない。
その動きがさらに痛みを呼び、連鎖する。

こんな、こんな地獄、死んだ方がマシだ。

“さて、少しの間だが貴様の体を使わせてもらおう。今は消えていてくれ”

「はっ、かつ……！？」

もう、ダメだ。

耐えきれない。

意識が飛ぶ。

ブラックアウト。

もう、何も見えない。

第二十四話 紅魔の宴（賓客来会）（後書き）

年の始めからダークですが気にしない。

さて、今度はお気に入りが百件を越えました。ありがとうございます。これからも精進していききたいので、批評、感想などどんどんお願いします！

それでは、また来週。

第二十五話 紅魔の宴（舞踏）

「……何だ、この能力ならば傷など簡単に癒せるではないか」
奪い取ったこの体、どうやら予想以上に使い勝手がよさそうだ。

活動の活性化、イメージすることであらゆる活動を活発、強力にするか。

ならば自然治癒を活性化させれば外傷はすぐに癒えるだろう。

私としては好都合ではあるが、持ち主は何故この方法を取らなかったのやら。

細胞の再生をイメージ。

予想通り、傷がみるみる塞がれていった。

この調子なら骨も治りそうだ。

これならわざわざ痛覚遮断を使わずとも戦える。

「……何者です、貴方は」

私の相手、銀のナイフを構えた華奢なメイドが数メートル先から私を睨む。

成る程、力こそ無さそうだが、その体からは強烈な霊力が発散されていた。

これなら体の持ち主が負けても仕方がない。

戦いを知らない素人なら、の話だが。

「何者、か。その問いは私に向けての物か？それとも霧崎翼に向けてか？」

「貴方、です」

流石に馬鹿ではないな。

人間の癖に適応力もある。

この異常事態に冷静さを保てる人間は少ないのだが、優秀な従者だ。阿呆が闇雲に私に襲いかかり、すぐさま幕切れということもよくあった。

戦いを本分とする私としては張り合いのある相手の方が嬉しいので、この展開はありがたい。

「私か。そうだな、その答えを今見せてやるう」

「見せる？何を、するつもりですか」

「確かこの懐に……そう、これだ。“破滅、コスト・オブ・グロウリー”」

栄光の代償に破滅をもたらす、まさにその通りだ。

右手に握られた漆黒の長剣は破滅の剣。

願いを三度まで聞き届けるが、代わりに願いを捧げた持ち主の自我を奪い、剣に宿る狂戦士の人格を植え付ける。

この小僧も、まさかそれを自らが体現するとは思わなかっただろうな。

「……随分と、禍々しい武器をお持ちですね」

「本来ならばもっと狂気を引き出せるのだがな。スペルカードとやらにされたせいか、私の力が弱まっている。本当に残念だ」

余計な真似をしてくれたものだ。

先日操った金髪の妖怪娘ほどには、暴れ狂えそうにない。

尤も、体に宿る能力はこちらが明らかに優秀。

元々の体の馬力も負けず劣らずなので、強さは格段にこちらが勝っている。

あまり文句を言えた立場ではないし、まずは願いを叶えてやるしよう。

「さて、そろそろ無駄話は止めだ。時間が惜しい」

命を助けて欲しい。

この願いを叶えるには、敵を排除せねばならない。

戦い、血を流すことによつて願いを叶える私には最も向いている願いと言える。

ありがたい物だ。

自然に歪む口元を抑え、血を欲する剣を両手でしかと握る。

戦うこと、それが私の存在意義だ。

例えどんなに呪われようとそれは永劫変わらない。

過去から現在に至るまでそうだったし、私はその事を誇りに思っている。

今では戦いに愉悦すら感じられる程だ。

だから私は、今まで数えきれないほどの者と戦ってきた。

騎士に英雄、果ては怪物や妖怪の類いまで。

私を倒した者こそいかなかったが、その中には中々腕の立つ者もいた。さあ、こいつはどれだけ戦えるか？

試してやるとしよう。

昂る。

体が熱を帯びる。

これから始まる戦いは、どれほど熱くなるだろう。全力で楽しませてもらおうか……！

「人間に私の相手は荷が重いだろうが、全力でついてこい。簡単に終わらせてくれるな！」

活性の能力で強化しておいた脚力に、我が力の一つである身体強化が加わり、地を蹴った私はさながらカタパルトのように女の懷に飛び込む。

人では反応してから動いても手遅れだ。

得意の瞬間移動を見せてもらおうか……！

「っ！」

何の前触れもなく消えた。

道具を使うでもなし、これが奴の能力か。

面倒だが、それなら対処も出来そうだ。

背後に回し蹴りを放つ。

当然足は空を切るが、そこには慌てて飛び退くメイドの姿があった。その隙を逃さず飛びかかり大上段から頭を狙う。

もう一度消えた。

直後頭上から降り注ぐナイフの雨を神速の剣でひたすら弾き落とす。そこに黒球の弾幕を展開してやると、今度は舞台の壇上に姿を現した。

休憩は与えない。

背の翼を広げ突進、その勢いを突きに乗せる。

十数メートルの距離が瞬きの内に0へと変わる。

剣の切っ先は横っ飛びに跳んだ彼女の肩を掠めるだけに終わるが、私は逃がさない。

勢いを殺さず右足で舞台裏の壁を蹴り、跪く女に横一閃を浴びせるべくターンする。

休ませはしない。

剣が吼え、一の文字を人体に刻もうと動く。

奴はあるうことか、それをナイフで受けた。

霊力がいくら強かるうが、これは人間ごときに受け止められる一撃ではない。

奴は得物こそ手放さなかったが、その衝撃には耐えきれなかった。

甲高い金属音を残し、部屋の反対側まで吹き飛んでいく。

女は空中で身を翻し、特にダメージもなく着地。

そのまま勢いで地を滑っているため距離が開いていくが、私に間などあつてないような物。

またもイカロスの翼を利用し飛翔、剣を構えながら電光石火の突撃を仕掛ける。

一方奴は足で勢いを殺しながらカードを取り出し、迎撃の姿勢をとった。

「傷符！」

メイドはナイフを両手に数本構え、私を睨み据えた。

その目は先程の冷たい銀色ではなく、血のような赤に染まっている。悪魔に似た残忍で獰猛な光が、瞳の中で燃えていた。

面白い、受けてたとう。

そのまま小細工を労さず、真っ向から斬りかかる。

その軌道に、ナイフは果敢にも挑みかかってきた。

「インスクライ・ブレードソウル！」

刃の交叉。

それを契機に、高速の剣舞が幕を開けた。

ただ速く、相手より多い手数を打ち込み、斬り倒す。

少しでも遅れた方が死ぬ、単純な勝負。

速さだけなら両手に武器を持つ相手の有利だが、人間風情に遅れをとるつもりなどない。

矜持を腕にのせ、剣舞を加速させる。

速く、更に速く、狂おしいほどに速く……！！

「あああああ！」

「こ、のおお……！！」

今自分は、どれほど剣を打ち込んだか。

何十か、それとも何百か。

私に遅れまいと銀の光も加速していき、悲鳴のような剣戟の響きが耳を徐々に支配していく。

視覚、聴覚、感覚、これら全てを戦いに注ぎ打ち込み合うが、それでもまだ決着は着かない。

「くははは……！！いいぞ、楽しませろ……！！」

「調、子につ……！！」

目の紅が深みを増す。

六本の刃が更なる靈力を宿す。

そつだ、もつと、もつと本気になれ！
私の命を狙いに来い！

「傷、魂……ソウ、ル・スカル、プチュア！」

魂すら切り刻むような無情の殺陣。

闇雲な滅多切りだが、それ故に思考の入る余地がなく速い。

結果漆黒と白銀の交差は更に苛烈な火花を散らし、戦いを彩る。

剣の一振りで風が吹き荒れ一合の衝撃に床が抉れていく。

前時代的なただの斬り合いが周囲に破壊をもたらし、怪物同士の戦いの歴史を残していく。

そつ、これだ。

気を抜けば、即座に死。

このギリギリの凌の削り合いこそ、戦いの醍醐味。

これ程までに私を楽しませた人間はいつ以来か。

この瞬間が、一合一合が堪らなく愛しい。

「ふ、はは、あはは……！くはははは……！」

「……つ、ぬ、く……！」

高揚が力に変わり、剣を昂らせる。

私の依り代は赤い神気を立ち上らせて、その能力を向上させる。

戦闘の余波による破壊の渦は拡大。

私達二人の立ち位置には、クレーターが形成され始めた。

どうやら人には入り込めない武の領域に手が届き始めたらしく、女の攻撃に向けられていた手が防御に回っていく。
私を狙う刺突も、薙ぎも、ゆっくりと姿を消していった。

「くく、どうした。守るばかりでは勝てないぞ？」

「うる……さい……！」

最早私の一方的な攻撃だ。

奴の刃は盾に役目を変えている。

私の剣の軌道に割り込み、ずらしていくだけ。

こんなナイフの使い方はあまりしたことがないのだろう、動きがぎこちない。

そして慣れない動作の隙も見抜けないようでは、伝説の剣の名が廃る。

何度目かも分からない首を狙った一閃。

それを止めに入った奴の右手は、明らかに力が弱まっていた。

私は急遽標的を変更、右手のナイフ三本に全力で剣閃をぶち当てた。予期しなかった動きに反応できず、奴のナイフは宙に飛び、床を滑っていく。

驚愕に見開かれた目は、赤ではなく銀色だ。

片手から武器が失われた以上、スペルを維持できなくなったのだらう。

私はそのまま突きを放って幕を引こうとしたが、流石に一筋縄ではいかない。

瞬間移動でかわされた。

しかしこれは攻めに転じるためのものではない。

自らの不利を悟り、ただ距離を取りただけ。

敗北一歩手前の足掻きだ。

奴は部屋の隅にその姿を現した。

服装は乱れ、所々に穴が開き、息はかなり荒くもう余裕は見られない。

それでも手を膝につかないのは、それが出来ないからだだろう。凄絶な殺陣で酷使された手からは、おびただしい血が流れ出ていた。右手が力なく垂れ下がっている様を見るに、骨まで損傷しているかもしれない。

左手は固まってしまったのか、まだ三本のナイフを握りしめたままだ。

やはり、ばててきたな。

十八番と言えど、立て続けに何回も使えば消耗するのは当然。そもそもこの戦いは、奴にとって連戦だ。

一戦目でもカードを使用、瞬間移動を駆使して勝利したというのに、その上二戦目でも攻めるためにナイフを投げ、スperlカードを連続使用、人間には無謀すぎる真つ向勝負まで挑んできた。

まともな生物でない限り、スタミナ切れは自明の理と言えよう。

それでも戦闘不能に陥っていない辺り、まだこいつは骨がある。もう少しは楽しめそうだ。

私は歩み寄りながら、犬歯を覗かせる。

「さてさて、次は何を見せてくれる？ 斬り合いが本分ではあるまい」

「……時符」

彼女は震える右手でカードを取り出した。

目はまだ戦意を失っていない。

この期に及んでまだカードを使うとは、本当に面白い人間だ。

しかし、ナイフを展開するでもなく、先程のように構えるでもない。

霊力の高まりは感じられるが、何をするつもりだろうか。

「プライベート・スクウェア」

その霊力が発散される。

直後、私は自らの目を疑った。

「なっ……！？」

一瞬、何が起きたか分からなかった。

先程までは何もなかったのに、何故こうなった？

いつの間には私は、無数のナイフに囲まれたのだ？

その包囲陣はまるで檻のようで、逃げ道などまるでない。

壁や天井すら覆い隠すような、驚異的な数の刃が私の頭上、視界全てを囲いきっていた。

背後には何もないが、壁が私の脱出を阻んでいる。

このままナイフが私を襲えば、人間剣山が出来上がること請け合いだ。

そうなれば、間違いなく死ぬ。

まさに不可避にして必殺の攻撃。

「お、おお！」

武者震いが体を走る。

これは完全には避けきれない。

まさか私に傷を付け得る人間がいたとは。

この女は何者だ？

血が沸き、全身が歓喜に震える。
楽しい、楽しい、楽しい。

伝説に謡われた幾多の戦士も、一切の抵抗を許さず斬り捨ててきた。
その私が人間に傷つけられる、何と素晴らしい事か！

闘争の喜びが身体中を駆け巡る。

顔には笑みすら浮かんできた。

こいつを切り裂いた時の鮮血はどれ程鮮やかに見えるか、計り知れない。

「これで、最後です。消えなさい！」

奴の声と共に、時が動き出した。

停止していたナイフが一斉に降りかかる。

身体強化があるにしても、全てを受けきるなど出来るはずもない。
途方もない数だ。

これが、貴様の全力か。

良いだろう、ならば私はまた正面から打ち破ってやるまで。

少しだが、私の力の一端を使う時が来たようだ。

剣を握る手に力を込め、足で地を踏み砕く。

衝撃と共に、一陣の風が私の元から逃げるように吹き抜ける。

その風を追って、私は駆けた。

「去ねええええええええええ！」

弾く、弾く弾く弾く。

白銀の弾幕をひたすらに弾き、前へと突き進む。

致命傷となりえないものはその身で受け、頭上のナイフを振りきるべく走り抜ける。

腕、肩、脚等から鮮血が迸るが、そんなことはどうでもいい。

痛覚は遮断されていて行動の支障にはならないし、何よりこの包囲網さえ突破すれば私の勝ちなのだから。

これほどの相手だ、勝利の喜びは有象無象に対するものとは別格に違いない。

この戦いを終わらせてしまうのは少し癪だが、勝利をこの手に一刻も早く掴みたい。

その渴望が、私をさらに突き進ませる。

それに従い、銀の檻は崩れていった。

私の進路を塞ぐ弾幕に綻びが生じ、やがて一点の穴が見えてくる。完全だった鳥籠は壊れた。

あとはその最後の一点を、突く！

「消えるのは、貴様だ！」

神すら刺し殺しかねない一撃が、人間の道具ごときに止められるはずもない。

邪剣は銀の壁を容易く蹴散らし、檻に風穴を開けた。

その僅かな隙間に身を投じて、突破。

そのまま無抵抗にも棒立ちしている相手に突進する。

最早戦意を失っているようで、動く気配もない。

このまま心臓を一突きすれば、終わり。

記念すべきこの体の一勝目が手に入る。

脚力はまったく陰りを見せず、一瞬の内に伸ばした右腕を奴の体に届かせた。

その腕が支える刃の先が、左胸に触れようとする。

喀血しろ、人間。

それが私の喜びとなる！

剣先が、皮を裂き、身体へと沈み込む。

返り血が破裂したように吹き出し、奴はその命を儂くも散らす。

筈だった。

「……………」

裂いたのは、皮まで。

そこからはただ虚空を突くのみ。

ティルフィングは剣先に血を付けただけで、奴の身体を貫きはしなかったのだ。

回避されたと分かった瞬間背後からの攻撃を警戒したが、それはいつまでも来なかった。

背後にも頭上にも殺気はしない。

もしこれほどに気配を殺せるなら、誰しも背後から一撃されるだろう。

「……………」

突如として訪れた静寂が、熱された闘争心を冷ましていく。

それと同時に、微かな失望を感じた。

一応裂傷だらけの大広間を見渡すが、やはり周囲には人の気配が感じられない。

ここまでくれば、疑いようがないだろう。

逃げられた。

もうここに、あの女はいない。
館の別室か何処かに移動したに違いない。
どうやったかは分からないが、丁寧にナイフまで回収して。

残されたのは私と剣、そして目の前にある一枚のカードだけ。
拾い上げ、裏向きのそれが何かを確認する。

「……………スピードのA」

剣、そして騎士の象徴。

敵から逃げる時にそれを残していくのは皮肉な気がするが、どうやらまだ私とやりあう気はあるらしい。

今は一時撤退、体勢を整えるといったところか。

「……………ぬかった」

奴にまだ能力を使う余力があったとは。
人間、というだけで甘く見過ぎていた。

あれほど善戦していたというのに、私はどこかで種族による勝手な判断を下してしまっていたようだ。

以前私がいた世界と、この世界は違うというのに、まだ偏見に縛られている。

幻想郷。

常識の崩壊した世界。

「……………くく、くははは」

哄笑が漏れる。

実に素晴らしい。
尽く尽く、素晴らしい世界だ。

非常識な存在、人の文明が作り出せなかったものがここには溢れている。

それこそ私の同類など掃いて捨てるほどに。

こんな世界なら、きっと私が満足できる相手も大量に見つかる。
今のメイドのような強者もうじゃうじゃといることだろう。

まずはあの人間に止めを指し、そして次にこの館の主に会いに行こう。

危険分子を排除する事も、この体の持ち主を助ける事になるはずだ。
捧げられた以上、願いはしっかり叶えてやらねば。

そのためには、闘争を。

更なる闘争を！

「今宵は宴だ！待っている人間、直ぐに血の杯を上げてやる！あはははは！」

破壊の爪痕が残る真紅の大広間に、笑い声が響く。

喉よ裂けよと言わんばかりの大音声。

私にとってはどこまでも純粹で、他人にとっては狂気と取られる笑い。

しかし、それも長くは続かない。

正面の扉から、新たな挑戦者が現れたからだ。

「随分と元気そうね……霧崎翼」

口元に牙、背に漆黒の翼。

幼くしなやかな体軀からは苛烈な妖気を迸らせ、赤い瞳は微かに狂気を孕んでいる。

夜の王、吸血鬼。

この赤き館の主。

紅い、悪魔。

「ああ、これもお前のお陰だ。感謝しているぞ」

「感謝だって？命を狙われることがあなたは嬉しいのかしら？」

「勿論。そこには必ず戦闘が起こる。私にはそれが堪らなく嬉しい」

私の返答を聞いた吸血鬼は妖気の濃度を強めた。

ありがたいことに、話し合うつもりが無くなったようだ。

「やっぱり、生かしておくには危険すぎるわ。霧崎翼も、そのあなたも」

「ああ。だったら、私を消すか？」

「そうね、私は退屈な時が嫌いだけど、その時間を破壊するものはなお嫌いだから……消えてもらうわよ。“神槍”の手によってね」

神槍はスペルカードの冠詞だったのだろう。

紅の槍が吸血鬼の右手に宿る。

私はその槍を見て、心が震えた。

歓喜か、それとも恐怖か、言い表せない高まりが押し寄せてくる。

あの槍、確かに見覚えがある。

私に向かつてそれが振るわれることは無かったが、大昔に下らん知恵比べを挑んできた爺が脇に携えていたはずだ。

奴が戦神だと知った時は取り逃した事を悔やんだな。

「オーデイン、だったか？あの爺の槍を何故お前が持っている」

「そんなことはどうでもいいでしょう？貴方はここで死ぬのだから」

槍が構えられる。

妖力のたぎりはあのメイドの比ではない。

どうやらさつきより楽しめそうだ。

楽しい第二幕、今度こそは完全なる勝利をこの手に。

私は闘争本能のままに、標的の首目掛けて一直線に走り出した。

第二十五話 紅魔の宴（舞踏）（後書き）

誰か戦闘描写のコツを教えてください（迫真）

それはさておき、一つお知らせです。

来週の更新日、一月十五日はセンター試験。

書き溜めはまだあるのですが、多分今までやってきたような見直し
がなされずに投稿されると思います。

クオリティが少し下がるかもですが、そこはご了承ください。

暇を見つけて後からちよちよいと修正を入れるかもしれせん。

その時はまた覗いてやってくださいね。

さて、次回で紅魔の宴も折り返し。

カリスマなおぜうさまに果たして勝機はあるのか？

それでは、また来週。

第二十六話 紅魔の宴（主催登場）

槍の長所を順に表すなら、私はまずリーチの長さを挙げる。相手が攻撃できない範囲から攻め立て突き崩すその戦法は、一対一において非常に有効だ。

攻撃されなければ、そもそも負けることなどありえないのだから、自分の間合いを保ちながら戦うことで有利に戦闘を展開できる。

剣は一般に槍より短い為、一太刀浴びせるにはどうしても槍の攻撃範囲に踏み込まなければならぬ。

「……ちっ」

見飽きた牽制の突きを回避し、私は一旦退がって警戒の視線を送る。どうやら相手も同じ腹積もりらしい。

私の剣、私自身を冷静な目で見ていた。

既に激突すること数度、いずれも私から仕掛け、数合を打ち合い、槍にあしらわれて退くだけに終わっている。

あのメイドとやりあったように力押しで戦う方が私は好みだが、今回は不用意に勝負を賭けられない。

向こうもそれは同じなのだろう、決して自ら動こうとはせず、ずっと見に徹していた。

その原因は知れている。

お互いの得物だ。

（何とも妙な槍を……）

戦神、オーディンが持つ北欧最高峰の投槍。

名はグングニル、揺れ動く物の意を持つ。

一度その手を離ればその進路を阻むものはなく、所有者に仇なす輩を貫きその手に舞い戻る。

その一投は、誰が投じようと百発百中。決して外すことはない。

伝承に聞いた話だったが、どうやらその効果は投擲だけに止まらないようだ。

私が槍を回避しようとする、その動きを読んでいたかのように軌道を変えて襲い来る。

突きが薙ぎに、薙ぎが払いに変化して私を狙うのだ。

何度攻撃を弾こうと、あの槍は別の一手を用意する。

結果いつまでも止まぬ攻撃に、対峙するものは攻め手を封じられてしまうのだ。

悠久の時を戦いに費やし続けた私だが、このように卦体な槍と相對したことはない。

あの爺め、私から逃げた腰抜けの割に、立派な武器を持っていたようだな……。

「……あなた、オーデインの名前とこの槍を知っていたわね」

互いの息遣いだけが聞こえていた広間に、吸血鬼の静かな声が不意に鳴る。

「だからどうした？」

「いえ。あなたの正体がようやく分かった、ただそれだけよ。魔剣ティルフィング」

相手も私の力に気付いたようだ。

私がオーデインの名を出した時点で気付かれてもおかしくないよう

なことだ、別段驚きはしない。

武器に興味がなかるうと、自らの得物と同じく北欧に伝わり、敵対
までした剣の名くらいは頭に入っていることだろう。

あの爺と実際に顔を合わせた剣など、数えるほどしかない。

その中でも一際強い邪悪性を持つ魔剣とくれば、私が拳がるはずだ。

「ご名答。だが私をどう滅ぼすつもりだ？それが分からなければど
うにもならんだろう」

「それは、あなたも同じでしょう？来なさい。我等が主の代わりに、
私があなたに裁きを下してあげる」

「笑止。吸血鬼が神の裁きを語るなど、馬鹿馬鹿しいにも程がある
わ愚か者」

「知性にかける言葉……あなたが神の力を持つことが不思議でなら
ないわ」

「私が望んだのではない。過去の所有者共が神の尖兵にされたから
そうなったただけだ」

軽口を叩き合い、徐々に、徐々に距離を詰めていく。

互いの闘気と得物の神気がぶつかり合い、肌を痺れさせる。

場は無音。

されど心臓の鼓動が、期待と興奮で鼓動を強めて耳を刺激する。

今までの小競り合いなど戯れに等しい。

これより始まる戦闘こそ本番、神の力の一端が衝突する壮絶な決闘
だ。

その力を操るは、強大な人外である吸血鬼と私。

あのメイドとは比ぶべくもない激しい闘争が繰り広げられることだろう。

これを楽しまずして何を楽しめと言うのか。

小さく舌舐めずりをし、喉の奥で笑う。

これ以上考えても埒があかない。

どうすれば勝てるかなど、戦えば分かることだ。

剣の切っ先を斬るべき相手に向け、私は高らかに宣誓する。

「行くぞ悪魔よ。天上の狂戦士どもに誓って、貴様を討ち取ってくれよう」

対する吸血鬼も、牙を見せて応えた。

「ならば私は誇り高き我が祖、ヴラド・ツェペシュに誓って、貴様の血を奪い尽くそう」

何か通ずるものがあつたのだろうか、私達は獰猛に笑む。

これでもう言葉は不要だ。

私は両手で剣を持ち、下段に構える。

相手も槍を構え、大きく翼を広げた。

姿勢が高いのは、空中において足の力はあまり役に立たないからだろう。

一瞬の静寂。

全ての音が停止する。

そして。

「……はっ……」

先に動いたのは吸血鬼だ。

刹那に空を切り裂きながら紅の槍が眼前に迫る。

当たれば貫くどころか頭が吹き飛ぶだろう速度だ。

力と速さに任せた人外ならではの突き込み。

かろうじて首を曲げて避けるが、グングニルはその程度では回避を許さない。

そのまま刃が追いつてくる。

すかさず剣で上に突き、振り上げたそれを右手一本で下ろす。

全力で頭を割りにかかったが、流星は悪魔。

寸前で後ろにかわし、再び突きを放つ。

払うが、続けざまに刺突が嵐のように迫る。

槍の突きは線ではなく点の攻撃であり、速い。

剣で防げないではないが、初動でどうしても出遅れてしまう。

ただの一撃でも見落とせば致命傷である故に、防御を怠ることが出来ず、攻めあぐねる。

私は渾身の振り抜きを捨てることにした。

左手を柄から離し、素早く神力を結集する。

紅の穂先は右手でなんとか突き続けながら、黒い弾の形成を始める。それを私の油断と見たか、吸血鬼は突き込みをさらに苛烈な物へと変えた。

片腕を失えば、速度もまた落ちる。

今まで対応できていた攻撃も必死に止めなければならぬ状況での加速は、もう弾ききれない。

幸いにも私には痛覚遮断と活性があるので、狙いの甘いものはその身で受けて耐える。

血が飛散するが、その程度は必要経費だ。

三度ほど食らった後に、私は一発の弾を作り上げた。
当たっても拳ほどの威力しか持たないが、怯ませるには十分だ。

手をかざし、発射。

吸血鬼は私の真意を読み、再び距離を取ろうと後方高くに飛ぶが、
剣士である私はこのまま近接戦闘に持ち込みたい。

活性中の脚力を使って追いながら、急速に離れていく悪魔を撃ち落
とすべく黒い弾を更に形成。

数は十、形は球、大きさは大人を三人包み込む程度。
れっきとした弾幕だ。

片手間でなければこれくらいの弾幕生成など造作もない。

狙いを定め、最高速で全弾発射。

天井近くに浮遊する悪魔へ黒球の群れが迫る。

いくらスピード自慢でも、かわす場所が無ければ意味をなさない。
あれだけ大きな弾を前にどうかわすか、見物だな。

吸血鬼は弾幕の前に、迷いなく右手を後ろに引いた。

その手が握るは神の槍。

本来投擲されるべき、必中の投槍だ。

紅い神力が鋭い光を放ち、黒い弾ごしに私の目を射抜く。

悪魔は、宣言を天に轟かせんばかりに吼えた。

「スピア・ザ・グングニル！」

一度放たれば、その槍を阻むものはない。

それは例え弾幕であろうと不変の事実だ。

手元を離れた槍は紅い彗星となり、我が黒の弾幕を易々と貫いた。

私の盾になった弾は霧となって消え果て、残りは吸血鬼の周りに無
駄な破壊を刻むだけ。

天井の一部が大口を開けることとなるが、ターゲットは無傷だ。

それだけでは終わらない。

グングニルは、必中の槍。

標的を確実に貫き、所有者の元に帰る。

彗星は勢いを失うことなく私目掛けて墜ちてきた。

槍の穂先が殺意をみなぎらせ、真っ直ぐに私を狙っている。

あれはどうしても止められない。

あれが放たれた以上、命中は絶対だ。

既に決定された事項を覆すことなど出来ない。

早々に悟り、覚悟した。

少しくらい、くれてやる。

剣を離し、左腕を曲げる。

痛覚は遮断し、神力生成を限界まで活性化。

赤い死は目前だ。

「いいだろう……命中はさせてやる。だが」

左腕を移動、ちょうど心臓と槍の延長線上に配置。

そこは、槍の通過地点だ。

「その落下地点は、私が決める！」

左腕が吹き飛ぶ。

比喩ではなく本当に吹き飛んだ。

中程から手先までが全て。

もう少し盾になるかと思っていたが、後の祭りだ。

それでも左腕の犠牲で少しだけ槍は威力を弱めた。
そのまま心臓に食らい付かんとするが、私はさせじと右手で掴み止める。

途端、凄まじい振動と紅い神力の奔流が私の右手を襲う。

鎌鼬で腕をいきなりズタズタにされ力が緩まりそうになるが、歯を食い縛って力を振り絞る。

抵抗のせいかわ、荒れ狂う槍の暴走はさらに激化。

私の右手を神力で焼き焦がし、邪魔をするなと叫ぶ。

必中の名を汚すまいと、槍は神力を際限なく増加させていく。
痛みは感じないはずなのだが、攻撃の威力と濃密な神力が纏う圧迫感に気が遠くなりそうだ。

ただでさえ強烈な神力量を誇るグングニルがその力を増大することは、周囲にまで影響を及ぼす。

私の体に限らず、周囲にまで余りに余った神力をぶつけ、破壊の力を撒き散らし始めた。

空気がその威力に恐怖してヒステリックに泣き叫び、床はおののき震える。

窓は衝撃に耐えきれず、一枚と残らず割れていく。

それでも私は、右手を離さない。

紅い霧と血が視界を染める中、私は槍を動かし左肩にあてる。

シャンデリアが轟音を立てて墜落するが、もう構うものか。

そのまま私は、ありったけの力を込めて。

刃を深く、無理矢理肩に沈み込ませた。

無事役目を果たした必中の槍は、神力を急速に失って光の粒となっていく。

カードへと戻るのだろうか。
空気と地を揺るがす波動も私への抵抗である神力の暴走も消えていく。
残ったのは崩壊寸前の大広間と、宙に浮かぶ吸血鬼、そして虫の息ながら生き延びた私だけだ。

「そんな、馬鹿な……」

吸血鬼はひび割れ隆起した床に着地し、小さく漏らした。

小さな声だったが、静けさを取り戻した大広間ならば十分に聞こえる。

「必中、とは……必ず当たること……どこに当たるかは、明確に、決められていない」

だから私は、わざとその身を削った。

即死となる心臓や脳だけは貫かれなないように。

損害の少ない部位に命中させることで、槍の呪いを無力化したのだ。

素早く神力の生成を活性化し、自然治癒にあてる。

千切れた左腕を拾い上げて接合し、穴が開いた肩を修復、その他身体中に受けた傷も回復させていく。

時間を巻き戻していくように細胞が増殖し、欠けた部分を塞いでいくさまは見ていて気持ちが悪い。

多少の傷ならそのまま皮膚表面の損傷を消すだけで済むが、腕や肩の肉まで勝手に生えることはない。

蠢き、隆起し、損傷部分を繋ぐだけ。

それでも最早人間の自然治癒の限界を越えているが、私の神力量と回復力は元々が人間離れしたものだ。
それ相応の神力を払えば、回復可能。

ものの数秒で、私の体は完全に修復された。
繋げた左腕を曲げ伸ばし、手を握り、開いてみるが、特に異常はない。

肩も問題なく動く。

右手で剣を拾い、私は数メートル先の怨敵に語りかけた。

「いや……あの一投は中々に効いたぞ、吸血鬼。神の槍、真その名に恥じぬ威力だ」

「戯れ言を。それを生身で受けきり回復した、あなたの力の方が余程ふざけているわ」

吸血鬼は不快そうに奥歯を噛み締めている。

仕留める自信があつたのだろう。

私でも体の持ち主から便利な能力を借りていなければ危なかったのだから、自信は持っていて当然だ。

「ふざけた力同士の衝突、と言うわけか……良いな。実に良い。まだまだ楽しめそうだ」

漆黒の大剣は紅い塵気楼を揺らめかせ、みなぎる神力を感じさせる。血を欲し、闘いを愛でる私の思いが、そこに形となって表れていた。

「宴の第二幕は始まったばかりだ。まだ舞えるな？」

返ってきたのは、無言の肯定。

私を見るその瞳には、心なしか少し不安が見えた。

今までに見られなかった、隙がそこにはある。

この勝負、もらった。

私は勝利を確信し、自らの分身に力を込めた。

紅き夜の宴は、まだまだ終わらせない。

第二十六話 紅魔の宴（主催登場）（後書き）

ちよと短め。

今日はこんなところで許してください。

それではまた来週！

第二十七話 紅魔の宴・剣舞（狂騒）

「うっ……」

ソファの上、苛々と膝を上下させる。

この出石閃珠、如何なる時も明鏡止水の心を忘れまいとしているのだが、まだ精進が足らぬようだ。

落ち着かぬ。

我が主、霧崎翼が晩餐会がどうとか言われ、侍女と共に消えて少し経つ。

しかし一向に私に連絡は来ず、拳げ句吸血鬼は私を放置し何処ぞへと失せた。

吸血鬼には此処に残っているよう言われたが、どうも待ちは性分に合わぬ。

脱け出して館の見学でも試みようか？

しかし私が迷惑をかければ主の恥となる。

どうしたものか……。

「……………む？」

話し相手もないせいで鋭敏になっていた聴覚が、異変を知らせてくれた。

微かだが、遠方から音がする。

地震のような、低く重い音だ。

一人でいなければ気付かなかったであろう。

それに合わせて窓も震えている。

衝撃音？

到底常時の音には聞こえぬが……よもや、戦闘が？
音からして距離はあるようだが、この館内であることは間違いあるまい。

主が騒動に巻き込まれてなければ良いのだが、此処は悪魔の館、樂觀的な思考は破棄すべきだ。

この館の住人が我らを嵌めたか、それとも第三者が館を急襲した？
何れにせよ、救援に向かうべきか。

主ならば何者に襲われようと負けはせぬが、世に絶対はない。

なれば、微力ながら加勢するのが従者たる我が務め。

「……参るか」

どうにも事態の雲行きが怪しい。

あの侍女が消えた折には違和感を覚え、それから間もなく衝撃音。

主、無事であれば良いが。

部屋を出るため、扉の取手に手をかける。

それを、捻る……。

が、回らない。

「……開かぬ、だと？」

吸血鬼は普通に開けていた筈だが。

もう一度試みるが、全くの無駄。
頑として回らない。

故障？

まさか、この短時間で、しかも確たる原因も無しになど有り得ぬ。
閉じ込められたと考える方が自然だ。

随分と小癪な真似をしてくれたものよ。

しかし、斯様な畏など私には意味を成さぬ。

開かぬならば通らなければよい。

この世界に来てから、主に出会ってから我が神力は格段に強化され
た。

全盛期の力をほとんど取り戻したと言っても過言ではない。

この程度の距離なら、一瞬で飛べる。

頭に浮かべるはこの扉の向こう側。

目を閉じ、少し念じる。

それだけで私は、思い通りの場所に移動していた。

「……さて」

何処を探そうか。

勝手が分からぬこの屋敷の内部をしらみ潰しに回るのは愚の骨頂。
やはりこの耳と勘を頼りに突き進むより他あるまい。

まずは階下へ下りよう。

なれば玄関まで戻ればよいかな。

再度能力を発動しようと目を閉じる。

しかし、不意に肩を叩かれたことで集中が途切れてしまった。

「何用……っ!？」

振り向くと同時に、息を飲む。

肩を叩いたのは、先程消えた侍女だった。
しかし私が驚かされたのは彼女の格好だ。

酷い。

服は埃にまみれ、足腰はふらふら、顔色は真っ青で尋常ではない量の汗をかいている。

霊力が枯渇していることは一目で分かった。

そして左胸の出血だ。

心臓は辛うじて無事なようだが、白い服が少し赤くなっている。

「お、おぬし、どうしたのだ？何があった？」

思わず聞くが、彼女は答えない。

代わりに一本のナイフが、私の首目掛けてつき出された。

不意打ちだったが、幸い大した速度ではなかったので能力を使用し
てかわす。

「……何のつもりだ」

油断を捨て、敵を見る。

いつでも出石小刀を抜けるよう柄に手をかけた。

彼女はあくまで平坦な口調で応じる。

このような姿でも弱味を見せないとこころだけは単に感心させられた。

「これも、お嬢様の言い付けです。お覚悟を」

彼女の目に私怨はない。

自らの意思を見せず、あくまで黙して従うか。
見上げるべき従順さよ。

「……堅い主への忠義、実に天晴れ。だが」

尋常の立ち合いならば我が剣は妖夢殿には届かず、目の前の敵とも
対等がいいところ。

しかし消耗した相手ならば話は別だ。

私とて手負いの者に後れを取るつもりはない。

彼女は仕掛けて来ず、私の動きを観察している。

隙を見せまいとするその姿勢が、既に隙だらけであることにも気付
かず。

「……ふん」

そんな姿を見て、私の眦はきりきりと吊り上がっていく。

前言を撤回しよう。

従順さもここまでくると愚かしいのみだ。

己で正しい判断も出来ぬのか？

このまま戦えば犬死にすることは火を見るより明らかではないか。

自らの命を軽視するなど、見ていて不愉快なだけだ。

それは自らの主人を護ることを放棄するようなもの。

刃と共に従者の誇りを体に刻んでやるか？

それとも今暫くは生かしておくか……。

一旦怒りを収め、黙考。

逡巡の末、私は構えを解いた。

「……貴様の命を主のために散らすべき正念場は、ここではあるまい。引き際を弁えることも、時には肝要ぞ」

柄から手を離し、私は良くも悪くも実直な従者に背を向けた。

情けをかけたのではない。

後顧の憂いを断つか、誇りを重んじるかを秤にかけ、誇りを選んだだけだ。

主を守る存在である私を殺すということは、主を狙うことと同義。ここで奴を討てば後々に主の助けにはなる。

しかし瀕死の敵に刃を突き立てるなど、一介の武人たる我が誇りが許さぬ。

ここが敵味方入り乱れ負傷など当然の戦場ならいざ知らず、果たし合いのような一対一の勝負でそれをするのは頂けぬ。

故に、今は見逃す。
それだけだ。

「……私の負けは、前提ですか。さらに上から目線で忠告とは、見下してくれるじゃないですか」

毒を絞り出すように、彼女は吐き捨てた。

相手は臨戦態勢なのだ、今の隙だらけの私など容易に討ち取れるであらう。

ただ怒りに任せて襲いかかればいい。

それを彼女がしないのは、己の限界を既に悟っているからに他ならない。
彼女は最初から、心のどこかでは勝てないと分かっていたのだろう。無謀と分かっているが、主のために戦いを挑むとは……つくづく融通の聞かぬ奴よ。

「私も神霊、人を見下すつもりこそないが、上位の存在だという自負はある。それに、道を違えし人を導くのも神の役目であろう」

たまには神として威厳を示すのも悪くあるまい。

しかし奴は目を丸くし、あるうことが苦笑いまで浮かべた。

「貴女が神霊？そんな小さな身なりなのに……冗談でしょう？」

「……貴様、いつか斬り捨ててくれよう。首を洗って待っているがよい」

一つ灸を据えてやりたいが、主を助けに行かねばならぬので仕方なく捨て置く。

能力を使用し廊下から一気に玄関へ移動。

火薬が炸裂したような音と共に景色が変わる。

目を開けば、そこは怪物が出入りでもするかのように広い玄関だ。

頭上のきらびやかな照明が妖しげに揺れている。

周囲を確認するが、あの女は追ってきていない。

これでやっと主の捜索に向かえるな。

少し時間を食ってしまった分、急がねば。

吸血鬼がはつきり敵だと分かった以上ぐずぐずしていらぬ。

二階へと続く大階段の両脇に扉が四つあるが、どれを開けるか？

一瞬の思考の結果、左側の端を選択。

この勘に答えるように、扉が勝手に開く。
しかし当然ながら独りでに開いたのではない。
向こう側から誰かが出てきただけだった。

「あ……。あなた、誰？お客様？」

眩い金髪に、前の吸血鬼と同じ帽子を被っている。

赤い瞳、赤い洋服と、目立つ容姿の少女だ。

中でも一番は、その特異な翼。

枯れ枝に七色の宝石を吊り下げたような、翼なのかどうかも怪しい
それは、吸血鬼が持つ蝙蝠の翼とは似ても似つかぬものだった。

現れた少女は玄関の真ん中で突っ立っている私を見咎め、出てくる
なり警戒心を露にした。

血に染まったような目を細め、牙を見せながら強く睨んでくる。

その眼光には濃密な妖力のせい、見た目からは考えられない圧迫
感があつた。

眼光で見たものを壊せそうな、戦慄を誘う狂気の瞳。

見られただけで凡夫は腰を抜かすであろう。

まさに、鬼。

気高き妖怪、吸血鬼に相応しい迫力だ。

悪寒が走り、目を背けそうになるが、耐える。

ここでおののいては駄目だ。

私はそう自らを律し、毅然と名乗った。

「我が名は出石閃珠、この館の主人に招かれし者だ。おぬしの名は
？」

一応は信用されたようだ。

眼力が幾分弱まる。

金髪の少女は距離を取ったまま名乗り返した。

「……私はフランドール・スカーレット。レミリアの妹よ」

「ほう、妹御か」

やはり姉妹とは似るものだな。

更に剥き出しで強烈だが、姉に似た近寄りがたい独特の覇気がある。顔付きもそれとなく似ている。

なれば、その力も姉に比肩する程度か……。

我らと対立することも十分に考えられるが、わざわざ喧嘩を売る要もあるまい。

むやみに刺激するは自殺行為だな。

私はなるだけ丁寧に妹御に尋ねた。

「フランドール殿、貴公に聞きたいことがあるのだがよろしいか？」

妹御の反応は早かった。

私の質問に彼女は少し考えると、手を打って問い返してきた。

「聞きたいこと？もしかして、さっきから響いてる五月蠅い音のこと？」

もうその眼に私への疑心はない。

私よりも優先すべき事項が出てきたからだろう。

彼女もこの音の出所を探しているのか……？

「然り。心当たりが？」

「分かんない。私も気になってたからそうかなって思っただけ」

「左様であつたか……」

何か有益な情報が得られるかと思つたのだが、肩を落とす私に、けど、とフランドール殿が続ける。

「館の外まで響いてるから多分お姉様のせいじゃないかな。美鈴や咲夜じゃ派手なことは出来ないし、今日はパチュリーも調子が悪いし」

妹御の言葉に私は歯を食い縛る。

やはり吸血鬼の仕業か。

今更第三者の介入とは思えぬし、主が戦っていると考えるのが妥当だ。

最早疑う余地もない。

あやつめ、謀つたな……！

静かに闘志を燃やす。

その一方で頭は冷静に。

まずは憎き悪魔の居場所を聞き出さねば。

妹御はどうやら姉の企みを知らぬようだし、ここは少し協力してもらおう。

「理解した。場所は推測できぬか？妹御」

「そうだな〜……。暴れ回れるところ……。大広間、かな？それとも、図書館？何処だろ〜……。」

フランドール殿は顎に手を当て思案する。

一生懸命候補を挙げていくその姿から、私は目を背けずにいられなかった。

他人に隠し立てをするのは心が傷む。

しかし、今は手段に拘っていられぬのも事実。

許せ、妹御。

心中で謝罪しながら、私は行動を起こすことにした。

「理解した。とりあえず、まずは大広間までの道を教えてくれぬか？勝手が分からぬのだ」

私彼女姉上の敵である事に感付かれたら面倒だ。

妹御とはここで別れるが上策であろう。

しかし我が目論みに反し、彼女は私の手を取った。

「うん、それじゃ案内してあげる。付いてきてね、閃珠」

「は？いやいや、そんな案内までしてくれずとも」

「遠慮しないでいいって。さ、行く〜！」

拒否権はないようだ。

彼女は私を引きながら、自らが出てきた扉をもう一度開けた。私も仕方なくそのあとに続く。

二階と同じく長い廊下だ。

「ここを突き当たりまで行けば、大広間だよ。レッツゴー」

「う、うむ」

手を引かれ、歩き出す。

彼女からは最早狂気など微塵も見られない。

至って普通の明るい女の子だ。

最初に見せた姿との落差に私は驚かされていた。

さっきは何かの悪霊が取り憑いていたのかと思っただけである。

フランドール殿は私の動揺を見止め、首を傾げた。

「閃珠、どうしたの？」

やはり邪悪さはない。

「いや……ちと気になってな。おぬし、私をあれほど警戒していたのに、何故手を繋いで歩けるのだ？」

この問いに、彼女の足が止まる。

何か変なことを聞いたであろうか？

「あ……手、繋ぐの嫌だった？ご、ごめんね、あはは……」

「なっ……!!」

妹御はとんでもない勘違いをしたようだ。

私の問いに彼女は見るからにしょげてしまった。

あからさまな作り笑いを浮かべ、慌てて手を離してしまっ。

その笑顔は見るだけで痛々しい。

そんな彼女に私はさらに動揺した。

「ち、違う違う！断じてそのような意味ではないのだ！そうではなく、おぬしは私を警戒すべき相手だと思ったのであるう？その私と手を繋ぐというのは矛盾しておらぬか、と、こう言いたいのだ！」

早口でまくしたて、離れた手を繋ぎなおす。

「……………ホント？」

「応とも！武士に二言はないっ！」

「……………そう、よかった。また嫌われちゃったかと思っただよ」

彼女の顔にいい笑顔が戻ってくる。

いや良かった、危うく鬼畜な勘違いをされるところであった……………。胸を撫で下ろす。

「ははは、まさか。ところでフランドール殿、答えを聞かせていただけぬか？」

「ん……………。良いけど、その前に」

また笑顔が消え、彼女の手の温かみが消えていく。
今度は表情が硬い。

また私は失言したのか……………？

「えと、一つ、約束して欲しいな」

「む……………」

何をであろうか。

彼女は恥ずかしそうに俯いて、もじもじしている。
しおらしくて可愛らしいものよ。

私には到底出来ぬ仕草だ……。

しかしこれ程尻込みするとは、どのような約束をするつもりなのか。
少し気を引き締めておかねばならぬな。

しばしの沈黙。

その後、フレンドール殿は意を決したように私に向き直った。
そして上目使いでこう言ったのだ。

「あの……ね。私のお友達に、なってくれる……？」

「……むう」

成程、理解した。

私がフレンドール殿と友達になれば、教えてくれる、と。
しかしこれは……如何にしたものか。

「……駄目、かな」

フレンドール殿は不安そうに、上目使いでこちらを見つめる。
力は文句無しに強いが、心まではそう強くなれなかったらしい。
その顔は、拒絶に対する怯えに満ちていた。

この娘と、友達か。

フレンドール殿がもしこの館の住人でなくば、私は迷いなくその手

を取った。

安心せよ、拒絶などせぬと抱き締めたであろう。

しかし悲しいかな、彼女は我が主を狙う者の妹だ。

彼女にとって、私は消し去るべき邪魔な存在。

私が姉を攻撃するとき、フランドール殿はそれを知ることになる。

裏切りを目の前にしながら友の誓いを交わすなど、誰が出来ようか。

今になって私は、妹御を利用しようとしたことを後悔した。

出会った時に突き放していれば良かったのだ。

こんな、弱々しい少女に、罪無き者に、こんな言葉を告げねばならぬくらいならば。

私は一瞬躊躇ったが、いずれ話さねばならぬことだ。

拳を握り、唇を噛み、覚悟を決めた。

「……我が主が、私が守らねばならぬ者が、襲われている」

「……うん」

空気が重みを増す。

期待と不安がない交ぜになった視線が、今もなお注がれている。

前置きなどどうでもよい様子だ。

彼女にとって関心あるものは、私の返事のみらしい。

私の様子で、答えを察してはくれぬか……。

私は目を伏せ、引き続き彼女を傷付ける為の毒を吐いた。

「他ならぬ、おぬしの姉上殿に。それ故、間も無く私は、おぬしにとつて許しがたい裏切りを行わねばならぬ」

「……っ」

小さく息を飲む音がした。

それは、儚い期待が崩れ去る音でもあった。

「ここに来て、更に罪を重ねたくはない。御免」

短く、言葉を締めくくる。

それと共に、私を見つめる彼女の赤い双眸から、光が消えていった。

「……あ、はは、ははははは……」

やがて漏れ出た乾いた笑いが、嫌というほど耳に響いた。

もう、直視できない。

致し方ないとはいえ、私はなんと酷い真似を……。

自責の念に駆られていた、その時。

「……アア、バカラシイ」

戦慄した。

地の底から這い出てきたような暗い声。

怨念を溜め込みに溜め込んだような、呻きだった。

その声に呼び覚まされたかのように、影を潜めていた狂気が、殺意の波動が、徐々に覚醒していく。

本能的に飛び退り、出石小刀を抜き放って構えた。

彼女はそんな私なぞお構い無しに、狂い笑う。

「そう、だよな。私は、気の触れた悪魔だし、誰からも嫌われて恐れられて、あは、ははは、ははは八八八八！」

違う、そうではない。

私はおぬしを嫌ってなどいない。

そう言いたかったが、その言葉がどれ程の説得力を持つだろう。今の私には、黙って見ているしかなかった。

「あゝ、おかしい。ねえ閃珠、お姉ちゃんのところへ行く前に、まずは私と遊ぼうよ」

「……遊ぶ？」

牙を見せ、口角を吊り上げるフランドール殿の右手には、一枚の力ード。

「そう。“禁忌”の遊び、楽しい遊び。弾幕ごっこでさー！」

彼女は突如現れた炎の剣を大仰に構え、声を張り上げた。

剣、なのだろうか？

異様に細く、先端が太く丸い。

杖を押し潰したような、なんとも怪体な形状だ。

同じ炎の剣だが、あれは主が持っていた光の剣とは真逆の印象だ。どこまでも禍々しく、荒々しい。

フランドール殿の狂気を形にしたような剣だった。

来る。

直感が告げた危険に備え、能力発動を準備する。

彼女は私を指差し、愉快そうに問うた。

「さて、あなたはどれだけでもつかなく。簡単には、壊れないですよ？」

「……壊れぬよ。我が途上に立ち塞がる者は、何人たりとも打ち倒すまで」

紫殿の、そして我が願いを果たすまでは死んでも死にきれぬ。

大真面目に返した私を、彼女は笑い飛ばした。

「きゃはは、強気〜！いいよ、それだけ言うなら閃珠から来なよ！先制のチャンスをあげる！」

フランドール殿は余裕の表情で手招き。

あれだけの力を持てば、慢心を抱くのも無理からぬことか。

しかし戦いは、それで勝てるほど甘いものではない。

あの隙を突けば、私にも勝機はある。

先手必勝。

初太刀で勝敗を決してくれる。

「……出石閃珠、参る」

必殺の覚悟を胸に、私は地を蹴った。

第二十七話 紅魔の宴・剣舞（狂騒）（後書き）

土曜更新出来ず。ほんとうに申し訳ないです……。

土曜更新は依然として変わりませんで、また来週も読んでくださ
い。

もうお知らせなしには遅れません）キリッ

初っぱなから視点切り替えもあり、解りずらかったかも？

お嬢様のカリスマを期待した方、スミマセン。

来週は随分とご無沙汰だった閃珠が大活躍、乞うご期待！
それでは、また次回。

第二十八話 紅魔の宴・剣舞（宴も酣へたけなわ）

真正面から特攻をかける。

私のあまりにも愚直なやり方に、フランドール殿は興を削がれたようだ。

「はあ……馬っ鹿じゃないの？工夫しなよ。いいや、死んじゃえ」

剣の間合いに完全に入ったと同時に、巨大な業火が私を襲う。

至近距離にいた私が大蛇のようなそれを避わせるはずもなく、抵抗も許されぬまま無惨に身体を焼き付くされた。

目の前の彼女には、そう見えただであらう。

「……疾！」

「くわっ……っ！」

火に包まれる直前、背後に瞬間移動し背中を一閃。

流石に吸血鬼らしく、並外れた反射神経と身体能力で致命傷は回避されたが、背中に一太刀浴びせることに成功した。

仕留めることは出来なかったが、中々の深手だったはず。

反撃の隙は与えない。

すかさず側に移動し、倒れている彼女を斬りつける。

体勢も何も考慮しない緊急回避の後では防ぎようもないと思ったのだが、流石は悪魔の妹、炎の剣で受け止めた。

私はそのまま押しきろうと、彼女はそれをはね除けようと、剣越しの睨み合いが始まる。

そんな状態でも、彼女の口元には狂気の笑み。

「くひひ……私と力比べなんて、止めといた方がいいんじゃない？」
ギチギチと刃が軋む中、こちらに喋る余裕などない。

（しかも片手か。随分と、嘗めてくれる……！）

倒れている相手に斬りかかっている私が、体勢的には断然有利にもかかわらず、出石小刀は炎の剣に阻まれたまま頑として動かない。

私と彼女では、腕力の差が大きすぎるようだ。
力勝負では敵わぬな。

力では勝てぬとなると、このままでは埒があかぬ。
どうやら彼女も悟ったらしく、空いている左腕に妖力を集め始めた。
紅の気が腕を包む。

まずい、至近距離から弾幕を喰らえば敗北は必至だ。

直ちにつばぜり合いを中断し瞬間移動、退避した。

直後、紅い光弾の嵐が天井を破壊、そのまま二階まで貫通し、屋敷内に轟音を響かせたあたり、自らの判断は正しかったようだ。

フランドール殿は瓦礫の雨をもとせず、まだ笑っていた。

「よく避けたね！じゃあ次はどうかなあ！？」

炎が大きくのたうつ。

両手で天へと掲げられた剣が持ち主に共鳴し、暴れたいと主張している。

周囲の温度は、いきなり肌が焦げ付きそうな程に上昇した。あの剣が、早くも目覚めるようだ。

幻想上の武器というのはどれも等しく強力だ。

中でも強力な物はただの一振りでも百の兵を尻ぎ払い、千の軍を打ち破る威力を誇る。

その力の保有量は当然武器によって異なるが、これほどの魔力となると、よもやあれは太古の時代に存在した破壊神の愛剣などではあるまいか。

渦巻く魔力は空気を震撼させ、際限なく私を威圧してくる。

あれは人が扱えるような代物ではない。

破壊を、災厄をもたらす為にあるような邪悪なる魔剣だ。

何か、とてつもない一撃が来る……！

「常世全てを焼き滅ぼせ！レーヴァテイン！」

瞬間、炎が爆裂した。

剣は赤に包まれたちまちま見えなくなり、火炎は二階へと突き抜けるほどに肥大化したのだ。

その様はまるで、彼女自身の腕が炎と化して、巨大になったようだった。

剣を床に横たえれば、廊下の横幅、縦幅をまるごと占領できるだろう。

そんなものを振り下ろされた時、周囲に回避場所はあるか？

答えは、否だ。

「キヤハハハハ！さあ行くよ、灰になっても恨まないでねえ！」

自らの住まう館などお構い無しに、天井を炙りながら炎が迫る。
あの紅蓮の世界に包まれれば、死は免れまい。
是が非でも避けねば。

安全地帯は……剣の持ち主の背後しかない。
迷うことなく能力を使用、灼熱の刃から逃れる。

「ヒヤハ、簡単には逃がさないよお！」

「……ぬう！？」

彼女は床に叩きつけた剣を腰の回転を使って振った。
移動した背後からまた、壁を焼く死の炎が迫る。

「くっ……!!」

選択の余地はない。
またしても背後へ。

しかし無情にも、回転する炎が私を飲み込もうと近付いていた。

「アハハハハ！ほらほら閃珠、反撃しなよ！アハハハハ！」

（く……これでは、徒に、神力を、消費する、のみではないか！）

移動、移動、移動に次ぐ移動。
駒のように高速で回転する炎を回避せんがため、能力を惜しみなく
使わざるを得ぬ。

このままでは体力勝負に持ち越される。

そうならば、恐らく我が神力より多くの妖力を持つ相手に軍配が上がるは必定。

正々堂々は大切だが、命には変えられぬ。
仕方あるまい……！

「玄関で待つ！追つて来るがよい！」

捨て台詞を残し、廊下から姿を消す。

先程通ったばかりの扉の向こうへと移動し、馬鹿でかい玄関口の中
央に着地。

これである魔剣に焼き殺されることはあるまい……。

しかし、安心したのも束の間、それとほぼ同時に扉が勢いよく吹き
飛び、私に向け飛来した。

素早く脇に蹴り飛ばすが、その選択は誤りであった。

障害物の向こうには、奇怪な翼を広げた敵が目前にいたのだ。

この距離では、能力発動も間に合わぬ。

不意を突かれた故に発動が遅れた。

小癩な策を……！

情け容赦無い蹴りを脇腹にもらい、私が蹴った扉同様に吹き飛ばす。
重厚な石壁に叩き付けられ呻きが漏れるが、歯を食い縛る。

怯んだところに追撃を貰えば勝負は決してしまうからだ。

再度闘志を燃やし、正面の敵を睨み据える。

彼女は、追撃には来ていなかった。

あの魔剣も手から消えている。

嗜虐的な視線を私に向け、牙を見せているだけだ。

その代わりに、状況は悪化したとしか言えなかったが。

「どうしたの？閃珠」

「そんな不思議そうにしてさ」

「目を擦ったって」

「何も変わらないよ？」

口々に、フランドール達が私を嘲笑う。

目の錯覚、であろうか。

或いは幻術の類いか？

それともこの危機に頭がおかしくなった？

最初は幻だと思った。

しかしその輪郭を、顔を、表情を、そしてその狂気を見れば、現実と判断せざるを得ぬ。

悪魔の妹、フランドール・スカーレットが四人いる。

分身術まで扱うとは器用な奴め、力押し of 戦いだけではないとはつゆとも思わなかったというに……！

反則的な力ではないか！

こんな相手とまともに対峙したことがそもそも間違いであった。

せめて応援を呼ばねば、私だけでは到底敵わぬ。

私が倒されれば、主を助ける者はいなくなる。

それだけは避けねば。

想像するは白玉楼の庭。

神力を想像に集中し、高まった所で解放。

いつも通りの至極簡単な手順を踏み、我が能力を発動する。

こうして私の体は白玉楼へと……。

「……？」

移動、しない。

もう一度、想像、神力を解放し、発動。

「……な」

私の足は、変わらず玄関口の床を踏み締めている。

一体何故？

まだまだ神力の枯渇には程遠いというに。

我が能力に異常が起きたとでも言うのか？

「そろそろ行くよ？」

「覚悟はいいかな？」

八つの瞳が私を射抜く。

血に飢えた獰猛な肉食獣のように、危険な光が宿っている。

一人で戦い抜くことなど元より覚悟はしていたが、最後の手段にして奥の手は潰えた。

その上四対一、絶対的な数の優位を覆さねば勝利はない上、その四人は全員真つ向勝負では太刀打ちできぬ強者。

この圧倒的苦境を打破する手段を講じねば、私は抵抗も許されず瞬殺されるであろう。

それが思い浮かぶまでは、耐えるしかない……！

「フォーオブアカインド。皆一緒に、遊びましょ？」

赤、青、黄色、緑。

四色の弾幕が一斉に放たれた。

眼前の空間が死で埋め尽くされる。

四方八方、部屋の隅々まで打ち込まれている今では、瞬間移動すら意味を成さないだろう。

その隙間を必死で縫い、時折弾を切り捨てながら、頭の片隅で対抗策を練る。

私にあの四人全てを倒す力はない。

それどころか、一人すら倒せるか疑問だ。

しかし、あの四人の内三人は偽物、本物だけを狙って倒せば消えるはず。

問題は本物はどれか、そして見抜いた本物を如何にして倒すか、この二点。

「……がつ！く……！！」

片手間では、やはり無理があるらしい。

剣の切っ先を避わした光弾が、容赦なく右肩に被弾した。肩が吹き飛んだかのような激痛が走る。

だが、思考と集中は切らさない。
次々と迫る極彩色の殺人光を斬り、避け、考える。

第一に、本物はどれか。

見た目は全て同じ、違いは弾幕の色と密度、些細な表情の機微のみ。
私に向けて狙い撃っているのは赤の弾幕を操るフランドールと、青の弾幕を操るフランドール。

黄色の弾幕担当は私の能力に対抗してか、赤と青の後方を見ながら、片手で闇雲に私を狙う。

緑の弾幕は好き勝手に四方八方乱射されていた。

まず、黄色は違う。

あれだけの狂気を持つ者が警戒役に徹する訳がない。

本物は戦闘に参加していると考えるのが自然だ。

狂っているといえれば好き放題している緑がしつくりくるが、黄色と同じ理由でこれも除外。

残るは、赤と青の二択。

この二体は隣り合って私を射撃している。

私から見て左側が赤、右側が青。

やはり手を抜いているのか二人とも弾幕を出す手は片手のみ。

青が左手、赤は右手。

どちらも前方広範囲を攻撃中……なれば、本物はあちらか。

当たりをつけ、引き続き倒す方法を模索……。

「ぐあっ！く、ぬう！」

破裂音が私の体を襲った。

またもや被弾。

今度は左足だ。

骨まで響いた衝撃を鑑みるに、もう全力失踪は不可能だろう。歩くことすら支障が出そうだ。

一撃一撃がとんでもなく重い。

早く攻撃に集中しないと殺される。

私は脳の隅々まで覚醒させ考えた。

自らより格上の敵を打倒するには、奇襲が弱点を突くのが常道だが、突ける死角がない故不意打ちは不可。

では、弱点はどうか。

吸血鬼は流水、日光等が弱点だと妖夢殿より伺ったがここにそれはない。

夜では上空に月が輝くのみで、屋根を破壊しようが無意味。

水……主なら水の神器を使い流水を操れそうだが、私には出来ぬ芸当だ。

弱点もつけそうにない。

正攻法しか私には残されていないようだ。

しかし、どうすればあの怪物を正面から打ち破れる？

考えれば考えるほど、勝利が遠退くようであった。

「……終わりだね」

「……っ!？」

唐突に告げられた終了宣告が、我が意識を現実集中させた。

しかし、それでは既に手遅れだった。
戦略を立てたのが逆に仇となった。
よもや斯様に単純な事にも気付けぬとは。

いつの間にか、四人のフランドールが結集していたのだ。
全力で私を討つために、後方の守りを捨てて集中砲火を浴びせてきている。

弾に隙間はほとんど無いに等しく、今の足の状態で避わしきることが不可能であることは容易に想像がついた。

瞬間移動も間に合わぬ。

意識を集中している間に弾幕の洪水に飲み込まれてしまう。
斬るには数が多すぎて対応しきれぬ。

防御、不可。

無数の炸裂弾をその身に浴び、私は塵のように吹き飛んだ。

フランドールの狂笑を遠くに聞きながら、我が体は部屋の隅まで地を滑り、転がされていった。

強かに頭を壁に打ちようやく止まる。

すかさず起き上がろうとするも、身体は言うことを聞かぬ。

弱々しく動き、激痛で抵抗を諦めてしまう。

服は所々破れ、血が滲み、肌が見えている腕や顔は傷だらけ。

骨も何本かやられていることであろう。

まさに満身創痍。

どう見ても、敗者にしか見えぬ。

「お〜しまいっと。私の勝ちだね、閃珠う。中々楽しかったよ」

四人から一人に戻ったフランドールが、勝ち誇った笑みを浮かべながら私に歩み寄ってくる。

このままではまずい、だがどうすることも出来ぬ。足掻いても、やはり身体は痛みを訴えるのみ。

私の数歩手前で立ち止まった彼女は、さらに新しいカードを取り出していた。

「折角だから、止めも派手に決めてあげる。ドッカーンって弾け飛んじゃうくらいにねえ！ひひひハハ！」

フランドールの背に生えた虹色の宝玉が輝きを放つ。

七色の光の残照を残しながら、フランドールはホールの天井近くまで飛び上がった。

翼の宝玉が、銃口の如く私に先端を向けている。

それぞれの光は暗い館を極彩色に照らし、私の目を眩ます。

カードの光はその中央、フランドールの右手で煌々と輝いていた。

「まだ……だ」

決して諦めるわけにはいかぬ。

どんな卑怯な真似をしてでも勝たねば。

主のためにも、仲間のためにも、私は絶対負けられぬのだ。

あの吸血鬼の攻撃を凌ぎ、奴を討つ逆転の一手を考えよ。

頼りない我が頭脳をこの上なく働かせ、思考の歯車を急速で回す。

「アハハハハ、それじゃあ行くよお！禁弾！」

何か、何か無いのか。
私を勝利へ導く手は。
考えよ、奴が最後の一手を打つ前に！

脳を働かせる歯車はこれ以上無いほど回転している。
しかし打開策は出ず。
当然だ、そう簡単に倒せるなら私は窮地に追い込まれることもない。
それでも、考えねば……。

ふと、その歯車が軋みを上げた。
それは天啓が我が元に下った音でもあった。

阿呆か、私は。
何故こんな事を考えているのか、考えるまでもなく答えは出ている。

貴様はもう出石小刀ではない。
出石閃珠だ。
新たな仲間を、新たな力を得て、主の為に振るえる力は格段に増え
たはず。

しかし貴様はあくまでこの世界の新参、もう出し惜しみをする余裕
など無いであろう。
今こそ、あれの力を解き放て。

忘れたなどとは、言わせぬぞ。
この幻想郷に生きる貴様の武器は、両手に握るそれだけか？

「否……断じて否あ！」

一瞬でも弱気になった自らを恥じ、喝を入れる為に私は吼えた。それと同時に能力を発動し移動する。傷の修復をせずに温存していた神力が、ここで役立つた。

「逃げた……わけじゃないか。逃げれば助かったのに馬鹿なの？」

私を見失ったフランドールは部屋を睥睨し、その姿を直ぐに見咎めた。

二階へと続く大階段の上、最も彼女に近付ける場所。

彼女は私を痛烈に嘲笑し、背の宝翼をこちらに向け直した。

「粉々になっちゃえ、スターボウブレイク！」

虹色の豪雨が私を破壊せんと降り注いだ。

一発だけでも一人吹き飛ばすには十分すぎる、巨大兵器の如き一撃。

このまま何もしなければ、私は数秒後に跡形もなく消えるであろう。狂える吸血鬼の奥の手に相応しい、途方もないほどの威力だ。

しかし十秒にも満たぬ今までの隙が、私に千載一遇の好機を与えてくれた。

照準を定め、弦を限界まで引く時間が出来たのだ。

射にどうしても必要な、時間が。

「射抜け……霊射！」

引き裂かれた肩が悲鳴を上げ手足の骨が苦痛を叫ぶ。

私は心中で、自らを叱咤した。

傷など構うものか。

腕砕け足折れようと、この命尽きるまで私は戦う。
そうして奥歯で呻きを噛み殺し、鏃の向きをピタリと虹の奥に霞む
フランドールへ定めた。

武士たる者、土道を貫くべし。

義を重んじ、恩に報い、主に忠節を尽くし、弓馬を磨く。
以前いた世界から貫き続けた志だ。

私はこの世界に来るまで、剣として使われるか神として崇められる
かのどちらかであった。

最初は自我すら持たず、気が付いた頃には主は消えており、神とし
て崇められていた。

自らに仕えるべき者がいたことすら、巫女から伝え聞いたのだ。

今度の主こそは、最後まで側に侍り守り抜きたい。

主に苦しみは味わわせぬ。

まずは主から賜ったこの弓矢で主の敵を討ち、恩に報いてみせる。

最大限緊張した弦の力を、私はありったけの神力を込めて解放した！

「破邪双雷！」

大弓につがえられた二本の矢が、光速を越えて風を裂く。

今一度妖魔を狩らんと、風切り音が吼えている。

我が霊矢はフランドールの弾幕の半分が届くか否か程度の威力。

他者が見れば私の抵抗は無謀の一言に違いあるまい。

しかし私は、その矢に自らの全てを賭した。

決して一か八かの博打ではない。
あれにはそれだけの価値がある。
もしスペルカードの効果もこの弓矢の伝承に違わぬなら、あるいは

矢と七色の壁は、今まさに交錯しようとしている。

勝負は一瞬、矢が光に飲み込まれるか、光が矢に貫かれるか。

「貫け……!!」

我が願いを乗せた矢が、光弾に触れる。

「……嘘っ!?!」

一つの弾が、静かに音もなく消えた。

一つ、二つ、十、百、進路に立ち塞がる弾の壁を容易く突き破りながら、矢は目標へと突き進む。

フランドールは驚愕し慌てふためいていたが、もう遅い。

我が願いは、確信に変わった。

妖怪だけは、絶対にあの矢を止めることは出来ないのだ。

「う、あああああ!」

フランドールの決死の弾幕が、二矢を襲う。

私自信が受ければ即死に追い込まれるに違いない全力の乱射。

それを受けながらもなお、二筋の光は勢いをそのままに猛進するのみ。

彼女は勢いを殺せず、さらに避けられるギリギリの距離を越えてしまった。

後に来る未来は、一つしかない。

「ああああ!!」

命中。

「あつ……!!」

矢は、標的に到達した。

射抜いた箇所は、脇腹。

威力が大きすぎて、傷は貫いたというより抉ったようになっていた。誰がどう見ても致命傷だ。

我が最後の一撃を受けたフランドールは、飛行する余力すら奪い去られたのか地面へと加速していく。そのまま床に叩きつけられた彼女は、ついに四肢を投げ出し動かなくなった。

「……終わった、か？」

フランドールは倒れたまま苦痛に身を震わせている。

その姿からはもう、殺気も抵抗の意志も感じられぬ。

あの体では戦うことも出来まい。

危惧していた、偽の標的を掴まされたということもなかったようだ。

辛うじてだが、勝利を掴めた。

「……ふはあ」

まずは安堵が体を包む。

一時は死も覚悟していただけに、こうして立っていられることを感謝せずにはいられぬ。

誰に、とは聞くまでもあるまい。

私が助けるべき方に、逆に助けられてしまうとは……やはり立派なお方だ。

私は傷だらけの体を引きずりながらも、彼女の側に近寄った。

彼女はどくどくと血を流し続ける傷口を見ながら、涙を浮かべ困惑していた。

「なん……で、なんで……治らないの……!?!」

「水破は触れた物の妖力を消し去る。故におぬしは妖力が枯渇しており、傷も癒えぬのだ」

あの弓の名は、雷上動。

矢は、水破、兵破という。

平安の都を騒がせた妖怪を貫いた、聖なる弓矢だ。

水破は妖怪の体を包む黒雲を引き剥がし、兵破は一撃で妖怪を討ち取った。

矢が伝承通りの力を発揮するとしたら、水破は妖力を消し去れると考えるのが簡単だろう。

彼女は私を見て恐怖に目を見開き何とか逃げようとするが、傷口のせいでまともに動けていない。

そんな哀れな姿を見て、私は胸が痛くなった。

そもそも、私は出来ることなら彼女と戦いたくなかったのだ。

主を助けるその途上、どうしても邪魔になれば誰であれ排除する覚

悟はある。

しかしそれは、私が戦いを望む事にはならぬ。

私が戦うべき相手は主を襲う吸血鬼、レミアア・スカーレットであり、その妹ではない。

もし話を聞いた後に彼女が何も言わずに退いてくれれば、それが最良であった。

彼女が持つ狂気が暴れ出し襲ってきたりしなければ、私とて剣は抜かなかつたであろう。

良き武士は無用な戦をせぬのだ。

これからも無駄な殺生は避けねばならぬ。

まずは、その一歩だ。

私はフランドール殿の怯えた視線を受けながら、話を持ちかけた。

「フランドール殿。おぬしが我が主と私に今後危害を加えぬと誓うならば、私はおぬしを斬らぬと約束しよう」

「……嘘、だ」

「嘘ではない。おぬしを騙して斬るより、誓いを守る方が余程良い結果が得られる」

水破がもたらした結末は、傷のほどは兎も角よいものであった。

瀕死ならば、彼女が如何に狂気の持ち主であろうと落ち着いて話が出来る。

私が会話の主導権を握ることも容易い。

武力で他を屈伏させてから交渉するなど不快極まりないが、それで上手く事が運ぶのであれば、これも一つの手法であろう。

私の話を聞いたフランドール殿は、長い間無言だった。瀕死の傷を受けたせいかと思いい、まさか死にはしまいなと心配になる。

妖力を根こそぎ消し飛ばされても、妖力の生成は止まらぬ。

傷は妖力が戻るにつれ段々と回復していくし、暫くすればいつもと変わらぬようになる。

大妖怪、吸血鬼ともなれば妖力の回復も速いはず。

はずなのだが……この様子だと、少し血を与えてでも回復を早めるべきか？

私があればこれ苦慮していると、彼女はポツリと、斯様なことを呟いた。

「約束、したら」

「したら？」

「約束、したら、友達になれるかな……？」

息も絶え絶えの状態で聞くことではないような気もするが、彼女にとっては重要なのである。

そうでなくば、目に涙は溜まらぬ。

「私……気が、触れてるから、み、皆から、怖がられちゃうの。だからっ、と、友達もいなくて」

……ふむ。

私が怖がらず接したからこそ、彼女は期待し、私にあのような頼み

をしたのか。

友がおらぬとは、どのようなものであろう。

苦境を乗り切る支えも、日々の下らぬ会話もなし。

自らの過ちも正してもらえず、無味乾燥な日常が過ぎ行く。

ただ積もるは寂寥と退屈。

さらに妖怪ともなれば、生きる時間も人とは比ぶるべくもない。

私も千年は優に越えた。

その永久にも思える年月、彼女は独り。

私なら耐えられぬ。

圧倒的な孤独に押し潰されてしまふに違いあるまい。

仲間達と共にあった記憶がなければ、私はこうして闘うことも叶わなかつたやもしれぬ。

あの日常を取り戻したいが為に、私は戦うのだから。

「あいつはっ、お姉様は、私が、そんな私が邪魔なのよ。だから、495年も屋敷に閉じ込めるの」

フランドール殿は裏返った声で吐露しながら、床を拳で弱々しく叩いた。

涙は瞳から溢れだし、血溜まりに混ざり合っ。

容易く口出しするべき問題ではないとは思えど、私はあまりに馬鹿げた対処に唇を噛んだ。

うつけめが、495年も屋敷に幽閉だと？

何故実の姉が妹から逃げたのだ。

彼女が狂気を発露したのが何時かは知らぬ。

だが何時であるうが、その妹を側で支えるべき一番の人物は姉以外

おらぬだろうに。

他人との触れ合いもなく、閉じ込められたままで心が育つはずなし。
彼女は幼いままなのだ。

幼く、孤独であるが故に、友を求め、自らを嫌うものは排除し目を逸らす。

よしんば彼女を恐れ友となろうとも、有象無象は吸血鬼に恐怖を見透かされ、飽きられ排斥される。

彼女はずっと一人だったのだろう。

そして今も、孤独な少女は拒絶の言葉を吐き続けている。

「どいつもつ、こいつも、大っ嫌い……！ ぜんぶ、ぜんぶ、壊れちゃえばいいんだ……！」

私は、慟哭する彼女を救いたと思った。

彼女が悪いのではない、彼女の内に眠る狂気が悪いのだから。

そして彼女がいかに狂気の持ち主であろうと、根は少し臆病で可愛らしいだけの少女なのだ。

この哀れな娘を、どうして見捨てられようか。

他がどう思おうと、私だけは彼女の味方でありたい。

私はその思いを込めて、思い切り彼女を抱き締めた。

「私が、友となるから。だから、左様な寂しいことは申されるな」

震えるフランドール殿。

その肩を私は強く抱き寄せた。

「ほん、と……?」

「応とも。武士に二言はない」

「う、ああ……、うあああああ……!」

孤独な少女は、綺麗な顔をぐしゃぐしゃに歪めて泣いた。
その声は、広い玄関に嫌というほど響き続けた。

第二十八話 紅魔の宴・剣舞（宴も酣へたけなわ）（後書き）

正直サブタイトルが被りすぎてヤバイ。若干後悔してます。ここまできたら貫きますけどね！

さて次回、ようやく紅魔の宴も終結！

お嬢様はどうなっているのか、妹様と閃珠はどうなるのか！
ずっと支配されっぱなしの主人公や、今まで出番のない方々が日の目を見ることはあるのか！？

それではまた来週。

第二十九話 紅魔の宴・剣舞（終幕）

フランドール殿が心身共に落ち着くまで数分。
私が最低限の傷を癒すのにまた数分。

「そろそろ、行かねば」

傷のせいか足がまともに動かぬが、それでもこれ以上は待てぬ。
自分でも愚かだとは思うものの、主の身がいよいよもって心配だ。
今も衝撃音はこちらに響いている。
しかも察するに、戦いは先程より苛烈さを増しているようだ。

「閃珠、何処行くの？」

フランドール殿がこちらを心配そうに見やる。

「前も申しした通り、主の元へ。私が助けに行かねばならぬのだ」

彼女にとっては敵対行為だが、致し方ない。
レミア・スカーレットは我が主の敵。
勝てぬとしても、せめて主を逃がすぐらいはせねば。

「……なんで、御姉様はその人間を襲ってるの？」

彼女は静かに問うた。

そこに狂気は見られない。

また、怒りも批難も感じられなかった。

「分からぬ。主が何か無礼を働いたわけでもなし、恐らく妖怪とし

ての性ではなかるうか」

本当にあの吸血鬼の真意が読めぬ。

最初は尊大ではあったが、至極友好的で敵意も見られなかった。あの短いやり取りのどこでそれが変わってしまったのか。

彼女は暫し黙り込んでいたが、やがて意を決したらしく頷いた。

「そう……、分かった。私も御姉様を止めてみる」

「良い、のか？」

彼女は実の姉に反旗を翻すことになる。

私はフランドール殿の敵となり、争うことはしたくない。

だが友となったのは、彼女を味方に引き入れ、レミリアとの戦いを有利にする為でもないのだ。

左様な酷で外道な真似をするは、人道に反する。

彼女は決然とした表情で言葉を紡いだ。

「うん。閃珠が困ってるなら、私はその力になりたいもん。出来ることはやりたい」

友とはいえ、先程出会ったばかりの者に斯様な言葉を私はかけられようか。

自らの姉上と天秤にかければ、容易く吹き飛びそうな存在なのに。姉上を殺されはしまいか。

そんな疑心もなしに、真つ直ぐな心で。

「真に、かたじけない」

心底、彼女に感謝した。

彼女は、本当はとても優しい娘なのだ。

狂気にはかり目を向けられるせいで、周りがそれに気づかぬだけ。この屋敷の主は、果たしてそれを分かっているのだろうか……。知らぬならば、教えてやらねばなるまい。

「では、参ろうか。立てるか？」

「ちよつと辛いけど、大丈夫。閃珠は？」

「同じく。この程度でくたばってはおれぬよ」

共に立ち上がり、先程も開いた扉へと向かう。

あの向こうの突き当たりが大広間だ。

思う存分暴れまわるに最も適した部屋。

主が居るであろう場所。

「ねえ閃珠、あなたが助けたい奴って、どんな人間なの？」

私を先導し、扉を開いてくれたフランドール殿が振り返った。

「素晴らしい御方だ。数多の神器を使いこなし、自由に空を駆け敵を討つ強者。しかし驕りはなく、寛容で優しく、実直で誠実。我が主に相応しい御仁よ」

気付けばすらすらとこれだけの言葉が出ていた。

我ながら少し心酔しすぎておるやもしれぬ。

フランドール殿も若干呆れ顔だ。

「閃珠、その人の事本当に大好きなんだね」

「好き？」

「だってそうでしょ？話してるのすごく楽しそうだったし、今だって笑顔なんだもん」

彼女は楽しそうに笑っている。

……好き？

主として好感が持てるということであろうか。

「私が紅魔館の皆の事を話すときも、こんな感じなのかな？だとしたら、ちよつと恥ずかしいな」

彼女はくすぐったそうに笑い、身を震わせた。

好き……、紅魔館の皆？

彼女にとって、寝食を共にする館の者達は家族も同然のはず。それを引き合いに出すということは……。

「私が従者ではなく一個人として、主の事を好いていると？」

「え？そうだけど、それ以外に何かあるの？」

彼女にとって、我が問いはおかしな物だったようだ。目をしばたかせ、口を小さく開けて私を見ている。

「いやいや、それは違う……。と言うよりあってはならぬ。私はあの方の従者であり、それ以上でもそれ以下でもないのだ」

従者とはそういうものだと思う。
私が描いてきた理想像は、主に頼られ、強い絆で結ばれた有能な従者。

私個人の意思で主を良い方向に導くことこそあれ、好きだの嫌いだの、左様に自分勝手な感情は必要ない。
無駄な感情が服従を拒むことだってあるのだ、今の私には半端な好意など邪魔であるのみ。

私は主を従うべき人物以外に見るべきではないのだ。

しかしフランドール殿はまた首を傾げた。

「従者だとかさ、そういうのは関係ないんじゃないかなあ。咲夜は私のことを慕ってくれてるよ？多分」

彼女には彼女なりの考えがあつて、私に意見しているのであろう。
それは理解しているし、気遣いも有難い。
しかし、私には私なりの考え方があつた。

「……同じ轍を二度も踏むわけにいくまい」

今の主は優しく、また自らが未熟である故に、己の感情をぶつけたりしてしまふこともあつた。
しかしそれが通じる相手ばかりではないことを、私は知っている。
世界はそう甘くない。
人は優しいばかりにはあらず。

「……閃珠、怒った？」

「へ？」

「怖い顔してるから……変なこと言って、ごめん」

表情が自然と強ばっていたらしい。

フランドール殿は怯えるように小さく頭を下げた。

驚異的な力を持つ吸血鬼に謝られるとは、何とも奇妙な気分だ。

私は笑顔で首を振った。

「気にしておらぬよ。その程度で怒るなど狭量に過ぎる。しかし、この話は止めにしよう」

これ以上話しても不毛だ。

彼女も同感らしく、すんなり首肯した。

「分かった、もう大広間もすぐそこだしね」

そう、大扉はもう目の前。

ここからは心を切り替え、気を引き締めていかねばならぬ。

ここに近付いて、私は確信した。

間違いなく音の発生源はこの部屋だ。

衝撃音、振動、剣戟の響きまで伝わってくるのだから間違いあるまい。

重厚な扉さえ、今にも外れて吹き飛びそうにガタガタと揺れている。

この奥に吸血鬼が……。

思わず拳を握る。

「閃珠」

フランドール殿が、横からその手を包み込んだ。
視線だけを向けると、彼女は一音一音をはっきりと伝えてきた。

「御姉様を、絶対殺さないでね」

「……承知」

手を握る強さは思いの証。

これを裏切るなど誰が出来ようか。

主さえ救えれば、私は他には拘泥せぬ。

最大限善処しよう。

「なればフランドール殿、おぬしも何があるうと我が主を殺さぬよ
う」

「うん、分かってる。それじゃ……行くよ？」

「……うむ」

彼女は扉に手をかざした。

その右手は、燃えているが如く紅に染まっている。

扉を開く隙を作らず、入口を吹き飛ばす腹積もりらしい。

入ってからは、ひとまず主の身を守ることを最優先にせねば。

その後適当に注意を引き付けながら、隙を見てあの玄関まで移動すれば此方の勝利だ。

すぐ戦闘に入れるよう、出石小刀は抜いておく。

神経を尖らせ、心を落ち着ける。

フランドール殿の右手に集まる光は最早炸裂寸前だ。

紅い光を四方に撒き散らしている。

これからは想像を絶する苦闘を強いられるだろう。
しかし私は心強い友を得ることができた。
彼女と共にならば、きっと成功するはず。
この戦いも、勝つ。

「いつ、けええ！」

爆裂。

紅の波動が扉を突き抜け疾走した。
破壊の波は広間を蹂躪し、奥の舞台に至るまでの全てを抉り潰す。
床は割れ、照明は落ち、窓は粉碎。
最後に舞台上の紅い幕を容易く粉微塵に裁断し、奥の壁にひびをい
れてようやく止まった。
人影こそ見えなかったから良かったものの、万一あれに飲み込まれ
ていれば、流石の主とて一堪りもあるまい……。

「……フランドール殿、やり過ぎだ」

「ありやりや、一応加減はしたんだけど……」

彼女は難しい顔をして頬を掻いている。

あれで手心を加えたと？

私は何故今生きていられるのであろう……。

「いやいや、素晴らしい攻撃だ。称賛するぞ、吸血鬼よ」

「っ!?!?」

頭上から声が。

低い、それなのに良く通る声だ。

聞き覚えがあるような、無いような……。

見上げる。

声の主は、天井近くで翼を広げていた。

右手に先刻見た黒い長剣を下げている。

フランドール殿のレーヴァテインに勝るとも劣らぬ禍々しさを放つ

それは、我が主の所有物であった。

「……主？」

何故、私は疑問を抱いたのか。

あの人物は、間違はなく霧崎翼の筈。

容姿はまさにあの方その者なのだから。

しかし……しかし、我が主は、斯様な雰囲気を持っていたであろうか？

狂気、そして邪悪、息苦しい空気。

何もかもあの方には似つかわしくない。

私の中に生まれた疑念は、やはり正しかったようだ。

「フラン！逃げなさい！」

「遅い！」

何処からか叫ばれた警告は届かなかった。

主はこちらに向けて突進してくる。

長剣は横凧ぎの姿勢。

まさか、まさかあれを振るうというのか？

彼の目は獰猛な殺意に満ちている。
狂気に落ちたフランドール殿と同じ目だ。
殺すことに飢え、それを楽しまんとしている。
抵抗せねば、死ぬ。

その確信が、私に剣を振らせた。

甲高い剣の交錯音が広間に木霊する。

同時に私から通じた衝撃で地が穿たれた。

「ぐっ、つう……！」

腕がへし折れそうな痛みが骨に突き抜ける。

何という怪力であろうか。

体ごと押し潰されそうだ。

まるで勝負にならぬ。

「このっ、離れなさい！」

我が窮地を悟ったか、フランドール殿が救援の弾幕を展開。
主はそれを避かわすために広間の中央まで下がった。

「主、私は味方であろう？何故剣を向けるのだ」

おかしい。

何かがおかしい。

決定的に何かが違う。

いつもの主ではない。

彼はにやついた顔で宣言した。

「味方？そんなものはいらんな。私は戦えればそれでいい」

……違つ。

あれは、主ではない。

心優しい主が左様なことを口にするはずがない。

なればこいつは何者だ？

主を真似しているのか、それとも主の体を支配しているのか。

「……貴様、名乗れ。借り物の姿ではなく、貴様の名を」

戦いに身を置くものが、名乗りを憚るとは思えぬ。

自らの威名を轟かすことこそ戦士の誉れ。

果たしてその通り、彼は高らかに名乗りを上げた。

「テイルフィンゲ。お前と同じ、剣に宿る魂だ。今はこいつの願いを叶える代わりに、体を借りている」

要するに憑依か。

我が主の自由を奪い、好き勝手にしてくれたのだな。

……生かしてはおけぬ。

「勝手な真似を……」

思わず零れた憎しみの言葉を彼は平然と受け止めた。

「勝手？馬鹿な。私はこいつが助けてくれと願ったから、それを叶えようとしているまでだ。その手段まで指図される謂れはない」

「減らず口を……。もうよい、斬り捨ててくれる」

とはいえ、あれは主の体。

そして私は既に疲弊している。

工夫なしに戦わぬわけにはいくまい。

あれと真っ向から斬り合えば、瞬く間に我が敗北となろう。

しかしもう雷上動は易々と使えない。

どうすれば……。

フランドール殿は、斯様に思考する私の前に立ちはだかった。

「閃珠、あの剣を壊せば良いの？」

「うむ……。一筋縄ではいくまいが、他に主を救う道が解らぬ故、な。加勢を願う」

「加勢？ううん、一瞬で終わるよ。私の能力を使えばね」

言って、彼女は右手の上に黒い球体を出現させた。

心臓の如くドクドクと脈打つそれからは、悪しき神力を感じる。

今目の前にいる、偽の主と同一の物を。

「何を、するつもりだ」

テイルフィングは油断なくフランドール殿を観察している。

対してフランドール殿は、油断どころか楽しそうだ。

「ねえ、知ってる？全ての物には、最も緊張している場所、“目”

があるの。それを自分の手の上に出現させるのが、私の能力」

「ほう……それで？」

「目が壊れたら、その物体も粉々になっちゃうんだけど……。さて、これは何の“目”か、分かる？」

「……フン」

緊張が走る。

誰しもが分かるだろう、あれは恐らくティルフィングの“目”だ。

「神剣は流石に壊したことないけど、もし壊れたら、貴方も無事では済まないよね」

我々神霊は、宿る物と一蓮托生。

物が滅びれば、道連れに我等も滅ぶ。

奴とて左様に危険な賭けを犯してまで、戦いを望む馬鹿ではあるまい。

ティルフィングは不愉快そうに舌打ちし、腹いせなのか剣を床に突き立てた。

「……脅しか、まったくつまらん」

「私も楽しい方が好き。だけど、友達のお願いは聞いてあげなきゃね」

「……勝手にしろ。私は今一度眠る、体の持ち主は一晩も経てば目が覚めるだろうから心配するな」

低い声が響き、邪悪な気配が消えていく。
途端、主の体は糸が切れた操り人形の如く崩折れた。

「主！」

駆け寄る。

幸いにも気を失っているだけだった。
安静にしておけば、恐らくは大丈夫であろう。
奴の言ったことは真実であるようだ。

「ああ……、よくぞ、よくぞ御無事で……」

私は安心の余り泣きそうになった。

主曰く、ティルフィングは破滅の剣。
一度願いを捧げれば、狂戦士となり暴れ狂う。
左様に危険な代物に憑かれながら、よくぞ生きておられた。

しかし、まだ終わってはいない。
最後の砦がいる。

「閃珠、今の内に逃げて。お姉さまは私が食い止めるから」
隣に立つフランドール殿がこちらを見ずに言う。
視線の先には、蝙蝠の翼を広げた吸血鬼。
全身傷だらけだが、妖力は尽きていないようだ。

「フランドン、退きなさい。私はそいつらを殺さなければならぬのよ」
血走った目が主と私を捉えた。

「何で？理由があるの？」

「当たり前じゃない。私は客を訳もなしに殺すほど野蛮ではないわ」

「じゃあ、その理由は？」

レミリアは仇敵を見るような目で我等を睨む。

「その霧崎翼は、破滅の運命を背負っているの」

「……何だと？」

「他人を巻き込む大きな破滅。絶望し、やがては終焉を迎えるわ。どうにか運命をねじ曲げようとしたけど出来なかった。だから」

レミリアは静かに、低い声で宣言した。

「他を滅ぼす前に、私がそいつを滅ぼす。私の手で強引に運命を変えてやる」

話し合いの余地は無いようだ。

レミリアは既に戦闘体勢に入っている。

それに対し、フランドール殿も静かに拳を握る。

すると、左側から炸裂音が轟いた。

見れば壁に大穴が空いており、その先には夜の暗闇が広がっている。フランドール殿は早口で私に告げた。

「あそこから逃げて！能力を！」

「っ、承知！」

後何回かならば能力は使える。

私は集中し、黙視している夜の世界に飛ぶ。

主は横に倒れたままだ。

草を踏み締めた感触からして、どうやら庭らしい。

ここからなら、白玉楼に飛べるか？

直後、後背から轟音が。

ぐずぐずしていられぬ。

集中し、白玉楼を思い浮かべ、神力を解放。

しかし。

「ち……！何故だ！」

飛べない。

目視範囲、又は館内なら問題なく出来るのに、何故。

焦燥が私の胸を焦がす。

このままでは、まずい。

どうすれば戻れる……？

「閃珠、危ない！」

思考を中断する流れ弾が飛来。

紅の光弾が主を狙う。

何とか能力で避ける。

「ちっ……致し方、あるまい！」

次に思い浮かべるは、門近くの風景。
場所は紅魔館内部。

集中し、能力を発動。
今度は、成功だ。

「くっ……、ふう」

戦闘音が遠くに聞こえる。
とりあえずは安全圏であろう。

神力が限界に近いのか、堪らず膝を屈してしまう。

「ようやくご到着ね。待ちくたびれたわ」

「……っ！」

か細い声に、弛んだ神経がまた刺激された。
俯いていた顔を上げると、眼鏡をかけた紫髪の女がこちらを見ていた。

その両手には、赤子ほどの重さはあるような巨大な本が。
足元には円陣に囲われた奇妙な星が輝いている。
西洋の、魔法陣……？

「魔女か……？」

「その通り。そう言うあなたは神かしら？」

「……然り」

しくじった。

よもや門前で待ち構えているとは。

この状態で倒れた主を守りきりながら戦うなど、不可能に等しい。ここはひとまず、逃げるしか。

能力の発動を遮ったのは、その魔女が発した意外な一言であった。

「どうしたの？外に出ないのかしら？」

「……何？」

嫌味だろうか。

声音はそれらしくないが。

「門前に来たのだから、館から出たいんでしょう？結果は消しておいたから安心して」

「……は？」

安心しろ、だと？

罠に誘っているのか？

「私が張った結界に、何回か神力が干渉してきたわ。あれ、あなたでしょ？」

「であれば、何とする」

「何もしない。ここであなたを倒したところで、私に利益はないから」

淡々と、感情が見えない喋り方。

何が狙いかも判然とせぬ。

こういった手合いは、好かぬな……。

「私は、あなた達に興味がある。能力、神器、二人とも面白いことずくめ。だから、逃がしてあげる代わりに」

動かずであった表情に初めて微かな変化が現れた。

眼鏡の奥の瞳が、ちろりと輝いた気がしたのだ。

邪心を感じさせぬ、情熱のに似た輝き。

「今度、ゆっくり話を聞かせてくれないかしら」

嘘にあらず、か？

しかし、命との引き換えがただ話をしるとは、圧倒的優位に立つ者が望む願いであろうか。

「……随分と、安い条件なのだな」

「何？それじゃあ、私の奴隷になってと言って、聞いてくれるのかしら？」

「断る」

「でしょう？だから、あなたがすんなり納得できる範囲で手打ちにしてあげるのよ。レミィが来る前に終わらせたいし」

合理的だ。

私が死ねば、何もかも水泡に帰す。
それを危惧してのことか。

確かに今レミアアが来れば私は主共々恐らく死ぬ。
私の生死はフランドール殿にかかっているのだ。
ぐずぐずしてもいられぬ。

「承知した。その条件を飲もう」

なればこの好条件は、承諾するしかない。
今は生き延びることが最優先だ。
魔女は頷き。

「そう。それじゃあこれを持っていきなさい」

自らが嵌めていた、小さな指輪を放って寄越した。
月明かりを鈍く反射するそれは、触れただけで魔術的処理が施されていると分かるような代物だった。

「……これは？」

「嵌めなさい。呪いはないから」

彼女が事前に嵌めていたのは、その証明であろう。
その種の攻撃的な呪術を物体にかけた場合、往々にして使用者は見境無く呪われる。

そして呪いに抵抗をしていたならば、私は魔力の高まりで見破っていた。

恐らく、大丈夫であろう。

言われた通り、指に嵌めてみる。
特に変化はなかった。

「その指輪に触れた者は、一週間後の正午、私の図書館に強制送還されるわ」

魔女め、やはり細工はしていたか。
呪いとは呼べぬ魔術だが、しっかりと逃げ道は封じる魂胆だったらしい。

「……強引な」

「破れるような約束はしたくないの。それじゃ、行きなさい」

魔女は、ようやく道を開けた。

鉄門は私を誘うが如く、少し開けられている。

数刻前に私はこの門を見たはずだが、気分だけなら数日前であった気がする。

この館での時間は、あまりに濃すぎた。

早く脱出し、主の目を覚まさせねば。

私は最後の力を振り絞り、能力を発動。
門の側に移動した。

次が、最後の一回となりそうだ。

「パチユリー」

「ぬ……？」

「私の名よ。パチュリー・ノーレッジ。あなたは？」

助けてもらいながら、名乗らぬわけにはいくまい。
もう、助かりさえするならばどうとでもなるがよい。

「……我が名は、出石、閃珠。そしてこちら……我が主の、霧崎翼だ」

「翼に閃珠ね。それでは、また会いましょう」

紫の魔女は踵を返した。

それを見届けてから、私は倒れ込むように、門扉を開ける。

「集中……、景色を頭に、思い浮かべる……」

そして、なけなしの神力を解放。

いつもと同じ感触に私は成功を確信し、安堵し。

意識を、手放した。

「あっ……」

結界が、消えた。

体にかかっていた重圧が無くなっていく。

パチエも、あの二人を逃がしたらしい。
外に出られたなら、一瞬でレポートされたに違いない。
もう、奴等を追うのは不可能だ。

「……終わつたみたいね、お姉様」

彼女も異変に気づいたようだ。

一部倒壊し、月が見える大広間。
裏切り者の妹、フランが月明かりに照らされながらにこりと微笑んだ。

私同様、体は傷だらけなのに、どうしてそんな顔が出来るのだろう。

「……余計な真似をしてくれたわね、フラン」

やりきれない思いで、私は月を見上げた。

私の好きな、赤い月。

美しいが、今日はどこか色褪せているように感じる。

この苛つく精神状態のせいだろう。

「だって、閃珠は友達なんだもん。助けないわけに行かないじゃない
いい」

フランは満足げだ。

友達の役に立てたことが嬉しいのだろう。

「それに、お姉様だって分かってたんでしょ？」

「……何が」

「能力で運命を変えられなかったなら、それはお姉様では干渉出来

ない運命なんだってこと。だよな」

流石に、495年も姉妹をやっつけていけばバレてしまうのか。

……分かってはいた。

あれは、自分の力ではどうも出来ないほど、大きな運命だということとは。

「それでも……見過ごせないでしょう。破滅の運命なんて」

あの男の運命は、ゾツとするほど暗かった。

未来予知ではないから、この先に何が起こるのかは分からない。しかし、ろくでもないことは間違いない。

あいつは近い将来、幻想郷全体を揺るがすような、破滅を呼ぶ。

「私達も、もしかしたら死ぬかもしれない。フラン、それでもあいつらを助けて良かったのかしら」

今更聞いたところでもう遅いのだが、つい批難したくて聞いてしまっ

う。

今日くらい、許されてもいいだろう。

フランは、一秒足らずで答えた。

「うん！」

良い、笑顔だ。

私はかつて、こんな妹の笑顔を見たことがあっただろうか。

幸せそうで、微塵も後悔していない。

……あの狂気を持つ妹に、こんな顔をさせる彼らは何者なんだろう。

「……………そう」

とりあえず、返事をするくらいしか出来なかった。
あんな顔をされて、説教なんか出来るわけがない。
まさか……………私が間違っているのだろうか？

十を滅ぼす存在たる一を捨てて九を救う、この方が断然良いはずなのに。

善良に過ぎる人間と、それに仕えるおかしな神。

あの二人は、本当に何者なんだ。

「……………もう、良いわ。今日は終わり。フランも部屋に戻りなさい」

「うん、分かったよ。お姉様、乱暴してごめんね。それじゃ」

頭を下げて大広間を出ていくフランに、私は啞然とした。

乱暴して、ごめん？

馬鹿な、そんな言葉がどうして出てくる。

乱暴どころか凶暴な狂気をはらみ、それに支配されることを甘んじて受け止めていた、あのフランから。

「……………あゝあ、何なのよ、まったく」

たった二人のせいで思考を乱されている自分に苛々する。
もう、考えるのは止めた。

頭の中がぐちゃぐちゃになる。

「……………まずは、咲夜を探さないとな」

私も酷いが、咲夜の方が重傷だった。

早急に手当てしてやるべきだ。

同じ人間相手に珍しく遅れを取ったらしいが、どうしたのだろう。

星の輝く夜空に向けて黒い翼を広げ、伸びをする。

少し体が痛むが、どうということはない。

自分にそう言い聞かせ、私は大広間から出ることにした。

第二十九話 紅魔の宴・剣舞（終幕）（後書き）

紅魔館脱出！

正直ちよつと時間かけすぎたかも。

ここからしばらくは前のように、戦闘メインではない話でいこうか
と書いていますが、引き続き応援のほどよろしくお願いします！
それでは、また来週。

第三十話 月満ちて夜に安らぎ戻る

白玉楼、中庭。

「あ、やっぱり。そろそろ来ると思ってたわ、紫」

「相変わらず鋭いわね、幽々子。あなた以外は予測なんて出来ないのよ？」

「当然よ。友達なもの」

私の出現にさして驚く風もなく、幽々子は月を見上げていた。欠けたところの無い、美しい満月。

これで色が赤くなければ最高だったのだが。

「妖夢は何処かしら？」

「さあ？いつも忙しく働いてくれるから、把握するのも面倒だわ」

「そう」

幽々子の隣に座し、再度夜空を見上げる。

「嫌な月ね……。不幸を呼び込みそうだわ」

何か問題が起こらなければ良いのだが。

しかし私の得体の知れない不安を余所に、親友の返答はあっけらかんとしたものだった。

「そうかしら？私は林檎のようだと思ったけど」

「幽々子らしいわね。だけど、林檎は禁断の果実なのよ？」

「確かにそうね。美味しいからどんどん食べてしまうもの、女を誘惑する禁断の果実だわ」

「ふふ、そう……なのかもね」

まったく、幽々子といると緊張感が欠片も出ない。

でも、今日は用事のあるなしに関わらず、ここに来て正解だったよ
うだ。

こうやって無駄話をしているだけでも気が楽になる。

ともあれ、まずはその時間を確保するため、用事を済ませてしま
おう。

「幽々子、翼が何処にいるか知らない？」

先程の妖夢のことがあるから、知らないと答えるだろうが一応。
しかし幽々子は、予想に反し即答した。

「ん、紅魔館」

予想外で、最悪の場所を。

「……え？」

完全なる不意打ち。

思わずふらつく。

聞き間違いではないか？

紅魔館、あの高慢な吸血鬼が住まう館？

悪い冗談だろうか、いや、そうであって欲しい。

そう思い、つい無意味な問い返しをしてしまう。

「紅魔館、ですって？本当に？」

声が自分でも驚くほど動揺していた。

これが幽々子の悪戯だったなら大成功だろう。
私としてもそちらの方がありがたい。

しかし残念ながら、幽々子は頷いた。

「ええ、それがどうかしたの？」

「急用が出来たわ、またね幽々子」

「ええ？ちょ、ちよつと、紫？」

こうしてはいられない。

幽々子におざなりに別れを告げながら、スキマを展開し悪魔の館に繋ぐ。

あの吸血鬼は人の運命を見通す。

未来予知とは少し違うらしいが、それでも翼の運命を見られたらま
ずいかもしれない。

もしそこから万が一、如意宝珠の存在を知ればどうなるか。

奴の性格からして、必ず手に入れようとする。
例え僅かな可能性でも、見付けたならば潰しておくべきだ。

私がスキマに足を踏み入れた、直後。

「ひゃあああ!?!」

屋敷内に叫び声が響いた。

「今の声、妖夢かしら」

「そのようね……行くわよ幽々子!」

「分かったわ……て、え、走るの!?!」

私は言うが早いか、スキマも使わず走り出していた。

胸の動悸が早くなる。

嫌な予感がする。

焦るほどのことでもない筈なのに、足は声のした方へと小走りに駆けている。

落ち着け。

今の叫び声は、そう、虫か何かが出ただけだ。
言い聞かせ、走る。

障子を開け、襖を開き、角を曲がる。

妖夢は、一番居て欲しくない場所に居た。
すなわち、翼の自室だ。

「翼！閃珠！しっかりしてください！何があったのです！？」

妖夢は畳に横たえ物言わぬ二人を、力強く揺すっていた。

本当に、何がどうなったのだろうか、二人とも満身創痍だ。

閃珠は剣道着も袴もボロボロ、体には火傷の痕や切り傷が至る所にある。

翼は能力のお陰か外傷こそ見られないが、服は当然酷い有り様で、顔面蒼白、一目で神力の枯渇が分かる。

この分だと、生命力まで奪われていそうだ。

二人とも、まるで死人のようだった。

「妖夢、少し退いて」

「ゆ、紫さま！どうしてここに」

「今はいいから退いて」

妖夢を無視し、二人の容態を見る。

幸いなことに、二人はあくまで死人の“よう”であった。

ちゃんと息はしている。

脈もあった。

しかし、このまま放置するのもまずい。

かといって私には何も出来ない。

治癒は専門外だ。

簡単なことなら出来るが、ここまでくると流石に治せない。

モタモタしてる間にも、彼等の体は弱っていく。
結論は早めに出すべきだ。
この場での最善の選択は、やはり……。

「……仕方ない、月の薬師に頼みましょう。行ってくるわ」

「お、お気を付けて……」

「またね、紫」

あの場所は嫌いなのだが、今は四の五の言っていられない。
境界を使って二人を抱え、迷いの竹林の奥深くにある蓬莱人の屋敷へ。

境界を抜けた先、真夜中の永遠亭はひっそりと静まり返っていた。
草木も眠る丑三つ時ではそれも当然か。
しかし、用がある者は幸いながら起きていた。

「本当に礼儀知らずね、貴女。玄関からは入らないし時間は考えないし」

私が降り立った小さな部屋の奥、こじんまりとした机に向かっていた女が椅子を回転させてこちらを向く。
長い銀の髪が微かな光を受けて輝いた。

「急患よ」

「だから？」

「治して」

「治療費は？」

「相応の金額は払う。だから早く、そして内密に」

数秒の沈黙。

私を品定めするような視線が煩わしい。

月の奴等はどうしてこつも上から視線なのか。

私達が命の汚れに満ちた地上に住んでいるから何だと言うのだ。

苛立ちを込めて強く一瞥する。

薬師は結局、頷いた。

「分かりました。おかしな二人だとは思っけど、詳しくは聞かないでおきましょう」

「そう、なら、あとは任せるわ」

私は翼の懷に小さな銅鏡を忍ばせ、帰るためにもう一度スキマを開く。

本来手渡しする筈だったのだが、こうなっては仕方ない。

彼の一刻も早い回復を祈ろう。

銅鏡は薬師が弄り回すかもしれないが、どうということはない。

どうせちよつと力のある道具程度にしか見えないだろう。

私が背を向けると、薬師は演技臭い声でこんな戯言を言った。

「もういいのかしら？私がこの子達に何をするか分からないわよ？薬の実験とかね」

そんなの、言うまでもないことだろうに。
私は背を向けたまま、首だけ向けて答えた。

「医は仁術。あなたも医者の方端くれ、そんなことは出来ないでしょうよ」

他人を助ける仕事をするものが、自分のために他人を犠牲にするものか。

薬師は小さく笑いながら、手を振った。

「回復次第、二人とも里に向かわせるわ」

「頼んだわよ」

もう話すこともない。

私は能力を使用し、我が家への道を繋げる。

「……お大事にね、翼、閃珠。それと、“あなた”もね」

呟き、私は永遠亭から我が家へとスキマを繋げる。
戻った先は居間。

藍はきちんと正座してうつらうつらとしていたが、私を見るとすぐさま立ち上がり、一礼した。

「お帰りなさいませ、紫さま」

「ただいま藍。あなたの方はどうだったの？」

どうだったとは、彼女の仕事についてだ。

彼女は眠気を感じさせないキビキビとした声で報告を始めた。

「結界についてですが、最近弱まっていた力が戻ったような気がします。幻想入りする物も増えており、まだまだ崩壊の兆しは見えませんが」

「ふむ……では、地底の動向については？」

「地底の入り口にいる土蜘蛛に話を聞いたところ、最近さとの妹が外をふらついている以外、特に変わったこともないそうです。その土蜘蛛は翼の知り合いらしく、彼の道案内を頼むと快く頷いてくれました」

「なるほどね……」

特に問題はなし。

あの二人が回復さえしてくれば、すぐにでも実行に移せるだろう。急いだところで百害あって一利なしなので、まだまだ時間をかけてじっくりと進めてはいくが。

「ところで紫さま、あの銅鏡はなんだったのです？」

急遽、翼に渡さなければならなくなったあの銅鏡。

預かせてもらっていたのだが、そもいかなかったなので翼に託したものだ。

「あれは、ある人のとても大切なものよ」

「ある人？」

「小さな侍さん」

「……魂魄の？」

藍は彼女と面識がないので見当違いな人物をあげている。確かにそれっぽくはあるがあの品は妖夢には全く関係がない。

「今度翼に会いに行けば分かるわ。折角だからお見舞いにでも行ってあげなさいな」

「はあ……え？お、お見舞い？」

藍の目が点になっている。

そういえばまだ説明していなかったか。

「翼、紅魔館に入って吸血鬼に襲われたらしいのよ。さっき永遠亭に送ってきたところ」

「……っ、そう、ですか」

ぶわっとなんげが膨らんだ。

表情にこそ出していないが相当勘に障ったようだ。

それはそうだろう、わざわざ忠告してやった翌日に、のこのこ吸血鬼の家に入るなんて馬鹿にも程がある。

しかしそんな馬鹿に、私はこの幻想郷を救ってもらわなければならぬ。

なんとも悲しいことだ。

私は苦笑し、右手をスキマに突っ込んだ。

取り出したのは、果物が入った籠。

「これでも持って行ってあげなさい。意識はまだ戻ってないかもしれないけど、その時は手紙でも添えておけばいいわ」

私がつき出した籠を藍は冷たい目で見下ろしている。暫くソツとしておいた方が良さそうだ。

「……了解、しました」

力強く取っ手を掴み、早足で藍は去っていった。

いつも温厚な彼女が不機嫌なのはあまり見ていたくないが、明日のお見舞いがどのようなものになるか、面白そうではある。

余裕があれば少しばかり覗いてみよう。

翼が死なない程度に怒りをぶつけられている様を、是非観察したい。最近あの少年には振り回されっぱなしだったし。

「早くよくなるといいけどね……三人とも」

般若と化した藍を送り込んでおきながら白々しい台詞などと、私は再度苦笑したのだった。

第三十話 月満ちて夜に安らぎ戻る（後書き）

繋ぎの一話。少しばかり短いです。

実はそろそろ書き貯めがまじでやばいのですが、二月いっぱいなんとかもちそうですのでそこまではペースを落とさず投稿していると思うっております。

三月に入ってから、もしかしたらペースが更に減速するかも知れませんが、何卒ご容赦ください。

それでは次回、永遠亭編にてお会いしましょう。

第三十一話 目覚め

眩しい。唐突に暗黒から発生した、光の洪水。

もう感じる筈のない光を感じし、驚き戸惑う。

戸惑ったが、それより何より、長い、本当に長い間無かった変化に、心のはね上がった。この世界に、もう何か特別なことが起こるとは期待していなかったから。

もしかして、ついに死ねたのか？ 願いが天に届いたか？

いや、そうでなくてもいい。この暗闇から抜け出せるならば、最早どう転ぼうと構わない。

どうなるんだろう、久々に高揚する心に気付き、更に気分が高まる。いつ以来か、こんなに心が動いた日は。何も喜びを感じない、悲しみだけの日々とは明らかに違う。

光は暗黒の世界を白く染め上げ、祝福するように煌めく。それが飽和し、限界に達した時。

「あ………」

気がつけば、自分は、両足で立っていた。

息をしている。手足が、指が動く。世界が黒一色ではなく、色彩に満ち溢れている。声が出る。空気の流れが感じられる。臭いが分かる。音が聞こえる。心臓が、鼓動している。

………生きている。

「あ………」

戻れた。

あの時のように。私が生きていた、あの頃と同じように………！
涙が落ちた。頬を伝う、温かい感触。下で舐めとると、しょっぱ

かった。

それすらも、嬉しくて。泣けることにも感動して。命を感じる喜びに、泣き叫んだ。

「まったく、何なのよ朝から……」

私が朝起きてから間もなく、病室から泣き声が聞こえてきた。

先日八雲が連れてきた急患だろうか。

彼女が帰ってからすぐに止血し、火傷は冷やし、軽い傷口は消毒し、ようやくと終わって寝た時にはもう空が白み始めていた。

それから二、三日は静かだったものの、今日起きてみればこれだ。随分と迷惑な患者である。

しかし、私は医者。どんな患者であれ、健康になるよう最善を尽くす義務がある。病は気から、患者が精神的に病んでいるなら私が診てあげなければ。

何より私は気高き月の住人、八意永琳^{やしいろえいりん}。泣いている者を見捨てるなど、出来はしない。

そう思いながら、病室に入ると。

「うえっ、う、うああああん……!!」

知らない少女が一人、床にへたりこんで号泣していた。

「え……と」

月の頭脳とまで呼ばれる私だが、流石にこの状況でどうすればいいかは分からない。

「あの、どうかしたのかしら？」

「ひぐつ、わ、わ、わら、わが、ちゃんと、生き、てて、そ、それでっ……！」

「……とりあえず、落ち着きましよう。お茶を淹れてくるわ」

声を上げて咽び泣く彼女に閉口し、一旦外に出る。

どういうことだ、昨日の夜までは、確かに患者は二人だったはず。侵入者ならば誰かしら気付いているだろう。ならば彼女は、元からあの場所にいた筈なのだが……。

あれは、患者の一人ではない。何者だ、あの娘は。

頭を働かせるも、いくら考えても疑問が噴出するだけであった。

本人に聞くのが一番早いだろう。

廊下を歩き、台所へと向かう。

その途中、襖からウサギの耳を生やした少女が出てきた。ブレザ―姿の所を見ると、もう身支度は済ませてあるようだ。

「お早う、うどんげ。随分と早いわね」

「あ、お師匠様。お早うございます」

月の兎、鈴仙^{れいせん}・優曇華院^{うとうんげいん}・イナバ。長いから私はうどんげと呼んでいる。

「うどんげ、朝から悪いんだけど、この間の急患が騒ぎ始めたの。私はそつちを診ておくから、朝御飯は貴女が作ってくれない？」

「了解しました。泣きようからすると傷は随分酷いようですが、どうなんですか？」

彼女もつんざりらしく、赤い目を伏せて皮肉った。苦笑混じりなので怒っているわけではないだろうが、そう言いたい気持ちは分かる。

実は患者のせいではないのだが……混乱するような事をわざわざ言う必要もないだろう。

「まあ、ぼちぼちね。数日すれば治るでしょう。次は心を落ち着かせてあげないとね」

「ホントに……その通りです。お師匠様、お願いします。姫様の安眠のために」

ああ、だからうどんげはこれ程にこの騒ぎを嫌っているのか。私はその理由に苦笑いするしかない。

彼女はこの永遠亭において、いつも損な役回りにされてしまう。皆から好かれてはいるのだが、貧乏くじを引かされやすいのだ。

寝起きが不機嫌な姫様を起こすのも、きっと彼女なのだろう。我が侘な我が輝夜姫様に、騒ぎの八つ当たりをされたくないのだ。

「その為には、まずお茶が必要ね。うどんげ、頼めるかしら？」

「お任せ下さ、わっ！？」

唐突に横から突き出された足。私は軽くジャンプして避けたが、うどんげは反応が遅れてしまった。

結果、見事なまでに足を引っかけられ、顔から盛大に倒れ込んだ。かなり痛そうだが大丈夫だろうか。

「……てい……？何のつもりかしらあ……？」

うどんげは鼻を押さえながらヨロヨロ立ち上がり、足が出てきた襖を開けながら怨嗟の声をあげる。その先には誰もおらず、紙切れが畳の上に一枚あるのみ。
拾い上げ、読んでみる。

「え〜つと……鈴仙、ごめん」

「え？」

「私、鈴仙にちよっかいかけるのが楽しいの。どれだけやられても、私に構ってくれる鈴仙だから。ありがとう」

「てい……」

「お願い鈴仙、面倒だろうけど、これからも私の悪戯に付き合って。その間抜け面を拝ませてね」

「ていいいいっ！！」

上げて落とされたうどんげは拳を握り、荒々しく走り去ってしまった。本当にたちが悪いわね、ていは。

悪戯兎、因幡てい。彼女がいる限り、うどんげに安息の日はないのだろう。

「てい、うどんげをからかうのも程々にしなさい。今日はあの子が作るんだから朝御飯が無くなるわよ？」

天井裏に潜んでいる彼女に一言忠告しておき、私は部屋を出た。さっさと台所へ向かい、茶を汲む。それを持って患者の元に戻る

と、例の少女のすすり泣きが出迎えてくれた。号泣していたさつきよりかは、マシになってくれたようだ。

「それでも飲んで、落ち着きなさい」

もちろん中には薬入り。薬師たる私の得意技だ。超即効性の睡眠薬と精神安定剤が、彼女を無理矢理落ち着かせてくれるだろう。

少女は小さくお礼を言い、一口飲む。

その効き目はバツチリ。彼女は飲み下した途端、欠伸をした。

「一旦眠るのもいいんじゃないかしら。布団を出しましょうか？」

提案するが、彼女は首を振る。

「眠るのは、怖い……。暗闇には、戻りとう、ない」

「そう。それじゃ、しばらくしたら事情を聞きにまた来るわ。それまではここでゆっくりしてて頂戴」

多分、その眠気には耐えられないでしょうけど。嘘の笑顔を浮かべながら、私は部屋を後にする。

「ぐ……う……」

去り際、こんな男の呻き声が聞こえた。どうやら患者その一がお目覚めらしい。

人間にしては異常な回復力だが、翼が生えていたのだし大方能力持ちだからだろう。後の処理は彼に任せて、私は退散することにしよう。

自分の責任でないならば、面倒事は他人に押し付けるに限る。私

は早足でその場を離れることにした。

「……………ぐ……………」は

目覚めたら、見知らぬ場所に寝ていた。清潔な白いベッドが目眩しい。白玉楼でも紅魔館でもないだろう。何処だろうか。

「ようやく、お目覚めじゃな。このままくたばるかと思ったわ」

起きた途端、聞き知らぬ古風な喋りの声を聞いた。……………デジャヴを感じる。

体を起こすと、やっぱり見知らぬ和風の少女がいた。

今まで幻想郷で出会った人たちと比較すると、見た感じでは一番普通な印象を受ける。外でも比較的よく見かける茶髪に茶の瞳で、お団子状にしたそれに金色のかんざしを挿している。目の力は少し強いが、他はいたって普通。凡庸だ。

「……………誰？」

聞くと、彼女はニヤリと笑い、ゆったりと両手を広げた。青銅のような色をした着物の袖が広がる。

「聞いて驚け……………妾は、神じゃ」

……………ふーん。

「なんだ夢か」

「阿呆、夢ではないわ。貴様、信じとらんな？」

にわかに騒ぎ始めた自称神様の少女。寝起きなんだから騒ぐのは止めて欲しい。

「阿呆はお前だ。いきなり私は神だとか言われて、信じる奴がいるか？」

痛い子を見る目で哀れむのが普通だろう。

それに、今更神様の一人や二人出てきた所で何だというのだ。こっちは既に閻魔さまに説教まで食らっているというのに。

しかし神様には俺の反応がいたく不興らしい。ズビツと俺を指差して胸を張った。

「ならば、その胸にある霊験あらたかな銅鏡を見よ。沸々とたぎる神力を感じるじゃろう」

「銅鏡……あ、ホントだ」

懐に、何故か見たこともない銅鏡が入っていた。触ってみると、かすかだが神力が感じられる。

しかし、沸々とたぎるなんて表現は不適當だろう。今にも消えてしまいそうなほどに儂い。これで実体を保っていられるのが不思議な位だ。

では、何故彼女は無事でいられるのか。これは、少し考えればすぐに答えに辿り着けた。以前、同じような経験をしている俺には分かりすぎるほどに分かる。

「妾はその銅鏡に宿る神霊じゃ。分かったか？愚鈍な人間め」

閃珠とは正反対に、かなり高圧的な神だ。

実際、神様からすれば俺は矮小な存在なんだろう。それは種族それぞれの考え方だ、仕方ない。

しかしだ。

恩を受けておきながらそれは、流石に許せない。神であれなんであれ、通すべき筋はある。

「その愚鈍な野郎に助けられたのは、何処のどいつですか？神様よ」

「は……？何を馬鹿な、気でも狂うたか？」

銅鏡の神様は嘲笑しながら、はっきりと見下してきた。自分が人間に助けられたなどは、つゆとも思っていないようだ。

しかし、俺は既に同じ体験をしている。ほぼ間違いなく、こいつは俺に命を救われたのだ。

「なら、身体に教えてやるよ……」

銅鏡を握り、神力が湧き出るイメージを開始。銅鏡の内部、表面、全体を光が駆け巡っていくイメージ。

体が重傷なので能力行使に支障が出ないか心配だったが、杞憂だった。いつも通り、力の働きを感じられる。

「む………？」

自らに起きた異変に気付いたようだ。

「どうだ、神力が増えたんじゃないか？」

「……」

自分の間違いを指摘され不愉快らしい。神様は黙りだ。

「沈黙は肯定として受けとるぞ？」

「……ちっ」

ここにきて舌打ちか。随分と強情だな。だからといって、俺も曲げるつもりはないが。

「今ので分かったらうが、俺は力の生成活動を活性化できる。お前の神力生成が俺によって活性化され、お前は神力を取り戻した。そうだろ？」

閃珠と全く同じ展開だ、恐らくこいつもそうなんだろう。いやに微かで偉い神力、突然の出現、状況も合っている。

閃珠は俺の能力を使うことで仲間を救おうとしていたし、実際閃珠はそうして助かったのだから、不可能ではないはずだ。

しかし丁寧に確認を取っても、生意気な神は無視してきた。シカトとは、舐めた真似をしてくれる。

生憎、俺もあまり気が長い人間では無い。気に食わない奴には、それ相応の態度を取らせてもらう。

「なら……いいさ」

ただ生きているだけで、全ての生き物は少しずつエネルギーを使っている。それも立派な生命“活動”の一つだ。神様なら、そのエネルギーは当然神力だろう。

「消えるよ」

冷ややかに告げ、神力の消費を活性化する。体を巡る光が、消えていくイメージ。

能力が発動した途端、偉そうだった神はいきなり顔面蒼白に変わった。いい気味だ。

ただ、勿論殺すつもりはない。ただ姿を保つのが難しいレベルまで神力の量を調節してやるだけだ。

俺は出来るなら、誰も殺したくない。だから繰り返すようだが、本当に活性化のレベルは低くしてある。少し痛い目に遭わせて、反省を促すだけのつもりだから。

それなのに。

「あ、ああ……止めて！止めてくれ！お願いじゃ！」

尋常じゃない怯えようで、神は俺に懇願し始めた。威厳も見栄も何もない、素の表情で。

「……そ、それじゃ、反省を」

「嫌じゃ！く、暗闇は、嫌じゃ、嫌じゃあ！」

俺の言葉など耳に入っていないようで、彼女はその場に屈み込み、頭を抱えて涙まで流し始めた。

正直ここまで恐怖されるとは思わなかったので、流石に毒気を抜かれた。半狂乱、と言ってもいい。どう見ても錯乱している。

どうやら、やってはいけないことをしてしまったらしい。

「あ……お、おい、落ち着けて……」

「た、助けて……！助けてえ……！」

声をかけるも、彼女には届かない。うわ言のように、助けると繰り返すばかりだ。先程不遜な態度をとっていた神とは、まるで別人……駄目だ、もう見ていられない。少し痛い目に遭わせるにしても、度を越えている。

「いや……悪い！やり過ぎた……」

慌てて銅鏡の神力生成を全力で活性化させ、謝る。

やれやれ、元々向こうが悪い筈なんだが、なんで俺が謝ることになってるんだ。意識したことはないが、もしかしたら、俺は意外と甘いかもしれない。

「これで、少しは落ち着いたら」

「……うっ……く……」

……会話にならない。ただ泣くばかりだ。

「……ふ〜」

面倒なことになった。俺は痛む体をベッドから引きずり出し、側の机に置いてある急須に手を伸ばす。

茶を湯飲みに注ぎ、一杯飲む。淹れたばかりらしく、美味い。

もう一つの湯飲みにもなみなみと注いでやり、しゃがみこむ彼女の隣に置いた。

「……ちよつとは気分が落ち着くから、どうぞ」

……ああ、本当に俺は、口が上手くないな。もうちよつと気の利

いた事が言えるようになりたい。

彼女は鼻を嚙りながら、湯飲みに口をつけた。

「……ほれ、鼻かめ」

紳士のたしなみ、ポケットティッシュ。銅鏡に押し潰されていた
それから数枚を抜き取り、差し出す。

紅魔館での戦いからよくぞ生き残ったものだ。静かになった病室に、
鼻をかむ音が響く。

「……落ち着いたか？」

「……うむ」

短い返事。それ以降は、言葉が続かない。俺はベッドに戻り、の
そのそと入り込む。

「……すまぬ」

ポツリと、こんな言葉が聞こえてきた。

「……ああ。俺も悪かったよ」

天井を見上げながら返す。気に食わなかったからと言えども、流
石にやり方が悪すぎた。あんな方法では何も解決しない。

「妾は、真、久々に命を得た。何故再び生を得たかは定かではない
が、恐らくおぬしのお陰じやろう。感謝しておる」

「……ああ」

「妾は日鏡^{ひかがみ}。人としての名は、日鏡雅^{ひかがみみやび}。昔、神主より戯れで頂戴した名じゃ。おぬしの名は？」

名を名乗り、聞くということは、その名で呼び合うことを許容するということ。先程の舐めた態度は改善してくれたらしい。

「……霧崎翼だ」

「翼、か……あの、早速見苦しいところを見せてしもつたが……よろしくの」

雅はそっぽを向きながら、右手を差し出してきた。これだけ心を改めてくれた彼女の手をはね除けるなんて、誰が出来ようか。

「おう、よろしくな、雅」

腕の痛みに顔をしかめてしまうが、握り返すことはできた。これからは衝突しないようにしたいなど、俺は恥ずかしげな彼女を見ながら思った。

第三十一話 目覚め（後書き）

オリキャラその三登場。（正確にいえば五人目、か？）

さて、この話から書き方を若干変えております。

暇を見つけて過去の話も修正を入れていきたいと思っておりますが、しばらくは手が回らないと思います。

違和感を覚えるかもしれませんが、どうかご了承ください。

もし以前の方が断然いいと思う方、他にも何か意見、感想、誤字報告等ありましたら感想の方にお願ひします！
それでは、また来週！

第三十二話 剣の思い

日鏡。天日槍が天皇に献上した八宝の一つ。紛れもない神器だ。確か紫は出石小刀を除く八宝を人質みたいにしていたはずだが……閃珠の仲間が助かったんだから、良しとしよう。

「なあ雅、閃珠もこの病院にいるかもしれないんだ。探してきてくれねえか？」

「閃珠……？誰じゃ、其奴は」

ああそうか、閃珠は俺が付けた名前なんだった。雅が知るはずもない。

「出石小刀だよ。仲間なんだろう？」

俺が意識を失った後、閃珠がどうしたのかは分からない。あいつの能力なら一人で脱出できたはずだが、あの性格で俺を置いて帰るとは考えにくい。主を助けるため、奮闘してくれたとするのが自然だ。

まさか……まさかだが、暴走した俺が全員を斬り殺して館から脱出した、なんてことは、ないよな……。

（私は残念ながら誰一人殺せなかった。安心しろ）

「っ！」

頭に響く声。俺の意識を闇に引きずり込んだあの激痛を思い出し、弾かれたように起き上がる。

そんな俺を、雅は不思議そうに見ていた。

「どうしたのじゃ？」

「いや……ちょっと、痛みが走ってな。それより、閃珠の話」

恐らく、錯覚だ。もしくは幻聴。それ以外ではないと、俺はそう思いたい。

適当に誤魔化し、話を続けてもらおう。

「うむ、出石があるんじゃないか……そう、じゃな。ま、行ってみるとしよう」

どうにも歯切れの悪い返事だ。もう少し喜ぶものと思っていたんだが……。

「雅、あいつはお前らのために頑張ってるんだろ？もうちょい再会を喜んだらどうだ？」

「……何の話じゃ？」

「計画の話だよ」

「計画……？」

きょとんとしている雅に偽りはなさそうだ。本当に計画を知らないらしい。

「お前……いや、お前達、閃珠から何も聞いてなかったのか？」

重要なことなのに、閃珠も、紫も話していなかったのか？

何故？忘れていた、なんて間抜けなことではないだろう。忘れられるほど、軽い問題じゃない。

何か理由でもあったのだろうか。

「聞くも何も……妾たちは消滅寸前だったんじゃ。聴覚なぞ、とうの昔に失せておった。妾が奴との別れについて知りえたのは、突如現れた妖力と共に出石の気配が消えた。ただそれだけじゃ」

尤も、出石は八宝でも随一の力を持つておったから感覚を失うには至らなかったかもしれんがの。

そう雅は付け加えた。

「……マジかよ」

あいつ、仲間にも応援されず、たった一人で戦ってたのか。

「それより、計画とは何ぞや。教えてくれんか？」

「ああ、そいつはな……」

このままでは、閃珠があまりに可哀想だ。だから閃珠の代わりに、俺が教えてやることにした。

大妖怪、八雲紫が意図すること。それに協力することで、仲間を助ける約束を閃珠が取り交わしたこと。さらに、この世界、幻想郷について簡単なことをいくらか。

全てを話し終えた後の雅の表情は、表現できない複雑なものだった。

「……そうか。あやつめ、そんな事情を抱えておったのか……」

「閃珠は俺に土下座までして頼んできたよ。仲間を助けてくれんな」

「……………そうか」

奴隷とも娼婦ともなる、そう断言してまでの頼みだった。あの小さな体のどこに、そんな強い覚悟が隠れているのか。そう思わせる程に、閃珠は必死だった。

「お前は、閃珠がどういう意図で神社から出ていったと考えたんだ？」

そんな閃珠の姿を見たからこそ、俺はそう問わずにいられない。あの覚悟が、当の仲間にごう認知されているのか知りたかった。

「……………どう答えても、怒るでないぞ」

そう前置きをするということは、良い印象は持たなかったのだろう。俺はやるせなさを感じながらも、黙って頷いた。

雅は俯きながら続けた。

「妾は、出石が、その……………皆を置いて、一人で助かるために逃げ出したのだと思った。他の者も、憤り、悲しむばかりじゃったよ。最早皆、出石を仲間とは思っておるまいて」

「なっ……………!!」

何だ、それ。あいつは皆を助けるため、こんなに危険な世界で戦う覚悟を決めたのに。

当の仲間には認められずに、あまつさえ裏切り者扱いまでされていたのか。

怒りが込み上げる。しかし、どうすることもできない。

死が目の前に見えている状態で仲間里去られ、肯定的な考えを持てる方がおかしい。閃珠も、雅も、そして残る仲間も、誰も悪くはないのだ。

だからこの怒りは、何処にもぶつけてはならないものだ。そんなことは分かっている。それでも、これでは閃珠があまりに報われな

い。

「そんなのって……幾らなんでも、酷すぎるだろうがよ……」

気付けば握っていた拳を力なく開き、舌打ちする。こんな嫌な思いをするなら聞くんじゃなかったと、少し後悔した。

雅も苦り切った表情ではあったが、口調だけは気丈にフオーローを入れた。

「し、しかしじゃ。真実は違った。このまま計画とやらを完遂し皆を救えば、誤解も解けて万事解決じゃろう？誤解しておった妾が言うのもおかしな話じゃが」

友達を悪く思っていたことに、多少なりとも罪悪感があるのだろう。雅は床を見つめながら、尻すぼみに言葉を締め括った。

「……まあ、そうか。そうだな」

雅の言う通りだ。今は誤解されていても、閃珠にその恨みの声が届く訳じゃない。閃珠が皆を救えば、誤解なんて無かったことになるだろう。

今は、計画を成功させる為に頑張るしかないのだ。

雅は明らかに無理をしている笑顔を浮かべ、俺から目をそらした。

「ちと、外の空気でも吸うてくる。では、行つてくるぞ、翼」

雅はずんずんと扉に向かいそのまま出ていった。自分のことが許せないのだろうか。

先程は鬱陶しく見えた偉そうな態度も、見方を変えれば好印象になるものだ。今まで人に崇められていた経緯から人間を軽視していただけで、根は良い奴に違いない。

第一印象は最悪だったが、この分ならどんどん改められていきそうだな。これからは上手く付き合っていけそうだ。

「むしろ問題は……こつちか」

五枚のスペルカードを取り出し、その内の一枚、黒い邪剣のカードを見る。

（問題とは、随分だな。お前を助けたのは他ならぬ私だというのに）

頭に再度声が。やはりあの気絶と激痛は、この剣の仕業だったか。願いを叶える。

その代わりに体を貸せ。

冷静に思い返せば、こんな条件を出すのはティルフィング以外にあり得ない。馬鹿げた取引だ。

（私がいなければ、お前はあの女に殺されていただろうよ。むしろ感謝して欲しいものだ）

確かにそうだが……もう少しやり方を考えて欲しかった。下手をすれば憑依の痛みでショック死していたかもしれない。

(心配するな。憑依を重ねるにつれ、私の魂は徐々にお前の体に馴染むだろう。痛みもなくなる)

騙されてたまるか。お前は三回願いを叶えた後に、俺の体を奪い取るつもりだろう。伝承みたいに死ぬのは御免だ。

(等価交換だ。三度も願いが叶えば、後の生などどうでもよからう)

馬鹿を言え。俺が死んだら、残される奴等が困る。

(他人を気にするなど、理解できんな……)

ああ、そうだろうな。他人をただ殺め続けたお前には、分からないだろう。

もうお前には、体を好きにさせない。

(耳障りだ、知った風な口を聞くな。お前も人間だ、すぐに私を頼りたくなるに決まっている)

今に分かるさ。俺は強くなる。お前なんか必要なくなるくらいにな。

(どうだか……)

「やーやー翼さん、お見舞いに来ましたよ」

声が消える。

代わりにドアが勢い良く開き、無駄に澆刺とした少女が中に入ってきた。

黒い翼に黒い髪、赤い瞳は新たなスクープを求めて輝く、烏天狗の新聞記者こと射命丸文だ。

「文？」

「はい、清く正しい射命丸です。妖夢さんから話は聞きましたよ。翼さん」

年中そのままみたいな笑顔で挨拶をする文。彼女は近くにあった椅子を引きずりベッドの側に腰掛けた。

「今回は災難でしたねえ。ま、自業自得な気もしますが」

「災難つてレベルじゃねえよ……死にかけた」

「じゃあ何で吸血鬼の館なんか？」

「そりゃ、呼ばれたから」

招待されたら、入らないわけにいかないだろう。理由も無しに断るのは礼儀に反する。

文はそれを聞いた途端目を丸くし、やがてやれやれと頭を振った。

「あなたらしいと言えば、そうなんですが……本当、馬鹿ですねえ」

酷い言われようだ。実際俺は、馬鹿なことをしたんだろうけど。

それでも俺は正しい判断をしたと思う。

「……馬鹿かもしれないけど、妖怪だから近寄るなどが、俺はそう言うのは嫌なんだよ」

文の目は厳しい。やはりというか、賛同は得られそうにない。

「ふむ……種族の違いはいかんともし難いですよ？妖怪は人間の敵なのです」

彼女は妖怪で、自分がどういふ存在かも自覚している。だからこそ、この立ち位置なのだ。

「そんなの知るか。俺は種族なんかより、個人を見て敵か判断するよ」

俺一人が妖怪をどう考えようと、世界に影響なんてない。妖怪たちが消滅してしまうこともないだろう。

ならば、親しくやっけていても良いはずだ。

「ふ〜ん……おかしな人。ですが」

文は一つ頷き、小さく微笑んだ。

意外に可愛くて、少しドキリとさせられてしまう。しかし顔に出したら何を言われるか分からないので、無表情を装っておいた。

「面白いです。吸血鬼との話、聞かせてくださいよ」

「……お前、それが目的で来たろ」

「まさかあ。人間が吸血鬼の館から生きて脱出したなんて、嘘っぱ過ぎて書けませんよ。一応ネタのストックにはさせていただきますが」

結局お見舞いよりも取材目当てか、こいつは。らしいと言えづらいが。

しかし裏を返せば、それだけ一生懸命にネタ探しをしているというところでもある。協力しないのも申し訳がない。

それに文には恩もある。恩人の頼みを断るわけにはいかない。

俺は頷き、以前と同じく頭を下げた。

「分かった。それじゃ、よろしく頼む」

「はは、そんな畏まらなくても……っつて、このやり取りはもうやりましたね。では始めてください」

「オーケー……とは言っても、俺が話せるのは一部だがな」

「どうしてです?」

「こいつのせいだよ」

ティルフィングのカードを取り出し、唱える。

「破滅」

右手に出るは、破滅の魔剣ティルフィング。これまでに二度使ったからか、手にしっくり馴染むような気がして嫌になる。

ちなみに今は大人しくしておこうというつもりらしく、あの声は話し掛けて来ない。見世物扱いするなと怒ると思っていたのだが、予想は外れた。

文は俺の意図が分からないようで、眉をひそめるだけだった。

「こいつは人の願いを叶える代わりに、そいつの自我を奪って暴れ

狂う剣だ。俺はこいつに助けってくれと願い、危うい所を助かった」

「自我を、奪う?」

「身体を乗っ取られるんだよ。この剣に宿る魂が、願いを捧げた奴の身体を勝手に使うんだ。そいつが戦っていた間、俺は気を失ったままだった」

あの状況から脱出したということは、十六夜は勿論のこと、レミアも恐らく倒したのだろう。

空恐ろしい力だ。扱いに気を付けないと、こっちがとり殺される。

「禍々しい、ですね。翼さん、持っていて大丈夫なんですか?まだ回復しきっていないでしょうに」

「体はちょっと重いけど、願いさえ捧げなきゃ大丈夫だ。自然に放たれている呪詛はそう強くない」

ティルフィングをカードに戻し、俺はベッドに倒れ込んだ。消耗した状態であれを使うのはやはりしんどい。

「そんな尻切れトンボな話で良ければ話す。聞きたいか?」

「当然です。どうぞ話してください」

天井を見上げながら、俺は話し始めた。それを文は相槌を打ちながら聞き、時折質問を、或いは茶々を入れてくる。

内容は物騒だが、その様子は平和なもの。こんな一日ばかりなら良いのに、と思ってしまうようなものである。

しばらくは、こうしてゆっくりしていたいな。俺は話しながら、

しみじみ思ったのだった。

第三十三話 もう一人じゃない

俺が文と話し始めて、どれくらい経つたろうか。突然ドアが荒々しく開かれ、新たな来客を知らせてくれた。

「……翼」

仁王立ちだ。

俺を視線で殺すつもりらしく、無言で威圧してきている。なんかオーラらしき物体が見えるが、気のせいに違いない。尻尾の残像とか何かだ、多分。

あっはっは……この人、こんなに恐かったかな。凄い優しくていい人だった記憶があるんだがなあ。

「あの……藍さん？私めのお見舞いに、来てくれたのでございますよね？」

最上級に低姿勢で聞いてみる。

その腕には果物かごがぶら下がっているので、間違いなくお見舞いのはずなんだが……怪我を悪化させに来た雰囲気なのは何故だ。

あのリンゴ、毒とか入ってないよな？

「……当然だ」

藍さんはぎこちなく頷き、俺にゆったりと近付いてくる。九本の尻尾が、わさり、わさりと音を立てる。

やだ怖い、誰か助けて。

「……文、助け……」

隣に座っている文に助けを求める……が、いない。いつの間にか消えていた。

あの薄情者……！

藍さんは巨大な妖力を放出しながら、俺のベッドの真横に立った。鋭く冷たい眼光が、俺を見下ろしている。

人を狩る獣は、こんな目をしていそうだ。俺……死ぬの？

「藍……さん……？」

彼女は右手を胸の辺りに上げ、拳を握った。

俺は人間だ、藍さんに殴られたらただじゃ済まないだろう。何せ、九尾狐だ。……どうすりゃいいの。

「この……」

「え？」

「この、大馬鹿がつ……！」

建物全体が、震撼した。

藍さんが叩き付けた拳が石壁にひびを入れたのだ。砕かれた石が、乾いた音を立てて床に散らばる。

怖え……！

「お前という奴は……！どうして保身を考えない！一歩間違えば死んでいたんだぞ……！」

胸ぐらを掴まれ、激しく揺さぶられる。牙を見せながら怒鳴り散らす藍さんの顔は、今までに見たどんな表情より怖かった。心の底

から怒っているのが嫌というほど分かるのだ。

「言ったはずだ、自重しろと！なのに、忠告した翌日に紅魔館へ行くとは……私を冒瀆しているのか!？」

「ら、藍さ……苦し……」

息が出来ない。このままだと、本気で死ぬかも。

俺のギブアップを聞いた藍さんは、とりあえず俺をベッドに打ち捨て、左手に持っていた果物がごを急須の横に置いた。いくらか床に落ちたフルーツを手早く拾い上げ、入れ直す。

一旦途切れてしまい怒りをぶつけ辛いのか、藍さんは荒い呼吸を繰り返すだけとなった。俺は突然の事に口を開けながら、沈黙するしかなかった。

温厚な人だと、そう思っていた。いや、実際に温厚なのだろう。なのに、まさかこれほどの激情をぶつけられるとは。

ティルフィングに対する流麗な太刀捌きといい、初めて出会った時の藍さんのイメージから、どんどん遠ざかっている気がする。

驚いたし、恐かった。本当に食われるかと思うほどに。
でも。

「藍さん……」

険しい顔で俺を見下ろす九尾の狐に、俺は感謝したいと思う。

怒りと同時に、とても温かいものを感じさせてくれたから。憤りの正体が、とてもありがたいものだったから。

危険を顧みない俺の身を案じて、正面から、迷いなく怒ってくれ
る。親しい人たちを失った俺だが、こんな感情を抱いてくれる人が
もっている。

素直に、嬉しかった。

「……すみませんでした」

頭を下げる。感謝と謝罪の、両方をしっかりと込めて。
藍さんは、静かに後ろを向いて言った。

「……もう、不必要に無茶はしないでくれ。お前がいなきゃ、紫さまも困る」

無茶するな、と言われましても。仕事上危ない場所にも顔を出すわけだし、これから妖怪と顔を合わせるのも少なくないはずだ。
俺は妖怪だから避けるなんて真似をするつもりはないし、意見が噛み合わなければ戦わなきゃいけないときが来るだろう。
例え怒らせる結果になろうとも、嘘はつけない。

「えと……善処します」

「善処、だと？」

「はい……さ、最大限に」

静かで、腹の底から絞り出したような低い声だ。やはり怒らせてしまった。

ぶわりと膨らむ、九つの尾。プレッシャーも一気に膨れ上がる。
殺気こそ無いが、彼女の性格を知らない者ならば、この場から逃げ出してもおかしくない。

今から何をされようと、怪我でダウンしている俺はまな板の上の鯉だ。また何か言われるんだろうが、どう答えりゃ良いんだろう。

「あの、ですね。妖怪だから、吸血鬼だからとかで、判断したくな

いんですよ、俺……分かって、くれませんかね」

一応藍さんの話は聞いた上での、考えを持った否定であることを示しておく。

おべんちゃらで分かりましたと首を縦に振ることも出来ただろうが、嘘はつきたくない。かといって藍さんが、俺の馬鹿な考えに納得してくれるかどうか。

ドキドキしながら彼女の背中を見つめる。九尾は存在を誇示するように膨れていたが、少しの間震えた後、パタリと萎れてしまった。……あれ？

「……もう、いい。お前には何を言っても無駄なんだろう。頑固者め」

「え？」

藍さんは先程まで文が使っていた椅子に座り、湯飲みに茶を注ぐ。

「お前は吸血鬼に喧嘩を売るような奴ではない。どうせ無警戒に荷物を館内まで運んだか、吸血鬼の招待を断れなかったか、どちらかだろう」

「う……」

図星。俺の反応を見た藍さんは、やっぱりかと呆れていた。

「命知らずな愚行だが、今回の件を善悪で判断するなら、どうやらお前に非はないようだ。元々お前は進んで悪事をするような奴ではないしな。そんなお前にはかり怒りをぶつけても、しょうがない」

藍さんは大きく息を吐いて、椅子に座る。

「命は無事だったんだ、今回は良しとしよう。見舞いに来たのに叱るばかりでは本末転倒だしな」

こう言っつてようやく眦を下げた藍さんに、俺は安堵の溜め息。彼女はそれを見て苦笑いを浮かべた。

「あはは……本気で怒鳴りはしたけれど、そんなに息苦しかったか？」

「怖かったですよ。紫には遠く及びませんが」

ちよつと毒を吐く。三回も脅されている身だ、あいつの怖さは骨身に染みている。

強さ、底の知れなさ、不気味さ、どれも一級品。俺の中では恐ろしい奴ランキング、単独首位だ。それも独走体勢に入っている。

その後ろにかろうじて追い縋る影が悪魔のメイドってところか。そんなあいつでも、藍さんにとっては自らの主人。

「ふむ……私にはまだ妖怪として貫禄が足りない。そういう風を受け取っておこうかな」

華麗に流し、柔和に微笑んだ。

彼女は手持ちぶさたになっただからか、リンゴを手に取り、一緒に持ってきていたらしいナイフでスルスルと皮を剥き始めた。

リンゴをむいてくれるのは嬉しいのだが、その銀色は一人の人物を思い起こさせてしまう。心を悪魔に売ったメイド。

思わず身震いした。そんな俺の様子を見た藍さんはちよいと首をかしげたが、スルーして皮むきに戻る。既に球体の上半分は裸だ。

「皮むき早いですね、藍さん」

「それはまあ、このくらいは出来る。一応毎日料理をしているんだ、こついつたことは慣れているよ」

本当に上手いもので、危なげなく作業を進めていく。

「……なあ翼」

「はい」

首も表情も動かさず、藍さんはサラリと呟く。

「お前は、馬鹿だ」

悪口なのだが、嫌味ったらしくはない。事実をそのまま口に出ただけの、何でもない一言だった。

「はは、何を今更」

だったらなんだと、笑ってみせる。

それは藍さんにも、文にも言われたばかり。自覚もしているし、悪いことだとも思わない。世界は広いのだから、一人くらい馬鹿がいたって別に良いだろう。

藍さんは首肯し、でもなと続ける。

「馬鹿なことなんだが、お前の言うことに賛同し、幻想する自分もいるんだ。妖怪だから、人間だから近寄らないと誰も言わないようにならないかなって」

気恥ずかしそうに話している彼女を見て、俺は最初に会った日の印象が蘇るのを感じた。

やっぱり藍さんは、優しくていい人だ。

「妖怪と人間の種族間に確固としてある敵対心。それを全部消し去ったような世界が、そんな場所があればいいなと思うんだ」

藍さんは淋しそうにちよつと下を向き。

「でも、妖怪は人間に怖がられなきゃ妖怪とはいえない。だから私たちは、お遊びを作っても人間と敵対し、戦い続けている。難しいな」

世の中はままならない。彼女はそう言って、微笑を復活させた。妖怪は人間を捕食対象にする危険な存在。これは大前提であり、未来永劫覆らない。

何故と聞かれても、そういう存在だからどうしようもない。藍さんに、あなたはどのようにして妖怪なんですかと聞いても答えようがないのと同じだ。

俺が二日間で感じた限りだと、妖怪も人間とほとんど変わらないのだが、やはり別の生き物で、危ない側面や思想を持つ事もある。それも人それぞれ……もとい、妖怪それぞれだが、同じ種族なら根っこは同じ。

妖怪は人間の敵。この共通認識が多かれ少なかれあるはずだ。

「……今まで通りではダメなんですか？」

「ダメではない。理想には近いし、このままでもいいかなとも思う。言うなれば私の幻想は、贅沢な我が侘だよ」

「……えっと、藍さん一人が人間達ともっと仲良く出来ればいいんですか？それとも世界を変えなければ意味がない？」

「そうだな……半々かな。私自身人間と仲良くしたいし、皆にもそうなって欲しい」

「成る程……」

敵対心を完全に取っ払うには、妖怪側が人間に働きかけて、人間にある固定観念を弄くる必要がある。

妖怪は人間の敵だけど、悪い奴ばかりじゃない。藍さんは大丈夫だ、と、こんな風に。

当然働きかける妖怪側が人間を忌み嫌って話にならない。だから正直、この幻想郷にいる妖怪全員に藍さんの気持ちを理解してもらうのは無理だろう。

人間嫌いな妖怪は少なからずいると思われる。考え方は妖怪それぞれ、その全てを矯正するなんて無茶な話だ。

だが逆に言えば、少人数なら出来る。それこそ藍さん一人なら、あとは相手となる人間の心を変えれば良いだけだ。

やり過ぎて里全体にまで規模が大きくなるようならまずいかもだが、バカを数人作り出すくらいなら不可能ではないし、問題もないだろう。

この世界を救う協力をしてくれと頼まれた俺が言うのもおかしい話だが、俺達は、元々一人で世界に影響を与えられるほど大層な存在じゃないんだから。

「世界を変えるのは難しいですけど、藍さん一人なら贅沢ではないでしょ。半人半妖の慧音さんだって、里の皆に認められてますし」

「それは……彼女が特別な存在だからでは」

「だったら、特別な慧音さんよりもあと半分、認められるよう頑張ればいい。藍さんなら出来ますよ」

冗談めかして歯を見せ、親指を立てた。人間代表からの細やかな応援だ。代表になるには些か見た目が奇抜だが、まあ問題ないさ。

藍さんは数瞬目をしばたかせ、目を伏せた。

呆れたのだろう。それでもこうして笑ってもらえるんなら、俺はこれで良い。

「やっぱりお前は、馬鹿だな」

「ええ、馬鹿ですよ」

「そうだな。でも、こんな馬鹿ならいても良い気がするよ」

「そいつはありがたいお言葉で」

「ふふ、林檎食べるか？」

「いただきます」

いつの間にもやらむき終わっていた林檎。ナイフに突き刺さっているそれを受け取ろうと手を伸ばす。

藍さんは微笑し、俺の手をすいとかわし、綺麗な顔を近づけ。

「はい、あ〜ん」

口元まで持ってきた。

「……」

「……どうした？ほら、口を開ける。あ〜んって」

何の冗談？これ。

「……いや、いやいやいやいや。藍さん、どうしてそうなるんですか」

顔近いつて、顔。睫毛の一本一本まで数えられそうだ。

「どうしてって、お前は怪我人じゃないか。私が食べさせてやる」

「……え〜」

ここは、感謝すべきところなのだろうか。良かれとっての行動だと彼女は主張しているが、完全に楽しんでいる顔だ。

「いやー、大丈夫ですよ、そのくらいなら自分で出来ますから」

そんな恥ずかしいまねは藍さんが相手であろうと御免だ。俺が再度伸ばした手は、またもかわされてしまう。

そのままベッドの淵に両手をつき、藍さんはよよと嘆く。

「そうか……。ああ、なんて悲しいことだ、翼は私の善意を受け取ってくれないということなのだ……。」

「ぐ〜……」

やだ、藍さんてば狡猾！

人の良心に訴えかけてくるとは、流石は妖怪、九尾狐。

九尾狐はその昔絶世の美女に化け、何人も男を惚れさせたらしいが、伝承は本当なのかもしれない。藍さんの容姿と性格、さらに手練手管に長けているとくれば、男の視線を集めるのも容易だろう。しかし……しかし、今日の俺はそう簡単に折れないぜ！

「藍さん、リンゴはありがたくいただきます。自力で」

俺の固い固い決意を持った一言に、藍さんも諦めたようだ。肩をすくめ、パツと素の表情に戻った。

こつも簡単に表情を変えるのは、俺には出来ない芸当だ。割と泣き真似も上手かったし。

「うっん……そうか。まったく、少しくらい悪ふざけに付き合ってくれてもいいじゃないか」

「別ベクトルの悪ふざけにしてくださいよ。ああいうのはホント苦手なんですって」

「……モテないのか？」

「ほつといてください！」

ああそうさ、俺は彼女なんて生まれてこの方出来た事もないよ、残念ながら！

バレンタインも義理しかもらったことないし、クリスマスも家族と過ごすのがデフォルトだった、し……これ以上思い出すと悲しくなるから止めよう。

鬱になってきた俺を見て同情してくれたのか、藍さんは俺の肩を

叩いて笑う。

「はは、大丈夫だ。お前ならいつかいい人に巡り会えるさ」

「あゝ……はは、そうだといいですけど」

そう考えて、早十七年。そろそろ出会ってもいいんじゃないだろうか。いい加減待ちくたびれた。

「こつちに来てから、普通の人間に会うこと自体が少なくなりましてからね。まだまだ先っばいです」

少なくとも名前を知っていて、ある程度会話したことのある普通の人間は、今まで出会った中なら霊夢や魔理沙くらいじゃないだろうか。

あの二人を普通の人間としてカウントして良いかは微妙だが、人間自体がかなり少ないから仕方ない。

紅魔館のメイドも人間だと言っていたが、まともな会話が出来そうにないのでパス。あとの知り合いは妖怪、亡霊、妖精、半獣、半霊、神霊、鬼などと、バリエーション豊かな種族の方々。正直、俺自身が人外サイドに加えられそうな交遊関係である。

「別に人間じゃなくてもいいだろう。私は妖怪と人が物陰でキスをしていた所を見たこともある。女の方には翼が生えていたから間違いない」

「へえ……マジですか？」

「ああマジだ。妖怪でも、人の姿をしている者は多いからな。私や紫さまのように」

確かに、知り合いの妖怪は全て人型だ。むしろ妖怪達の方が、美人だったり可愛かったりするような……性格や能力云々は別にすれば。

そう思えば、別段おかしいことでもないのか。

俺の思考回路はほとんど外の基準からはみ出していくなあ……いや、こんなことを思うのも今更か。

今になってようやく手渡された林檎をかじりながら藍さんを見る。彼女は蜜柑を剥きながら、小さく欠伸をしていた。

「まあ何にせよ、気長に待つことだ。ただし」

「待っているだけでは来ない、ですか？」

「その通り……っ!？」

藍さんがわずかに身を竦ませ、蜜柑を取り落としたのは、扉が押し退けられるように勢いよく開かれたからだ。

肩を上下させながら入り口に立っていたのは、悪魔の館にて離れ離れになってしまった俺の相棒だった。黒い髪を二つに結わえ、こんな場所でも寄り代の剣を携えている。

俺の姿を確認したそいつは瞬く間にこちらに駆け寄ってきて、息を弾ませながらも張りのある声で聞いてきた。

「あ、主……無事か？ 体に異常は？」

スミレ色の瞳が、不安げに揺れている。体が痛むのか、その表情は少し苦痛に歪んでいた。

まったく、これじゃお前の方が大丈夫かと問い質したくなる。体には俺と同じように包帯が巻かれ、所々生傷も見えているというの

に、俺の元へ走ってくるなんて本当にこいつは……。

しかしそんな彼女を見ると、俺のことを思ってくれる奴は藍さんだけではないんだなと、しみじみ実感させられる。もしかしたら、こいつが俺のことを一番考えてくれていられるかもしれない。

なんだって、こいつは俺の従者なんだから。

だったら、俺は主として相応しい行動を取らなきゃあな。

俺は彼女に笑いかけ、強い声でしっかりとこう言った。

「大丈夫だ。ありがとな、閃珠」

彼女の目元から、一筋の涙が溢れた。その一粒を先駆けに、ぼろぼろと涙が頬を伝い、落ちていく。

そこでとうとう我慢が出来なくなったのか、彼女は俺の胸元にゆっくりと顔を埋めに来た。

正直少し気恥ずかしくも思ったが、ここで拒んだら俺はこいつの主失格だ。だから小さな彼女をしっかりと受け止め、背中に手を回してさすってやった。

「本当にごめんな……心配かけて」

「……っあ、るじい……よくぞっ、よくぞ、ご、無事で……うっ……」

閃珠は大声を出さないように、必死に肩を震わせながら、時々小さくしゃくり上げていた。

こんなに泣くほど俺を心配してくれるなんて……本当にいい奴だ、閃珠は。俺なんかの従者にしておくには勿体無いくらいだよ。

「ふっ……なんだ、もう出会ってるじゃないか」

唐突に聞こえた藍さんの声。反応できずに、聞き漏らしてしまっ
た。

「え？ あの、藍さん、何て言いました？」

俺の問いに、藍さんはただ首を横に振り、優しく笑う。

「何でもないよ。さて、私はもうお邪魔だろうし、帰るとする。お
大事にな、二人とも」

「あ……はい、ありがとうございます」

藍さんは立ち上がり、上機嫌に手を振って別れを告げる。俺も手
を振り返したかったが、閃珠の背中から手を離すのが何となく躊躇
われ、目と口だけで返すことに。藍さんはそのまま、蜜柑を片手で
弄びながら悠々と帰っていった。

閃珠と二人きりになった部屋で、俺は藍さんが最後に何とやって
たのか軽く頭を捻ったが、結局答えは出ずじまいとなった。

第三十三話 もう一人じゃない(後書き)

書き貯めツキタ〜(^^)ノ

これからもなるべく土曜更新を目標に取り組んでいきますが、不定期になる可能性が非常に高いです。定期更新を楽しみにされていた方々、申し訳ありません。

絶対に完結まで書き続けますので、どうかこれからも応援の程、宜しくお願いいたしますm)——(m

第三十四話 仲間を持つ者、持たざる者

「閃珠、落ち着いたか？」

「……うん」

珍しくも、見た目相応に子供らしい声だった。声になど気を使っ
てられないのだろう。

胸の内から見上げる視線にも、いつものような強さはない。

「……主よ」

「なんだ？」

「その……色々、申し訳ない」

何のことを謝られているのか、俺にはよく分からない。しかし、
どうせこいつのことだから、感じる必要のない責任を感じているん
だろうなと、おおよそ予測をつける。

「館では主を守れず、一時と言えど刃を向けた。こちらでは……そ
の、胸を、貸していただき……」

一時刃を向けたというのは、俺が自我を乗っ取られていた間のこ
とだろう。全く覚えにないから、それ以外に考え付かない。

しかし、赤くなりながらゴニョゴニョと話す閃珠の補足を聞いて、
やっぱりなと思う。つくづく分かりやすいというか、はっきりして
いるというか。どれも謝るようなことじゃないだろうに。

「どれも気にするなって。あんな急にレポートされて追いかけるわけないし、俺だってまさか命を狙われるとは思ってなかったからさ」

「……しかし、私なら追いかかれたやもしれぬ」

ぎゅっと俺の着流しを掴み、彼女は悔しそうに目を伏せた。責任をまだ感じているらしい。本当に生真面目な奴だ。それが閃珠のいいところでもあるけれど、今回は悪い方向に生真面目だ。

俺は俯く閃珠の頭を、軽く、本当に軽く小突いてやった。

「行き先も分からなかったのに、か？ 何でもかんでも背負いこもうとするな。お前はもうちょっと楽に考えたほうがいい」

人間、真面目に生きてばかりではいつかパンクしてしまう。適度に手を抜くことも、時には必要だ。

「お前が無事でいたから、今回はそれでよしだ。お前に落ち度なんてないよ、閃珠」

「む……では、主、今の無様な私も、認めていただけなのか……？」

彼女は涙に潤んだ目で、俺を遠慮がちに見上げてきた。この表情なら、男は大体のことを許してしまうんじゃないか、そう思わせる表情だ。

しかし、こいつは……もし意識して言ってるなら相当の策士だが、多分意図せずして言ってるんだろう。

そういうこっ恥ずかしいことをストレートに聞くなよ。こっちだってどう答えたらいいのか分からないだろう。今だって結構緊張しているのに。

それでも答えないわけにはいかないのだ。頑固な閃珠の自責を良い形で終わらせるには、彼女が期待しているだろう答えを出してやるしかない。だから恥ずかしさを奥歯で噛みつぶしながら、言っ
てやった。

「……その、誰だつて泣きたい時くらいあるからな。胸くらい、いくらでも貸してやる」

「……かたじけない」

我ながら臭い台詞だな、と自嘲する。それでも閃珠がはにかみながら小さく頭を下げてください、言っ
てよかったと思う。

「あの……主、もう少しこうしてきたいのだが、よろしいか……？」

「……ああ。気が済むまでこうしてたらいい」

閃珠が俺に甘えてくるのは、多分これが初めてだ。戦いの中でも、夜に話した時でも、彼女は自分の弱さを見せなかった。むしろ俺の役に立つことを優先し、荷物を持つとしたりしてくれた。

俺は彼女にとって、少しは頼れる存在になれたということだろうか。だとしたらいいのだが。

しかし……閃珠しかいないからいいけど、こんな所を誰かに見られたら明日からそいつと顔合わせられねえよ、ホント……。

「……あー、翼……もういいか？」

ビシリと、己の体が固まる音がした。閃珠も同じような反応を示し、二人でゆっくりと入り口を見ることに。

悲しいかな、幻聴ではなかったようだ。

胸元、というか閃珠にしか気を配っていなかったから、全く気付かなかった。いつからいたのか、入口に二人の女性が立っている。一人は記憶にない人で、赤十字が入った帽子をかぶっている事から、こここの医者だということが分かる。

医者の方はまだいい。これはもう起こりうる事故の範囲内だし、他人だからその場を笑って済ませるだけでいいから。

問題はもう一人の方で、その方は俺も良く見知っている人なのだ。銀の長髪、聡明そうな顔立ちで、俺を半ば呆れた風に見下ろしている女性。

里の守護者こと、上白沢慧音さん。

「け、慧音殿……？」

「何だ？」

「今の話……全て聞いておられたか？」

「……まあ、大体は」

「う……あ、うう……」

ゆらりと立ち上がり、顔をさらに真っ赤にしながら閃珠は近くの椅子に力なく座り込んだ。

無理もない。心身共に強い彼女が、あんなに弱い姿を見せるのは恐らく滅多にないことだろう。それを主である俺のみならず他人にまで見られたとなれば、その羞恥の程は推して知るべしである。

正直俺も……穴があつたら入りたい。

「せ、閃珠、そう落ち込まないでくれ。その、とても可愛かったぞ？」

慧音さん、多分そのフォローは逆効果です。

「かわ……ぬ、うう……」

やはり、閃珠はその一言で止めを刺された。可愛いと言われて恥ずかしいやら悲しいやら、閃珠は唸りながら頭を抱えて俯き。

「……白玉楼」

派手な音を立てて消えてしまった。テレポートだ。耐えられなくなつて逃げ出したらしい。

怪我人が病院を抜け出すのは駄目だとは思うが、どうせ数分で帰つてくるだろう。行き先は分かっているから、大人しく再起を待つとしよう。

俺も逃げ出したいが、そうなれば収拾がつかない。とりあえずあの二人の用件を聞かねば。

「え〜つと、ですね。慧音さんとお医者さん、何かご用ですか？」

前に進み出てきたのはお医者さんの方だ。

「ええ、まずは私が。さつきこの部屋から物凄い音がしたのですが、ご存じありませんか？」

いい笑顔だ。しかし、笑顔は時として恐ろしい。例えば今の彼女のように。

「えと……さつき、藍さんがここの壁を殴りましてですね。多分、それじゃないかと……」

壁に走っている蜘蛛の巣状のヒビが、衝撃の凄まじさを物語っている。流石藍さん、身体能力も驚異的なレベルだ。

それは分かるんですが、落とし前くらいは着けておいてくださいよ、藍さん。あなたらしくもない……。

「あら、やっぱりそうでしたか。実は先程紫さんがやってきまして、壁の修復はあなたに頼めとの言葉を頂いたのですよ。患者様にこのようなことを頼むのは心苦しいのですが、壁の修繕費をお願いできますか？」

口を挟む隙もないほどに笑顔で捲し立てられた。これをもし断ればどうなるか、その完璧な笑みが教えてくれている。

最初から、俺に選択肢はないようだ。

「分かり、ました。出来るだけ早く、用意致します」

「どうもありがとうございます。それではお大事に」

用件が済むと、お医者さんはさっさと出ていった。なんつーか、閃珠にかけた言葉じゃないが、今度は俺が泣きたくなってきたよ。

「さーて……慧音さん、あなたは何の御用で？」

「あ、ああ……翼、大丈夫か？ 目に力がないぞ」

「気のせいですよ。それより、大事な話を早く済ませちゃいましょう」

「そ、そうか……まあ、大したことじゃないんだ。君の仕事をどの

くらい休みにするか、それを決めておこうと思ってね」

ああ、確かに。それを決めておかないと、里の人に迷惑がかかる。しかし完治のめどが立っていない以上は、何日で復帰できるかも分からない。

しかしそこは慧音さん、抜かりない。

「さつき八意……やじい医師に聞いたんだけど、もう二、三日で回復出来るらしいね。とりあえず余裕を持って一週間、かな」

「二、三日？」

自分の体を見してみる。ナイフを刺された背中や恐らく折れたと思われる骨たちは何故か無傷だが、体の節々が痛む。表面上、傷痕は無いと言つのおかしな話ではあるが、少し体を動かすだけでも苦痛だ。

これが二、三日で治るものだろうか？

「冗談かとも思ったが、慧音さんは大真面目だ。

「恐らく君の能力が回復を手助けしているのだろう、とのことだったが……翼、君の能力とは何なんだ？」

「えと、あらゆる活動の活性……あ」

口に出して、一つの可能性に気付いた。

人体には、怪我や病気を自力で治す力がある。自然治癒力と呼ばれる物で、これがあるから風邪も治るし骨折も元通りになる。医療もこの働きをより上手く働かせる手伝いをするための術、らしい。

これも当然、人間の生命維持に必要な“活動”だろう。ならば、その力を限界以上に活性化すればどうなる？

「……なるほど、お医者さんの言う通りらしいです」

まだ試していないから分からないが、多分出来るはず。神力のみならず怪我まで回復できるとは……かなり便利な能力だ。

「そうか。何であれ、早く治るならそれでいいよ」

慧音さんはクルリとドアの方へ。

「あれ？ もう行くんですか？」

「うん、急ぎの用があるので失礼するよ。翼、一週間後の朝に会おう」

「あ、はい……」

慧音さんが退出して扉が閉まると、ようやく部屋に静寂が訪れた。時間にすればごく短かったが、実に中身の濃い時間だった。悪くはなかった……いや、悪くもあり、良くもあったが、こんな嵐のような訪問がいつまでも続くのは、流石に勘弁願いたい。精神的に疲れる。

「……はあ……」

起こしていた体をベッドに預け、天井を見上げる。

「随分とお疲れのようじゃの、翼」

「色々あったからな、疲れもするさ」

今しがた帰ってきたらしい雅に全てを説明するのは面倒なので、はぐらかしておいた。

「この屋敷は面白いのう、翼。小さい兎があちこちをうるちよろしよる。長く生きてきた妾でも、こんな家は初めてじゃよ」

「はは、冗談だろ？」

「冗談なものか。なんなら外に出てきたらどつじゃ？そこら中におるぞ」

「え〜……」

兎が大量にいるなんて初耳だ。しかも、ここは病院ではなく屋敷らしい。いやでもお医者さんはちゃんとしたし、慧音さんも医師って言っていたはずだ。自宅営業、なのか？

兎が走り回る屋敷で仕事をする自宅営業の医者……謎だ。

「しかし、出石は見つからなかった。本当にここにおるのか？」

「ああ、タイミングが悪かったな。俺のところにはさっき来たよ。暫くしたら戻ってくるだろうから、ここにいといるといい」

「う、む……」

雅は藍さんの破壊の痕を見つめている。その瞳は何か暗いものを感じさせた。

外に出たときに、何かあったのか。

「なあ雅」

「ん」

「何かあったか？ 元気ないけど」

嫌な思いをしても、そのまま溜め込むのと誰かに吐き出すのでは大違いだ。

だから聞いてみたのだが、雅は俺に背を向けた。そのせいで顔は見えないが、声音から真剣な顔をしているのは間違いない。

「……のう翼、ちと妾の話を聞いてくれんか」

息が詰まるような話でなければいいのだが、期待するだけ無駄だろう。楽しいお喋りをするにしても、この声音では台無しにしかない。

ちよっとうんざりしながらも、聞き返す。

「話って？」

「うむ。実はな……」

応答まで、ほんの数秒間が空いた。その時間が、嫌に重い。雅がどんな顔をしているのか気になるが、彼女は相変わらず後ろを向いていた。

壁を見つめながら、雅は独り言のように言った。

「妾は……出石に会わず、ここを去ろうと思う」

「……は？」

閃珠に会わず、ここを去る。雅の今の言葉、その通りに受け取っているのだろうか。つまり、自分を含めた仲間の為に奮闘している閃珠を置いて、この場を去るという風に。

「お前……本気で言ってるのか」

自分でも予想外なほどに冷えた声が出てきた。脅しているような我ながらあまり聞いていたくないような声だ。

雅は相変わらず振り向いてくれない。その背中に、俺は自分の願望をぶつけた。

「冗談、だろ？ 頑張ってるあいつを放っておくなんて、仲間のすることじゃない。そこで手を差し伸べてこそ、仲間なんじゃねえか」

勝手に、軽い言葉だとは思っ。それでも、言わずにいられない。

俺の言っていることは、何か間違っているか？ 俺は閃珠の覚悟を仲間への思いを知っている。だから彼女の仲間も、同じほどに閃珠を大切に思っている、それが当り前だと信じていたのに。雅は、閃珠から逃げようとしている。

そんなの、嘘だと思いたい。しかし、雅は否定してくれなかった。

「それでも、妾は出石と会いとうない」

「っ、ざけんじゃねえぞ、テメエ」

もし怪我をしていなかったら、俺は雅に手を上げていたかもしれぬ。思わず跳ね起きた時に走った痛み、今だけは感謝しておこう。

どさりと体を倒し、その小さな背中を覗む。

やがて俺の耳に届いた雅の返答は、少し掠れていた。

「……怖いんじゃないよ」

「……怖い？」

何年かぶりに友人と再会し、手を貸すことの何が怖いのか。

「怖い。どうしようもなく怖いんじゃない。出石が、もし妾の姿を忘れていたらと思うと……体の震えが止まらない。もしあやつにすら妾が忘れられていたら」

ようやく振り向いてくれた雅は、笑っていた。それは、こんな笑顔があるのかと驚かされるほどに、凄絶な笑みだった。

「妾は、誰に覚えていてもらえるんじゃない？」

「……それは」

答えられない。答えられるわけがない。

俺と彼女では、生きる時間の重さが違いすぎる。

俺が今まで自分なりに精一杯生きてきた十七年余りだって、彼女からすれば瞬く間に去っていくわずかな時間に過ぎなかっただろう。雅は恐らく千年以上の時を生きており、これからも、俺が死んでもらも生きていく。

この世界にいる唯一の知り合いである閃珠が彼女を忘れていたなら、雅の今まで生きてきた時間は、幻想郷では彼女の記憶にしか残らなくなる。何処へ行っても、誰の記憶の中にも自分の顔がない。それは、どれほど寂しいことか。人間である俺には、一生分からないだろう。

どこまでおかしくなろうと、やはり人間である俺は、一つの希望を示すしかない。

「閃珠は、きつとお前のことを覚えてる筈だよ。仲間を助けるなんて言い出すやつなんだから」

雅は天井を見上げ、乾いた笑いを漏らした。

「はは……姿を保てなくなったのはいつごろだったか、もう覚えとらん。それだけ大昔なのじゃろう。そんな奴の顔を、覚えとる奴がおろうか？ この妾が……妾自身が、あやつの顔を思いだせんのじやぞっ？」

「っ……」

最後の一言には、とてつもない凄味があった。口元は歪み、涙目なのに、その視線には後ろに下がりたくなる迫力が宿っていた。彼女が生きた年月の重みが、そう感じさせたのだろうか。

それでも、怯んでしまったのは失敗だったに違いない。そうでなければ、次の瞬間に起こる出来事に、何かしら対処できていたかもしれないのに。

「主、ただいま戻った」

「あ……」

毎度の爆発音を響かせ、話題に上がっていた人物が帰ってきた。俺と雅の間に出現した彼女は、雅の顔を見て、一言。

「……おぬし、何者だ？」

どうしようもない最悪の一言を、放ってしまった。

「おい、待て！」

制止なんて意味を成さない。雅は力の限りに扉を開き、風のように走り去ってしまった。よく見えなかったが、横顔には涙が光っていた。

二人になった部屋の中で、閃珠はいきなりの騒動に動揺しているようだった。

「閃珠……お前って奴は……」

「あ、主、私がおかしてしまったのか？ あの娘、泣いていたようだったが……今から追いかけて、謝罪した方がよろしいか？」

本気で心配している。その涙の理由が自分のせいだと分からない閃珠が、雅のことを心配しているなんて、まったく笑えない皮肉だ。起きて早々、面倒なことになってしまった。あのまま雅を放置しておくなんて選択肢はあり得ない。どうにかして二人の仲を取り持つてやりたい。

しかし、何をどうすればいい？ 閃珠は事情を説明すれば雅に会おうとするだろうが、雅はこの分だと閃珠を拒絶しかねない。大体それ以前に彼女が何処へ行ってしまったのが全く分からない。当てがないのにこの幻想郷を彷徨うのは自殺行為だ、今すぐ追いかけてい所なのだが体が動いてくれない。閃珠だって怪我の具合を見る限り、相当無理をして俺の病室に来ている筈だ。走り回り、能力を連続使用するなんてのは無理だろう。

本当に、どうしよう。

やり切れなさに溜め息が出た。先程感謝したばかりの怪我だが、

今ほど恨めしいと思うことはないだろう。

閃珠の顔を見る。困惑顔の彼女を見て、俺はもう一度溜め息をついた。

第三十四話 仲間を持つ者、持たざる者（後書き）

今回は土曜日更新セーフ……来週はどうなるかわかりません。全力で書いていきますので次回もよろしくお願いします。

第三十五話 過去を今へと繋ぐため（前書き）

遅くなつてすみません……。
少し短いですが、どうぞ。

第三十五話 過去を今へと繋ぐため

どうせ隠していてもいずれ知れる、ならば真実を話すべきだ。それは分かっている。

しかし閃珠に雅のことを話したら、どれだけ自分を責めることか。仲間のことを真剣に救いたいと願う閃珠自身が、仲間を傷つけた。彼女はそれを聞いて、また涙を流すかもしれない。その姿は、純粹に見たくなかった。

「主」

「何だ？」

「顔が青い。御気分が優れぬならば、横になっっているべきでは？」

閃珠が俺の顔を覗き込んでくる。精神的にも肉体的にも参っているのだから、そりゃ顔色だって悪くなる。

尤も、閃珠も同じくらい青いので、説得力は皆無だ。

あまり状況を把握していない閃珠だが、雰囲気から自分が関係していることくらいは読み取ったようだった。自らの発した何気ない一言に過剰な反応を示し、涙まで流して走り去った謎の少女。閃珠も彼女を少なからず気にしているからこそ、この部屋に来た当初より顔色が悪化しているのだろう。

誰かに気遣ってもらうことは、とても嬉しい。俺は自分を気遣ってくれる人たちは大切にしたいし、出来るなら力を貸したい。勿論、今俺の側にいてくれる閃珠だってそうだ。策は全く浮かばない。それでも、俺のことを心配してくれる閃珠を悲しませるのは、なるべく避けたいのだ。主としても、相棒としても。

全ての問題をなんのしこりもなく解決する、都合のいい妙案。そ

んなものは何処にもない。だったら少しでも良い結果に結び付けられる道を模索するべきだ。

いつまでも悩んでいたって何も解決しない。まずは一歩でも前に進んでみることに。

「……なあ閃珠」

「む？」

「お前は、どのくらい昔のことを覚えてる？」

あまり露骨には聞けない。雅の正体を感じ付かれずに聞くには、この程度が限度か。

閃珠は少し首を傾げたが、一応答えてはくれた。

「例え千年前のことであろうと、印象的なことならば覚えている。残念ながら何があったか、だけであり、その時見た情景や、人の顔までは覚えておらぬが」

「そっか……」

だったら、雅の顔も忘れてしまっただろう。記憶は儂い。神も、人間も、そこに違いはないようだ。閃珠も同じ思いなのか、寂しそくに薄く笑った。

「仲間達の顔も、もう忘れてしまいかもしれぬ。幾千、幾万と酒を酌み交わし、笑いあったというに」

俺は情けなくも、閃珠自身がその言葉を吐いてしまったことで、少し挫けそうになった。忘れてしまふ、それだけは言っていて欲しくな

かった。それでも、諦めて成り行きに任せるわけにはいかないと唇をかむ。

失った記憶はどうしようもない。ならばせめてもの埋め合わせを、後からしていくしかない。だが、それを逆に言えば、埋め合わせは出来る。俺が考えるべきはそこだ。閃珠と雅、二人がどうすればより幸せになれるか。

「主は、どの程度昔を思い出せる？」

考えに耽り始めるところだったので、この閃珠の問いは危つく聞き逃しそうになった。

「俺は……そうだな、お前ほど長く生きていないから、四歳頃のことならうつすら覚えてることもある。でも……やっぱりお前と同じように、印象的なことで、何があったかくらいかな」

皆、人間はそんな物ではないかと思う。むしろ年をとればとるほどに覚えなければならぬことが増えていき、幼いころの些細な記憶は駆逐されていく。仕方のない事だが、人間とはそういうものなんだろう。

「やはりか……記憶を残せるものがあれば、少しは抗えるであろうにな」

「記憶を残す、か……」

記憶そのものは残せないが、他のやり方ならあるのではないか。文字で過去を綴る、絵で残したい顔を、風景を描く。ささやかだが、抵抗は出来る。

尤も、それはこれから出来ること。今までの記憶は、既に薄れて

しまっている。今からそれを残そうとしても、ぼやけた不完全なものとなってしまうだろう。残すならば、経験した直後、もしくはその最中でなければならぬ。

しかし閃珠は次の一言で、その最大の問題を容易く解決してしまった。

「あの写真があれば、な……」

「写真？」

殆ど反射的に話題に飛びついた。自分でも、後から少し過剰な反応だったと思うほどだ。閃珠は俺のおかしな食いつきに再度首を傾げたが、また何も言わずに補足してくれた。

「うむ。撮影機というものが来て間もなく撮った、たった一枚の写真だ。その頃神社にいた皆の顔が映っている、私たち八宝の宝物。恐らく私がいた神社の宝物庫で、今も大切に保管され、眠っているであろう」

仲間達の為、残してきたのだ。はにかみながら、閃珠はそう締めくくった。

今の話で、俺は一筋の光が闇の中に差し込んできたような気がした。道筋は照らされ、進むべき方向は示された。では、最高の再会をアシストするため、俺がすべきことは一つだ。

「残念だな……閃珠、俺のことは良いから、後は病室に戻ってゆっくり休んでくれ」

「む？ いや、私は大丈夫だが」

「嘘つけ。お前だって具合悪そうにしてるじゃねえか。あの子のことは俺がどうにかするから、お前は怪我を治すことに専念しろ。主からの命令な」

「む……承知。しかし主、私の力が必要となれば、いつでもお申し付けを」

不服そうではあったが、閃珠も自分の体が万全ではないことを理解はしているらしい。大人しく自らの部屋へと引き下がった。

こんな特権を振りかざして無理を通すやり方は好みではないが、それで結果がよくなるなら良しだ。どうしても閃珠には席をはずしてもらわなければ、話が出来ない。

恐らくいるだろうあの妖怪と。

「出てこいよ、紫」

「ふふふ、仕方ないわね」

読みは当たったようだ。部屋の隅、注意深く観察しなければ見落としそうな壁の亀裂。そこがぐわっと開き、スキマ妖怪を生み落とす。

紫は眩い金髪をふわりとかきあげ、いつもの読めない笑みを浮かべた。

「いつから気付いていたのかしら？」

「気付いてなかったよ。お前なら藍さんが怒ってる所を覗きそうだったから、一応呼びかけてみた」

例えいなかろうが、俺は探しに出かけていただろう。怪我を押し

てでも動く価値があることだと、俺はそう思う。
紫は大げさに天を仰いだ。

「あらあら、私はまんまと釣られてしまったのね」

「良く言つよ、お前は自分が出てきたかったから出てきたただけだろ、
どうせ」

本当に釣られたと思うなら、笑顔のままではいないだろう。そもそも、普通なら十数年しか生きていない小童にこの大妖怪が手玉に取られるはずがない。計画を話させたときだって、閃珠の存在と俺の特異な立場がなければ何もできなかった。

「どちらでもいいじゃない。あなたが会いたくてたまらなかつた紫ちゃん
は目の前にいるんだから」

「その呼び方は似合わないから止めとけ」

「はいはい。それじゃあ冗談は終いにして、早く本題に入りましようか。
頼みがあるんでしよう？」

「ああ、その通りだ。お前にしかできないことを、頼みたい」

紫は笑顔を消した。それだけで、部屋に漂う空気が一気に引き締まる。

彼女は俺と閃珠の会話を聞いていた。だったら、今から俺が頼みたいことも概ね分かっているだろう。正直彼女には何の得にもならないようなことだが、こんな無茶苦茶な頼みを出来るのは紫以外にいない。彼女の眼を真っ直ぐに見て、俺はこう口にした。

「俺を、外の世界に連れて行ってくれないか」

「……何のために」

「聞いてたなら分かってんだろ？ 二人を引き合わせるためだ」

紫は嫌そうに表情をゆがめた。

そんな顔をされるのも仕方ない。以前少し外に出ることをちらつかせただけでも余裕がなくなったのだ、今後俺を幻想郷から出すつもりなど彼女には毛頭ないのだろう。

「閃珠はなるだけ仲間を悲しませたくないはずだ。そのためには、お前の力が必要なんだよ。頼む」

紫相手に頭を下げることになるとは思わなかったが、頼みごとをするなら誠意を尽くさねばならない。これだけで二人がまた仲直りできるなら安いものだ。

「……どうして、そこまでするのかしら？」

紫は嫌そうな顔のまま、問う。

「そりゃ、俺は閃珠の主だからな。あいつを助けようとするのは当然だろ」

俺が笑いながら返してやると、紫は更に嫌そうな顔をした。

「……ホント人が良いわね、あなた。馬鹿馬鹿しいくらいに」

「馬鹿でいいさ。だから、助けてくれ」

「……助けない、と言えば？」

「助けてくれるまで付き纏ってやるよ」

境界を操る紫に付き纏うなんて不可能だが、要は気持ちの問題だ。そのくらいの気持ちで頼んでいると分かってもらえればそれでいい。どうしても俺が必要な紫は、俺にあまり下手なことはできない。俺の思いが生半可でないと分かれば、紫は踏みにじるのが難しくなるだろう。また卑怯な考えだが、もう構うものか。

紫は、結局両手を上げた。

「はあ……計画が終わったらたつぷり嫌がらせしてあげるわ。覚悟することね」

紫は見たくない笑顔をこちらに向け、俺の胸、心臓のあたりを指差した。紫からの嫌がらせ……どの程度の物になるのか。命が取られなければいいのだが。

ともあれ、そんな言葉を吐くということはだ。

「……協力してくれるんだな？」

「ええ、甚だ不本意だけど」

言って、ベッドの少し前の空間に指で線を引く。そこがぱくりと開き、無数の眼がギョロギョロと蠢く異空間への扉となる。

「行き先は、出石神社の宝物庫でよかったかしら？」

「ああ。それじゃ……行くと、するか」

体を起こし、ベッドから降りる。節々が痛むが、今は我慢だ。人を飲みこむほどに大きく開かれたスキマに、足を踏み入れる。そして今度は、俺が嫌な顔をして隣に並んでくる紫を見た。

「……ついてくるのか？」

「なら、どうやって帰るつもりかしら？」

「あ……」

確かに、そうだ。帰ることを全く考慮してなかった。

「ふふ……本当に馬鹿ね」

「う、うるせえ、早く行くぞ」

「はいはい、それじゃあ行きましようか」

子供を見るような眼をされているが、俺は気にしない。全く気になどしていない。

さつさと目的を遂げるため、スキマに飛び込む。紫も俺の後に続いてきた。その先にあるのはがらんどうの空間、標識や目玉が周りを囲んでおり、不気味極まりない。俺は気持ちの悪い浮遊感を味わいながら、ひたすらに奈落へと落ちていく。

やがて、底にかすかな光が見えた。あそこが目的地へと続く出口なのだろう。俺は体勢を整え、背の翼を広げて光へと突っ込んでいった。

第三十六話 神々の眠る蔵（前書き）

大変遅くなり、誠に申し訳ありません……。これから遅くはなりますが、なんとか更新していくつもりですので、応援よろしくお願いいたします。

それでは、前置きはこのくらいで。
最新話をどうぞ！

第三十六話 神々の眠る蔵

「ここが、宝物庫ねえ……」

ほこりつぽく、カビ臭い。ガランとしているのに狭苦しく、あまり来たくない場所だが、何故か来たことがあるような……不思議な場所だ。

薄暗いのに着地地点に光が溢れていたのは、恐らく格子から太陽光が差し込んでいるからだろう。薄い光の帯が、数少ない宝物達にかかっている。勾玉が三つ、矛が一つ。そして太刀と……神棚らしき見たこともないもの（脚が付いた台座の上に木が立てられている）。無造作に床に放置されているそれは、まるで日向ぼっこでもしているかのような、穏やかな雰囲気を漂わせていた。

何の気なしにその中の一つ、大きな矛を手にとってみる。

「むやみに触らないで」

その手をすぐに、紫に掴まれた。

「あなたが触っていれば、じきに神々は復活する。それは、あなたと閃珠がやるべきことをやってからよ」

「……ああ、そうかい」

紫らしい言葉だ。情けなしの、彼女にとっては合理的な選択。

ここで全ての神器を俺に助けられたら、閃珠には戦う理由が無くなる。そうなれば、紫は貴重な協力者を失うかもしれない。

俺は正直、閃珠が紫を見捨てるような薄情なやつだと思えないし、助けられる奴はすぐにでも助けるべきだと思うのだが、この約束はあくまで閃珠が結んだものだ。俺がどうこう言うべきことじゃない。矛を置き、神器たちから離れる。

「さて……写真、だったな。紫、探すの手伝ってくれ」

「それには及ばないわ」

紫が足元の神器を指差す。なるほど、確かにその通りだ。

神棚らしき物体に目を奪われ気付かなかったが、よく見れば、三

つの勾玉は小さな紙切れを下敷きにしている。勾玉に触れぬよう、慎重に拾い上げて確認。

「……………」
そこには、笑顔があった。白黒で色褪せてはいるが、その輝きは今後も失われることなくないだろう。

写真に写っている一人一人が、実にいい、目一杯の笑顔を見せていた。閃珠も、雅も、幸せそうだ。これから皆が消えていくことなど、考えもしていない。純粹な笑顔。

今、閃珠たちはこんな笑顔が果たしてできるだろうか。

閃珠は真面目な奴だけど、よく笑顔を見せてくれる。しかしそれから全てを思い返しても、この写真に写る彼女には敵わないんじゃないか？こんな、見たもの全てを笑顔にしてしまうような笑顔、あいつ、したことあったかな……………」

雅は会ったばかりだから何とも言えないが、思いつめている彼女がこんな笑顔を作れるわけがない。そもそも、あいつがこんなに明るく笑うなんて想像もしなかった。

こいつは、この笑顔は、取り戻さなきゃいけない。絶対だ。強く誓い、内ポケットに大事に写真をしまいこむ。

その時、ふと。

「……………」

「？ 紫、何か言ったか？」

「いいえ？」

空耳か？今、微かに声がしたような……………」

「……………」

空耳でも、幻聴でもない。間違いなく、誰かの声が聞こえる。

でも、誰か？ 紫ではない。それにこの倉には、俺と紫以外には、誰も……………」

「……………」

いや、いる。この倉の主人たちが。彼らを忘れるなど、とんでもない。

俺は屈みこみ、神器たちに耳を近付けた。

「ダ……メ……」

今度は、はつきり聞こえた。どうやら声の出所は、三つの勾玉のうち、一番大きな琥珀色の勾玉のようだ。

ダメ、とは、俺たちへの精一杯の警告だろう。大体、俺たちは勝手に入ってきた招かれざる客であり、彼らからすればどうみても泥棒だ。いくら約束があるにしても、無抵抗な彼らをほったらかして無許可で写真を持っていくのは、筋が通らない。

「……紫、頼む」

さつきから、俺の頼みは苛立つことばかりだろう。紫には申し訳ないが、それでも……やっぱ、筋は通すべきだ。あの必死に絞り出された声を、無視なんてできない。

紫は、少し沈黙して。

「……なんだか、このままではどんどん甘くなっていきそうだわ」

フンと鼻を鳴らし、甚だ不服そうに言った。

「分かったわ。但し、一つだけよ。それ以上は許さない」

「ああ、十分だ」

これ以上を求めるのは我が儘だ。可哀想だが、他の神器たちにはもう少し待っててもらうしかない。

琥珀の勾玉を優しく手に取り、両手で包み込む。そして、勾玉の中に小さな炎が灯る様をイメージ。この神器に残る微かな神力を、大事に大事に育てていく……。

「……ッ!？」

突如腕に走る、鋭い痛み。思わず勾玉を落としてしまう。何なんだ、今のは……？

「あなた、まだ本調子じゃないでしょう。あんまり無理しすぎたら、動けなくなるわよ」

紫がめんどくさそうながらも忠告してくれた。

「……気を付ける」

あれだけ瀕死の状況に追い込まれ、先程起き上がったばかりなん

だから、考えてみれば当たり前だ。活性の能力で神力を回復できるようにしても、体のあちこちに痛みくらは出る。

しかし、ここは踏ん張らなきゃいけないところ。やるべきことをやり終えるまで、痛みくらい我慢だ。

勾玉をもう一度拾い上げ、作業を再開。神力を慎重に注いでいく。

「……あなたたち、ホント似てるわね」

「何の話だ？」

作業に集中したので、目は向けずに聞く。

「閃珠とあなたよ。馬鹿みたいに真面目で、義理堅くて、真っ直ぐで。自分をないがしろにしても他人を助ける。そっくりじゃない」

「……」

俺は一度、そのことについて閃珠に約束させた。自分をないがしろにするな、大切にしろと。

これじゃ俺も、人のこと言えないな。小さく苦笑してしまう。

「……あ、れ……？」

幸い、その馬鹿みたいな努力は実を結んだようだ。

「良かったじゃない、気が付いたようね」

紫は大層どうでもよさげに言い、後ろを向いた。

「あたし……あれ？　なんで、あつれえ……？　それにあなた、誰？」

まだ神の姿は出せないものの、ようやく復活したらしい勾玉は、起きるなり俺に質問責め。

「俺は霧崎翼。お前に頼みがあつて、起こさせてもらった」

「起こさせて……って、あなた、軽く言うね……。あたしを起こすのにどれだけかかったのさ？」

五十年？それとも百年？勾玉は疲れたように笑う。彼女らが苦しんできた月日は、それほどに長い時間だったんだろう。雅は本当に久々に生を得たと言っていたが、その言葉は俺が思っていたよりも遥かに重い意味を持っていたようだ。

そして物言わぬ神器たちは、未だに死んだように動けず、苦しん

でいる。俺なら今すぐに助けられるのに、それは禁じられている。本当に齒痒く、辛い。

「かかったのは数分くらいだ。信じられねえだろうけどな」

八柱もの神が集まってもどうにもならず、諦めるしかなかったことでも、たかだか人間崩れの俺ならこうも簡単に解決できる。皮肉なもんだな、と思った。

「ハッ、つくならもう少しましな嘘つきな。あたしが死に物狂いになってもダメだったんだ、人間のアなたにそんな真似が出来るわけない」

雅同様、嘲笑われた。いい気はしないが、もう怒りはしない。また喧嘩なんかしても、百害あって一利なしだ。

「本当だ。出石小刀も、日鏡雅も、同じ風に助けたんだ」

雅の名前は、昔神主からもらったものらしい。ならば、彼女とずっと一緒だったこの勾玉がその名を知らないわけがない。そしてただの人間ならば、雅の名前など絶対に知ることはないだろう。

「背中のそれといい……あんた何もんだ」

「俺はあいつらの味方だ。当然、あいつらの仲間であるお前だってな」

怪しまれてもしようがない。でも、諦めはしない。どうにかして、信じてもらわなきゃ。

勾玉は笑い、

「仲間？　へえ、仲間ねえ。だったらさ」

「何だ？」

驚くほどに抑揚のない声でこう言った。

「それなら、あたし以外の奴等も起こしてやってよ」

「それは……」

答えにつまってしまう。

それはできない。後ろから俺を睨む紫が、認めてくれない。

固まった俺を見て、勾玉はやっぱりなという風に鼻で笑った。

「ほら、出来ないじゃん。仲間だったら、あいつらだったら、絶対

助けてくれる。出来ないあんたは、仲間じゃない」

「いや、これには理由が」

「黙れ人間！ 言い訳なんて聞きたくない！」

バシリと遮られてしまった。暗い倉庫に、重い沈黙が訪れる。

勾玉はそれつきりなにも言わなくなり、俺もどうすればいいか分からず立ち尽くした。

もう何を言おうと、彼女は聞いてくれそうにない。諦めるわけにはいかないし、そのつもりもないが、手段がない。まさかこうも早々と打つ手がなくなるとは思わなかった。どうしよう、無駄と分かっているながらも話し続けるか……？

「情けないわね……あなた」

「……返す言葉もねえ」

「まったたく……」

紫はやれやれと息を吐き、表情を引き締めた。

「翼、勾玉を置きなさい」

「……何だよ、諦めろってか？」

「ええそうよ。だから置きなさい」

暫し、無言で睨みあう。紫は確固とした意思を感じ取れる、鋭く冷たい目をしていた。

いくらでも表情を作れそうないつのことだ、この顔の下にどんな感情を隠しているか分からないが、単純な俺は表情から心を読むしかない。

少なくとも紫の顔は、もう妥協を許してくれそうにはなかった。

本当は、絶対嫌だ、まだ話があると突っぱねたいが、今日は皆さん我が儘を言ってきたのだ。そろそろ紫も我慢の限界かもしれない。納得はいかないが、ここらが引き際っぽいな。

せめて最後に、言うべきことだけは言っておこう。

「もう一度言っておくが、俺は本当に雅たちの仲間なんだ。訳あって、今はまだ皆を助けられないけど、時が来たら絶対皆を助ける。約束だ」

返事はない。やっぱり信じてもらえないか。

「閃珠、もとい、出石と雅、お互いの顔も忘れちゃってさ。昔のことを思い出させるために、あの写真貸して欲しかったんだが……無理は言えないからな。邪魔したな」

少し期待してみたが、やはりもう声は聞こえなかった。勾玉は沈黙を守ったままだ。折角見つけた解決への糸口が、今ここで潰えた。残念だが、仕方がない。名残惜しいが勾玉を元あった場所に返す。

その瞬間。

パチン！

「は？」

小気味いい音が響いた。何の音かと振り向くと、紫が苦笑していた。

「お前何笑つ、て……」

もう一度見て、俺は同じように苦笑せざるを得なかった。

視線の先には、来たときと変わらず神器たちが日の光を浴びている。厳かだが、どこかのんびりとした雰囲気を醸している不思議な光景だ。

ただそこからは、二つのものがその姿を消していた。大きな琥珀色の勾玉と、一枚の色褪せた写真。確かに床に置いたはずのそれはなく、それぞれがあつた場所には小さな穴が空いている。端に赤いリボンの結ばれた異次元への入り口、その奥からはギラついた瞳がこちらを覗いている。

紫一色に染まったあの空間を作り出せるのは、彼女しかない。

「お前なあ……」

相変わらず、やり方が一々強引な奴だ。

「あなたが甘すぎるから、私が悪役をやるはめになったんじゃない。うんざりといった風に首を振り、後ろを向く紫。

「あなたは諦め、帰ろうとした。だけど私がそれを許さず、無理矢理彼女を連れていき写真を奪った。これで満足でしょう？」

「ああ、ありがたいよ」

勾玉は紫の能力を知らない。もしかしたら単なる偶然として受け止めてくれるかもしれないが、後々紫の能力を知れば、恐らく紫は悪党扱いされるはずだ。

「お前も、十分甘いじゃねえか」

どうせ否定されるから、聞こえないよう呟いた。

損な役回りを自ら引き受けるなんてお人好しにもほどがある。最初こそ厳しく非情なイメージしかなかったが、やっぱりこいつは悪いやつじゃない。

「なにか言っただかしら、翼？」

「いいや、何も。帰ろうぜ紫」

「……まあ、いいわ。ほら、早く飛び込みなさい」

「おう！」

開かれた幻想郷へ続く穴に、俺は意気揚々と飛び込んだ。

第三十六話 神々の眠る蔵（後書き）

お気付きの方もいらっしゃるかもしれませんが、また書き方が変わっています。これからはこの書き方でいこうと思います。過去の話の修正が追いつきそうにないですが、ご容赦を。

次話についてですが、また頑張って書いていきますので、どうか気長にお待ちください。

それでは、また次回！

第三十七話 失踪、疾走

元いた病室に何とか着地。遅れて紫も戻ってくる。

「主」

「っ!？」

いきなり呼ばれ、思わず体がびくついた。いくら聞きなれた閃珠の声でも、不意打ちされればやはりびっくりする。

「この写真」

俺たちが強引に持ち帰ってきた写真を、閃珠はまるで我が子を抱くように抱き寄せている。その様子だと、どうやらその正体には気付いてるらしいな。本当は雅を探しだし、じっくりと話をしてから、次に閃珠に見せるつもりだったんだが……こうなっては仕方がない。成り行きに任せる他ないだろう。

「紫殿が、持ち出したのだな」

閃珠の声は、若干震えていた。それが怒りや情けなさのせいではないことを祈るばかりだ。

「そうだ」

そのベッドに転がっている勾玉の話は後にしよう。今それを伝えたら、閃珠はきつと平静を保ってられない。さっき泣いたばかりなのに、また泣かせたくはない。俺はあいつとその仲間を喜ばせるために、これを持ってきたんだ。

しかし、彼女はもう気付いてしまっていた。自らの過ちに。

いきなりどうと膝をつき、閃珠は静かに涙を流し始めた。

「お、おい、大丈夫か？」

理由なんか分かりきってる。それでも心配で、俺は彼女の側に慌てて駆け寄った。

「私は……なんと言う、事を……っ!」

唇を噛み締め、だけど写真だけは大事そうに抱きながら、閃珠は後悔に打ちのめされていた。何とか言葉をかけたいのだけど、さっ

き叩き付けられた時間の重みが邪魔をする。十数年ぼちしか生きていない人間が、彼女の過去に入り込む余地なんてない。もう見ないふりなんて出来ない程に首を突っ込んでるのに、今更になって躊躇してしまうとは……。

つくづく俺は、情けない。でも、俺以外にどうにかできるやつなんていないんだ。全力を尽くすしかない。怯んだ自分に言い聞かせ、ようやくと口を開こうとしたその時。閃珠がやおら立ち上がった。「行かねば」

弱々しく、今にも倒れそうなほどに儂い。それでも確固とした意思が、その言葉には宿っていた。

俺は彼女の心の強さを、この時ほど疎ましく思ったことはない。

「行くつて、どこへ」

分かりきった問いではあるが、やはり聞いておかなければならない。俺の予想が当たっていたら、俺には主としてやらねばならないことがあるから。

閃珠は真つ正直に答えてくれた。

「仲間のもとへ」

「……そうか」

これで、俺のすべきことは決まった。

「っ！主……？」

俺は包帯が巻かれた閃珠の腕を掴んだ。閃珠は痛みを強張らせ、涙目で俺をみた。若干心が痛んだが、それでもこの手は離せない。こうして繋いでおかなければ、彼女は今すぐにも駆け出しそうだから。

彼女の腕は細いけど、しなやかで確かな力強さがある。まさに鍛え上げられた剣のような腕だ。しかし、今は包帯が巻かれ、傷口が隙間から覗いている。俺はこの腕を、これ以上危険に晒して欲しくない。

「ボロボロのお前を外に出すなんて出来ない。俺には、お前を守る義務がある」

半分は本音だが、半分は建前。確かにそれもあるが、一番言いたかったのはそこじゃない。

「約束したよな？ 自分を大切にしろって。お前はもう、それを忘れたのか？」

今閃珠が動いたところで、事態が好転するとはとても思えない。むしろ二人が傷付く結果に終わるだけだろう。勝手な話だが、俺は閃珠が悲しむ顔は見たくない。そのために頑張っているんだ。お節介であるうと、俺がそうしたいからそうしてるんだ。

だから、まだ閃珠にはここにいてもらわなきゃ困る。

「分かってくれ……頼む」

心からの、願いだった。

「……約束は、覚えている。一生、忘れぬ」

苦渋に満ちた物言いだだが、彼女は俺の約束を肯定した。と、いうことはだ。

「分かってくれたか……っ！？」

安心して手を離れたのが間違いだった。次の瞬間、体が宙に浮いたのだ。一瞬気持ち悪い浮遊感に襲われるが、すぐにそれは止んだ。背中から地面に落ち、今度は傷口に加えられた衝撃に悶える。

何が起こったのか、まるで理解できなかった。考えようにも痛みが思考を阻む。さっきまで痛みなしで動いていたのが信じられない。

「主も酷い傷だ。横になっていた方がよい」

「馬鹿、やろう……！」

閃珠がこんなことをするなんて、全く予測できなかった。彼女の能力を使えば、俺の邪魔は簡単に出来る。しかし武士道を重んじる彼女が、主である俺にまさか手をあげるとは。

あいつ、それほどに追い詰められてんのか……。

「私は私を尊重する。故に、行かねばならぬ。このままでは、私の心が折れてしまうのだ」

「詭弁、だ」

もう、駄目だ。俺が何を言おうと、彼女は最初から行くつもりだ

ったんだ。説得しようとしたところから、そもそも間違っていたんだ。今更、俺は彼女の決意の固さに気付かされた。

それでも行つて欲しくないから、俺は彼女の言葉を否定し、手を伸ばす。閃珠は俺の側、手の届かない距離に正座し、深々と頭を下げ、額に地を付けた。

「数々のご無礼、お許しを。今日のことは、全てが終わった後、きつと償わせていただく」

それを最後に、そのまま彼女は消えた。残されたのは沈黙を守つたままの勾玉と、無様に地面に転がっている俺だけ。

「くつ、そ、があ……！」

大事なところで、とんでもないチョンボをやらかした。あの写真は、絶対閃珠が見付けない場所に落としてもらうべきだった。まだ雅の居場所も分かってないのに、閃珠まで失踪してしまうだなんて最悪だ。

窓の外を見ると、いつの間にもやら太陽は西側に傾いていた。竹林の向こう側から少し赤みを帯びた光が差し込んできている。あの太陽が沈めば、夜が来る。夜は、妖怪たちが支配する時間だ。本調子じゃない二人、特に復活したばかりの雅がもし凶暴な妖怪に襲われたら……考えるのも恐ろしい。

最早、一刻の猶予もない。立ち上がり、襖に手をかける……。

「待ちなさい」

後ろを向くと、西陽を背に受けた紫が日傘をこちらに向けていた。

「何の真似だ」

紫の声はあくまで冷静だ。

「落ち着きなさい。今のあなたが出ていったところで、実りのある搜索は出来ない」

「何故そう言い切れる」

「体が駄目なら頭を使っしかないでしょう？ でも今のあなたにはそれすら出来ないからよ」

頭に血が上る。咄嗟に言い返そうとしたが、強い語調に上手く出

鼻を挫かれてしまう。

「あなたは人間でしょう？ だったらまずは閃珠たちがどこに行つたかを考えなさい。その方が探しやすいでしょう」

「ぐ……」

悔しいが、その通りだ。この広い幻想郷を宛てどもなく探していはきりが無い。逆に俺が妖怪に襲われるのがオチだ。場所をある程度絞り、可能性の高い場所から順に潰していくのがベターだろう。無策で動くなど愚の骨頂。まずは頭を冷やして考えるところからだ。

「可能性の高い場所……」

冷静になれ、霧崎翼。出来の悪い頭でも、こんな時くらいは役立ててみる。大きく息を吸い、吐く。そして思考をフル回転させ、まずは自らに与えられた情報を整理する。

閃珠から考えるなら、彼女は行ったことがある場所にしか移動できない。俺は大体彼女と行動を共にしてきたから、つまり移動先は俺の知っている場所である可能性が極めて高い。

しかし閃珠はそもそも雅を探しに出たのだから、やはりまずは雅が行きそうな場所を探すべきだ。

雅には、恐らく閃珠のような移動に役立つ能力は無いと思われる。もしあつたなら、病室から出ていく時に使っていたはずだ。まだ雅が出ていってからあまり時間は経っていないので、この病院の近辺にまだいると考えるのが自然だ。

「紫、ここいらの周辺って」

「迷いの竹林と呼ばれる場所よ。初めて入った者はまず迷うとされているわ」

間違いない。だったら雅は竹林で迷っている筈だ。幸か不幸か、外が厄介な場所であつたお陰で居場所が知れた。

あとは閃珠がどこにいるかさえ分かれば……。

「まだ分からないかしら？」

もう当たりをつけているのだろうか。紫はいつもの嫌な笑顔だ。

やっぱり気に食わない表情だが、今は四の五の言ってる場合じゃない。彼女の知恵を借りて解決するなら、頭を下げるべきだろう。

「分かるなら、教えてくれ」

紫はもう呆れ顔だ。

「今日は随分と私に頼るのね、翼」

「これで最後にする。搜索は一人でやるから、お願いだ」

一分一秒が惜しい。俺が考えている間にも、太陽はその高度を下
げているのだ。夜になる前に、なんとか搜索を終えたい。

紫は首を振った。

「あなた一人で行かせるわけないでしょう。迷子が一人増えるだけ
じゃない。後で付き人を呼ぶわ」

「付き人？」

「ええ。まずは閃珠の居場所を教えるところからだけど」

ベッドに座り込み、紫は口を開いた。

「閃珠は雅が出ていった所を見ていたでしょう。だったら、彼女も
近辺を探そうと思うはずよね？」

「つまり、閃珠も同じく迷いの竹林に？」

首肯する紫。

「いや、それはおかしい。閃珠は竹林に行ったことなんてないはず
だ。瞬間移動を使ってる時点で、そこは除外される」

紫は俺の反論に全く動じなかった。それどころか、さらに笑みを
深くした。

「まず前提が間違ってるのよ。閃珠は本当に知っている場所しか行
けないのかしら？　すぐそこに竹林は広がっているというのに」

紫は病室にある唯一の窓を指差した。窓、といっても格子窓で、
自由に開け閉め出来るタイプではない。竹垣の向こう側に、背の高
い竹が何本も乱立している。あれが迷いの竹林か……。

「あ！」

「気が付いたかしら？」

「そっだ……そっだっだ」

閃珠は視界の中に広がる空間にも移動できる。窓から覗いた場所にだって飛べる筈だ。

「だったら、二人とも竹林に……！」

「よし！」

行つて部屋の出口に走ると。

「落ち着きなさいって言つてるでしょう」

思いつきし頭を日傘でしばかれた。

「くろう……！」

強烈な一撃に頭を抱えて踞る。

痛い。半端じゃなく痛い。頭蓋にひびいったんじゃね、これ。こ

いつ手加減しなかつたな……！

「付き人を呼ぶつて言つたでしょう？ ほら」

パチン。

「ひあ！？」

ドサツ。

「いった〜……」

紫が指を鳴らすと何かが起こる。それは分かっていたが、今は流石におかしい。本当に何でもありなんだなとため息が出てくる。

人が落ちてくるつて何だよ。つか頭から兎の耳が生えてる時点で人ですらないし。

黒いブレザーに赤のネクタイ、下はスカートと学生みたいな服装だが、兎の耳と尻尾が生えているところから間違いなく妖怪だ。今まで出会つた妖怪同様、腰の辺りまで伸ばされた紫色の長髪に、吸い込まれそうな赤い瞳と、およそ日本人には有り得ない特徴を有している。特にあの赤い目。見ているだけで何故か心が掻き乱される、不思議な目だ。

「もう、何なのよスキマ妖怪！」

しゃがみこんだまま涙目で恨めしそうに紫を睨む妖怪。何かそんな表情が板についてる感じがするのは気のせい、だよな？

「あなたに彼の人探しを手伝つてほしいのよ。竹林に行くなら、案

内人についてもらわないとね」

「私は案内人じゃないわよ、まったく……ホント信じらんない……」
ぶちぶちと愚痴をこぼしながら襖に手をかけた妖怪兔に、紫はわざとらしい悲しみの声をぶつけた。

「ああどうしましょう、まだ永遠亭での治療も終わってないでしょうに、まさか勝手に病室を抜け出すなんて。もし何かあったら……考えるだけでも恐ろしいですわ……」

紫より、妖怪兔の方が余程恐ろしそうな顔をしているのは気のせいじゃないだろう。紫はそれを狙って言ったに違いない。相変わらず人の心を掌握するのが上手い。

「患者が、逃げ出したの？」

「ええ、つい先ほど」

やっぱり紫は性格が悪い。人がこの上なく焦っている時でもいつものように笑っているんだから、まったくもって酷い奴だ。しかし今回は紫のお陰で色々と助かってるから、黙っておくことにしよう。

兔は数秒間固まっていたが、すぐに復活した。襖を開き、俺を鋭く睨み付けてきた。俺、何か悪いことしたかな？

「早く探しにいくわよ」

「了解です」

二つ返事で了承。彼女が焦る理由は分からないが、急いでくれるのはありがたいのでよしだ。

「翼」

今にも走り出さんとする俺たちを紫はまた呼び止めた。

「何だよ……つと」

振り向きざまに飛んできた何かを、反射的にキャッチ。それは先ほど連れてきた第三の神器、あの赤い勾玉だった。

「うっかのあかしたま 鶺鴒々赤石玉だって八宝の一つ。もしかしたら役に立つかもしれないから、一応持っていきなさい」

やはり勾玉は全く喋らない。神力は順調に回復しているみたいだが、まだ機嫌が直らないようだ。今のままの彼女を持っていったと

ころで役に立つかは疑問だが、特に断る理由もないのでとりあえず懐に収めておくことにした。

「私も他を探してみるわ。翼、あなたも頑張りなさいよ」
「おう」

二人とも、必ず見つけ出して仲直りさせて見せる。俺は固く心に誓い、廊下へと飛び出した妖怪兎を追いかけた。

第三十七話 失踪、疾走（後書き）

永遠亭編、これで前半終了。

次回からは迷いの竹林で後半です。

それでは、また次回。

第三十八話 始まりは日没と共に（前書き）

今回はなんかすごく筆が進みました。本当に不定期な更新ですいません（汗）

第三十八話 始まりは日没と共に

体が軋む。どうやらティルフィングは相当無茶をしてくれたようだ。地を強く踏みしめる度に、全身が痛みを訴えてくる。自然治癒力を活性化させて回復を急いでいるが、それだけでは全く不十分だ。外傷はなんとかかなりそうな所まできたが、いかんせん内部損傷が激しい。つまり、神力生成器官の消耗だ。

俺は神力生成を活性化できるが、それはあくまでいつも以上の力を引き出しているだけであり、器官そのものの力を強化しているわけじゃない。無理をさせているわけだから、能力が切れたらその分の負荷が返ってくるのだ。

俺は戦うとき、いつも神力生成を活性化させて戦っていた。チルノとの戦い程度ならまだしも、紅魔館で十六夜とやったような激戦は、終えた時の負荷が凄まじい。

今までも多少のしんどさはあったが、無視できるレベルだった。痛みまで走るというのは初めてだ。何もしなければ痛みもないのだが、今のように全力で神力を使っている状況は、はっきり言って非常に好ましくない。

「一旦ストップよ!」

四方を竹に囲まれた林の中。日が傾いてきているこの時間にこんな場所をうろつく馬鹿は流石におらず、聞こえるのは風と葉の擦れる音だけ。

妖怪兎がようやく立ち止まったのは、竹林の中を一時間は駆け通した後だった。大きく彼女に遅れを取っていた俺は、数秒後になつてようやく彼女の隣りに並ぶ。

「大丈夫?」

「え?」

「さつきから苦しそうだから。いくら能力持ちでも、今は無理しない方がいいんじゃない?」

彼女は軽く息を弾ませているが、まだまだ余裕といった様子。対して俺は自分でも怖いほどに荒い息を吐いていた。今すぐ倒れてもおかしくなさそうな、酷い息遣いだ。彼女の方がスピードは格段に速かったのに、なんてザマだ……。

体から嫌な汗がじつとりと吹き出てきて気持ち悪いし、疲労と痛みで膝は笑っている。正直今すぐにも倒れ込みたいのだが。

「俺が、見つけたいんだ」

「ここは譲れない。」

妖怪兎はふうと息を吐いた。

「そう。でも、本当に駄目な時は言いなさいよ。迷惑だから」

睨まれてもしようがない。向こうからすれば、いきなり見ず知らずの怪我人と無理矢理人探しをさせられているのだから、さぞ不快なことだろう。実際に足手まといになって初めて気付いたが、捜索前の一睨みも、こうなることを予測してだったのかもしれない。

「ごめん。こんなことに付き合わせて」

「謝るくらいなら戻ってくれない？」

「……それはできない」

「でしょうね……はあ」

彼女は再び嘆息し、

「とりあえずこのままじゃ倒れかねないから、ここからは歩いて探しましょう。それなら負担もなさそうだし」

反対は出来ない。体がもうこれ以上の無茶は無理だと伝えてきている。彼女に従うのが一番賢い選択だろう。

「分かった……」

能力を解除、身体能力、神力生成を通常時まで戻す。反動に目眩がしたが、何とか倒れずに踏みこたえた。

「ホントにポロポロね」

「面目ない」

疲労を少しでも和らげようと、小さなペットボトルから水分補給カバンに入れたままだったものを見つけ、洗って使えるようにして

おいたのだ。今日汲んできておいた水を口に含み、

「そんなにあの神様のことが好きなんだ」

「ぶっ!?!」

盛大に吹いた。彼女に背を向けていたのがせめてもの救いだ。

兎はやれやれと首を振った。

「何よ、今更このくらいで照れることないでしょ」

「ば、馬鹿! そういうんじゃないよ! 閃珠は俺の大事な相棒だ
っつもの!」

何変な勘違いしてんだよこいつは!?

「またまた。聞いたわよ? あなた達別々の病室なのに、お師匠様
がいざ来てみたら一緒にたって抱き合ってたって」

「が! あ、あれは……!」

思い出すと気恥ずかしくなって、つい言葉が尻すぼみになってしまふ。あんな経験は初めてだった。自分でもよく冷静に話が出来ていたなと思う。あの時は閃珠の話聞くことしか考えていなかったからだろうか。

いつもの強さからは想像できないほどに彼女の体は小さく、優しい柔らかさを持っていた。あの感触を思い出し、またドキドキしてしまう。

「ほらやつぱり。あなた、顔真っ赤じゃない」

「う、うるせえ」

俺が、閃珠を?今まではないと断言できたのに、今日に限ってそれが出来ない。

お、おかしい。昨日まではそんなこと、全然思わなかったのに。確かに素直だし、真面目だし、見た目も結構可愛いとは思ってたけど、それはあくまで客観的評価であって、別に俺があいつのことが好きだっただけじゃ……。。

「相棒ってことは、いつも一緒にいるんでしょう? 一緒にいるうちに好きになっちゃったのかもしれないわよ?」

「いや、それは……」

まだ会って間もないんだぞ？それはないだろ。じゃあ、一目惚れ？まさか。それなら初めて会ったときから、もつと違う対応をしていたはずだ。ホントに、なんでこんなに焦ってたんだ？俺。自分でも訳がわからない。

「ま、何でもいいけど。そろそろ無駄話はおしまいにしましょうか」「あ、ああ……」

ゆっくりと歩いての搜索が開始される。それからまた口数が少なくなり、ひたすら閃珠と雅を探す時間が続くことになった。しかし俺の脳内では、ずっとさっきの言葉が渦を巻いていた。

（そんなにあの神様のことが好きなんだ）

違う。とは言い切れない。でも、そうかと問われるとはつきりとは領けない。どうなんだろう……？

（ああ、くそ！ やめだ、やめ！）

今はそんな浮わついたことを考えてる場合じゃないだろ。まずは二人を見つめる。それが最優先事項だ。余計なことは考えるな。

頭を振り、大きく息を吸って空を見上げる。竹の葉の向こう側に赤から紫へとグラデーションした空があった。いよいよ太陽は地平線の向こうへと消えていきそうだ。夜まで、あと少し。

二人とも、どこにいるんだ。もう夜が来るつてのに。

焦燥に、今すぐ駆け出したくなる。しかし体はそれを許さない。

歯痒さを少しでも打ち消すため、せめて歩幅を大きくした。

「まだ、無事だよな……？」

誰にも聞こえない呟きは、暗闇に吸い込まれていった。

竹林はいよいよ暗闇に包まれ、見通しがきかなくなってきた。人間ならば苦勞するだろうが、生憎と私は半分獣だ。この程度の闇は見通せる。

半人半獣のこの身は、私、上白沢慧音の最大の武器。この力があ

ればこそ、私は里を守れるのだ。こんな時間に友人の家を訪ねられるのも、この力のお陰。聞こえこそ悪いが、案外妖怪の力も捨てたものではない。

「……ん？」

気のせいだろうか、視界の端に一瞬だけ、人影が見えたような。周囲を確認。やはり間違いはなかった。林立する竹の向こう、人が倒れている。あんなところにおいては妖怪の格好の餌食だ。正直、現在生きているかも微妙なところである。

私は里の守護者、人間の味方だ。妖怪に襲われている人間を助けるのも、私の仕事。しかし、仕事が万事上手くいくとは限らない。助けられず、無惨な姿を晒している人間を何度見たことが。その度に私は、涙が涸れるほどに泣いた。自分の未熟さを呪い、次こそは必ずと胸に誓った。

今回の彼女が、新たな犠牲者でなければいいのだが……。言い知れぬ恐怖を抱きながら、私はそちらに近付いた。

「……ふう」

そして私は、胸を撫で下ろした。一目見ただけで、彼女が生きていると分かったからだ。

仕立てのいい青銅色の着物に金のかんざしと、どこかのお嬢様かと思うような格好の彼女。目を閉じてはいるがその表情は安らかで、到底妖怪に襲われたとは思えない。規則正しいリズムで呼吸していて、時折もぞもぞと動いている。

何故こんなところなのかは分からないが、どうやら彼女は寝ているらしい。

「まったく、紛らわしいことだ、なっ」

ここに放置しておくわけにもいかない。妹紅もこうのところまで連れていくつ。

ぐっすり眠っている彼女を背負い、引き続き目的地を目指す。

(しかし……変わったこともあるものだ)

私も一応人外だ、雰囲気で種族は大体分かる。かなり微弱だが、

彼女から放たれる清廉な気は多分神力によるものだ。つまり、彼女は神に類する者だと推測される。

しかし、それにしてもはいやに弱々しい。普通は遠目からでも神ならそれと分かりそうなものだが、近づくまでは何の力も持っていないように思えるほど、彼女の力は弱い。どうしてそうなっているのか気になるが、それを知る本人が熟睡中では仕方がない。起こすのもなんだし、このまま寝かせておくか。

竹が風に吹かれてざわざわと騒ぐ中、私は少し早足で妹紅の家へと向かう。静寂を乱す音がこれだけとなると、何故か心を掻き乱される。さらに周囲に広がる薄暗闇が、心の隅に巣食った不安を増幅させる。迷いの竹林と言うが、もしかしたらそれは、この不気味な雰囲気人が人の正常な判断を狂わせるせいもあるのではないだろうか。空を見上げる。昼と夜のちょうど境、といったところか。もう空には一番星が輝いている。これから星はどんどん増えていき、太陽は月に取って代わられ、そして竹林は完全な暗闇に閉ざされるだろう。

闇そのものを恐れる必要はないが、そこには何が潜んでいるか分からない。だからこそ、夜の外出はタブーなのだ。特にこの幻想郷では、藪をつつけば蛇どころか竜が出てくる恐れがある。今この瞬間だって、私の背が妖怪に狙われている可能性は否定できない。

それに何だろう、今晚は殊更嫌な予感がする。何ら根拠のない勘だが、どうにも不安が拭いきれない。ピリピリとした緊張が、この竹林全体を覆っている、そんな感じがする。これまで何度もこの竹林には足を運んでいるのだが、今日は雰囲気が違う。

妹紅はこの異変に気付いているだろうか。いや、気付かないはずがない。彼女はここの住人だ、彼女が気付かないなら私も気付かなかったことだろう。

活発な彼女だから、もう異変を解決するために動き出しているかもしれない。家こそ見えたが、果たして家にいるだろうか……。

「夜分遅くにすまない。妹紅、いるか？」

決して立派とは言えない一軒家。明りがついているということはどうやら在宅のようだ。簡素な扉を叩くと、中からいつもの返事が返ってきた。

「ああ、慧音か。開いてるよ」

「そうか。それでは、お邪魔します」

扉を開いて一礼すると、妹紅が苦笑しながら出迎えてくれた。夕飯の準備をしていたのか、カッターシャツの上からエプロンを付けている。月光に映える白銀の髪もきれいに纏められている。

「相変わらず仰々しいなあ、慧音は」

「こつという性分だからな。今日は生憎みやげも何も無いが、許してくれ」

妹紅は笑いながら私の背後を指差した。

「何言ってるのさ、ちゃんと大きなみやげを背負ってるじゃないか。まさか神様を持ってこられるとは思わなかったけど」

そうだな、暫く寝かせてもらうつもりなのだから、説明するのは当然の礼儀だ。

「竹林のど真ん中で眠っていてな。あまりに危なっかしいから連れてきたんだ」

「それはまた豪気な……まあ、そこらに寝かせといてやりなよ」

「ああ。ありがとう、妹紅」

入ってすぐの居間に彼女を下ろし、座る。中央には卓袱台が置かれ、その上にはすっかり夕食の準備が整っていた。魚の煮付け、そしてキノコの汁物……見た目はいいのだが……。

「慧音、食うか？」

「いや、遠慮しておこう」

「そっか……自信作なんだけどな」

彼女、料理の腕は良いのだが、材料に関する知識が乏しいため、たまに得体の知れない物まで料理に使うことがある。あのキノコ、以前食べて酷い目にあった物と色合いが似ているような……。流石にそれを食べる勇氣は私にはない。

「なあ妹紅」

「ん〜？」

汁を啜りながら、こちらを見ずに妹紅は私の呼びかけに応じた。「案内落ち着いているようだが……竹林の異変には気付いているんだよな？」

割とのんびりくつろいでいるので、まさかとは思ったが聞いてみた。彼女は器を置いてこくりと頷いた。

「そりゃ、ずっとここに住んでるからねえ。気付かない方がおかしいだろ」

「だったら、解決しには行かないのか？」

「解決しようにも、元凶が分からないんだ。それに、今の所私には害がないし……飯の後にちょっと様子を見に行くくらいだな」

なるほど、道理だ。もしかしたら妹紅からすれば、この程度のこととはよくあることなのかもしれない。一々考え込むようなことでもないのか……？

「ま、慧音はいらぬ心配が多、い」

言葉に詰まったのだ、妹紅だって気付いたことだろう。今、家全体が揺れた。それに、外から聞こえてきた重い音は……。

「……妹紅」

「まったく、飯くらいゆつくり食べたかったんだけど」

妹紅は腰を上げ、ぐっと伸びをした。そして赤いもんぺのポケットから、お気に入りらしい白地に赤の入ったリボンを取り出し、手際良く毛先に結んでいく。最後に一つ大きなリボンを結んで、準備完了。

「続きは腹を減らしてから、だな。慧音、その子は頼んだよ」

深紅の瞳が私の後ろ、熟睡している神様へと向いた。本当はついて行きたいのだが、この神様を一人にしておくわけにもいかない。それに私が元凶を探りに行くより、この竹林に詳しい妹紅が行った方が確実に早いだろう。選択肢はなかった。

「分かった……妹紅、気を付けてな」

「大丈夫。それじゃ、行ってくる」
私は不安ながらも、渋々妹紅の背を見送った。

第三十八話 始まりは日没と共に（後書き）

視点変更がこれから増えそうな予感……。

それでは、またいつになるかは分かりませんが、次回にてお会いしましょう。

第三十九話 呪われし刃

「何？ さっきの音……」

隣の妖怪兎が、ウサ耳をしきりに動かしながら辺りを見回す。先程竹林を揺るがした衝撃音。つい最近似たような音を聞いた覚えがある。具体的には、あの吸血鬼が住まう屋敷で。

まさかまた、戦いが……。

「分からねえ。とりあえず、行ってみよう」

閃珠がいるかもしれない以上、見過ごすことはできない。神力生成を活性化、続いて筋細胞の活動を……。

「……っ！」

忘れてはいけませんが、俺は現在入院中の身だ。身体だって完全には治っていない。それをいつも以上の力で動かすなんて、自殺行為以外の何物でもない。先程の全力疾走も、損傷に拍車を駆けたようだ。

身体が拒否反応を示したか、全身に激痛が走り、膝をつく。着々と酷くなっているのが自分でも分かった。正直、洒落にならない。気を緩めたらすぐ倒れてしまいそうだ。

「あなた……」

「っ、大丈夫、行こう」

彼女の言葉を待たずに走り出す。あのまま聞いていれば、俺は病室に逆戻りしそうだったから。今は甘えたことを言っただけではないし、聞くべきでもない。閃珠のため、そして雅のためにも、俺が戦わなきゃいけないんだ。

「……損な人ね」

並走しながら、兎は独り言のように言った。

「損？」

「損じゃない。他人のことを考えるあまり、つい自分を蔑ろにしてしまう。愚かだわ」

最初から俺と彼女の思考はかなり食い違つと思つていたが、まさかそうまで言い切られるとは思わなかった。

「辛辣だな」

「当たり前でしょ。無理してあなたが倒れたら、私の責任だもの。あなたの意見なんか受け入れられない」

それに、と言つて付け加えられる。

「個人的にも、あなたの考えは受け入れがたいわ」

「……そうかい」

残念ながら、この妖怪兎と俺の相性はそう良くないらしい。元々妖怪と人間、相容れない種族ではあるが、今まで仲良くしてきた妖怪も数多いので少し悲しい。

まあ、俺の思考は一般的なものとずれてるらしいから、それも仕方ないか。俺は俺だ。俺は自分の正しいと思つた道を進む。そうやって生きていくしかないんだ。誰も、進む道を決めてくれなんかしない。

「……おしゃべりは、ここまでのようね」

「……らしいな」

妖怪兎と共に足を止め、前方に浮遊する妖怪を睨む。

またも少女の見た目だが、絶対妖怪だ。俺以外に翼の生えた人間はいないはず。俺ほど大きい翼ではないが、立派なものである。さらに長い爪、エルフのように長い羽の耳がついている。そして羽の飾りがついている帽子と靴……鳥の妖怪か？

何であれ、戦闘は避けられないだろう。その両手には、彼女には似つかわしくない両刃の大剣が握られている。妖怪兎はともかく、間違いない俺は標的にされているだろう。

月明かりに照らし出された彼女は、上ずつた声で叫んだ。

「駄目！ 逃げて！」

「っ……ち！」

言葉とは裏腹に、彼女は迷いなく突つ込んできた。何の武器も持っていない状態で戦えるわけがない。慌てて飛びあがり避ける。体

が悲鳴を上げるが、抵抗しなければ殺される。歯を食いしばり、ス
ペルカードを取りだした。描かれているのは破滅の魔剣。

破滅「コスト・オブ・グロウリー」

「がつ……く、そ！」

召喚されるは、ルーンが刻まれた漆黒の刃を持つ呪剣、ティルフ
イング。恐らく俺が所持する神器の中でも、トップクラスの力を持
っているものだ。しかしその代償に持つていかれる神力の量は他の
比ではない。剣を握ると同時に、頭が揺さぶられるような感覚に吐
き気がこみ上げた。

だが同時に、体の痛みは引いていく。普通なら耐えられない無茶
をしているんだろうが、痛覚遮断効果を持つこの剣なら、無理して
使っても十分に戦える。それでも誤魔化しているだけなので、時間
に限度はあるだろうが。

（くく、早速の呼び出しか。やはり私の力が必要なのではないか）
勘違いすんな。俺が欲しいのはこの剣の力だけ。お前に願いを捧
げることは、二度としない。

（そうか。しかし私は、いつでも貴様の願いを受け入れる準備があ
る。もし力を欲すならば、願うんだな）

「ほざけ！」

奴に対する憎悪を剣に込め、一閃。刺突を狙う大剣を弾く。

妖怪は甘んじて受けたものの、反撃は早かった。弾かれ軌道をそ
らされても、すぐに方向を修正し二の太刀を振るうため猛突してく

る。しかし、単純な軌道なら見える。満身の力で二の太刀も弾き返した。

しかし……なんて一撃の重さだ。打ち合ったたび、手に強い衝撃が伝わってくる。

「何、やってるのよ、早く逃げて！」

「けっ、良く、言っぜ！」

弾いても弾いても、しつこく飛来してくる。殺意に満ちたその戦いは、言葉とあまりにも矛盾している。話を聞いたところで無駄だ。

「ぶっ飛ばえ！」

渾身の振り抜き。腕力を限界まで高めて放ったその一撃は、鳥の体を吹き飛ばし地面に叩きつけた。あれで戦闘不能にはならないだろうが、これだけの隙があれば十分だ。妖怪の脚力なら易々と逃げ切れる。

俺は視線だけ動かして妖怪兎を探す、が。

「……早いな、オイ」

既に彼女の姿はここにはなかった。どうやら思惑は一致していたようだが、ここまであっさりと置いていかれるのは流石に少し悲しい。

そう、こうやって俺たちがこの鳥の妖怪と戦っている間にも、閃珠は危機に陥っているかもしれない。事は一刻を争うのだ、あまり時間は食ってられない。だったらどちらか一人がこの妖怪と戦い、もう一人が閃珠を探しに行った方が良い。

あの兎はそれを一瞬で判断し、隙を見て走ったのだろう。賢いやつだ……何か納得いかないけど。

ずっと飛んでいると神力がどんどん削られていくので、翼をたたんで一気に着地。ゆっくり下りている時間などないのだ、あの狂戦士相手には。

「このっ……！」

すぐさま交錯する剣と剣。がっちりと鏖兢り合い、ぶつけられる

力に刃が悲鳴のように鳴る。いつかの戦いとまったく同じ状況だ。

以前は簡単に押し切られてしまったが、あの頃の俺とは違う。まだまだ未熟だが、俺だって戦う術を得たんだ。全身の細胞を励起させ、目の前の脅威を払うため更なる力を呼び起こす。

どうやら今回は俺の方が上手らしい。だんだんとテイルフィングが相手の首筋へと近づいていく。このままいけば勝てるけど、殺したくはないし、どうしよう。気絶するレベルの傷だけ負わせて逃げるか……？

「っ……」

考えてから、少し背筋が寒くなった。殺したくないから気絶させようとは……我ながら吐き気のするような思考だ。ホント、人間じやなくなってきた俺……。

でも、どうする？向こうは間違いなく命を狙ってきてる。手を抜けば逆にやられるかもしれない。現に目の前にある剣は、俺を撥ね退けようと必死に押し返してきているのだ。油断して負けたなんてことは絶対に許されない。どうする……？

「なんで、なんで逃げないのよ……。このままじゃ、死んじゃうわよ……？」

この期に及んで、表情まで作って戯言を吐くか。俺は目の前の敵を更に強く睨んだが、その瞬間、腕の力を緩めそうになってしまった。

彼女は、泣いていたのだ。唇を噛み、目を伏せ、肩を震わせながら。流石にここまで来れば演技とは思えない。しかしそれに反して、俺に伝わってくる剣圧はまったく緩まない。なんだこれは、どういうことだ。まさかこいつ、本気で俺に逃げて欲しいのか？ だが、それならこの迷いない戦いぶりはどう説明すればいい。

とにかく、何かがおかしいことは明白だ。

「……おい、お前」

歯を食いしばりながら、呼びかける。まともに話をするには、間近で唾競り合っている今しかない。

「なんで、泣いてんだよ。この戦いは、お前が仕掛けてきたんだろ
うが」

彼女は噁り泣きながら、ふるふると小さく首を振った。弱々しい
仕草だが、やはり剣は俺を殺りにきている。

「違っ……違っの……この手が、勝手にっ……」

手が、勝手に？まるで子供の言い訳だ。だが俺には、それを簡単
に否定することはできない。俺だって体を勝手に動かされていたこ
とがあるのだ、意識はあろうと、その意思に関係なく体が動くこと
だってあるかもしれない。

彼女はポロポロと涙をこぼしながら続けた。

「私も、嫌なの……。でも、でも、止まらないのよっ……！」

やはりそうらしい。だとしたら、元凶はやはり剣か。

俺のティルフィングみたいに狂気を引き出す剣か、もしくは何ら
かの呪いがかかっているか。何にせよ、厄介な効果を持つ魔剣。

「くっ……」

思考を邪魔してくる剣圧をはね返しながら、俺の知識の中からい
くつかの魔剣をピックアップする。紫の本を読みこんでいたお陰で、
それらしい候補はすぐに思い当った。

魔剣、ダインスレイフ。一度抜かれれば人の血を吸うまでは鞘に
戻らず、所有者は延々と戦い続けることとなる呪われた剣だ。これ
によりデンマークの王ホグニは、今も世界の果てで戦い続ける羽目
になっていると言う。

もしあの剣がそれなら、この状況にも説明がつく。彼女はやはり、
本意で戦っているのではないのだろう。だったら俺は、こいつをた
だぶっ倒すだけじゃだめだ。

「……お前、名前は」

彼女は小さい声ながらも、答えた。

「……ミステリア」

「そうかっ……。俺は、翼だ」

剣越しの自己紹介。不可思議なものだが、倒すべき相手じゃない

なら名を知ることが必要だ。これからまた、生きて会うことになるんだから。

意を決して足を上げ、バランスを崩す前に蹴りを放つ。ミステイアはそれを察知したか上手い具合に飛び退ってよけたが、それでいい。あのまま刃を交差させていても意味はないのだから、まずは離れる所から始めなければならなかったのだ。

彼女は先程の猛攻とは一転して、今度は綺麗な構えを見せ、動かなくなった。剣が戦い方を変えた、ということだろうか。隙を見せれば瞬く間に襲いかかってくるのだろう。思考は止めないが、それで気を緩めるわけにはいかない。

剣が元凶なら、そちらを何とかしなければならぬ。以前藍さんがやったように剣を手から弾き飛ばすか、あの剣の力を根こそぎ奪うか。パツと出てくる対抗策はこれくらいか。

事実上、剣の弾き飛ばし一択。しかも長い時間はかけられない。難しいが、何とかして成し遂げねば。彼女の為に、俺の信念を貫くために。そして閃珠を助けるために。

「行くぞミステイア。その呪い、今解いてやるからな！」

呪いの剣を手に、俺は翼を広げ彼女に突進した。

第三十九話 呪われし刃（後書き）

呪われた剣って、良いですよね（暗黒微笑）

前話の修正が追い付いておらず、新しい書き方や文体に違和感を感じられる方も多いかと思いますが、お許しください。
それでは、また次話にて。

第四十話 叫びと涙

テイルフィングは痛覚を遮断してくれるが、神力はしっかりと持っていく。だから俺の中の神力が尽きれば、もうスペルは保ってられない。元々今日は調子が悪いし、そう長い間は戦えないだろう。短期決戦が大原則。

「はあっ！」

だから、退かない。前に出る。ひたすら前に出て、フルパワーで剣を振る。ミステリア、もとい魔剣は何とか俺の攻撃をかわし、弾いているが、それで手一杯のようだ。

それも当然のこと。テイルフィングの効果は、能力強化、痛覚遮断、身体能力増強、戦闘技能の向上、第六感の付与。これだけあれば、近接戦闘では敵無しだ。さらに俺の能力、活性による身体能力強化まで上乘せされるのだから、その膂力はまさに怪物的なものになる。全力を出せば、妖怪でもついてこれる奴はそういないだろう。だから俺は、何度も打ち込めばミステリアも剣を持っていられなくなるかと踏んだのだが……一向にその気配がない。防戦一方だが、それでもちやんと戦えている。剣を持っているだけ、の状態にまったくならないのだ。

「らあ！」

このままではいくらやっても意味がない。力任せの一刀をぶち当て、ひとまずミステリアを無理矢理後退させる。たたらを踏んでいくくせに、やはり決定的な隙が見えない。今踏み込んでもきつと決定打にはならないと、直感が告げてくる。

「ち……」

どうする。とりあえず、今のような力押しは通じない。ただの神力の浪費だ。

改めてミステリアの剣を見る。どちらかという背の低いミスティアには似つかわしくない、長大な剣。リーチはテイルフィングと

同程度、向こうの剣についてはまだ確証は無いものの、恐らくダイ
ンスレイフだと思われる。もしそうだとしたら、呪いの強さはこち
らが多分上だ。それでいてまだ奴を倒せないのは、俺の未熟さゆえ
か。

いや、それは無い。ティルフィングのサポートには戦闘技能の向
上まである。今の俺はこの肉体で再現できる剣技を全て会得し、限
界まで身体能力を引き上げられた、言わば完全なる剣士。俺の能力
など、ティルフィングの前では問題にならないのだ。

にしても、本当に何故倒せないのか。もたもたしてられねえつて
のに。早いとこ新しい戦法に切り替えて決めないと、相手に斬られ
るまでもなく自滅する。

「……！」

不意に閃く。通常よりも研ぎ澄まされた直感はただの当て推量で
はなく、確信めいた自信を伴って一つの解を出した。

もしかしたらあの剣は、俺の自滅を待ってるんじゃないか？最初
の小競り合いで俺の、ティルフィングの力を見極め、まともに勝て
る相手でないかと判断したなら、それは正しい戦略だ。妖怪をも操る
あの魔剣がひたすら防御に徹したなら、流石にティルフィングの力
があっても突破は難しい。そうして防御しているうちに、やがて所
持者の俺の方が呪詛に耐えきれなくなり倒れると、そう考えたか。

一応話の筋は合っている、はず。

思わず舌打ちする。あの魔剣、想像以上に厄介な相手だ。相手の
弱点をきつちりと見通してやがる。

しかし泣き言は言ってられない。こうしている内にも、俺の神力
はどんどん搾り取られている。それが尽きたら、負け。

「どうする……！」

考える。相手の戦術を知った以上、こちらから攻めるのは下策だ。
敵は今まで通りに守るだけで終わるだろう。しかし今も剣を構え怯
えた目で俺を見ているミステリアからは、全く攻めてくる気が感じ
られない。彼女に戦意が無いのはもちろんだが、俺の勘が魔剣も同

じだと言っている。不意を突かれないう気を張ってはいるが、それだけ。結局奴は守ることしか頭のないのだろう。俺が攻めない限り、今の戦局は動かない。

動くしか、無いのか。

(早まるな馬鹿が)

脳髓に響く、不快な声。こんな会話方法を取るのはいつしかない。

構えを緩めぬまま、聞く。

(認めるのは癪だが、いくら挑んだ所で無駄だ。攻め方を根本的に変えねば奴は倒せん)

今さら分かり切ったことを言う魔剣に苛立ちが募る。その攻め方が分からねえから困ってんだろうが。それとも他に何か良い方法でもあるってのかよ。

魔剣は暫く黙し、意を決したように言った。

(……貴様よりいくらかマシな策はある。しかし、やはり下策だがな)

無いだろうと思っていただけに、驚いた。あるなら勿体ぶってないで早く出してくれよ、時間がない。

敵だつてこっちの急な沈黙をいぶかしんでるかも知れないんだ。

剣は甚だ気に食わないという風に唸り、ようやく続けた。

(奴が攻めてきた所に、カウンターを狙う。一撃に全力を賭ける)

聞いて、落胆した。だから、そう簡単に攻めてくるなら苦勞しねえんだつて。

「っ、とおー！」

痺れをきらしたか、向こうから攻撃してきた。しかし、その方法は弾幕。紫色の光弾を遠距離から放ってくる。数はまちまち、避けるのはそう難しくない。手心を加えているのは明らかだ。挑発、だろうか。

くそ、ホント面倒な相手だ……！

(そうのんびりしてられんな。いいか、奴が攻めてくるように誘い

をかける。貴様からの神力供給を、一瞬だけ最小限まで断つことだな。そうすれば我が呪いの効力も一瞬で弱まるだろう。それを見逃す相手ではあるまい)

「ほう……！」

時折飛んでくる弾幕を軽くかわしながら、考える。

それで限界まで引き付けて、射程圏内に入った所で神力を限界まで供給し、フルパワーのカウンターを決めるってことか。上手く虚を突ければ、確かに成功するかもしれない。

しかし、かなり危険な賭けだ。

(だから下策だと言っただろう。嫌なら止めておけ)

何も思い浮かばなかった俺が言えたことじゃないが、かなりの下策だ。障害がかなり多い。

まず、相手に乗ってくるか。次にカウンターが間に合い、なお且つ敵が逃げられないタイミングで神力供給を再開できるか。そして最大の難関、一瞬での神力供給に俺自身が耐えられるか。最後、カウンターの決めても、本当に剣を吹き飛ばせるか。

だが、他に何も無いのも事実だ。選択の余地なんてない。向こう側も俺の急停止を怪しんではいるみたいだが、やっぱり守りの姿勢は崩さないし。

だったらその策に、乗るしかないよな。

(ほう、やるのか。それはつまり私に命を預けるということだが、それでもいいのか？ そうするくらいなら、私に勝利を願う方が余程安全で確実だと思うがな)

まさしくそうだ。神力の供給は彼がコントロールしている。俺はただ搾られるがまま与えるだけだ。この作戦の肝は、その供給の操作。それが失敗すれば、全ておじゃんだ。俺の体を奪って好き勝手暴れたこいつに、俺の命を預けるのか……。

だが、それでも願いを捧げることだけは出来ない。願いを捧げたら、願いが叶うまでは体の支配権まで奪われてしまう。そんなのは二度と御免だ。それに、こいつがミステリアに対して配慮するとは

思えない。体を手に入れたら、奴は手っ取り早くミステリアを斬つてしまふに違いない。

だから、俺は絶対に願わない。自分の力で、勝つ。

（私を使っている時点で、そう偉そうなことは言えんと思うがな……。まあ、良いだろう。貴様が死ぬと私としても少々面倒だ。手を貸してやる）

決まりだ。なら早速実行、と行きたいが、この作戦はティルフィングの供給ストップから始まる。スタートは任せるしかない。

俺はいつでも良いから、スタートするなら一声かけろよ。

（……随分と潔いことだな。もう少しゴネると思っていたが）

言われてみれば、自分でも随分変わったなと思う。最初にティルフィングと対峙した時はあんなにビビってたのに、今では普通に命を賭けて戦っている。

度重なる戦闘で、慣れてしまったのかもしれない。まったく、我ながら馬鹿げた話だ。

（何が貴様をそうまで変えたか……これからゆっくり観察させてもらおうしよう）

そうかい。ただそれなら、まずはここを生き残らないとな。

（言われるまでもない。それでは作戦前に、まずは奴と少々斬り結んで来い。怪しまれているようだからな。先程のように、無策でいい。その無策っぷりをアピールしろ。作戦開始は合図する）

「よし……行くぞ！」

作戦は決まった、ならばもう神力の無駄遣いは出来ない。それは最後の一撃に取っておくべきだ。

放たれた弾幕を斬って、強引に攻めへと転じる。俺が走り出した時には、もうミステリアは防御態勢に入っていた。

一撃、二撃加えるが、やはり手応えなし。

（適当に何回か攻撃したら離れる。そこから開始だ）

「はああ！」

だったら、もっと全力つばさを出した方がいいな。声をあげ、

さらに苛烈に剣を振る。全て弾かれるが、向こうも全力で守っているのが分かる。これでいい。

十か二十か、剣を叩きつけ、最後にまた渾身の一撃を加える。ミステリアは少し危ないと感じたか、背中の中を羽を広げて後ろへと飛び、距離を取った。

全力の攻撃を耐えきり、ある程度の間合いを取った直後。相手を釣るには、絶好のシチュエーションだ。

(始めるぞ)

中々の痛打を与えたようだが、もう追撃はできない。体から力が抜けていくのが分かったからだ。

しかしこっちは命懸けだったのに、唐突だな。そう愚痴りたくなつたが、作戦としてはそれでいい。神力を温存する必要があるのだから、一分一秒でも無駄にはできない。

「ごほつ……!?」

それは、突然訪れた。忘れていた痛みへの復活。今までの戦いで、体の方はもうガタが来ていたようだ。膝をつき、片手を地につける。遂に口から血を吐くまでに至った。

ヤバいだろつとは思ってたが、まさかこれほどとは……！

(剣だけは離すな、来るぞ！)

「いやあああ!!」

泣き叫びながら、ミステリアが魔剣を手に突進してくる。悲しいかな、その動きには一点の迷いもない。

ここまでできたら、もう引き返せない。あとは作戦を成功させるしかない。この最悪の状態から。

改めてミステリアを見る。涙を溢し、目を瞑っている。なんとも酷い顔だった。ここで彼女を救えないなら、閃珠もまた救えないだろう。ならば俺は、勝たなければならない。交わした約束を、果たすために。

震える膝を律し、立ち上がる。その時にはもう、魔剣は眼前まで迫っていた。

「……っ！」

同時に、四肢に力が戻る。ぐらりと視界が揺れたが、構ってられない。俺は勝つ。仲間のために。

血がたぎる。闘志がみなぎる。痛みなどは消え失せた。絶対勝利の呪いを受け、俺の体が急速に力を取り戻していく。この全てを乗せ、後は剣を振るだけだ。

悲鳴を断ち切るべく、振るわれた魔剣。それが、悲鳴を生んだ魔剣と交錯する。

「ああああ！！」

激突。そして夜を切り裂く、凄まじいまでの烈風。魔と魔の衝突に、夜の竹林が戦慄いた。衝撃が総身を駆け抜け、吹き荒れた死の風に竹は血飛沫のように葉を散らす。

「あ……」

しかし、それは長くは続かなかった。残響と共に、一振りの剣が宙を舞ったからだ。

全てを懸けて放った神速の一閃。それは同種である魔剣すら凌ぎ、辛くも一人の妖怪を悲しみから救ったのだった。

「は、は……」

またギリギリだったが、何とか勝てたらしい。安堵のせいか、両手から剣が滑り落ちる。テイルフィングの維持にも限界が来たようで、霧となって消えていった。

「翼……？ 翼！？」

無様に地面に倒れる。もう、無理だ。まだ俺には、やるべきことが残っているのに。

閃珠、雅。お前らを、助けに……。

「主iiiiiiii！！」

手放しかけた意識は、一つの叫びでまた覚醒した。

今の声、聞き間違えようがない。閃珠だ。あいつが俺に、助けを求めた。

よろめきながら、立ち上がる。なんだ、まだ立てるじゃないか。

だつたらまだ戦えるだろ。あいつのために、俺は行かなきゃ……。

「ちよつと……どこへ行くの？」

ミスティアが泣き腫らした目のまま、問う。

「……仲間の、もとに」

この一言で、ミスティアも悲鳴の正体が分かったのだろう。ハツと息をのみ、そして今度は首を振った。

「無理よ、今のあなたじゃ……」

「無理じゃ、ねえ」

立てるなら、戦える。俺は彼女の言葉を無視し、悲鳴の元へと歩む。

しかし、彼女は諦めず俺の前に立ち塞がった。

「行かせない。私は、あなたに死んで欲しくないもの」

「誰が、死ぬかよ」

「本当に？」

「ああ……っ!？」

避けられない。不意をつかれた。数発の光弾が俺の腹をえぐり、吹き飛ばす。

「嘘。今のも避けられないんじゃない、もうあなたは戦えない」

「ミス、ティア……」

急速に視界が狭まっっていく。折角繋いだ意識がまた消えていく。

駄目だ、今気を失ったら駄目だ。なのに、目は開いてくれない。

「しばらくここで休みなさい。私がそばにいる。何があっても、あなたを死なせはしないわ」

涙が出るほど嬉しい言葉だが、違う。俺は行きたいのに。やっとあいつが、俺に助けを求めてくれたのに。

悔しさに歯噛みする。しかしどうしようもなく、俺は夜の闇の中で目を閉じた。頬に温かいものが流れたのは、気のせいだと思いたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9668n/>

東方翼閃光

2011年10月5日19時55分発行